

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 21 (2009) 年度



奈良市教育委員会

2012

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 21 (2009) 年度

奈良市教育委員会

2012



播磨産軒瓦（古大内式軒丸瓦Ⅰ型・古大内式軒平瓦）
平城京跡（左京五条四坊九坪・五条条間北小路）の調査 第608-F次（軒丸瓦）・第459-2次（軒平瓦）



奈良三彩小壺
平城京跡（左京五条四坊九坪）の調査 第622-A次



(背面)



(鏡面)

弥勒寺藏 三角縁吾作銘二神二獸鏡

例 言

1. 本書は、平成 21 年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財に関する各事業の概要と、埋蔵文化財調査センター紀要を取録したものである。

ただし、平成 21 年度に実施した調査のうち東紀寺遺跡第 11 次調査については、昨年度に刊行した『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 20（2008）年度』に同第 10 次調査の概要とともに既に取録済みである。また、平城京跡第 623 次、626 次調査については次年度以降に報告の予定であるため、本書には取録していない。

さらに、平成 20 年度に実施した平城京跡第 608 次調査については、平成 21 年度に実施した平城京第 622 次調査の成果とともに、本書に取録した。このほか、西大寺旧境内第 25 次調査については、平成 24 年度に報告書を刊行する予定であるので、本書には取録していない。

2. 平成 21 年度の埋蔵文化財調査に関する各事業は下記の体制で実施した。

奈良市教育委員会事務局 教育総務部

文化財課

課 長 西岡康夫
課長補佐 西崎卓哉 大西章市（文化財総務係長事務取扱）

文化財総務係

主 任 三好美穂 植松宏益
技術職員 大窪淳司

埋蔵文化財調査センター

所 長 森下恵介
所長補佐 岡田恭明
主 任 森下浩行 鐘方正樹
技術職員 松浦五輪美 武田和哉 秋山成人 安井宣也 宮崎正裕 原田憲二郎 久保清子
池田裕英 中島和彦 久保邦江 原田香織 池田富貴子 山前智敬
事務職員 酒井真弓
嘱託職員 大原 瞳 中居和志（現 京都府教育委員会）

3. 発掘調査、出土遺物整理、保存活用等の各事業に関しては、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表する。

4. 各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数となっている。遺跡の略記号は下記のとおりである。

H J 平城京跡 D A 大安寺旧境内 G G 元興寺旧境内 S D 西大寺旧境内
K K 菅原寺旧境内 T I 東市跡推定地 H K 東紀寺遺跡 F S 古市遺跡

5. 古墳時代以前の遺跡については、仮に大字名を付して遺跡名としたものがある。

6. 本書で使用した遺構番号は、一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構等の番号の前には、その種類に応じて以下の番号を付した。

S A (柱列・塀) S B (掘立柱建物) S D (溝・濠・溝状遺構・暗渠)

S E (井戸) S F (道路) S K (土坑) S X (その他)

また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。

7. 本文中で示した過去の調査の実施機関は、調査次数の前に下記の略記号を使用し表記した。

国 — 独立行政法人奈良文化財研究所 (旧奈良国立文化財研究所含む)

県 — 奈良県教育委員会 および 奈良県立橿原考古学研究所

市 — 奈良市教育委員会

8. 本書で使用した遺物名称・形式・型式は、一部を除き下記の刊行物に準拠した。

奈良時代 軒 瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』 奈良市教育委員会 1996

土 器：『平城宮発掘調査報告書V II』 奈良国立文化財研究所 1976

『平城宮発掘調査報告書X I』 奈良国立文化財研究所 1982

古墳時代 須恵器：田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981

弥生時代 土 器：奈良県立橿原考古学研究所『奈良県の弥生土器集成』 2003

9. 発掘区位置図については、奈良市発行の「大和都市計画図」(1/2,500)を、また調査地位置図については、国土地理院発行の1/25,000の地形図(1/25,000)を利用した。

10. 本文中において示した位置の表示値は、平面直角座標系第VI系(世界測地系)の数値である。なお、座標値の表・図中の標記については単位(m)を省略した。

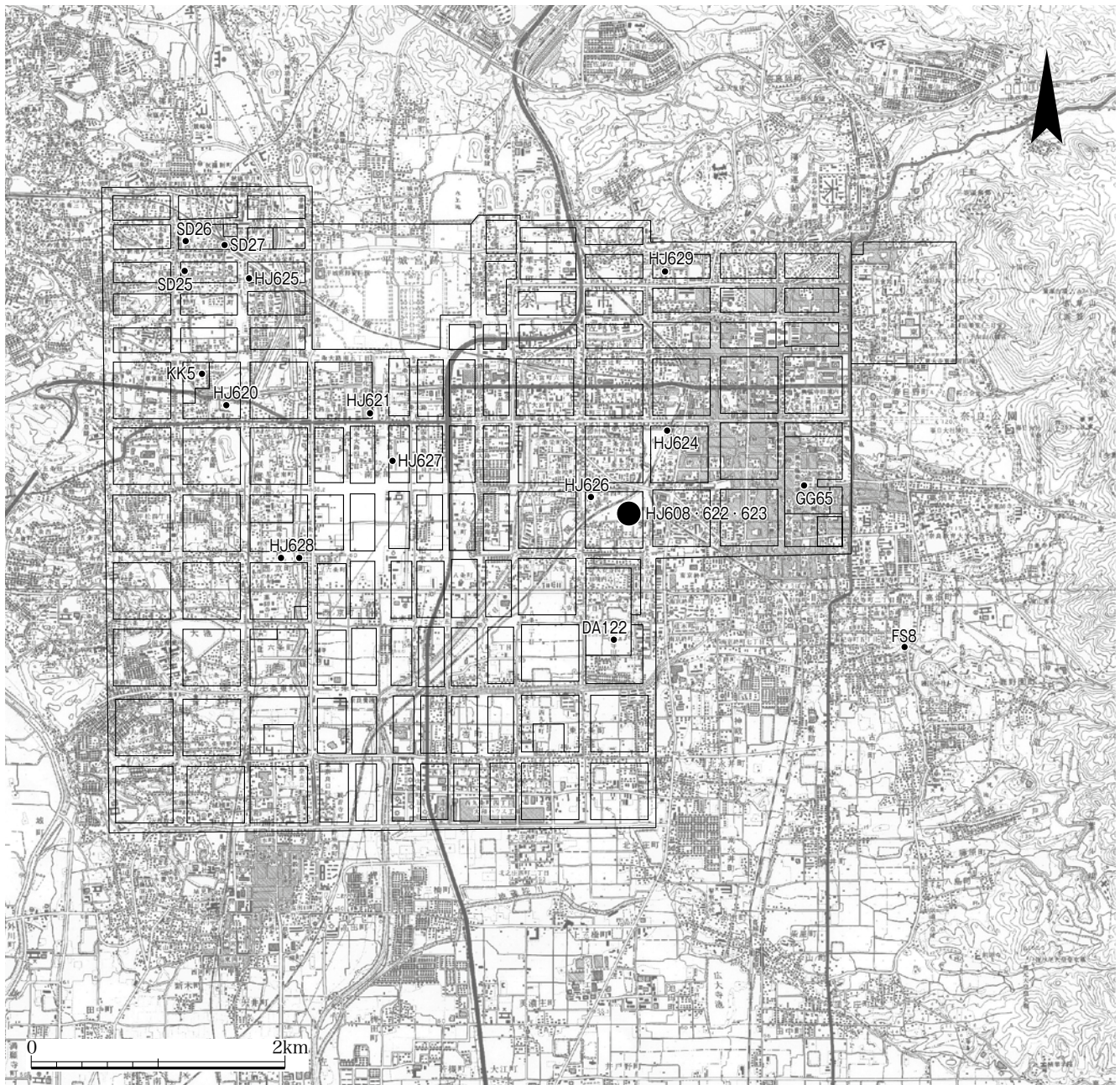
11. この報告に関する調査記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

12. 第1・3章の執筆は、当該調査と遺物整理を担当した埋蔵文化財調査センター職員が分担し、文責は各調査報告の文末に記した。第2章は分析機関の報告を再編集して構成した。第4章は埋蔵文化財調査センター職員が執筆した紀要を掲載した。

13. 本書の執筆および編集は平成23年度に行い、埋蔵文化財調査センター所長 森下恵介、同 グループリーダー 主任 三好美穂・鐘方正樹・久保清子の助言、および主務 久保邦江の協力を得て、主任 武田和哉が編集を担当した。

目次

巻首図版	I ~ II
例言・目次	i ~ v
第1章 平成21年度奈良市埋蔵文化財調査概要報告	1
1. JR奈良駅南特定土地地区画整理事業に係る発掘調査	2
平城京跡（左京五条四坊九・十・十五・十六坪・五条条間北小路・東四坊坊間東小路）の調査 第608次・622次	3
2. 近鉄西大寺駅南地区土地地区画整理事業に係る発掘調査	25
平城京跡（右京一条二坊十三坪）の調査 第625次	26
3. 平城京跡（右京三条三坊五坪）の調査 第620次	35
4. 平城京跡（右京三条一坊四坪）の調査 第621次	38
5. 平城京跡（左京四条五坊八坪）の調査 第624次	41
6. 平城京跡（左京四条一坊三坪）の調査 第627次	43
7. 平城京跡（右京五条大路）の調査 第628次	45
8. 平城京跡（左京二条五北郊）の調査 第629次	49
9. 史跡大安寺旧境内の調査	51
東塔跡の調査 第122次	52
10. 元興寺旧境内の調査	57
東面回廊推定地・奈良町遺跡の調査 第65次	58
11. 西大寺旧境内の調査	62
（1）正倉院跡推定地の調査 第26次	63
（2）西大寺寺地の調査 第27次	66
12. 菅原寺旧境内の調査 第5次	67
13. 古市遺跡の調査 第8次	69
14. 平成21年度実施小規模調査・試掘等一覧	72
15. 平成21年度実施工事立会一覧	72
16. 平成21年度実施踏査一覧	78
第2章 自然科学分析報告	79
1. 平城京第459-2次調査における樹種同定	81
2. 平城京第608次調査における自然科学分析	83
3. 平城京第622次調査における自然科学分析	92
第3章 平成21年度保存活用事業報告	103
第4章 紀要	113
平城京の陶硯 三好美穂	114
弥勒寺蔵 三角縁吾作銘二神二獸鏡について 鐘方正樹	147
巻末図版	I ~ IV



平成 21 (2009) 年度 発掘調査位置図 (過年度調査で本書にて報告する文も含む 1/50,000)

平成 21 (2009) 年度 奈良市教育委員会実施 埋蔵文化財発掘調査一覧表

No.	調査 回数	遺 跡 名	調 査 地	調査 面積 (㎡)	調査期間	事業 区分	事業者	事業内容	届出受理 番号	担当者	摘要
1	H J 620	平城京跡 (右京三条三坊五坪)	宝来一丁目 84-1、85-1	100	4/8 - 4/28	原因者	ヤマトラ	宅地造成	H 20.3450	大原・中島	
2	H J 621	平城京跡 (右京三条一坊四坪)	三条大路四丁目 1-1	190	5/12 - 5/29	原因者	積水化学工業株式会社	工場増築	H 20.3408	秋山	
3	H J 622	平城京跡 (左京五条四坊九・十・十五・十六坪、五条条間北小路、東四坊坊間東小路)	大森町 141、142 番地他	1300	5/11 - 10/6	公共	奈良市長	J R 奈良駅南特定土地区画整理連立関連公共施設整備事業	H 12.3145	原田憲・大原	
4	H J 623	平城京跡 (左京五条四坊十五・十六坪、四条大路)	大森町 131、134 番地他	3450	5/25 - 3/5	公共	奈良市長	J R 奈良駅南特定土地区画整理都市再生事業	H 12.3145	宮崎・池田裕・山前・中居	次年度以降に報告の予定
5	H J 624	平城京跡 (左京四条五坊八坪)	三条本町地内	153	8/19 - 9/9	公共	奈良市長	J R 奈良駅前周辺整備事業	H 21.3095	武田・松浦	
6	H J 625	平城京跡 (右京一条二坊十三坪)	西大寺南町 2271-2 ~ 4	850	9/24 - 1/22	公共	奈良市長	西大寺駅南地区土地区画整理通常事業	S 63.3056	久保清・中居	
7	H J 626	平城京跡 (左京五条四坊一坪)	大森西町 182 番地他	462	12/14 - 2/12	公共	奈良市長	J R 奈良駅南特定土地区画整理臨時交付金事業	H 12.3145	原田憲・大原	次年度以降に報告の予定
8	H J 627	平城京跡 (左京四条一坊三坪)	四条大路三丁目 984・992	150	12/26 - 1/5	原因者	株式会社 Z E R O	宅地造成	H 21.3343	鐘方・中島	
9	H J 628	平城京跡 (右京五条大路)	西ノ京町 188 番地、五条町 325-1 他	110	1/20 - 2/19	公共	奈良市長	西ノ京地区歴史環境整備事業	H 21.3404	秋山	
10	H J 629	平城京跡 (左京二条五坊北郊)	法蓮町 717 番 4	26	2/1 - 2/5	緊急	個人	個人住宅新築	H 21.3445	安井	
11	DA 122	史跡大安寺旧境内	東九条町 1326	80	11/16 - 12/15	公共	奈良市教育委員会教育長	史跡大安寺旧境内保存整備事業	H 21.1079	山前	
12	GG 65	元興寺旧境内	中新屋町 40-2 他	10	7/13 - 7/24	緊急	個人	賃貸住宅新築	H 21.3093	中島	
13	KK 5	喜光寺旧境内	菅原町 516-2、516-3	42	8/17 - 8/21	原因者	(宗)喜光寺	庫裏新築	H 21.3178	秋山	
14	SD 25	西大寺旧境内	西大寺新田町 2564-1 他	321	4/8 - 7/14	緊急	個人	個人住宅新築	H 20.3421	久保邦・中居	次年度に正報告刊行の予定
15	SD 26	西大寺旧境内	西大寺新田町 536 番他	44	8/24 - 8/31	緊急	個人	個人住宅新築・道路工事	H 21.3152	中島	
16	SD 27	西大寺旧境内	西大寺国見町一丁目 224 番地 1 の一部他	78	11/9 - 11/10	原因者	奈良交通株式会社	駐輪場建設	H 21.3222	中島	
17	HK 11	東紀寺遺跡	東紀寺町一丁目 50 番 1 号	96	4/13 - 5/1	公共	奈良市長	奈良市立病院建替事業	H 20.3046	池田裕	平成 20 年度年報にて既報告
18	FS 8	古市遺跡	古市町 1611 他	195	4/13 - 4/28	公共	奈良市長	第 10 号市営住宅建替事業	H 20.3471	武田・松浦	

第 1 章 平成 21 年度 奈良市埋蔵文化財調査概要報告

1. J R奈良駅南特定土地地区画整理事業に係る発掘調査

この調査は奈良市が進めるJ R奈良駅南特定土地地区画整理事業（総面積14.6万㎡）に係り、実施したものである。

奈良市教育委員会では、平成13年度から当事業地内の発掘調査を行っており、平成20年度までに27,035㎡の発掘調査を実施している。

調査位置は、J R関西本線、桜井線、および主要地方奈良生駒線の南に広がる水田地帯であり、東から西へと緩やかに低くなる沖積地上に位置する。また、事業地の中央には東西方向の用水路があり、南北方向の地形は、この用水路付近に向かい緩やかに下っている。

平成21年度は、前年度事業の繰越分として連続立体関連公共施設整備事業で1,300㎡、平成21年度の事業に係わる発掘調査として、都市再生事業で3,450㎡、地域活力基盤

創造交付金事業で462㎡の計5,212㎡の調査を行った。

発掘調査位置は、平城京の条坊復原では、左京五条四坊一・九・十・十五・十六坪、四条大路、東四坊大路、五条条間北小路、東四坊坊間東小路である。

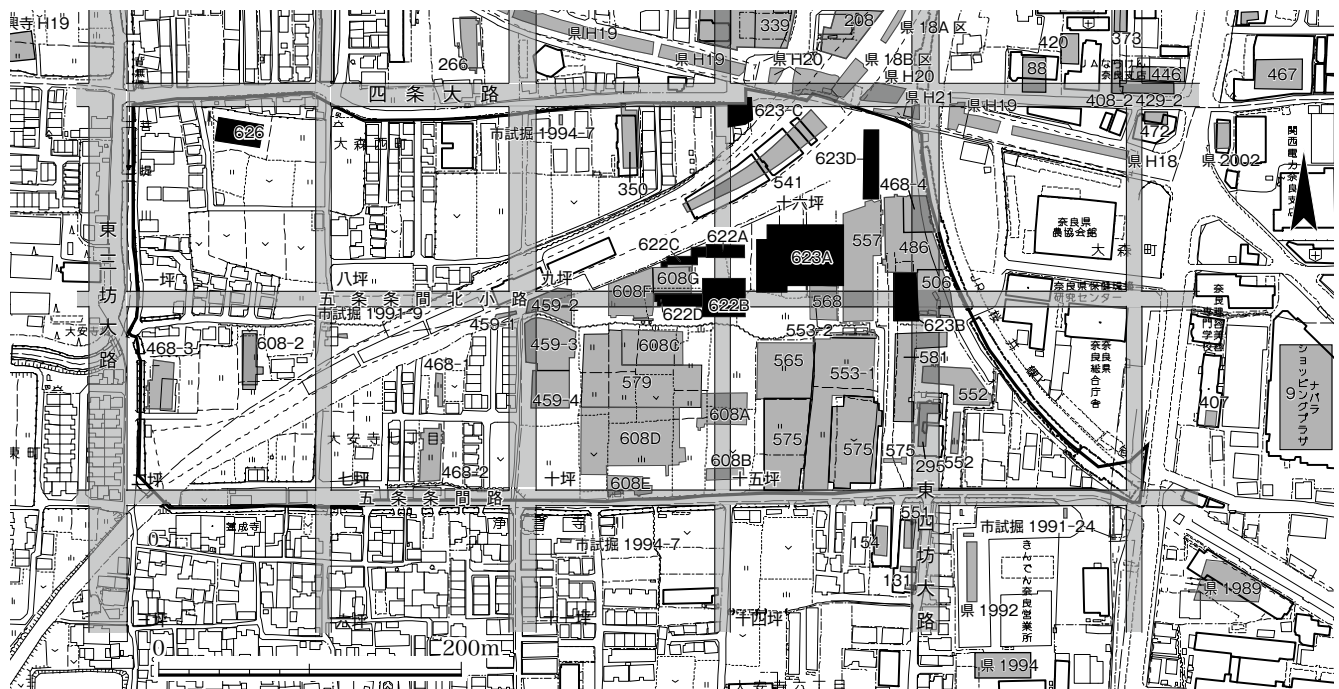
これらの事業と調査の概要は下記のとおりである。

このうち、今回報告する調査は、市H J第622次A・B・C・D発掘区と、平成20年度に実施した市H J第608次F・G発掘区である。市H J第623次A・B・C・D発掘区と626次調査については、次年度以降に報告する。

報告に際しては、古墳時代以前の遺構には2桁を、奈良時代以降の遺構には3桁以上の遺構番号を付している。これらは、当事業に係る調査で設定している遺構番号であり、条坊遺構・坪ごとに設定した通し番号である。

平成21年度 J R奈良駅南特定土地地区画整理事業 発掘調査一覧表

調査次数	発掘区	事業名	遺跡名	調査面積	調査期間	調査地	調査担当者
H J 第622次	A	連続立体関連公共施設整備事業（平成20年度繰越）	平城京跡（左京五条四坊九・十六坪、東四坊坊間東小路）	200㎡	H 21. 5.11 ~ H 21. 8.11	大森町141・142番地他	原田憲・大原
	B		平城京跡（左京五条四坊九・十・十五・十六坪、東四坊坊間東小路、五条条間北小路）	700㎡	H 21. 5.11 ~ H 21. 8.11		
	C		平城京跡（左京五条四坊九坪）	171㎡	H 21. 8.17 ~ H 21.10. 6		
	D		平城京跡（左京五条四坊九坪、五条条間北小路）	229㎡	H 21. 8.17 ~ H 21.10. 5		
H J 第623次	A	都市再生事業	平城京跡（左京五条四坊十六坪）	2,300㎡	H 21. 5.25 ~ H 22. 2.19	大森町131・134番地他	宮崎・池田裕・山前・中居
	B		平城京跡（左京五条四坊十五・十六坪、東四坊大路、五条条間北小路）	520㎡	H 21. 5.25 ~ H 21. 7.29		
	C		平城京跡（左京五条四坊十六坪、四条大路）	180㎡	H 21. 7.15 ~ H 21. 8.14		
	D		平城京跡（左京五条四坊十六坪）	450㎡	H 21.12.25 ~ H 22. 3. 5		
H J 第626次		地域活力基盤創造交付金事業	平城京跡（左京五条四坊一坪）	462㎡	H 21.12.14 ~ H 22. 2.12	大森西町182番地他	原田憲・大原



J R奈良駅南特定土地地区画整理事業地内 発掘調査位置図 (1/5,000)

平城京跡（左京五条四坊九・十・十五・十六坪・五条条間北小路・東四坊坊間東小路）の調査 第608次F・G発掘区・第622次A・B・C・D発掘区

I はじめに

H J 第608次F・G発掘区とH J 第622次A・B・C・D発掘区は、平城京の条坊復原によると、平城京左京五条四坊九・十・十五・十六坪、五条条間北小路、東四坊坊間東小路に相当する。

調査地周辺での調査成果については、まず九坪でH J 第459-2・541次の各調査が実施されている。特にH J 第459-2次調査では播磨産軒平瓦や播磨産とみられる平瓦・熨斗瓦が出土し、その出土分布から、これらが九坪で使用されたものと考えられている。十坪ではH J 第459-2～4・579・608次A～D発掘区の各調査が実施され、中心建物や多くの埋納遺構が検出されている。5時期の遺構変遷があり、奈良時代を通じて一町利用されていたことが判明している。十五坪はH J 第553-1・2と565・575・581次の各調査が実施され、5時期の遺構変遷が確認された。特に8世紀後半には前殿・後殿を中心に、その周囲に雑舎と倉庫群を配置していること、さらには円面硯の出土割合が宮内に匹敵することから、宮外官衙の可能性が指摘されている。

十六坪はH J 第468-4・486・541・557・568次の各調査が実施され、東西・南北ともに4分割した正方形の1/16町を基準に利用された時期があったと考えられている。東四坊坊間東小路は、H J 第541・608次A・B発掘区で確認され、ここでは側溝心々間距離が約7.0mの幅員であることが判明している。五条条間北小路は、H J 第459-2・506・568・557次の各調査区で確認され、側溝心々間距離が7.2mの幅員であること、同北側溝が東四坊大路を横断することが判明している。

このような周辺の調査成果を受け、H J 第608次F・G発掘区は左京五条四坊九坪の南辺部と十坪の北辺部および五条条間北小路の様相確認を目的とし、その推定位置に発掘区を設定して調査を行った。

H J 第622次A発掘区は東四坊坊間東小路および十六坪の南北1/4ラインにおける宅地割施設の有無の確認を目的として、東四坊坊間東小路とこれに面する左京五条四坊九・十六坪にかけて設定した。

H J 第622次B発掘区は五条条間北小路と東四坊坊間東小路の交差点の様相確認を目的として、交差点およびこれに面する九・十・十五・十六坪にかけて設定した。

H J 第622次C発掘区は九坪内の様相確認を目的とし

て、A発掘区の西側で、H J 第608次G発掘区北側の位置に設定した。

H J 第622次D発掘区は、五条条間北小路の様相確認を目的として、B発掘区の西側で、H J 第608次G発掘区北側の位置に設定した。

なお、H J 第579次・608次C発掘区の各調査では、縄文時代晩期の土器を包含する貯蔵穴・ピットを、H J 第486・557・568次の各調査では、縄文時代晩期の土器を包含する河川を検出している。奈良時代の遺構面下で下層遺構の検出も想定できるため、その確認も目的として調査を進めた。

II 基本層序

発掘区内の基本的な層序は、上から水田耕作土の黒灰色土、灰褐色砂質土、灰色土、灰色細砂土と続いて、現地表面下約0.3～0.4mで黄灰色粘土に至る。ただし、五条条間北小路〔以下「北小路」と略称する〕付近では、灰色細砂土の下に、北小路上が流路化した時の埋土である灰褐色砂質土が堆積しており、現地表面下約0.5～1.1mで黄灰色粘土に至る。弥生時代中期以降の遺構はこの黄灰色粘土上面で検出した。遺構面は標高が62.3～63.2mで、北東から南西へ低くなる。

黄灰色粘土は、周辺の調査で確認されている縄文時代晩期～弥生時代前期の土器を包含する層である。このため弥生時代中期以降の遺構調査完了後、黄灰色粘土を除去し、地山である黄褐色粘土上面で遺構検出を行った。黄褐色粘土上面の標高は、62.6～62.7mである。下層の黄褐色粘土上面で縄文時代後期から晩期の土器を包含する幅約50mの河川を確認した。河川の掘削は一部に留まったが、東岸付近では深さ約2.2mである。埋土は灰白色砂または灰色砂礫である。縄文土器は南岸付近で多く出土した。検出位置の関係から、H J 486・557・568次調査で確認されている河川1と一連の流路とみられる。H J 486・557・568次調査では、河川は北東から南西に向かって流れるのに対し、今回の調査区では南東から北西へ流れていることから、河川の屈曲部を確認したことになる。

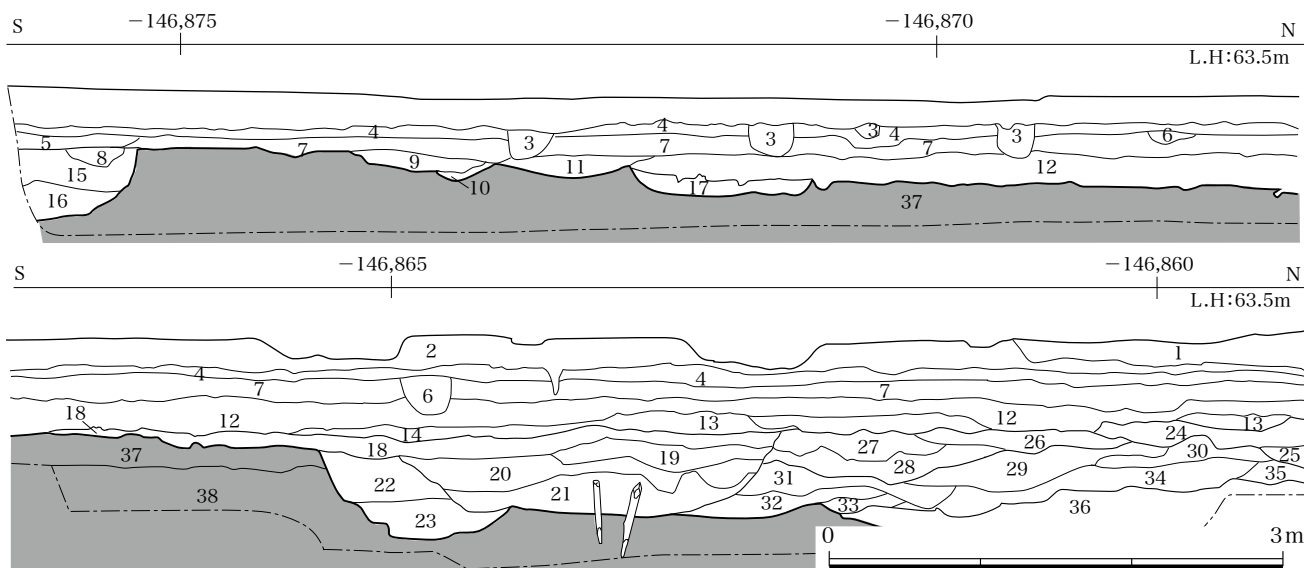
III 検出遺構

各遺構の概要は一覧表にまとめた通りである。以下、主要な遺構について述べる。

弥生時代の遺構

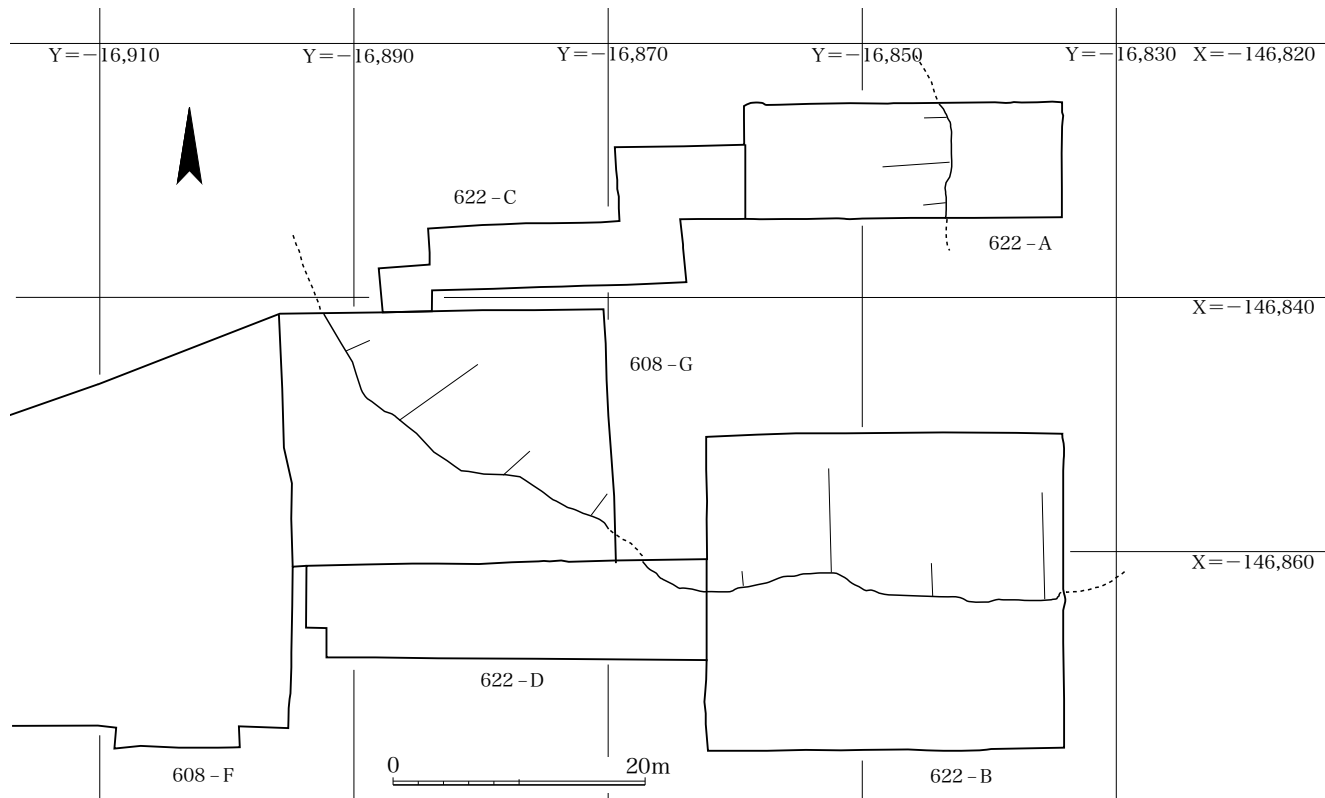
土坑を2検出した。土坑S K 02はH J 第608次F発掘

平城京跡(左京五条四坊九・十・十五・十六坪・五条条間北小路・東四坊坊間東小路)
 の調査 第608次F・G発掘区・第622次A・B・C・D発掘区

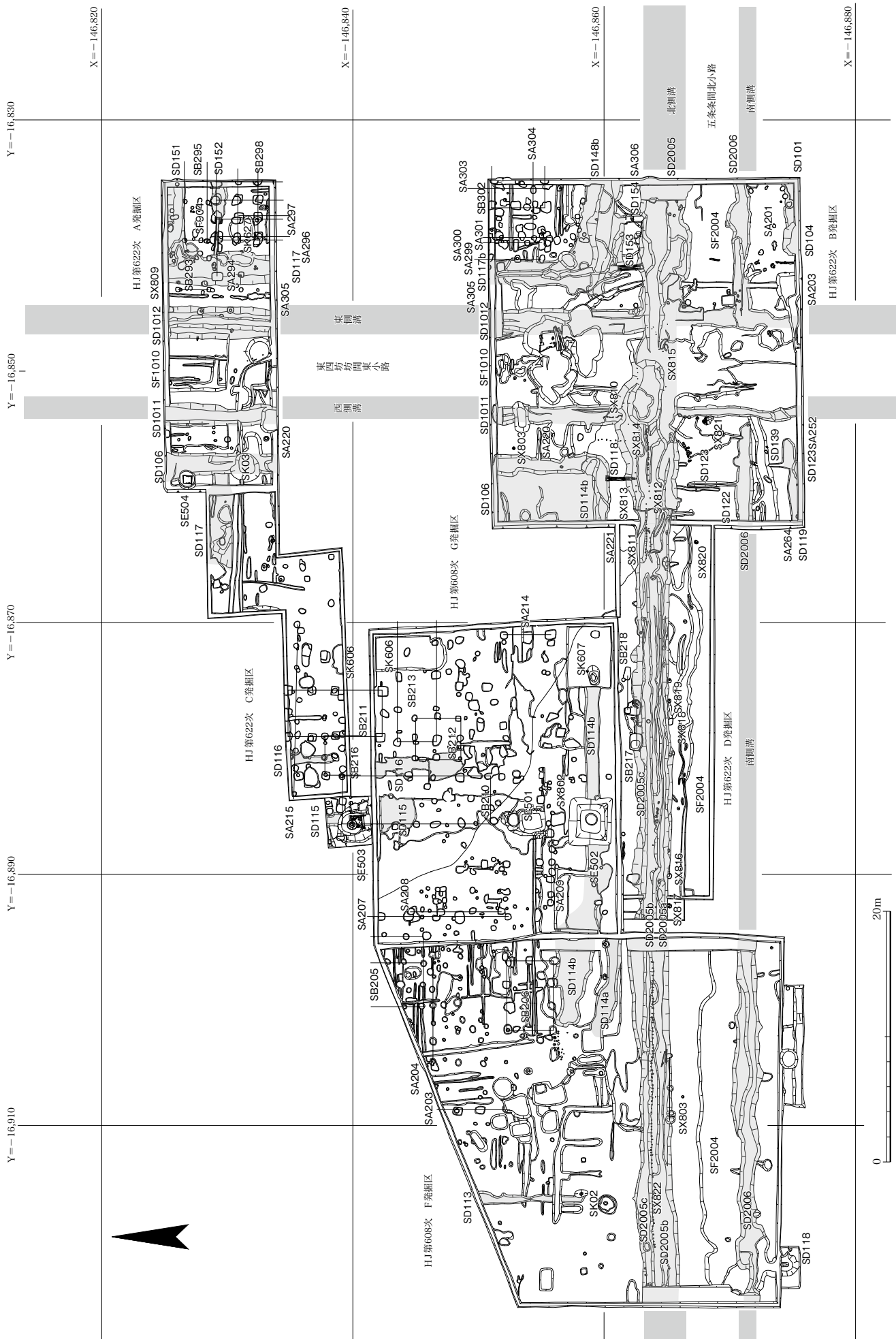


- | | | |
|---------------|---------------------|-------------------------------|
| 1. 黒灰色土(灰色礫混) | 14. 橙灰色砂質土 | 27. 橙白色粘土(築地盛土) |
| 2. 黒灰色土 | 15. 褐色粘土(SD119) | 28. 青灰色粘土(灰色粘土混)(築地盛土) |
| 3. 灰褐色土 | 16. 灰褐色砂質土(SD119) | 29. 黄色灰褐色粘土(SD2005北岸崩壊土) |
| 4. 灰褐色砂質土 | 17. 黄灰褐色粘土(SD2006) | 30. 褐灰色砂(SD2005北岸崩壊土) |
| 5. 灰色土 | 18. 茶褐色砂質土(SD2005b) | 31. 灰色細砂(SD2005北岸崩壊土) |
| 6. 灰色砂質土 | 19. 灰白色細砂(SD2005b) | 32. 灰色砂(SD2005北岸崩壊土) |
| 7. 淡灰褐色砂質土 | 20. 灰色粘土(SD2005b) | 33. 淡黒灰色粘砂(SD2005北岸崩壊土) |
| 8. 灰色細砂土 | 21. 灰色砂(SD2005b) | 34. 灰色粘質土(淡灰色砂混)(SD2005北岸崩壊土) |
| 9. 灰褐色細砂土 | 22. 淡灰色砂質土(SD2005a) | 35. 灰色細砂(縄文河川) |
| 10. 灰褐色細砂 | 23. 暗灰色砂(SD2005a) | 36. 灰白色砂(縄文河川) |
| 11. 灰褐色細砂土 | 24. 灰褐色砂質土(SD114) | 37. 黄灰色粘土(地山) |
| 12. 灰褐色砂質土 | 25. 橙灰褐色粘土(SD114) | 38. 黄褐色粘土(地山) |
| 13. 灰褐色土 | 26. 橙灰色細砂土(築地盛土) | |

H J 第 622 次調査 B 発掘西壁土層図 (1/50)



縄文時代後～晩期の河川平面図 (1/600)



HJ 第 608・622 次調査 遺構平面図 (1/300)

(この図はPDF化にあたり全体を73%に縮小しています。)

区に位置し、東西約1.1m、南北約0.7m、深さ約0.7mである。埋土から弥生時代後期の広口壺が出土した。土坑SK 03はHJ第622-A発掘区南西隅に位置し、東西約2.3m、南北約1.5m、深さ約0.3mである。埋土から弥生時代中期末～後期初頭の長頸壺、甕が出土した。

奈良～平安時代の遺構

条坊遺構、掘立柱建物・掘立柱列・溝・井戸・土坑・門・橋・護岸施設・埋納遺構を検出した。以下に条坊関連遺構・九坪内の遺構・十坪内の遺構・十五坪内の遺構・十六坪内の遺構の順に主な遺構を報告する。

条坊関連遺構 HJ第622次調査A・B発掘区の東四坊坊間東小路〔以下「東小路」と略称する〕が想定される位置で、南北溝2条(SD 1011・1012)を検出した。両溝は左京五条四坊九・十六坪間で検出した東小路の東西両側溝(HJ第541次調査)、左京五条四坊十・十五坪間で検出した同小路の東西両側溝(HJ第608次A・B発掘区)と検出位置に矛盾がないことから、SD 1011は東小路の西側溝、SD 1012は同東側溝と判断できる。東小路SF 1010の路面幅は、側溝心々間距離で7.5mである。路面上に舗装などの造作はなかった。東小路西側溝SD 1011・東小路東側溝SD 1012の溝底はともに、五条条間北小路〔以下「北小路」と略称する〕北側溝SD 2005へ向かって勾配をつけ、北小路SF 2004を横断する。東小路西側溝SD 1011の埋土は下から茶灰色砂質土、褐灰色土で、溝心の国土座標値は、 $X=-146,869.00$ 、 $Y=-16,852.90$ である。東小路西側溝SD 1011と北小路北側溝SD 2005との合流部付近には、東小路西側溝SD 1011西岸に沿って護岸施設SX 810がある。護岸施設SX 810は、西岸の勾配に合わせて杭を打ち込んでいることから、西岸を守る為の護岸施設と考える。東小路東側溝SD 1012の埋土は下から灰褐色土、茶灰色土で、溝心の国土座標値は、 $X=-146,869.00$ 、 $Y=-16,845.40$ である。宅地側である溝の東岸には、南北2間の橋脚をもつ橋SX 809が架かる。十六坪の西面築地塀SA 305上に開く門SB 293と南北中軸ラインが一致することから、これと同時期とみることができる。

HJ第608次F発掘区・HJ第622次B・D発掘区で、東西溝SD 2005を検出した。またHJ第608次F発掘区・HJ第622次B発掘区では東西溝SD 2005の南に平行して流れる東西溝SD 2006を検出した。両溝は左京五条四坊九・十坪間で検出した北小路の南北両側溝(HJ 459-2次)、左京五条四坊十五・十六坪間で検出した北小路の南北両側溝(HJ 506・557・568次)と検出位置に矛盾がないことから、SD 2005は北小路の北側溝、SD 2006は同南側溝と判断できる。北小路SF 2004は、周囲の宅地よ

り標高が低いため、両側溝埋没後、路面上が流路化しており、浸食により東小路SF 1010との交差点付近では大きく削平されていた。遺構の重複関係から、北小路北側溝SD 2005は南から北へ位置をずらして掘り直し、東小路SF 1010上を横断することが判明した。溝底は東から西へ排水するように勾配を下げている。九坪南東隅に面する北小路北側溝SD 2005の北岸は、水流によって崩壊した痕跡があった。以下、古い順に北小路北側溝SD 2005 a、SD 2005 b、SD 2005 cとする。北小路SF 2004の側溝心々間距離は、北小路北側溝SD 2005 aの時期では、東方のHJ第622次B発掘区で7.6m、西方のHJ第608次F発掘区で7.2m、北側溝SD 2005 bの時期ではHJ第622次B発掘区で6.7m、HJ第608次F発掘区で8.3mである。

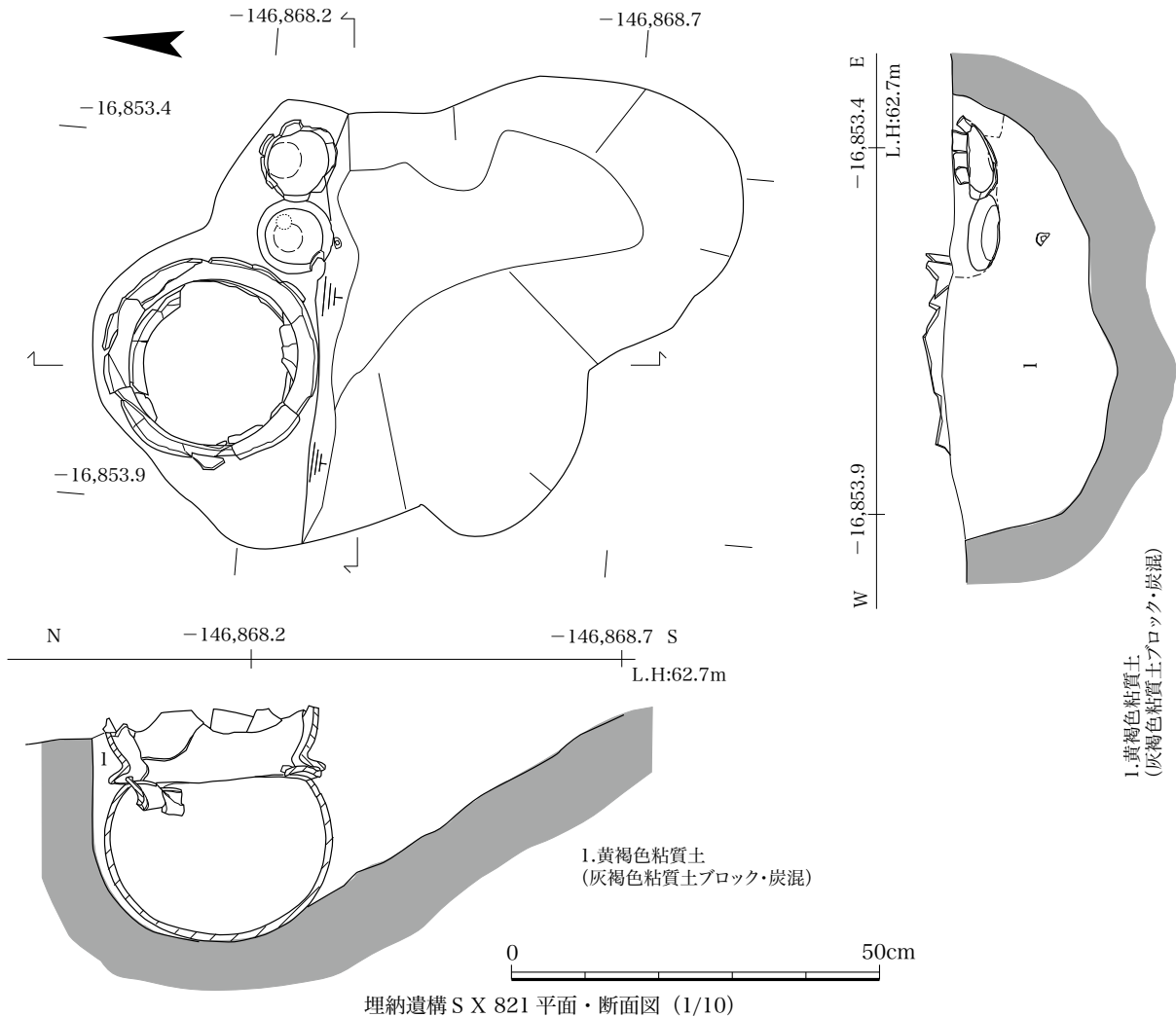
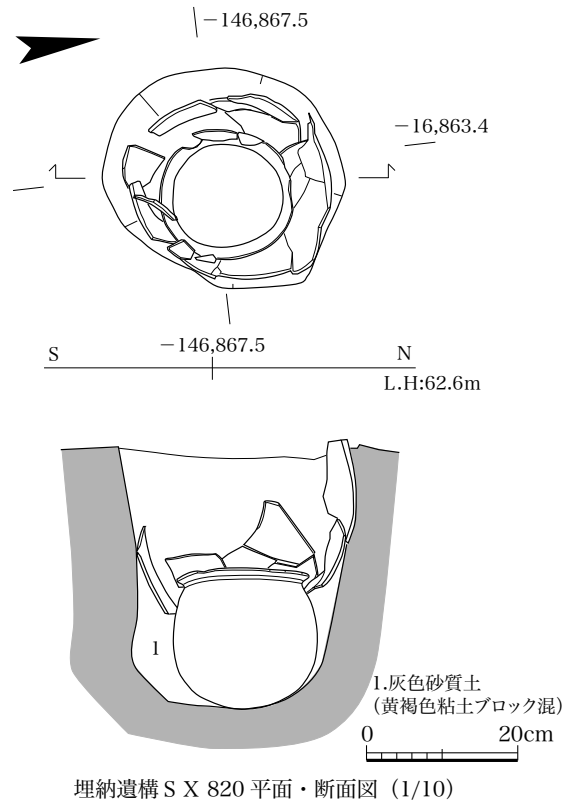
北小路北側溝SD 2005 aは、東小路西側溝SD 1011西側からHJ第622次調査D発掘区西端までの間でのみ検出した。溝の南岸はほぼ垂直に落ちている。溝の北岸は北小路北側溝SD 2005 bによって削平され、溝幅は不明である。ただし、北小路北側溝SD 2005の中央には杭列SX 814が残存し、これを北小路北側溝SD 2005 a北岸の護岸施設と考え、幅は約2.5mであったと推定できる。埋土は下から灰色粗砂、暗灰色粘質土である。上層は腐植土を主体とし、木簡をはじめ、木製品などが遺存していた。北小路北側溝SD 2005 a溝心の国土座標値は、 $X=-146,864.80$ 、 $Y=-16,893.60$ である。埋土から8世紀後半から末頃にかけての土器が出土した。

北小路北側溝SD 2005 bは、北小路北側溝SD 2005 a埋没後に約1.0m北側に位置をずらして掘りなおしている。宅地側である北小路北側溝SD 2005 bの北岸は、北小路北側溝SD 2005 cによって削平されている。交差点付近の北小路北側溝SD 2005 b両岸は東小路両側溝SD 1011・1012からの排水によって大きく浸食を受け、溝幅が最大で5.0mと広がっていた。溝底は、東から西に向かって排水するように勾配を下げているが、東小路西側溝SD 1011との合流部は、土坑状に窪み深くなっていた。この窪みは、周囲の溝底からの深さ約0.6mを測る。北小路北側溝SD 2005 bの埋土は下から灰色砂、灰色粘土、茶褐色砂質土である。埋土から8世紀後半から10世紀にかけての土器が出土したが、9～10世紀にかけての土器は少量で、8世紀後半の土器が多い。北小路北側溝SD 2005 b溝心の国土座標値は $X=-146,863.90$ 、 $Y=-16,860.80$ である。

木橋SX 803・816～819は北小路北側溝SD 2005 bの時期に架かる橋と考える。木橋SX 803・817・819は北小路北側溝SD 2005 bと平行する東西1間の橋脚であり、これらはいずれも路面側である北小路SF 2004の北

端にて検出した。一方、宅地側にはこれに対応する橋脚はなかったことから、当初からなかったものと考え。木橋 S X 803 は九坪内を東西に2等分するラインのやや東寄りに位置する。北小路北側溝 S D 2005 内では橋板とみられる部材 2 枚を確認した。木橋 S X 816 は直径 0.25 m の円形の柱根が残る。一柱穴のみの検出であるが、検出位置から木橋 S X 817 と同じ構造と考え、東西 1 間に復原した。なお、組み合う柱穴は、西側の H J 第 608 - F 次発掘区内には無かったことから、H J 第 608 - F ・ 622 - D の両発掘区間にあるものと考え。木橋 S X 819 は角柱の柱根が残り、掘形には地山の黄灰色粘土ではなく、根腐れを防ぐ目的で灰色粘土を充填していた。木橋 S X 818 は北小路北側溝 S D 2005 b と直交する南北 1 間の橋脚である。また、木橋 S X 818 は後述する九坪の南面築地塀 S A 221 上に開く門 S B 217 と、S X 819 は門 S B 218 と南北中軸ラインを揃えることから、それぞれ同時期と考える。重複関係から近接する位置で西から東へ造り替えていることがわかる。

なお、東小路と北小路との交差点付近では、橋脚の痕跡がなかった。ただし、交差点東側の溝底には樹皮が残る自



然木の先端を尖らせた丸太杭S X 815が打ち込まれていた。これを「芥よけ」に伴う杭と考え、この西側に橋を想定することも可能である。

北小路北側溝S D 2005 cは北小路北側溝S D 2005 b埋没後に掘削された溝である。D発掘区東辺から始まり、H J第608次F発掘区に続く。埋土から10世紀の土器が出土。

北小路南側溝S D 2006は、北小路北側溝S D 2005とは対照的に浅く、溝幅も狭く、東小路S F 1010を横断しない。東小路東側溝S D 1012とは合流するのに対し、東小路西側溝S D 1011とは接続せず手前で途切れる。そのためか、北小路S F 2004上に南北溝S D 122・123を設けて、北小路北側溝S D 2005へ向けて排水する。埋土は下から灰色砂質土、黄灰褐色粘土である。上層は地山ブロックを多く包含し、短期間のうちに人為的に埋めたようだ。播磨産軒丸瓦が上層から出土した。北小路南側溝S D 2006溝心の国土座標値は、X=-146,871.50、Y=-16,860.80である。

北小路S F 2004路面上では埋納遺構S X 820・821を検出した。S X 820は直径0.3mの掘形内に土師器甕Aを正位に据え、その上に底部を打ち欠いた土師器甕Aを正位に据える。下段土器周囲には土師器甕片を埋めており、これらは下段土器を固定させる目的で差し込んだものと考えられる。甕内に内容物はなかった。S X 821は東西0.6m、南北0.9mの掘形内に合口にした土師器甕A 2個を据え、その東横に土師器壺B 2個を正位に据える。壺Bの下で銭貨(和同開珎) 4点を確認した。堆積状況から甕Aを据えたのち、埋めながら銭貨と壺Bを埋納したのちと考える。

九坪の遺構 掘立柱建物9棟(S B 205・206・210～213・216～218)、掘立柱列7条(S A 203・204・207～209・214・215)、塀2条(S A 220・221) 井戸4基(S E 501～504)、土坑2(S K 606・607)、溝6条(S D 106・113～118)、埋納遺構2基(S X 802・803)があり、遺構の重複関係から3時期に区分できる。

東小路西側溝S D 1011とその西側の南北溝S D 106に挟まれた幅約1.8mの空閑地には九坪東面を限る築地塀S A 220の存在を考え、南北溝S D 106は築地塀雨落溝と判断した。北小路北側溝S D 2005とその北側の東西溝S D 114に挟まれた、幅約1.5mの空閑地には九坪南面を限る築地塀S A 221の存在を考え、東西溝S D 114は築地塀雨落溝と判断した。坪内南東隅では北小路北側溝S D 2005の北岸が崩壊し、宅地側である溝岸は大きく浸食されていた。築地塀S A 220・221とともに、北小路北側溝S D 2005の崩壊土上に厚さ約0.3m分の築成土が残存しており、北小路北側溝S D 2005北岸崩壊後に補修されたとわかる。溝S D 106・114はいずれも坪内南東隅で大きく氾濫して溝

幅が広がる。溝S D 114は、H J第608次F発掘区東辺では、重複関係から2時期あることがわかり、古い南側のものを溝S D 114 a、新しい北側のものを溝S D 114 bとした。溝S D 114 bは遺構の重複関係から井戸S E 502・S K 607より新しいことがわかる。溝S D 118は、築地塀S A 221上で検出し、築地暗渠と考える。溝S D 118内には半裁し削り抜いて製作した木樋を北から南へ向かって勾配が下がるように設置しており、宅地内の水を北小路北側溝S D 2005 bへと排水するためのものと考えられる。

南北溝S D 113は坪内東西1/2ラインに、南北溝S D 115は東西1/4ラインに、東西溝S D 117は南北1/4ラインにそれぞれ位置し、坪内区画施設とみられる。溝S D 116は西側の溝S D 115と平行しており、両溝間の幅約4mの空閑地を坪内道路とみることもできる。なお、同じく九坪で行ったH J第541次調査区でも、東西1/4ライン付近で、平行して流れる南北溝S D 111・112を確認しており、これが溝S D 115・116と一連の溝である可能性も考えられる。

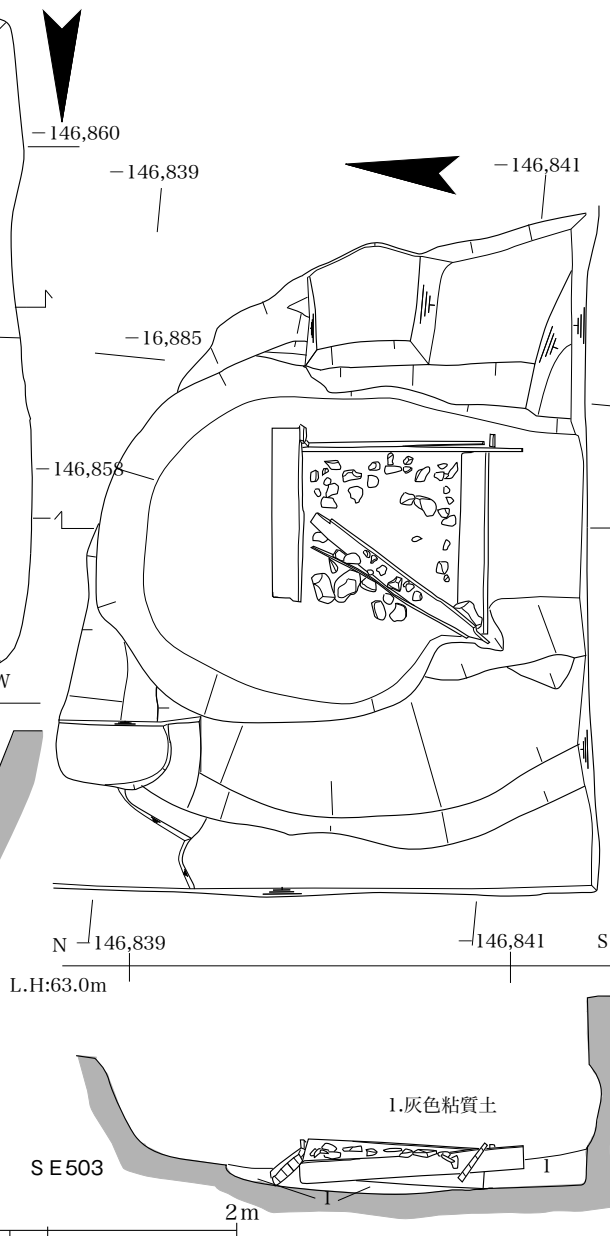
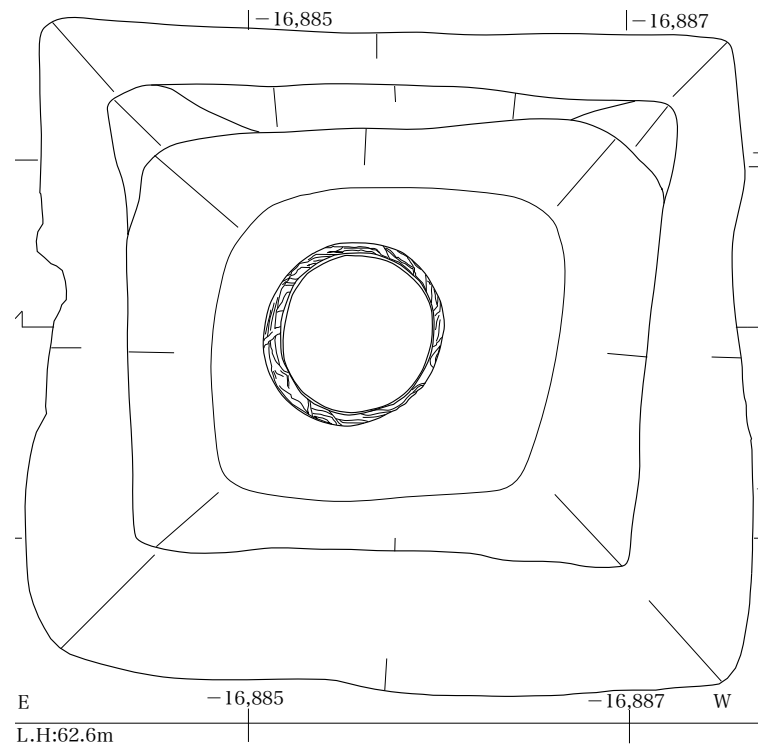
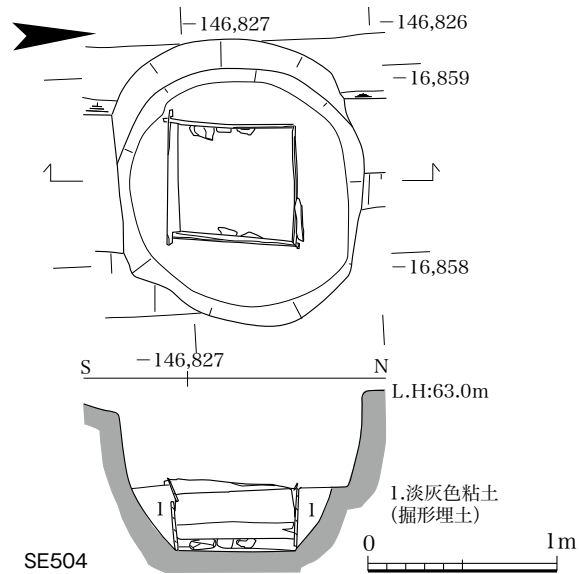
掘立柱列S B 217・218は、九坪南面築地塀S A 221上で検出し、九坪内に入る門と考える。重複関係から2時期あることが判明した。門S B 217の南側には木橋S X 818が、門S B 218の南側には木橋S X 819がそれぞれ位置する。門S B 217東側の柱穴には直径0.3mで、八角形に面取りを施した柱を据え、柱の根腐れを防止するためであろう、柱の周囲に粘土を巻いていた。門S B 217の東側柱穴および門S B 218の西側柱穴は、坪内の概ね東西1/6ラインに位置する。柱の重複関係から、門S B 217から門S B 218の順で、西から東へと建て替えられていることがわかる。

井戸S E 501は井戸枠が抜き取られており、枠組構造は不明であるが、湧水層まで達しており井戸と判断した。井戸S E 502は一木削り抜きの枠である。検出面から約1.4mまで掘り下げたところで、枠を確認した。枠材は丸太材をそのまま内削りしたものである。枠は径約1.0m、厚さは約0.1m、残存高約1.3mである。井戸S E 503は方形横板組で、下段の1段分が遺存していた。井戸S E 504は方形横板組で、下段の2段分が遺存していた。東側と西側の掘形底面には0.2m程の礫を並べ、その上に枠を据えている。枠内埋土から奈良三彩小壺・蓋などが出土した。奈良三彩小壺をX線撮影した結果、ガラス玉6点を確認した。井戸を埋める際に納置したのちと考える。

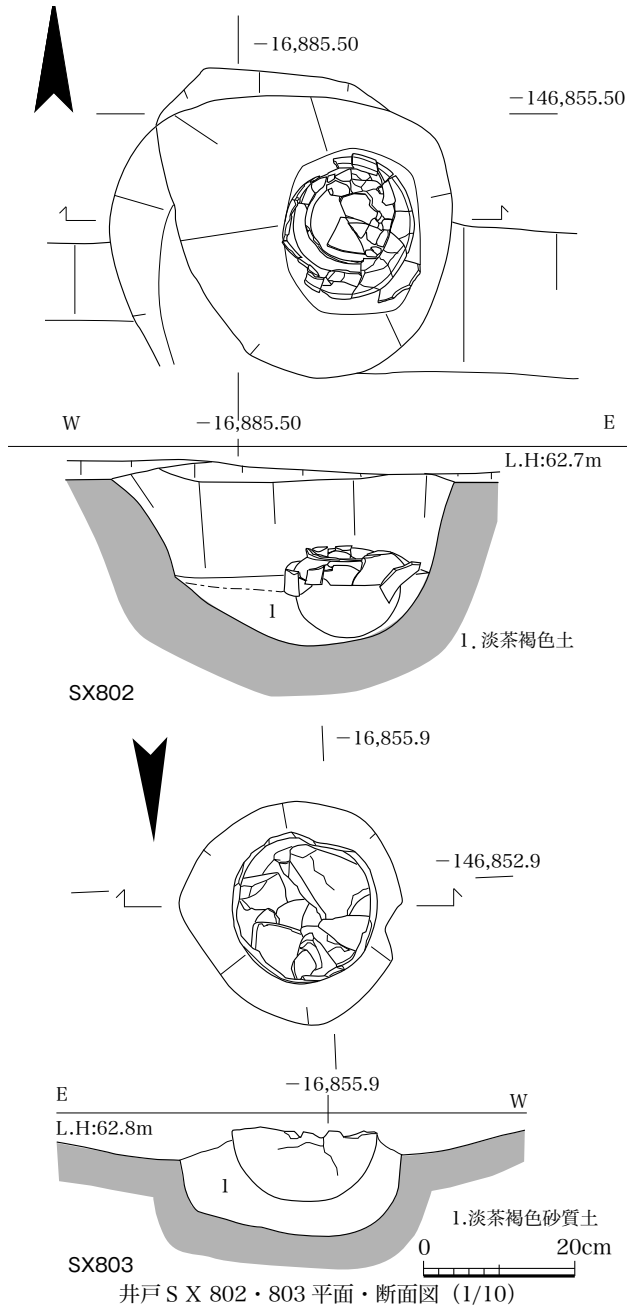
埋納遺構S X 802はS E 502北側で検出した。土師器甕Aを正位に置き、土師器杯で蓋をする。甕内部のX線撮影で、金属片と銭貨片が写っていたが、掘り出したところ、それらしきものは無かった。埋納遺構S X 803は東面築地塀S A 220上で検出した。掘形内に土師器甕Aを正位に置く。

X線撮影の結果、甕内に和同開珎5枚、ガラス玉10点以上、銀薄板2枚を確認した。検出位置から東面築地塀S A 220構築時の地鎮と考える。

十坪の遺構 東小路西側溝S D 1011とその西側の南北溝S D 123との間には幅約1.5mの空閑地があり、ここに築地塀S A 252を想定し、南北溝S D 123はその雨落溝と考える。北小路南側溝S D 2006とその南側の東西溝S D 119の間は幅約2.4mの空閑地で、ここに北面築地塀S A 264を想定し、東西溝S D 119はその雨落溝と考える。南北溝S D 139は南から北へ向かって勾配を下げることから、雨落溝S D 119から北小路南側溝S D 2006へ向けて排水するための暗渠排水路と考える。南北溝S D 118も、同様に宅地内から北小路南側溝への排水施設と考える。



井戸S E 502・503・504平面・断面図 (1/40)



十五坪の遺構 北小路南側溝 S D 2006 とその南側の東西溝 S D 101 の間は幅約 2.4 m の空閑地で、ここに十五坪の北面を限る築地塀 S A 201 を想定し、東西溝 S D 101 はその雨落溝と考える。東小路東側溝 S D 1012 とその東側の南北溝 S D 104 との間には約 3.9 m の空閑地があり、ここに十五坪の西面を限る築地塀 S A 203 を想定し、東西溝 S D 104 はその雨落溝と考える。

十六坪の遺構 掘立柱建物 4 棟 (S B 293・295・298・302)、掘立柱列 8 条 (S A 294・296・297・299～301・303・304)、塀 2 条 (S A 305・306)、土坑 1 (S K 627)、溝 6 条 (S D 117・148・151～154) がある。

東小路東側溝 S D 1012 とその東側の南北溝 S D 117 b との間には約 2.1 m の空閑地があり、ここに十六坪の西面を限る築地塀 S A 305 を想定し、溝 S D 117 b はその雨落溝

と考える。北小路北側溝 S D 2005 とその北側の東西溝 S D 148 b との間には約 1.5 m の空閑地があり、築地構築時の堰板留めとみられる小柱穴を検出したことから、ここに十六坪の南面を限る築地塀 S A 306 を想定し、溝 S D 148 b はその雨落溝と考える。小柱穴から復原できる築地塀 S A 306 の基底幅は約 1.3 m である。築地塀 S A 305 の南端と築地塀 S A 306 の西端部分には厚さ約 0.2 m の褐灰色粘砂があり、これを築成土と考える。雨落溝 S D 117 b・148 b の埋土は下から灰色粘土、茶灰色土である。溝 S D 117 b 溝底は、北から南へと勾配を下げている。十六坪内は南側の北側溝 S D 2005 へ排水していたと考える。

築地塀 S A 305・306 の接続部の下で、十六坪南西隅に沿って L 字状に屈曲する溝を確認した。位置関係から古い築地塀雨落溝と判断し、古い西面築地塀雨落溝を S D 117 a、古い南面築地塀雨落溝を S D 148 a とする。雨落溝 S D 117 a・148 a の埋土は下から灰色砂、褐灰色粘砂である。溝幅は堆積状況から両溝とも約 2.7 m 以上と推察できる。南北溝 S D 153・154 は、築地塀 S A 306 上で検出し、北から南へ勾配を下げることから、坪内から北小路北側溝 S D 2005 への排水を意図した築地暗渠と考える。築地暗渠 S D 153 には、木樋が据えられていた。木樋は残存長約 1.7 m で、厚さ約 5 cm の底板と両側の側板が残存していた。底板の幅は約 25 cm、側板の高さは約 12 cm で、木樋の内法幅は約 16 cm である。

十六坪内の南北 1/4 ラインでは、平行する 2 条の東西溝 S D 151・152 を検出した。両溝間は幅 2.4 m あり、ここに東西方向の坪内道路 S F 904 を想定して、北側溝が S D 151、南側溝が S D 152 と考える。北側溝 S D 151 の埋土は下から灰褐色土、茶灰色土で、南側溝 S D 152 の埋土は灰褐色土である。南側溝 S D 152 は、発掘区東端で幅 1.0 m であったものが、西面築地塀雨落溝 S D 117 との合流部付近では幅 0.3 m に狭くなる。重複関係から南側溝 S D 152 は掘立柱建物 S B 298 より新しい。なお、坪内道路 S F 904 部分には、重複関係から北側溝 S D 151 より古い小柱穴が 2 条平行して並んでいた。これは発掘区外東側へ続く東西棟建物 S B 295 と復原したが、これら小柱穴を築地構築時の堰板留めの柱とみると、ここに築地塀があったとも考えられる。

掘立柱列 S B 293 は、西面築地塀 S A 305 上で検出し、十六坪に入る門と想定できる。柱間中央が坪内道路 S F 904 の道路心と一致し、坪内東西道路 S F 904 と同時期と考える。

東西方向の掘立柱列 S A 294 は坪内の概ね南北 1/4 分割ラインに位置する。坪内を区画する施設と考えるが、検出できたのは 1 間分である。掘立柱列 S A 294 は、遺構の重複関係から雨落溝 S D 117、坪内道路南側溝 S D 152 より古いことがわかる。(原田憲二郎・大原 瞳)

平城京跡(左京五条四坊九・十・十五・十六坪・五条条間北小路・東四坊坊間東小路)
の調査 第608次F・G発掘区・第622次A・B・C・D発掘区

条坊関連遺構一覧表

遺構番号	掘形等			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)		
S F 1010	南北道路	長さ 34.0 以上 × 幅 5.5 ~ 6.0	—	—	東四坊坊間東小路。東西側溝心々間距離は 7.5 m。路面心の国土座標値は X = -146,869.00、Y = -16,849.20。
S D 1011	南北溝	長さ 34.0 以上 × 幅 0.6 ~ 1.8	0.2 ~ 0.5	8 ~ 9 世紀前半：土師器杯・皿・椀・甕、須恵器杯・皿・甕・壺・丸瓦・平瓦	東四坊坊間東小路西側溝。溝心の国土座標値は、X = -146,869.00、Y = -16,852.90。五条条間北小路 S F 2004 を縦断する。
S D 1012	南北溝	長さ 34.0 以上 × 幅 1.1 ~ 2.1	0.2 ~ 0.5	8 ~ 9 世紀前半：土師器杯・皿、須恵器杯・皿・甕・壺、統一新羅土器、墨書土器、軒丸瓦 (6311 B a・新形式)・軒平瓦 (6704 A)・丸瓦・平瓦	東四坊坊間東小路東側溝。溝心の国土座標値は、X = -146,869.00、Y = -16,845.40。五条条間北小路 S F 2004 を縦断する。
S F 2004	東西道路	長さ 90.0 以上 × 幅 3.5 ~ 5.5	—	—	五条条間北小路。南北側溝心々間距離 S D 2005 a では 6.7 m、S D 2005 b では 7.6 m。路面心の国土座標値は X = -146,867.70、Y = -16,860.80。
S D 2005 a	東西溝	長さ 28.0 以上 × 幅 0.9 以上	0.5	8 世紀後半 ~ 末頃：土師器杯・椀・皿・甕、須恵器杯・皿・杯蓋・壺・甕、墨書土器、人面墨書土器、丸瓦・平瓦、銅製飾板、木簡・斎串・曲物底板・箸・漆塗椀・糸巻・木製支脚、石鏃、鉄釘、銭貨 (和銅開珎・萬年通寶)	五条条間北小路北側溝。溝心の国土座標値は、S D 2005 a では X = -146,864.80、Y = -16,893.60。S D 2005 b では X = -146,863.90、Y = -16,860.80。東四坊坊間東小路 S F 1010 を横断して流れる。このことから横断地点には橋が想定されたが、橋脚と断定できるものは無かった。ただし、橋想定付近では径 5cm の自然木の先端を尖らせた丸太杭を 12 本確認しており、これらが橋脚を水流から守る為のものであった可能性は考えられ、流失したのであろうが橋が架かっていたと考える。北岸付近は一度崩壊しており、その先後関係から古いものを a、新しいものを b とした。2005 a の幅は北岸が 2005 b の掘削により削平を受け不明だが、杭列 S X 814 を 2005 a の時の北岸護岸施設とみると、約 2.5 m に復原できる。
S D 2005 b		長さ 90.0 以上 × 幅 1.5 ~ 4.4	0.6 ~ 1.1	8 世紀後半 ~ 10 世紀代：土師器杯・皿・椀・盤・高杯・壺・甕・籠・甗、須恵器杯・蓋・皿・盤・鉢・壺・平瓶・甕、統一新羅土器、唐三彩、製塩土器、墨書土器、人面墨書土器、土馬、軒丸瓦 (6143 A)・6301 種別不明・6311 F・6348 A a)・軒平瓦 (6664 F・6666 A・6671 I a・6691 A)・丸瓦・平瓦・埴、銅鉾・銅製円盤・銅板・銅製人形・巡方・丸軛・鉸具・瓔珞・銅滴・銅滓、鉄釘、銭貨 (和銅開珎・萬年通寶・神功開寶)、木製馬形代・斎串、石鏃、砥石、獸骨、桃種	
S D 2005 c		長さ 55.0 以上 × 幅 1.0 ~ 1.5	0.2 ~ 0.3	8 世紀末 ~ 10 世紀：土師器杯・軒丸瓦 (6318 A)・軒平瓦 (6704 A)・播磨産平瓦	
S D 2006	東西溝	長さ 19.0 以上 × 幅 1.0 ~ 2.0	0.2 ~ 0.3	8 世紀後半 ~ 10 世紀中頃：土師器杯・皿・椀・高杯・羽釜・甕・須恵器杯・皿・杯蓋・壺蓋・鉢・甕、黒色土器 A 類椀・杯、統一新羅土器、軒丸瓦 (6134 B・古大内式 I 型)・軒平瓦 (6664 F)・丸瓦・平瓦	五条条間北小路南側溝。溝心の国土座標値は X = -146,871.50、Y = -16,860.80。
S D 122	南北溝	長さ 3.0 × 幅 0.5	0.3	サヌカイト削器、8 世紀後半以降：土師器皿・椀・甕、須恵器甕、平瓦	溝底は南から北へ緩やかに下っており、五条条間北小路南側溝 S D 2006 から北側溝 S D 2005 への排水施設と考える。
S D 123	南北溝	長さ 4.0 × 幅 0.5	0.3	サヌカイト剥片、8 世紀後半以降：土師器杯・皿、須恵器杯・杯 B 蓋・壺、平瓦	溝底は南から北へ緩やかに下っており、五条条間北小路南側溝 S D 2006 から北側溝 S D 2005 への排水施設と考える。
S X 810	—	南北 1.5 m	—	—	東四坊坊間東小路西側溝 S D 1011 西岸付近で検出した木杭列。樹皮が残る自然木の先端を尖らせた丸太杭を用いる。杭の径は 0.1 m 前後で最も長いもので残存長は 0.4 m。護岸施設。
S X 811	—	東西 4.0 m	—	—	五条条間北小路北側溝 S D 2005 北岸付近で検出した木杭列。樹皮が残る自然木の先端を尖らせた丸太杭を用いる。杭の径は 0.1 m 前後で最も長いもので残存長は 0.6 m。護岸施設。
S X 812	—	東西 1.9 m	—	—	五条条間北小路北側溝 S D 2005 北岸付近で検出した木杭列。角杭を用い、垂直に打ち込む。最も長いもので残存長は 0.8 m。護岸施設。
S X 813	—	東西 3.0 m × 南北 1.2 m	—	—	五条条間北小路北側溝 S D 2005 北岸付近で検出した 2 条の木杭列。角杭を用い、垂直に打ち込む。各杭間隔は広く、杭間に板を打ち付けた、九坪圃からの築地暗渠 S D 118 からの排水を受ける枺か。
S X 814	—	東西 4.0 m	—	—	五条条間北小路北側溝 S D 2005 中央で検出した木杭列。樹皮が残る自然木の先端を尖らせた丸太杭を用いる。杭の径は 0.1 m 前後、残存長は 0.6 m。S D 2005 a 段階の北岸護岸施設と考える。
S X 815	—	—	—	—	五条条間北小路北側溝 S D 2005 中央で検出した木杭群。12 本確認。樹皮が残る自然木の先端を尖らせた丸太杭を用いる。杭の径は 0.05 m 前後。最も長いもので残存長は 0.45 m。
S X 820	不整形	南北 0.3 × 東西 0.3	0.35	土師器甕	五条条間北小路 S F 2004 の路面上に位置する埋納遺構。掘形内に土師器甕 A を据え、その上に底部を打ち欠いた土師器甕 A を据える。
S X 821	不整形	東西 0.6 × 南北 0.9	0.3	土師器甕・壺・銭貨 (和同開珎)	五条条間北小路 S F 2004 の路面上に位置する埋納遺構。土師器甕 A 2 つを合口とし、東横に土師器壺 B を 2 つ置く。壺の下で銭貨 4 枚確認。
S X 822	—	東西 23.0 m	—	—	五条条間北小路北側溝 S D 2005 北岸付近で検出した木杭列。樹皮が残る自然木の先端を尖らせた丸太杭を用いる。杭の径は 0.1 m 前後で最も長いもので残存長は 0.7 m。護岸施設。

条坊関連検出遺構 (木橋) 一覧表

遺構番号	桁方向	規模		柱間寸法 (m)		備考
		規程	梁行全長 (m)	梁行	梁行	
S X 803	東西	2	4.8	2.4 等間	—	五条条間北小路北側溝 S D 2005 に架かる橋。橋脚は掘立柱で、柱穴深さ 0.4 ~ 0.45 m。橋板とみられる部材は、1 枚が残存長 1.3 m、残存幅 0.14 m、残存厚 2cm。もう 1 枚は残存長 1.1 m、残存幅 0.1 m、残存厚 3cm。
S X 809	東西	2	4.8	2.4 等間	—	東四坊坊間東小路東側溝 S D 1012 に架かる橋。橋脚は掘立柱、柱穴深さ 0.4 m。
S X 816	東西	1 以上	—	—	—	五条条間北小路北側溝 S D 2005 に架かる橋。橋脚は掘立柱、柱穴深さ 0.5 m。
S X 817	東西	1	4.8	4.8	—	五条条間北小路北側溝 S D 2005 に架かる橋。橋脚は掘立柱、柱穴深さ 0.4 m。
S X 818	南北	1	1.8	1.8	—	五条条間北小路北側溝 S D 2005 に架かる橋。橋脚は掘立柱、柱穴深さ 0.25 m。
S X 819	東西	1	1.7	1.7	—	五条条間北小路北側溝 S D 2005 に架かる橋。橋脚は掘立柱、柱穴深さ 0.4 m。

平城京跡(左京五条四坊九・十・十五・十六坪・五条条間北小路・東四坊坊間東小路)
の調査 第608次F・G発掘区・第622次A・B・C・D発掘区

九坪内検出遺構(築地塀・溝・土坑・埋納遺構)一覽表

遺構番号	掘形			主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)		
S K 02	長円形	東西 1.1×南北 0.7	0.7	弥生土器大口壺	弥生時代後期。
S K 03	長円形	東西 2.3×南北 1.5	0.3	弥生土器甕・高杯・短頸壺	弥生時代中期末～後期初頭。
S A 220	—	長さ 34.0 以上×幅 1.8	—	—	九坪東面築地塀。
S A 221	—	長さ 70.0 以上×幅 1.5	—	8世紀中頃～後半:土師器杯・皿・甕・高杯・壺、須恵器杯・皿・杯B蓋・甕・壺、墨書土器	九坪南面築地塀。東端付近で厚さ 0.3 m 分の盛土が残存。
S D 106	南北溝	長さ 34.0 以上×幅 1.6～5.4	0.25～0.55	8～10世紀前半:土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器杯・皿・甕・壺、製塩土器、丸瓦・平瓦	九坪東面築地塀雨落溝。九坪南面築地雨落溝 S D 114 との合流部では西側に大きく広がる。
S D 113	南北溝	長さ 8.5 以上×幅 0.7～1.2	0.25	8世紀代:土師器杯・皿、須恵器杯・杯B蓋	九坪の東西約 1/2 ラインに位置する。
S D 114 a	東西溝	長さ 7.5×幅 1.0～1.5	0.14	8世紀代:土師器杯・皿・甕、須恵器杯・甕	九坪南面築地塀雨落溝。両溝とも西は Y=-16.902 辺りで途切れ、さらに S D 114 a は、東が 608 次 F 発掘区と G 発掘区間で途切れる。S D 114 b は九坪東面築地雨落溝 S D 106 との合流部では途切れる。
S D 114 b		長さ 46.0×幅 9.2 以上	0.4	8世紀末～9世紀初頭:土師器杯・皿・杯B蓋・甕・高杯、須恵器杯・皿・杯B蓋・甕・壺、黒色土器A類、墨書土器、製塩土器、線刻土器、丸瓦・平瓦	
S D 115	南北溝	長さ 1.0 以上×幅 1.2	0.2	8世紀後半:土師器杯・皿・甕、須恵器杯・杯蓋・甕・壺、墨書土器	九坪内東西 1/4 ラインに位置する。S E 503 より古い。
S D 116	南北溝	長さ 14.0 以上×幅 0.5～2.0	0.1	8世紀代:土師器杯・皿	S D 115 と平行する。H J 第 541 次調査の S D 111 と一連の可能性。S B 216 より新しく、S A 215 より古い。
S D 117	東西溝	長さ 7.0×幅 2.0 以上	0.3	サヌカイト剥片・石鏃、8世紀末～9世紀初頭:土師器皿・椀・高杯・甕、須恵器杯・杯蓋・皿・甕・壺、線刻土器、製塩土器、丸瓦・平瓦	九坪内南北 1/4 ラインに位置する。
S D 118	南北溝	長さ 2.8×幅 0.4	0.2	出土遺物なし	九坪内から、五条条間北小路北側溝へ排水する築地暗渠。
S K 606	長楕円形	南北 9.0×東西 2.4 以上	0.1	8世紀後半:土師器皿・甕、須恵器杯・甕	S B 212 より新しい。
S K 607	長方形	南北 3.6×東西 5.0 以上	0.2	8世紀代:土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器杯・甕・壺、墨書土器、製塩土器、籬羽口、平瓦・丸瓦	
S X 802	不整形円形	南北 0.4×東西 0.32	0.2	8世紀代:土師器杯・甕、金属片、銭貨(銭文不明)	井戸 S E 502 北側で確認した埋納遺構。掘形に土師器甕を置き、土師器杯で蓋をする。甕に金属片と銭貨を納める。
S X 803	円形	径 0.25	0.1	8世紀代:土師器甕A・銭貨(和同開珎)・銀薄板・ガラス玉	九坪東面築地塀位置で確認した埋納遺構。掘形内に土師器甕Aを正位に置く。甕内に銭貨・銀薄板確認。

九坪内検出遺構(掘立柱建物・列)一覽表

遺構番号	棟方向	規模	桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法 (m)		備考
					桁行	梁行	
S A 203	南北	2 以上	4.2 以上		2.1 等間		柱穴の深さ 0.3～0.4 m。
S A 204	東西	6 以上	9.6 以上		1.6 等間		柱穴の深さ 0.1～0.5 m。
S B 205	南北	2 以上×2	2.8 以上	3.6	1.4 等間	1.8 等間	東面廂付建物。廂の出は 2.1 m。柱穴の深さ 0.2～0.5 m。
S B 206	東西	3×2	北側 5.8 南側 5.6	西側 3.8 東側 4.0	北側 西から 1.8-1.8-2.2 南側 西から 2.0-2.0-1.6	西側 1.9 等間 東側 2.0 等間	柱穴の深さ 0.1～0.6 m。九坪南面築地塀雨落溝 S D 114 b より古い。
S A 207	南北	5 以上	10.5 以上		2.1 等間		柱穴の深さ 0.4～0.9 m。掘立柱列 S A 208 より古い。
S A 208	南北	3	7.2		2.4 等間		柱穴の深さ 0.3～0.4 m。掘立柱列 S A 207 より新しい。
S A 209	東西	5	6		1.2 等間		柱穴の深さ 0.2 m。
S B 210	南北	5×1	11	3.8	2.2 等間	3.8	柱穴深さ 0.1～0.25 m。溝 S D 115 より新しい。
S B 211	南北	3×2	5.4	3.6	1.8 等間	1.8 等間	柱穴深さ 0.2～0.4 m。掘立柱建物 S B 216 より新しい。
S B 212	南北	2×2	3.6	3.2	1.8 等間	1.6 等間	柱穴深さ 0.2～0.4 m。
S B 213	東西	3 以上×2	7.8 以上	3.2	2.6 等間	1.6 等間	柱穴深さ 0.3～0.4 m。
S A 214	南北	2	4		2.0 等間		柱穴深さ 0.15～0.3 m。
S A 215	東西	8 以上	13.6 以上		西から 2.1-1.4-2.3-1.7 -2.7-1.7-1.7		柱穴深さ 0.05～0.2 m。溝 S D 116 より古い。
S B 216	南北	1 以上×2	1.5 以上	3.2	1.5	西から 1.5-1.7	柱穴深さ 0.15～0.3 m。掘立柱建物 S B 211、溝 S D 116 より古い。
S B 217	東西	1	3.3		3.3		門。東側の柱穴は九坪東西約 1/6 ラインに位置する。柱穴の深さ 0.5 m。
S B 218	東西	1	3.3		3.3		門。西側の柱穴は九坪東西約 1/6 ラインに位置する。柱穴深さ 0.6～0.65 m。

九坪内検出遺構(井戸)一覽表

遺構番号	掘形			井戸枠		主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	構造	内法 (m)		
S E 501	方形	東西 1.05×南北 1.1	1.2	—	—	8世紀代:土師器甕、須恵器杯	枠は抜き取られていた。井戸底の標高は 61.4 m。
S E 502	方形	東西 3.6×南北 3.8	2.45	一木割り抜き	0.77	8世紀後半:(枠内)土師器杯・皿・甕、須恵器杯・甕・壺、墨書土器、製塩土器、曲物底板、桃種、砥石	枠内底は礫敷き。重複関係から S D 114 b より古い。井戸底の標高は 60.0 m。
S E 503	円形	南北 2.6 以上×東西 3.2	1.1	方形横板組	1.0	8世紀後半～末:(掘形)土師器杯・皿・甕・黒色土器A類杯か椀、木簡、(抜取)8世紀末～9世紀初頭:土師器杯・椀・皿・甕・壺、須恵器杯・甕、黒色土器A類杯、鉸具	横板は相欠き仕口で接合。枠内底は礫敷き。重複関係から S D 115 より新しい。井戸底の標高は 61.8 m。
S E 504	円形	1.4	0.9	方形横板組	0.65	8世紀後半～末頃(掘形):土師器杯・皿・甕、須恵器杯・甕、丸瓦 8世紀末～9世紀初頭:(枠内)土師器皿・椀・高杯・甕、須恵器杯・甕・壺、奈良三彩小壺・蓋、丸瓦、木製横櫛・齋串・曲物、桃種・梅種	西・東側は 0.1m 程の礫を南北に並べ、枠を据える。重複関係から九坪東面築地雨落溝 S D 106 より古い。井戸底の標高は 62.1 m。奈良三彩小壺内にガラス玉 6 点確認。

十坪内検出遺構一覧表

遺構番号	掘形			主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)		
S A 252	—	長さ 4.5 以上 × 幅 1.5	—	—	十坪東面築地塀。
S A 264	—	長さ 7.5 以上 × 幅 2.4	—	—	十坪北面築地塀。
S D 119	東西溝	長さ 7.0 以上 × 幅 1.0	0.5	8世紀代：土師器皿・甕・高杯、須恵器杯か皿、壺、土馬、平瓦	十坪北面築地塀雨落溝。
S D 123	南北溝	長さ 0.7 以上 × 幅 1.0	0.2	出土遺物なし	十坪東面築地塀雨落溝。
S D 139	南北溝	長さ 2.5 × 幅 0.2	0.1	出土遺物なし	十坪内から、五条条間北小路南側溝へ排水する築地暗渠。

十五坪内検出遺構（築地塀・溝）一覧表

遺構番号	掘形			主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)		
S A 201	—	長さ 8.5 以上 × 幅 2.4	—	—	十五坪北面築地塀。
S A 203	—	長さ 2.5 以上 × 幅 3.9	—	—	十五坪西面築地塀。
S D 101	東西溝	長さ 5.0 以上 × 幅 1.0	0.2	出土遺物なし	十五坪北面築地塀雨落溝。
S D 104	南北溝	長さ 1.0 以上 × 幅 2.7	0.2～0.3	土師器・須恵器	十五坪西面築地塀雨落溝。

十六坪内検出遺構（築地塀・溝・土坑・道路）一覧表

遺構番号	掘形			主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)		
S A 305	—	長さ 11.5 以上 × 幅 2.1	—	8世紀代：土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・甕、製塩土器、平瓦	十六坪西面築地塀。
S A 306	—	長さ 9.0 以上 × 幅 1.5、 基底幅 1.3	—	8世紀代：土師器杯か皿・甕、須恵器杯・甕	十六坪南面築地塀。
S D 117 b	南北溝	長さ 19.0 以上 × 幅 2.4 ～ 2.7	0.3	サヌカイト石鏃・剥片、8世紀末～9世紀初頭：土師器杯・皿・椀・甕・高杯・須恵器杯・皿・杯蓋・甕・壺・鉢・盤、線刻土器、製塩土器、丸瓦・平瓦	十六坪西面築地塀雨落溝。掘立柱列 S A 294・299 より新しい。
S D 148 b	東西溝	長さ 7.0 以上 × 幅 3.0	0.4	8世紀後半～9世紀代：土師器杯・皿・甕・竈、須恵器杯・甕・壺・壺A蓋、製塩土器、線刻土器、墨書土器、軒平瓦 (6681 E)・丸瓦・平瓦	十六坪南面築地塀雨落溝。
S D 151	東西溝	長さ 5.5 以上 × 幅 1.5	0.2～0.3	8世紀末～9世紀初頭：土師器杯・皿・椀・高杯・鉢・甕・壺、須恵器杯・皿・杯蓋、甕・壺、平瓦・丸瓦	坪内東西道路 S F 904 の北側溝。掘立柱建物 S B 295 より新しい。
S D 152	東西溝	長さ 5.5 以上 × 幅 0.3 ～ 1.0	0.05～0.15	8世紀代：土師器杯か皿・甕、須恵器杯・皿・杯蓋	坪内東西道路 S F 904 の南側溝。掘立柱列 S A 294・296・総柱建物 S B 298 より新しい。
S D 153	南北溝	長さ 1.5 以上 × 幅 0.5	0.8	サヌカイト楔形石器、8世紀代：土師器杯・皿・甕・墨書土器	坪内から、五条条間北小路北側溝へ排水するための築地暗渠。
S D 154	南北溝	長さ 1.5 以上 × 幅 0.5	0.2～0.3	8世紀代：土師器杯か皿・高杯・甕、須恵器杯、製塩土器	坪内から、五条条間北小路北側溝へ排水するための築地暗渠。
S F 904	東西道路	長さ 6.0 以上 × 幅 2.4	—	—	ほぼ十六坪内南北 1/4 分割ラインに位置する坪内道路。掘立柱建物 S B 295 と関連させて、坪内土塀の可能性も。
S K 627	楕円形	南北 2.0 × 東西 2.0	0.2	サヌカイト石匙、8世紀末～9世紀初頭：土師器杯・皿・椀・杯蓋・甕・壺、須恵器杯・甕・壺・高杯、製塩土器、線刻土器、土馬、平瓦	掘立柱列 S A 296・297・総柱建物 S B 298 より新しい。

十六坪内検出遺構（掘立柱建物・列）一覧表

遺構番号	棟方向	規模		桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法 (m)		備考
		桁行 × 梁行				桁行	梁行	
S B 293	南北	1		2.7		2.7		十六坪南北約 1/4 ラインに位置しており、十六坪西面築地塀上に位置することから、門の可能性を考える。柱穴深さ約 0.2 m。
S A 294	東西	1 以上		2.4 以上		2.4		坪内東西道路 S F 904 南側溝 S D 152・十六坪西面築地塀雨落溝 S D 117・掘立柱列 S A 296 より古い。柱穴深さ 0.3～0.4 m。
S B 295	東西	1 以上 × 1		3.0 以上	2.1	3.0	2.1	坪内東西道路 S F 904 北側溝 S D 151 より古い。柱穴深さは約 0.4 m。
S A 296	南北	2 以上		3.0 以上		1.5 等間		十六坪西限を示し、発掘区外南側へ続く掘立柱塀の可能性を考える。礎盤を用いる。柱穴深さは約 0.3 m。掘立柱列 S A 294・総柱建物 S B 298 より新しく、坪内東西道路 S F 904 南側溝 S D 152・土坑 S K 627 より古い。
S A 297	南北	1 以上		3.0 以上		1.5 等間		発掘区外南側へ続く掘立柱塀の可能性を考える。掘立柱列 S A 296 から 1.5 m 東へ離れ、柱間も同じ。柱穴深さも同じく約 0.3 m。総柱建物 S B 298 より新しく、土坑 S K 627 より古い。
S B 298	—	3 以上 × 3 以上		東西 4.5 以上	南北 4.5 以上	東西 1.5 等間	南北 1.5 等間	総柱建物。建物は発掘区外南東に続く。柱穴深さ 0.5～0.6 m。掘立柱列 S A 296・297、坪内東西道路 S F 904 南側溝 S D 152、土坑 S K 627 より古い。
S A 299	南北	2 以上		4.2 以上		2.1 等間		十六坪西限を示し、発掘区外北側へ続く掘立柱塀の可能性を考える。柱穴深さ 0.3～0.4 m。十六坪西面築地塀雨落溝 S D 117 より古い。
S A 300	南北	2 以上		4.2 以上		2.1 等間		十六坪西限を示し、発掘区外北側へ続く掘立柱塀の可能性を考える。柱穴深さ 0.3 m。柱間は異なるが、掘立柱列 S A 296 とは同じ南北ラインに位置し、これと一連の塀の可能性もある。S A 299 と柱筋を揃える。
S A 301	南北	2 以上		4.2 以上		2.1 等間		十六坪西限を示し、発掘区外北側へ続く掘立柱塀の可能性を考える。柱穴深さ 0.4～0.6 m。
S B 302	東西	1 以上 × 2		2.1 以上	4.2	2.1	2.1 等間	西側柱列は中央柱がその両側の柱に比べて浅く、これを妻柱とみて、発掘区外東側へ続く東西棟建物と考える。側柱の深さ約 0.6 m。西妻柱は約 0.4 m。
S A 303	南北	2 以上		3.6 以上		1.8 等間		発掘区外北側へ続く掘立柱列の可能性を考える。柱穴深さ 0.4 m。
S A 304	東西	2 以上		4.2 以上		2.1 等間		十六坪南限を示し、発掘区外東側へ続く掘立柱塀の可能性を考える。柱穴深さ 0.2～0.3 m。

IV 出土遺物

6箇所の発掘区を合わせて、遺物整理箱で約260箱分の遺物が出土した。これらのうち、主な出土遺物について、以下に述べる。

1. 土器類

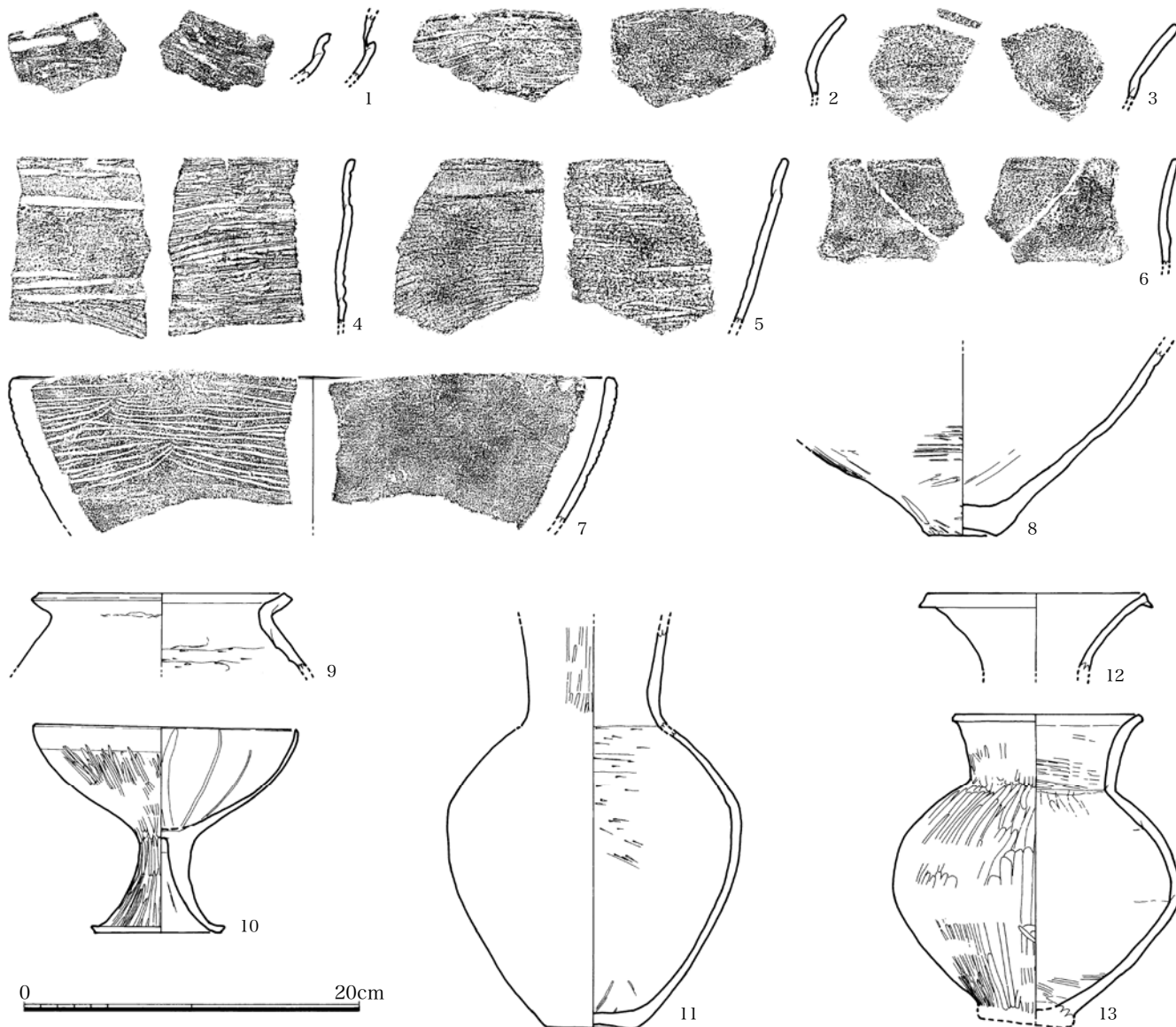
土器類には、縄紋土器、弥生土器、8～9世紀の土師器・須恵器・統一新羅陶器・唐三彩・奈良三彩・黒色土器A類、灰釉陶器、輸入陶磁器、12世紀後半～13世紀の瓦器椀、17～18世紀の陶磁器がある。

縄紋土器 第608次G発掘区と第622次A・B・C・D発掘区で確認した縄文時代の河川から総数1,214点の縄紋土器片が出土した。縄文後期末～晩期中葉頃の土器片が大半を占めるが、中期末～後期前半頃の土器片も少量ながら混在している。晩期後半の突帯文土器は、今回の調査区内では出土していない。

1は波状口縁の深鉢あるいは浅鉢で、波頂の突起に伴う

と思われる半円形の割りが口縁の一部に残る。口縁部外面に沿って2条の凹線があり、波頂下に一つの巻貝圧痕がある。2～6は深鉢の口縁部である。2は口縁部外面に横方向の条痕が残り、体部外面をケズリ調整する。3は波状口縁で、口唇部に刻目があり、体部外面をケズリ調整する。4は2段に屈曲して外反し、上段に2条、下段に3条の沈線をめぐらせる。内外面に条痕が残る。5の口縁部は、段を付けて短く外反する。内外面に条痕が残る。6は口縁部が直立気味に外反し、体部外面をケズリ調整する。7は浅鉢の口縁部で、復原口径36.0cm。口縁部外面に多重弧線文を入れる。8は深鉢の底部で、底面が窪む。内外面の一部に条痕が残る。

これらの土器は、1が宮滝式、4・5が滋賀里1式、7が滋賀里2式、2・3・6が篠原式の範疇に相当しよう。1・2・4・5・7・8は第622次B発掘区内の南岸付近、3・6は第622次C発掘区内からの出土品である。



縄紋土器・弥生土器 (1/4)

弥生土器 9～11は第622次A発掘区の土坑SK03出土土器である。9は甕で、復原口径14.7cm。体部内面をケズリ調整する。10は高杯で、残存部での器高12.2cm・復元口径15.6cm。口縁部を除く外面をタテ方向にヘラミガキし、杯部内面に粗い放射状の暗文を入れる。11は口縁部を欠失するため断定はできないが、短頸壺と思われる。外面をミガキ調整するが、表面風化のためよくみえない。体部内面は、上半部をヘラケズリ、下半部を板ナデする。これらの土器は、大和第V様式の範疇に属する。

12・13は第608次F発掘区の土坑SK02出土土器である。この他に別個体の広口壺口縁部片1点があり、土坑SK02出土土器はすべて広口壺となるのが大きな特徴である。口縁端部を下方に拡張する例(12)2点と拡張しない例(13)がある。12は復原口径12.9cmで、表面風化のため調整がよくみえない。13は底部を欠失するが、概ね18.8cm前後の器高に復原できる。復原口径11.05cmで、外面をタテ方向にヘラミガキする。これらの土器は、大和第VI-3様式の範疇に相当しよう。(鐘方正樹)

奈良～平安時代の土器 遺物整理箱で99箱分出土した。条坊側溝からの出土が大半であり、五条条間北小路〔以下「北小路」と略称する〕北側溝SD2005が最も多い。8世紀後半～9世紀初頭の時期を示す土器が多く、8世紀前半と9世紀前半～10世紀前半の土器はごく少量である。以下に主な出土土器について概述する。

埋納遺構SX821出土土器(1～4) 1・2は土師器壺Bで、体部は開き気味である。口縁部内外面はヨコナデ調整で、体部外面は指頭圧痕が残る。3・4は土師器甕Aである。3が上段、4が下段土器である。3は球胴状を呈するとみられる。口径28.0cm・残存高8.3cmである。4は体部内面にハケメ調整と当て具痕跡が残る。口径27.4cm・器高26.4cmである。

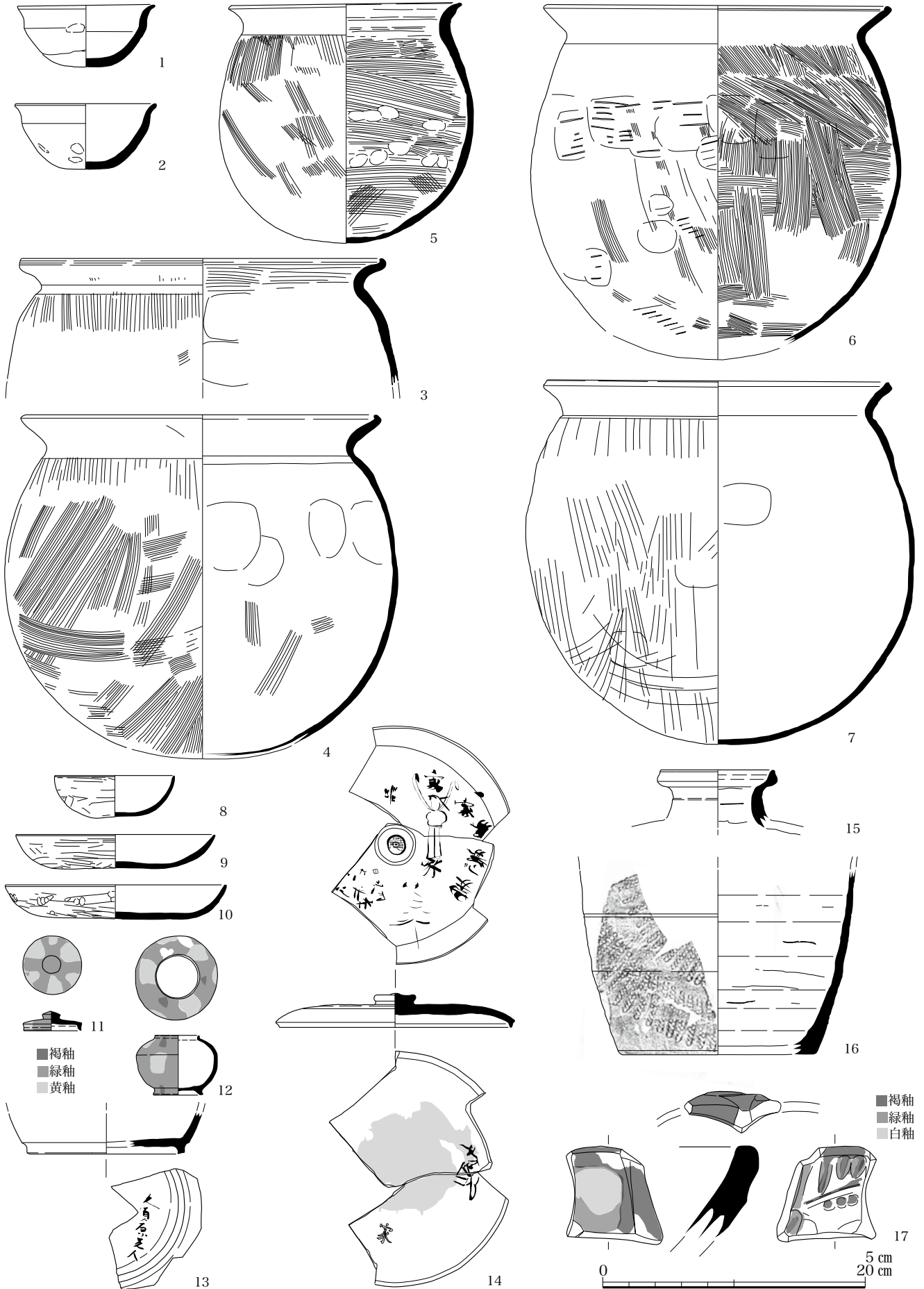
埋納遺構SX820出土土器(5～7) 5～7は土師器甕Aである。6が上段、5が下段土器である。7は下段周囲から破片で出土し、接合の結果、ほぼ完形に復原できた。5の口縁部は器厚が0.9cmと肥厚する。体部外面上位にタテハケ、それ以下と体部内面はハケメ調整。内面は体部中位と底部に指頭圧痕による凹凸が残る。口径17.8cm・器高18.3cm。6・7は直線に伸びる口縁と外傾する端面を有する。6は体部外面にハケメ調整と叩き痕跡が、体部上端には粘土積み上げ痕跡が残る。体部内面は細いハケメ調整と当て具痕跡が残る。口径26.5cm・器高27.0cm。7は体部外面全体に叩き痕跡とハケメ調整、体部内面に当て具痕跡が残る。口径26.6cm・器高27.0cm。叩き痕跡が見られることから、8世紀末～9世紀前半頃の土器とみられる。

井戸SE504枠内出土土器(8～12) 8は土師器碗Aで、外面全体をヘラケズリ調整する。口径9.05cm・器高3.25cm。9・10は土師器皿Aで、いずれも外面全体をヘラケズリ調整する。9は口径15.1cm・器高2.65cm、10は口径16.9cm・器高2.6cm。11は完形の奈良三彩小壺蓋で、全体に淡黄釉を施釉後、緑釉をつまみから放射状に6方向に施釉する。褐釉は頂部外面の縁部寄りに施釉する。口径4.4cm・器高1.5cm。12は11と組み合う完形の奈良三彩小壺で、球胴の体部と短い口縁部を有する。内外面ともロクロナデ調整。淡黄釉を全体に施釉した後、緑釉を肩部、体部中央、高台付近の各段に淡黄釉を大小の鹿子斑状に残して施釉する。褐釉は小鹿子斑の周囲を縁取る。口径3.5cm・器高4.5cm。8世紀末～9世紀初頭頃の土器とみられる。

墨書土器(13・14) 総数118点が出土した。出土遺構の内訳は、北小路北側溝SD2005aが7点・2005bが87点、東四坊坊間東小路〔以下「東小路」と略称する〕東側溝SD1012が3点、九坪南面築地塀雨落溝SD114bが4点、九坪南面溝SD115が2点、十六坪南面雨落溝SD148が1点、十六坪南面築地塀暗渠SD153が1点、九坪井戸SE502が3点、九坪土坑SK607が1点、九坪南面築地塀築成土SA221が2点、耕作に伴う溝が3点、近世土坑が2点、遺物包含層が2点である。このうち、判読できた36点については以下の一覧表にまとめた。13は須恵器杯Bの底部外面に「久須原足人」という人名を墨書する。北小路北側溝SD2005bから出土した。14は須恵器杯蓋

墨書土器一覧表

番号	次数	出土遺構	種類	器種	記載位置	釈文
1		SD 2005 a 第2層	須恵器	杯力皿	底部外面	奈
2		SD 2005 a 第2層	須恵器	杯力皿	底部外面	□〔三カ〕□
3		SD 2005 b 第1層	須恵器	杯力皿	底部外面	東カ
4		SD 2005 b 第1層	須恵器	杯蓋	頂部内面	官
5		SD 2005 b 第3層	土師器	杯力皿	底部外面	大口
6		SD 2005 b 第3層	土師器	杯力皿	底部外面	□〔〇カ〕
7	608	SD 2005 b 第3層	須恵器	杯B	底部外面	久須原足人
8	-F	SD 2005 b 第3層	須恵器	杯B	底部外面	太
9		SD 2005 b 第3層	須恵器	杯力皿	底部外面	十カ
10		SD 2005 b 第3層	須恵器	杯力皿	底部外面	十カ
11		SD 2005 b 第3層	須恵器	杯力皿	底部外面	大口
12		SD 2005 b 第3層	須恵器	杯力皿	底部外面	□〔入カ〕
13		SD 2005 b 第3層	須恵器	杯力皿	底部外面	□〔坐カ〕
14		SD 2005 b 第3層	須恵器	壺	底部外面	□〔武カ〕合
15	608	SD 114 b	須恵器	杯蓋	頂部内面	十
16		SD 114 b	須恵器	壺	口縁内面	十
17	-G	SE 502 枠内	須恵器	杯蓋	頂部内外面	
18		SD 2005 b 第1層	須恵器	壺	口縁内面	春□
19		SD 2005 b 第2層	土師器	杯力皿	底部外面	□〔南カ〕
20		SD 2005 b 第3層	土師器	杯力皿	底部外面	□〔角カ〕
21	622	SD 2005 a	土師器	高杯	裾部内面	井
22	-B	SD 2005 b	須恵器	杯力皿	底部外面	□〔三カ〕
23		SA 221	須恵器	杯A	底部外面	杯
24		近世土坑	須恵器	杯力皿	底部外面	□〔鳥カ〕
25		SD 2005 b 第1層	須恵器	杯蓋	頂部外面	之
26		SD 2005 b 第1層	須恵器	杯B	底部外面	清または請/□
27		SD 2005 b 第2層	須恵器	壺カ	底部外面	十
28		SD 2005 b 第2層	須恵器	皿A	底部外面	十
29		SD 2005 b 第2層	須恵器	杯A	底部外面	十
30	622	SD 2005 b 第2層	須恵器	壺	底部外面	十□
31	-D	SD 2005 b 第2層	須恵器	杯力皿	底部外面	奈
32		SD 2005 b 第2層	須恵器	杯A	底部外面	井
33		SD 2005 b 第2層	須恵器	杯蓋	頂部内面	十
34		SD 2005 b 第2層	須恵器	杯力皿	底部外面	中
35		SD 2005 b 第2層	須恵器	杯B	底部外面	井
36		SD 2005 b 第2層	須恵器	杯蓋	頂部内面	東



奈良～平安時代の土器 (1～16は1/4, 17は実物大)

の頂部内面に輪郭を縁取りした「家」の字を、頂部外面には絵と「家／家／器」などの文字を墨書する。九坪井戸S E 502 枠内から出土した。

統一新羅土器 (15・16) 第622次B・D発掘区から総数61片が出土した。出土遺構の内訳は、北小路北側溝S D 2005 bが13点、東小路東側溝S D 1012が27点、北小路南側溝S D 2006が2点、北小路北側溝S D 2005 あふれの埋土が18点、耕作に伴う素掘溝が1点である。これらの殆どが東小路S F 1010と北小路S F 2004の交差点周辺から出土しており、胎土・焼成・調整技法から同一個体になるものとみられる。15は壺の口頸部である。内外面ともロクロナデ調整。外側は暗青灰色で、断面は灰赤色に焼き上げる。口径8.6cm。北小路北側溝S D 2005 bと東小路東側溝S D 1012出土分が接合した。16は壺の底部で、平底である。体部内外面はロクロナデ調整、底部外面はロクロケズリ調整。内面には粘土積み上げ痕跡が残る。外面は一条の沈線を巡らした後、縦長連続文をジグザグ状に施す。色調は15と同じである。底径15.0cm。北小路北側溝S D 2005 b出土品と、東小路東側溝S D 1012と北小路南側溝S D 2006との合流部出土品が接合した。

唐三彩 (17) 第622次F発掘区内の北小路北側溝S D 2005 bから1点出土した。17は細片ではあるが、輪花形の杯か碗の器形になるものとみられる。外面には花卉などの印花文を施す。内面は白釉、緑釉、褐釉を、外面は褐釉と花卉に僅かな緑釉を施釉する。釉薬には細い貫入が見られる。胎土は軟質で白色を呈する。(大原 瞳)

2. 瓦類

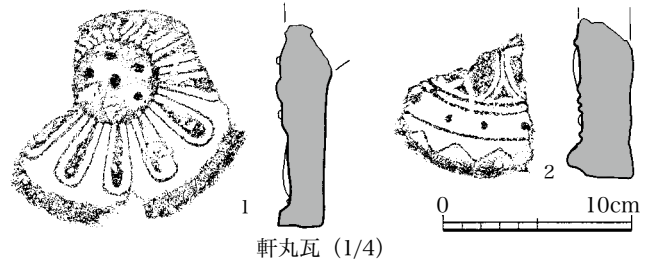
瓦類は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が150箱分出土した。ここでは軒瓦について記す。軒瓦の型式と出土点数の内訳は別表のとおりで、これらのうち、遺構から出土したものは遺構規模一覧表に示した。

出土した軒瓦のうち、軒平瓦6666型式A種と6671型式I a種は十五坪の主要瓦であり、軒平瓦6702型式A種は十坪の主要瓦であることが、過去の調査で判明している。2点出土した新形式軒丸瓦について報告する。

1は単弁蓮華紋。古代山陽道賀古駅家に比定されている、兵庫県加古川市の古大内遺跡出土品を標識名とする、「古大内式軒丸瓦」のI型と同範¹⁾であり、単弁13弁蓮華紋軒丸瓦とわかる。中房蓮子は1+6に配置し、中心蓮子は周囲の蓮子より一回り大きい。蓮弁は輪郭線で囲まれた子葉からなる。外縁は素紋の直立縁である。瓦当裏面に接合溝を設け、丸瓦を接合する。瓦当側面下半部の一部には瓦当面から1.2cm幅でめぐらる面があり、範の側面の痕跡とみられる。胎土は密、焼成はやや軟質、色調は白灰色である。

軒瓦出土点数表

		608 -F	622 -A	622 -B	622 -D	計
軒 丸 瓦	6 1 3 4 B	1				1
	6 1 4 3 A			1		1
	6 2 8 2 C a				2	2
	6 3 0 1 種別不明	1				1
	6 3 1 1 B a			1		1
	6 3 1 1 F	1				1
	6 3 1 8 A	1				1
	6 3 4 8 A a			1		1
	新形式			1		1
	新形式 (古大内式I型)	1				1
軒 平 瓦	奈良時代型式不明	2		4		6
	近世以降左巴紋		1			1
	6 6 6 4 F	1		1		2
	6 6 6 6 A	1				1
	6 6 7 1 I a	1		2		3
	6 6 8 1 E			1		1
	6 6 9 1 A			1		1
	6 7 0 2 G			1		1
	6 7 0 4 A	6				6
	6 7 2 1 種別不明			1		1
奈良時代型式不明			1	1	2	



北小路南側溝S D 2006から出土した。

2は小片で、内区と外区の上に2重の圈線が巡るのが特徴的である。中房からのびる弁の輪郭線は、界線に接続する。間弁は短く三角形状である。外区内縁に珠紋を、外区外縁に線鋸歯紋をめぐらす。外縁の形態は、内面が内傾する傾斜縁。東堀河出土品²⁾は同範の可能性が高い。実物照合を行った結果、一致する部分は無かったが、紋様構成や各紋様の大きさ、種紋・鋸歯紋の間隔は同じで、東堀河出土品の欠損部分の紋様を補完するものとみられる。東堀河出土品と本例をもとに紋様構成を復原すると、蓮弁は複弁7弁と単弁1弁の、複弁単弁混合紋となる。瓦当裏面は粗い縦方向のナデツケ調整をおこなう。瓦当側面には瓦当面から0.9cm幅でめぐらる面があり、範の側面の痕跡とみられる。胎土は粗く、焼成はやや軟質、色調は灰色を呈する。東小路東側溝S D 1012から出土した。(原田憲二郎)

3. 金属製品

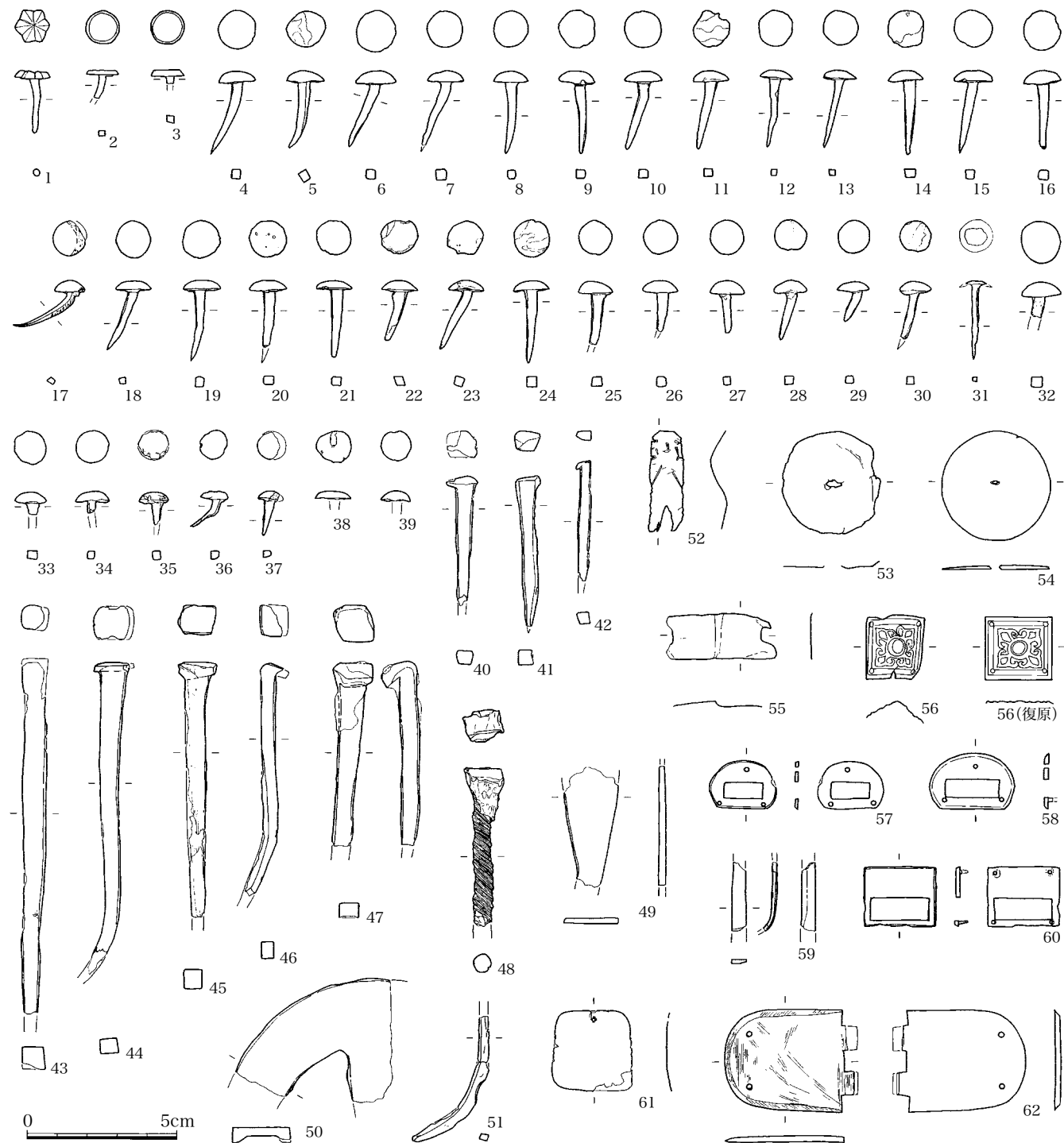
銀製品 埋納遺構S X 803の土師器甕内に納入されていた銀の薄板が2点ある。最大長1.9cmと1.4cmで、厚さ0.01cm。いずれも不整形で、不規則に折れ曲がっている。

銅製品 銅鋌は合計45点あり、このうち頭部が残るもの

(1~39)は39点である。頭部の形態から、花形銅鉾(1点)・扁平形銅鉾(2点)・半球形銅鉾(36点)の3つに分類できる。花形銅鉾(1)は6弁で構成され、弁中央に稜線をつくる。足部の断面が丸いという特徴を有する。頭部表面にのみ鍍金が認められる。全長2.1cm・頭部径1.2cm・頭部厚0.25cm・足部厚0.4cm。扁平形銅鉾(2・3)は頭頂に径1.0cm前後の平坦面をつくる。足部は断面方形で、2点ともにその一部を欠損するため全長は不明である。頭部径1.05~1.1cm・頭部厚0.15~0.2cm・足部厚0.25cm。半球形銅鉾(4~39)は頭部の大きさが径1.0~1.35cm・厚0.25~0.5cmの

範囲に広がるが、径1.1~1.25cm・厚0.3~0.4cmの範囲に全体の85%が集まる。足部は断面方形で、足部厚は0.3~0.5cmの範囲内に収まる。足部長は2.1~2.5cmの範囲内に20点(77%)が集まり、1.0~1.7cmの範囲内に散布する6点(23%)は先端部が丸いなど湯回りが悪いものが目立つ。半球形銅鉾の多くは不良品とみられる。

人形(52)1点は、厚さ0.02cmの薄い銅板を人形に切り抜き、顔と手を整えて叩いて線で表現する。S字状に屈曲した状態で遺存するが、これをまっすぐに伸ばした時の大きさは全長3.6cm・幅1.15cmに復元できる。



金属製品 (1/2)

円盤(53・54)2点は、厚さ0.05cm～0.15cmの薄い銅板を円形に切り抜き、中央を鑿で穿孔する。53は径3.4cmで、片面から穿孔し、一部が割れて表裏に折れ曲がる。54は径3.6cmで、表裏両面から穿孔する。

銅板片は7点あるが、本来の形状が推定できるのは55のみである。残存長3.7cm・幅1.5cm・厚さ0.03cmの銅板を中央で鍵形に屈曲させ、両端部を凹形に切り欠いているようにみえる。

飾板(56)1点は、屈曲し変形して遺存するが、全長2.25cm・幅2.1cm・厚さ0.02cmの方形に復元できる。四隅に向かつてのびる法相華紋を中央に型で打ち出した後、四隅に鋳留孔をあける。

丸軋(57・58)は2点ある。57は縦1.6cm・横2.2cm・厚さ0.1cm、58は縦1.85cm・横2.85cm・厚さ0.15cmで、周縁に面取りがある。長方形孔と3つの鋳留孔があり、2点ともに裏金具とみられる。

巡方(60)は1点あり、縦2.0cm・横2.4cm・厚さ0.15cmで、四周に面取りがある。長方形孔と四隅に足があり、表金具とみられる。足は銚板と一体で鑄造されている。

鉸具は3点あり、2点(59・62)を図示した。59は弓金具の一部と推定され、残存長2.25cm・幅0.5cm・厚さ0.15cmである。62は板金具で、差し金との結合部分が欠失する。三方に面取りを行い、2つの鋳留孔がある。表面に研磨痕が残る。縦3.4cm・横4.3cm以上・厚さ0.2cm。

瓔珞(61)1点は、縦2.65cm・横2.68cmの隅丸方形で、厚さ0.03cm。上辺中央に1つの穿孔がある。

他に小さな銅片が5点ある。図示した銅製品は56が北小路北側溝S D 2005 a、61が北小路北側溝S D 2005 c、それ以外はすべて北小路北側溝S D 2005 bから出土した。

鉄製品 鉄釘は概ね形状の判明するものが8点ある。小型品(40～42)と大型品(43～47)に大きく分かれる。すべて欠失部があり、全長が判明するものはない。足部の断面形はすべて方形。小型品は全長5cm前後であったと推測でき、足部幅0.6cmの太釘(40・41)と0.4cmの細釘(42)がある。頭部のつくりは40が鍛造、41・42が折り曲げである。大型品は全長10～13cm程度であったと推測され、足部幅0.7～0.8cmの太釘(43～45・47)と足部幅0.5cm前後の細釘(46)がある。頭部のつくりは44・45が鍛造、46・47が折り曲げ、43が不明である。なお、51は鉄釘足部の可能性があるが、凹凸をつくり出す点に差異がある。48はねじり鉄で、先端に付着する何かを挟みこんでいるようにみえる。残存長5.3cmで、断面は径0.6cmの円形を呈する。49・50は不明鉄製品である。49は残存長3.95cm・最大幅1.8cm・厚さ0.25cmの鉄板で、広端側に向かって厚みが減り、

狭端側に屈曲を認める。50は復原径10cm・厚さ0.5cmの鉄製品の一部で、内部に透孔がある。裏面には深さ0.2cmの凹みをつくり出す。

42は第622次B発掘区北半中央に位置した野井戸の枠内から出土しており、近世以降まで時期が下る。44・46は北小路北側溝S D 2005 aの出土品で、50が遺構面直上の出土品、その他は北小路北側溝S D 2005 bの出土品である。

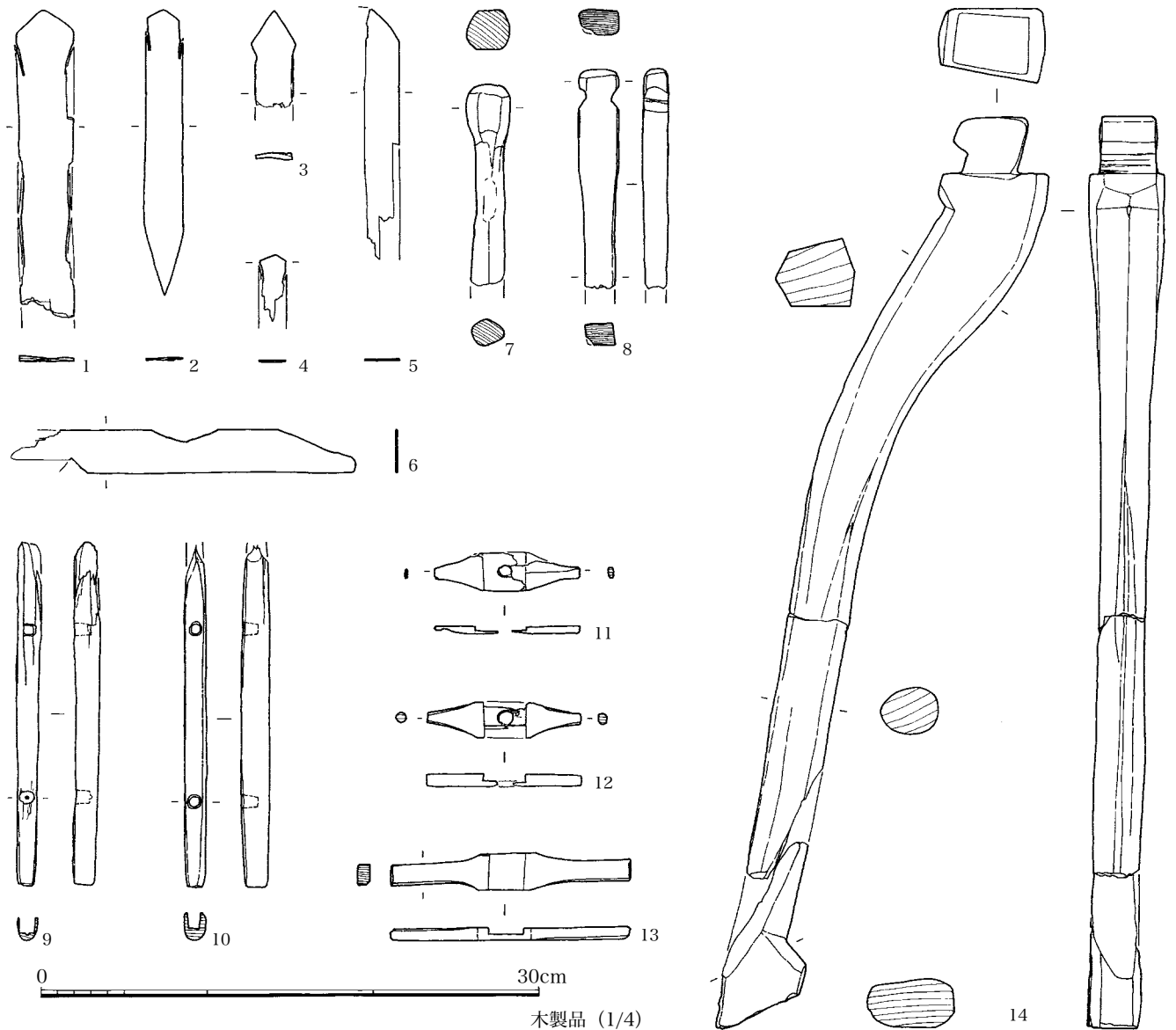
4. 木製品

北小路北側溝S D 2005から杭・棒状品・割裂き材・燃えさし・檜皮等と共に出土した主な木製品について以下に記す。6・7は北小路北側溝S D 2005 bの出土品で、それ以外はすべて北小路北側溝S D 2005 aの出土品である。

祭祀具 1～5は斎串、6は馬形と推定でき、すべて割裂き材を使用して製作されている。1は残存長18.4cm・最大幅3.5cm・厚さ0.2～0.4cmで、下半部を欠失する。上端を圭頭形につくり、上下の切込みを側面の左右に2対以上入れるものと思われる。2は全長17.1cm・最大幅2.4cm・厚さ0.2cmである。上端を圭頭形、下端を剣先形につくり、上端近くの側面の左右に1箇所切込みを入れる。3は残存長5.8cm・最大幅2.7cm・厚さ0.25～0.45cmで、下半部を欠失する。上端を三角形につくり出す。4は残存長4.05cm・最大幅1.65cm・厚さ0.15cmで、上端部がわずかに遺存する。上端を圭頭形につくり、上端近くの側面の左右に1箇所切込みを確認できる。5は残存長15.0cm・残存幅2.15cm・厚さ0.2cmで、上半部の左右1/2がわずかに遺存する。側面の切込みは確認できない。6は残存長20.75cm・最大幅2.65cm・厚さ0.1cmで、頭部の一部を欠失する。下辺に頭と頸の境をあらわす三角形の切欠き、上辺に背をあらわす弧状2段の切欠きをいれる。

7・8は棒状木製品で、いずれも下半部を欠失する。7は残存長12.15cm・最大幅2.7cmで、頭部を隅丸方形に削り出す。8は残存長13.2cm・最大幅2.5cm・厚さ1.3～1.6cmで、上端近くの側面の左右に1箇所切欠きを入れる。

9～12は糸巻の一部、13はその未製品と考えられる。9・10は桧木で、端部の一部を欠失する。いずれも横木を結合するための柄穴を2箇所に設けている。断面形はU字形で、横木を結合する面のみ平らに削る。柄穴は貫通しない。9は全長20.7cm・最大幅1.45cm・厚さ1.2～1.6cmで、柄穴は径0.8cm前後・深さ0.9～1.0cm。10は残存長20.6cm・最大幅1.35cm・厚さ1.3～1.75cmで、柄穴は径0.8～0.9cm・深さ0.9cm。11・12は横木で、いずれも2片に割れ一部を欠失する。桧木に結合するため両端を細く丸く削り、中央に相欠きをつくって軸孔を穿孔する。相欠き幅は2点ともに2.5cmであり、組み合う可能性が考えられる。11は全長



8.85cm・最大幅2.4cm・厚さ0.5cmで、軸孔は径0.7cm。12は全長9.4cm・最大幅2.2cm・厚さ0.8cmで、軸孔は径0.8cmに復原できる。13は横木の未製品で、全長14.6cm・最大幅2.3cm・厚さ0.8cm。両端を細く削る前の状態で、軸孔も未穿孔である。相欠き幅は2.15cmである。

14は机などの天板を支える脚部(支脚)と考えられる。脚先の破片とは直接接合しないが、その形状や同じ遺構内から出土している点から同一個体と判断できる。上端につくり出した鍵形の出納で天板と結合したと推測できる。獣脚に似ており、上部は太く六角形に面取りし、下へいくにつれて細く丸くなるが、脚先は蹄状に大きくつくる。全長は57.5cm前後に復元でき、最大幅6.6cm・最大厚4.5cmである。他に曲物(一部)が北小路北側溝S D 2005 aから7点、九坪の井戸S E 502 枠内から1点、九坪の井戸S E 504 枠内からは曲物1点・横櫛1点が出土した。(鐘方正樹)

5. 木筒

木筒は九坪の井戸S E 503の掘形の底から1点(1)が、

北小路北側溝S D 2005 aの暗灰色粘質土層から2点(2・3)が密着して出土した³⁾。

(1)・□ 臣□□ 家家 足

〔臣カ〕

・□□□ (297)×32×8 065

上端は表面側と裏面側の両側から切り込みを入れ、二次的に折り取る。下端部は切断し、平坦である。左側面は刃物を途中まで入れ、割り裂く。右側面は割り裂きの後、一部削り調整を行う。表裏両面とも丁寧に削る。

(2)・「∨古銭百廿一文『□』」

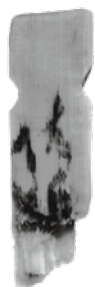
・「∨『□□』」

129×19×4 033

銭の付札。上端部寄りの左右に切り込みを入れていたとわかる。下端部は剣頭状に削る。表裏両面と両側面は丁寧に削る。表面最下段の文字と、裏面の文字は元の木筒として利用されていた時の文字とみられる。古銭は8世紀後半に発行された新銭である万年通寶・神功開寶に対する呼称で、それより前に発行された和同開珎を指すとみられる。



1



3



2

木簡 縮尺 (2/3)
 (撮影：奈良文化財研究所 中村一郎氏)

(3) 佐伯 × (61) ×19×6 039
 上端部寄りの左右に切り込みを入れる。下半部は欠損して
 おり、下端部の形状は不明である。表裏両面と両側面は丁
 寧に削る。 (原田憲二郎)

6. その他の遺物

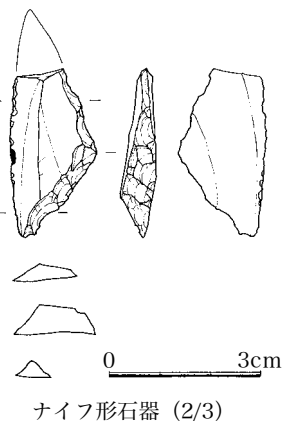
銭貨 総数 61 枚 (和同開珎 28 枚・神功開寶 19 枚・萬
 年通寶 6 枚・銭文不明 8 枚) が出土したが、このうち 49 枚 (和
 同開珎 22 枚・神功開寶 19 枚・萬年通寶 6 枚・銭文不明 2 枚)
 が条間北小路北側溝 S D 2005 出土で大半を占める。

ガラス玉 九坪の井戸 S E 504 出土の三彩小壺内に納入
 されたガラス玉 6 点は X 線写真で確認できるものの、極めて
 遺存状態が悪い。X 線写真から径 0.5cm 前後のガラス玉
 と判断できる。北小路路面の埋納遺構 S X 803 出土の土師
 器甕内に納入されたガラス玉も遺存状態が悪く、風化して
 緑灰白色を呈し破損が著しい。ガラス玉は径 0.6 ~ 0.65cm・
 厚さ 0.4 ~ 0.45cm で、6 点前後を確認できる。

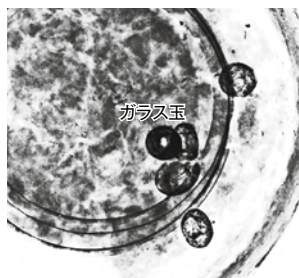
石器 出土石器の内訳は、旧石器時代の国府型ナイフ形
 石器 1 点・縄文~弥生時代の楔形石器 7 点・石匙 2 点・石
 錐 5 点・石鏃 19 点 (未製品 6 点を含む)・削器 20 点・搔
 器 2 点・石核 49 点・剥片 363 点 (RF43 点・UF70 点を含む)・
 碎片 79 点・太型蛤刃石斧 1 点である。図示した国府型ナ
 イフ形石器は、サヌカイト製で刃部に微細な剥離痕がある。
 残存長 3.3cm・幅 1.7cm・厚さ 0.7cm。片端を欠損する。

その他 出土した砥石 8 点のうち 5 点と土馬 10 体以上・
 円盤形土製品 1 点・鞆羽口・焼土・木炭等が北小路北側溝
 S D 2005 から出土した。

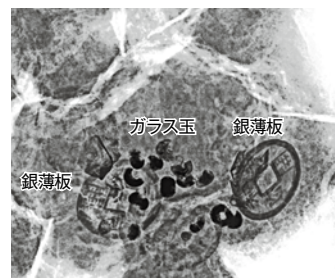
自然遺物 縄文時代の河川 1
 から栗皮 26 点以上・イチイガ
 シ 33 点以上・クルミ核 2 点以
 上トチノミ 6 点以上・不明種
 実 14 点以上、北小路北側溝 S
 D 2005 から桃核 130 点・クル
 ミ核 4 点・不明種実 2 点・馬歯
 16 点以上、井戸 S E 504 から
 桃核 80 点以上・不明種実 2 点
 以上・クルミ核 1 点・栗皮 1 点
 が出土した。 (鐘方正樹)



ナイフ形石器 (2/3)



井戸 S E 504
 三彩小壺 X 線写真



埋納遺構 S X 803
 土師器甕 X 線写真

V 調査所見

①五条条間北小路北側溝 S D 2005 については、H J 第 506 次調査で、東四坊大路の路面を横断するように造られていることが確認されていた。このことは周辺地形をも勘案すると、五条条間北小路北側溝が周辺の基幹排水路として機能していたためという見方ができる。その西方となる今回の発掘区でも、五条条間北小路北側溝 S D 2005 は、交差する東四坊坊間東小路両側溝 S D 1011・1012 からの排水を受け、東四坊坊間東小路の路面を横断していたことが判明した。この成果は五条条間北小路北側溝が周辺の基幹排水路であったことを追認するものであるとともに、排水計画を重視した平城京の条坊施工計画の一端を示すものと評価できよう。

また、今回の発掘区では五条条間北小路北側溝 S D 2005 が南から北へ位置をずらして掘り直されていたことが判明した。五条条間北小路北側溝 S D 2005 北岸付近の地盤が、縄文時代の河川による灰色砂が堆積した場所であり、基幹排水路である五条条間北小路北側溝 S D 2005 の流水によって、常に浸食されやすい状況であったことがうかがえる。この地質的条件を考慮し、九坪側では五条条間北小路北側溝 S D 2005 崩壊土上に築地塀と雨落溝を築く時期には、坪南東隅辺に接する東四坊坊間東小路西側溝 S D 1011 西岸や、五条条間北小路北側溝 S D 2005 北岸に護岸施設を設け、溝岸の浸食を防ごうとしたのであろう。

②五条条間北小路北側溝 S D 2005 に架かる橋 S X 816～819 を検出した。柱の中には角柱を用いるものがあった。橋脚は、溝の一方の岸側では検出したものの、対岸ではこれに対応する橋脚が無く、橋桁等の詳細な構造は不明である。ただし、橋の架かる五条条間北小路北側溝 S D 2005 はこの周辺の基幹排水路であったため、流量が多かったことが考えられ、増水時の流水により橋板が流されないように、取り外し可能な橋板を掛け渡したような簡易な構造だったとも考えられる。

③交差点付近の五条条間北小路 S F 2004 上で埋納遺構を検出した。平城京内における埋納遺構の検出例は管見の限り 140 例以上確認されているが、道路上に合口にした土師器甕を埋納する類例は左京七条一坊の 5 例のみである。これらの性格については、小児を埋葬した可能性が高いものと指摘されている⁴⁾。今回検出した埋納遺構 S X 821 は、左京七条一坊と同様に小児を埋葬した可能性も考えられるが、合口にした土師器甕を縦位に埋納する例は今回が初例となるため、今後同様の類例を確認した上で性格を判断したい。

④五条条間北小路両側溝 S D 2005 からは、多量の遺物が出土したが、特に「古大内式軒丸瓦」が出土したことは



平城京出土「古大内式軒瓦」(1/4)

注目される。今回の調査地西隣の H J 第 459 - 2・3 次調査では、これらと組み合う播磨産の「古大内式軒平瓦」が出土しているからである。ここでは他に播磨産とみられる平瓦・熨斗瓦・須恵器が出土している。播磨産とみられる平瓦・熨斗瓦の出土分布からは、左京五条四坊九坪にこれらの瓦を葺いた建物が存在した可能性を指摘できる。

「古大内式軒瓦」は「播磨国府系瓦」と呼称される瓦の一群で、出土分布はほとんど播磨国内に限定されており、出土遺跡も播磨国府推定地(姫路市本町遺跡)・播磨国分寺・古代山陽道沿いの駅家等であることから、播磨国司の管理下において生産と配布がなされたと考えられている⁵⁾。

こうした瓦が平城京内で出土した要因としては、九坪に播磨国の調邸が存在した可能性が考えられる。調邸とは諸国から運ばれた調物を一時保管する施設であり、国から調物を運んできた運脚や在京中の郡司の宿泊機能も併せもっていたと考えられている⁶⁾。史料では、平城京の東市の西辺りに相模国の調邸があったと知られるだけであるが、各国の出先機関ともいえる調邸の性格を考えれば、諸国が平城京内外にそれを設置していたと想定できる。

調邸内には調物を保管する倉庫群や、運脚が宿泊したであろう長屋建物の存在が想定できる。これまで九坪内の調査地は、そのほとんどが坪南端部でもあり、遺構の上から存在を証明できているわけではないが、今後はそういった視点での調査が必要となろう。(原田憲二郎)

- 1) 今里幾次氏のご教示による。
- 2) 「平城京左京四条三坊九坪(東堀河)の調査」『平城京左京四条四坊・四条五坊発掘調査報告書』2007 (p.104 - 図 80 - 14)
- 3) 木簡の記載方法は、『木簡研究』の凡例に準拠した。
- 4) 奈良国立文化財研究所「第VI章 4 A 十六坪周辺の埋納遺構」『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』1997
- 5) 今里幾次「姫路市本町遺跡の古瓦」『本町遺跡(本文)』姫路市教育委員会 1984
- 6) 館野和己「相模国調邸と東大寺領東市庄」『高井悌三郎先生喜寿記念論集歴史と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念事業会 1988

平城京跡(左京五条四坊九・十・十五・十六坪・五条条間北小路・東四坊坊間東小路)
の調査 第608次F・G発掘区・第622次A・B・C・D発掘区



H J 第 608 次 F 発掘区全景 (西から)



H J 第 608 次 G 発掘区全景 (東から)



H J 第 622 次 A 発掘区全景 (東から)



H J 第 622 次 B 発掘区全景 (西から)



H J 第 622 次 C 発掘区全景 (西から)



H J 第 622 次 D 発掘区全景 (東から)



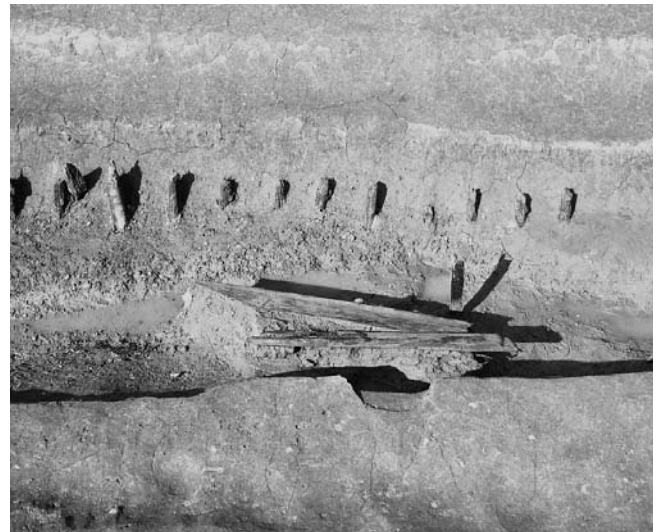
H J 第 608 次 G 発掘区 下層遺構面全景 (西から)



H J 第 608 次 F 発掘区 五条条間北小路 S F 2004 (東から)



H J 第 622 次 B 発掘区 東四坊坊間東小路 S F 1010 (南から)



H J 第 608 次 F 発掘区 木橋 S X 803 (南から)



H J 第 622 次 B 発掘区
 築地暗渠 S D 118・護岸杭列 S X 810・812・813 (南西から)



H J 第 622 次 B 発掘区 築地暗渠 S D 153 (南から)

平城京跡(左京五条四坊九・十・十五・十六坪・五条条間北小路・東四坊坊間東小路)
の調査 第608次F・G発掘区・第622次A・B・C・D発掘区



H J 第 608 次G発掘区 井戸 S E 502 (北から)



H J 第 622 次C発掘区 井戸 S E 503 (南から)



H J 第 622 次A発掘区 井戸 S E 504 (北東から)



H J 第 622 次A発掘区 井戸 S E 504 杵内奈良三彩小壺出土状況 (南から)



H J 第 608 次G発掘区 埋納遺構 S X 802 (南から)



H J 第 622 次B発掘区 埋納遺構 S X 803 (北から)



H J 第 622 次D発掘区 埋納遺構 S X 820 (東から)



H J 第 622 次B発掘区 埋納遺構 S X 821 (西から)

2. 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に係る発掘調査

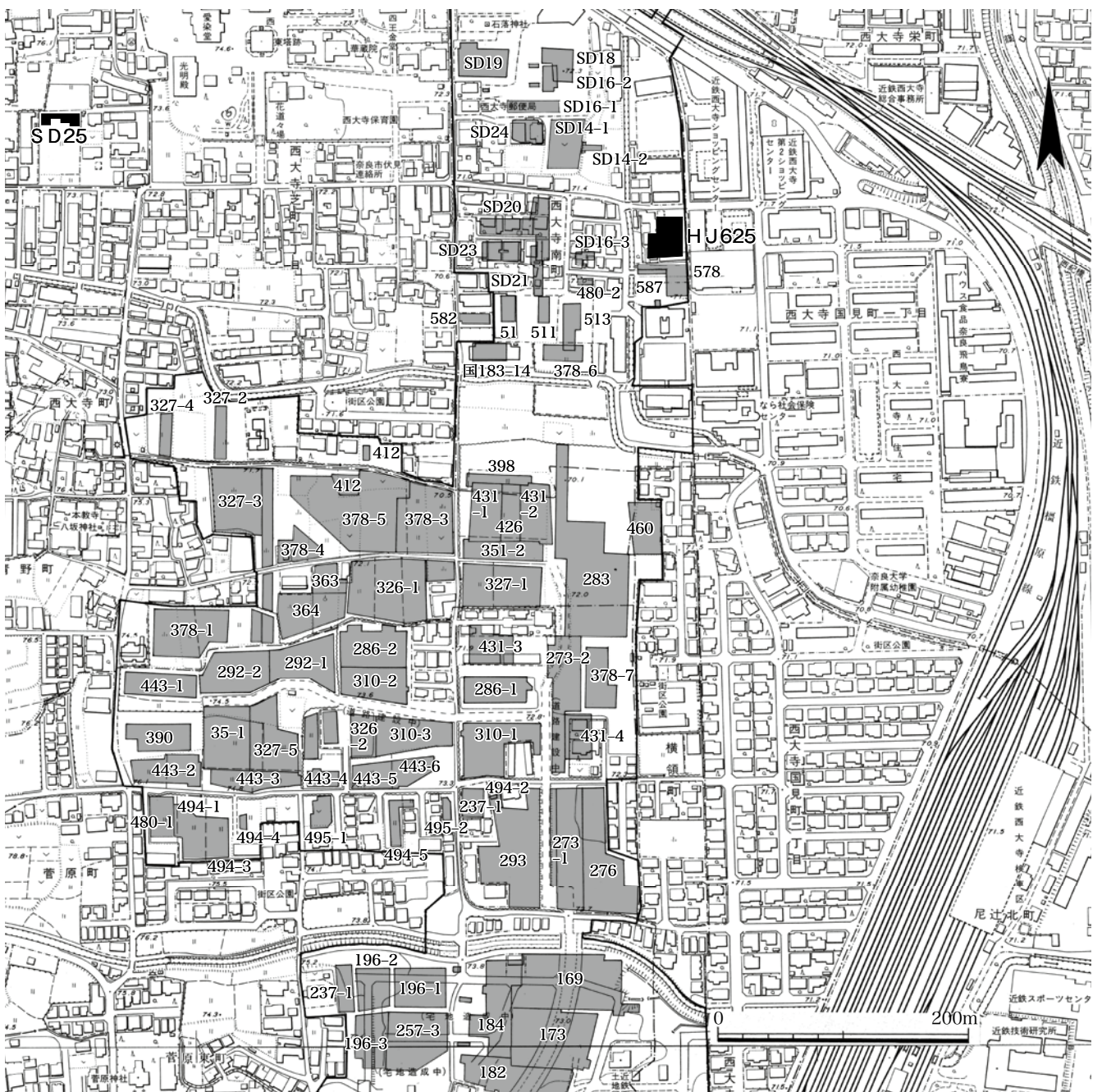
奈良市教育委員会では、昭和 63 年度から近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業地内（総面積 32 万㎡）の発掘調査を実施しており、平成 20 年度までの調査面積は 109,674㎡である。平成 21 年度は、平城京の条坊復原では、右京一条二坊十三坪にあたる地点において、1 箇

所 850㎡の調査を実施した。

報告に用いる遺構番号は、当事業地内で設定している坪ごとの通し番号であり、古墳時代以前の遺構には 2 桁を、奈良時代以降のものには 3 桁の番号を用いた。

平成 21 年度 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業 発掘調査一覧表

遺跡名	調査回数	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
平城京跡(右京一条二坊十三坪)	HJ第625次	通常事業	西大寺南町 2271- 2~4	H21. 9.24~ H 22. 1.22	850㎡	久保清・中居



近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業地内の調査 発掘区位置図 (1/5,000)

平城京跡（右京一条二坊十三坪）の調査 第625次

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京一条二坊十三坪の南西隅にあたる。今回の調査地の南側では、平成19年度に市HJ第578・587次調査を実施しており、奈良時代の道路（一条南大路）、十三坪の南辺を限る東西溝、井戸の他、平安時代以降の掘立柱列、土坑を検出している。

今回、十三坪内の様相を確認する目的で、敷地の東半部で700㎡、西半部で150㎡、計850㎡の発掘区を設定し調査を実施した。

II 基本層序

発掘区内の基本的な層序は、東半では旧駐車場造成土(0.4～0.6m)の下に旧耕作土である黒灰色土(0.2m前後)、灰色砂質土(0.1m)、黄灰色粘土と灰色砂質土の混合土(0.05m)と続き、現地地表下0.7～0.9mで黄褐色粘土の地山となる。西半では、旧宅地造成土(0.2m前後)の下に旧耕作土である黒灰色土(0.1m前後)、灰色砂質土(0.05m)、橙灰色粘砂(0.1m)と続き、現地地表下0.4mで黄褐色粘土の地山となる。なお、発掘区北東部は弥生時代以前の河川上にあたり、黄灰色細砂、青灰色砂、橙褐色灰色砂などが堆積し、河川上層埋土には弥生時代前期の土器が含まれる。遺構はすべて、地山及び河川上面で検出し、その標高は70.9～71.0mである。

III 検出遺構

検出遺構には、古墳時代の土坑・溝、奈良時代以降の掘立柱建物・掘立柱列・井戸・土坑・溝等がある。各遺構の概要は一覧表にまとめた。以下、時代順に報告する。

古墳時代の遺構

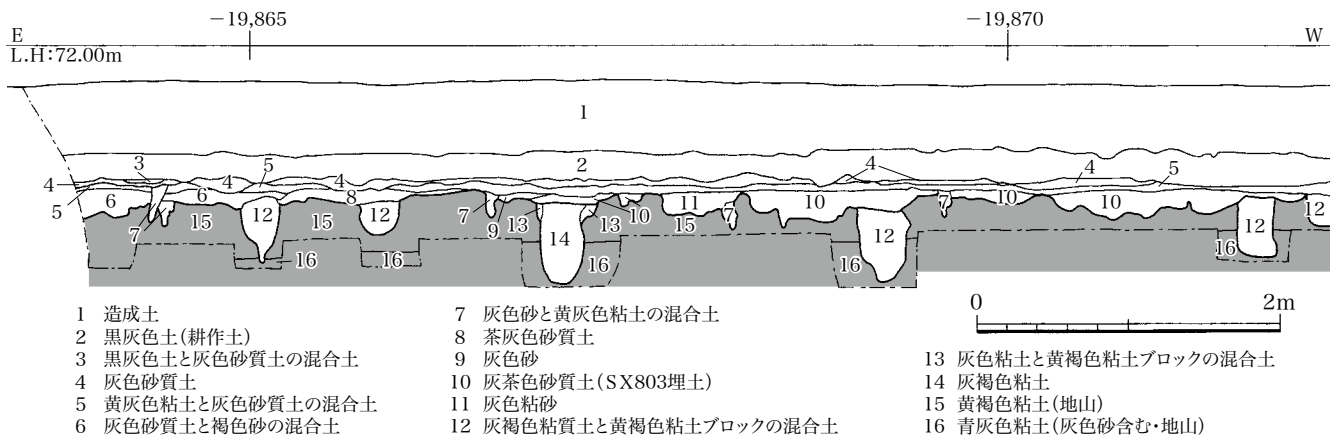
土坑6基(SK01～06)、溝1条(SD07)がある。SK01～04は発掘区北東部で、SK05・06・SD07は発掘区西半部で検出した。

SK01・02は平面が長円形の土坑で、SK01の埋土は灰色粘土と下層の暗灰色粘土と青灰色粘土の混合土に分かれ、上層埋土からは古墳時代前期後半の土器が出土した。SK02の埋土は炭化物を多く含む暗灰色粘土の1層で古墳時代前期末～中期の土器が出土した。SK03は平面が円形になるとみられる土坑で、一度掘り直しされている。埋土は最上層の暗灰褐色砂質土、上層の暗灰色粘土と灰褐色砂の混合土、中層の暗灰色粘質土と青灰色粘土の互層状堆積土、下層の灰褐色粗砂と灰色粗砂の混合土の4層に大きく分かれる。最上層埋土からは古墳時代前期後半の完存する土師器甕が横位置で出土した。甕内は、土が充満しているのみで他の内容物は無い。上層からは古墳時代前期後半の土器、鑄造関係遺物、下層からは古墳時代前期中頃～後半の土器、桃核等が出土した。SK04は西端部分のみの検出で、発掘区外に続く。平面が円形の土坑になるとみられ、埋土からは古墳時代前期頃の土器小片が出土した。SK05は平面が不整形、SK06は平面が不整形長方形の土坑で、いずれの埋土も堅く締まっており、上層の暗灰色粘土と黄灰色粘土ブロックの混合土、下層の灰色砂と黄灰色粘土ブロックの混合土の2層に分かれる。SK05は出土遺物がなく、SK06は土師器小片が出土した。SD07は国土方眼方位に対して北で東に振れる素掘りの溝である。埋土は、上層の暗灰色粘土、下層の暗灰色粘土と青灰色粘土の混合土の2層に分かれる。いずれの層からも出土遺物は無い。

SK05・06とSD07については、明確な時期を示す遺物が出土しなかったが、他の古墳時代の遺構と埋土が近似しており、これらと同時期のものであるとみられる。

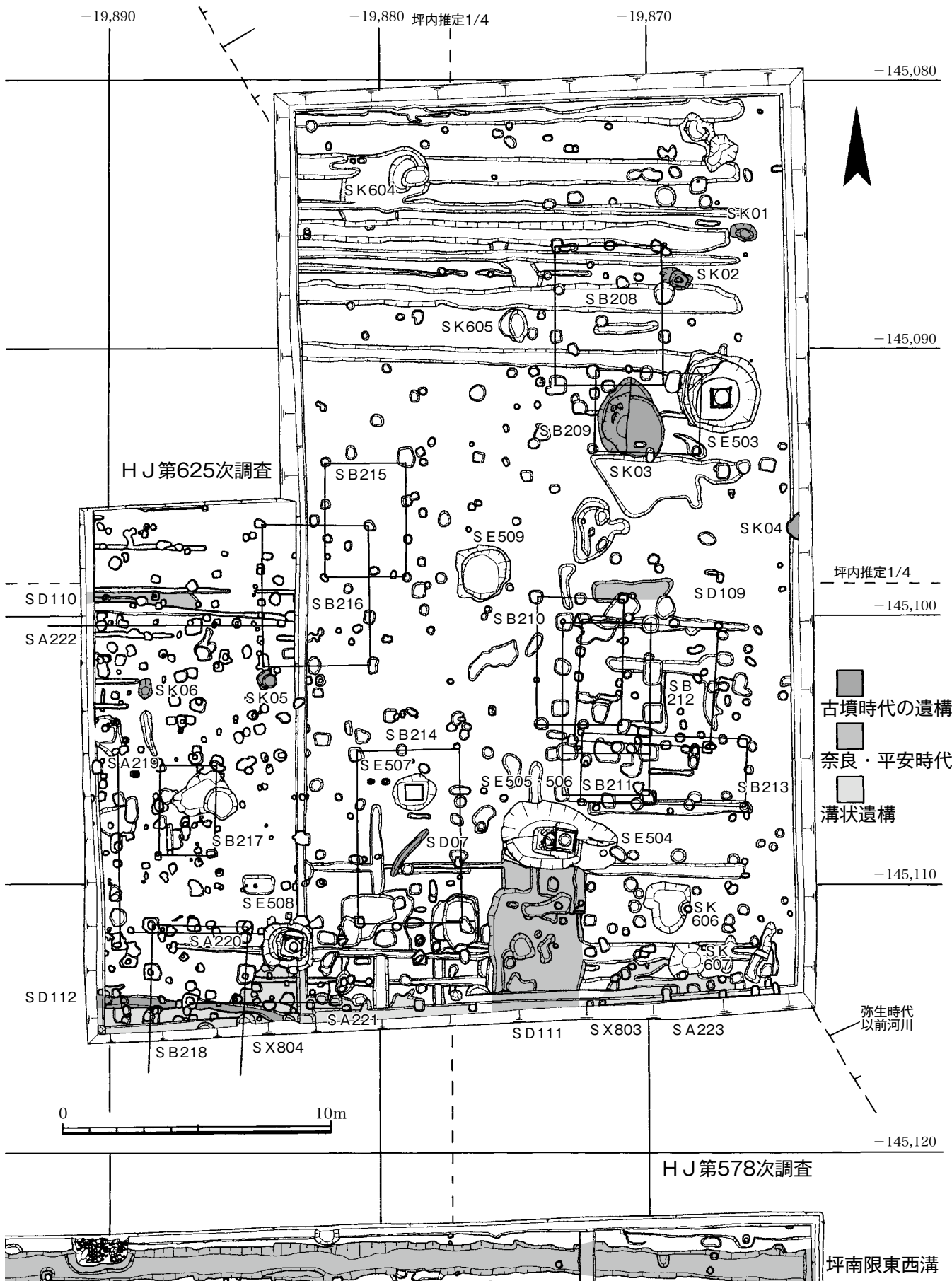
奈良時代以降の遺構

掘立柱建物11棟(SB208～218)、掘立柱列5条(S



- | | | |
|-------------------|-------------------------|--|
| 1 造成土 | 7 灰色砂と黄灰色粘土の混合土 | |
| 2 黒灰色土(耕作土) | 8 茶灰色砂質土 | |
| 3 黒灰色土と灰色砂質土の混合土 | 9 灰色砂 | |
| 4 灰色砂質土 | 10 灰茶色砂質土(SX803埋土) | |
| 5 黄灰色粘土と灰色砂質土の混合土 | 11 灰色粘砂 | |
| 6 灰色砂質土と褐色砂の混合土 | 12 灰褐色粘質土と黄褐色粘土ブロックの混合土 | |
| | 13 灰色粘土と黄褐色粘土ブロックの混合土 | |
| | 14 灰褐色粘土 | |
| | 15 黄褐色粘土(地山) | |
| | 16 青灰色粘土(灰色砂含む・地山) | |

HJ第625次調査 発掘区南壁土層図(1/50)



H J 第 625 次調査 遺構平面図 (1/200)

A 219～223)、溝4条 (S D 109～112)、井戸7基 (S E 503～509)、土坑4基 (S K 604～607)、溝状遺構2基 (S X 803・804)がある。これらの遺構は、重複関係から4時期以上の変遷がある。

掘立柱建物・列 (S B 208～218・S A 219～223) 発掘区北東部で南北棟建物S B 208・東西棟建物S B 209を検出した。S B 209は重複関係から井戸S E 503よりも古い。発掘区南東部では南北棟建物S B 210・南廂付南北棟建物S B 211・東西棟建物S B 212・213・東西方向の柱列S A 223を検出した。重複関係からS B 210・211はS B 212・213よりも古い。S B 212は建物の主軸が西で北に約5度振れる。発掘区西半部では南

北棟建物S B 214～218・南北方向の柱列S A 219・東西方向の柱列S A 220～222を検出した。S A 219は南北棟建物の東側柱列、S A 221は東西棟建物の北側柱列になる可能性がある。S B 218・S A 221は重複関係から溝S D 112・溝状遺構S X 804よりも古く、S A 220は井戸S E 508よりも古い。

溝 (S D 109～112) S D 109は発掘区中央部東寄りで検出した東西方向の素掘りの溝である。埋土は灰色砂質土と灰茶色粘土の混合土で、8世紀の土器、瓦片が出土した。溝心の国土座標値はX=-145,099.05 m、Y=-19,870.00 mである。S D 110はS D 109の西側の延長上にあたる地点で検出した東西方向の素掘りの溝で

H J 第 625 次調査 検出遺構一覧表 (1)

古墳時代の遺構

遺構番号	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	主な出土遺物	備考
S K 01	不整長円形	東西 1.0× 南北 0.7	0.5	古墳時代前期土師器甕・高杯	
S K 02	不整長円形	東西 1.2× 南北 0.7	0.4	古墳時代前期土師器壺・甕・高杯	
S K 03	不整円形	東西 2.4× 南北 3.0	1.3	古墳時代前期土師器壺・甕・高杯・鉢、鞆羽口、金属滓、砥石、石皿状石製品、サヌカイト剥片、桃核	
S K 04	円形?	東西 0.5 以上 × 南北 2.2	0.7	古墳時代前期土師器片	
S K 05	不整方形	一辺 0.7	0.3	出土遺物なし	埋土は他の古墳時代遺構と近似。
S K 06	不整長円形	東西 0.5× 南北 0.8	0.2	時期不明土師器片	埋土は他の古墳時代遺構と近似。
S D 07	斜行溝	長さ 2.2、 幅 0.3	0.2	出土遺物なし	埋土は他の古墳時代遺構と近似。

奈良時代以降の遺構

遺構番号	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	主な出土遺物	備考
S D 109	東西溝	長さ 10.0、 幅 0.8	0.1	サヌカイト剥片、8世紀土師器杯カ皿・皿C・高杯・壺B・甕、須恵器杯Aカ皿A・杯カ皿蓋・壺・甕、製塩土器、丸瓦、平瓦	坪内南北 1/4 分割ライン付近に位置する。溝心の国土座標値はX=-145,099.05、Y=-19,870.00
S D 110	東西溝	長さ 4.2 以上、 幅 0.9	0.1	8世紀後半須恵器杯Bカ皿B・甕、丸瓦、平瓦、11世紀前半土師器皿・羽釜、黒色土器B類椀	坪内南北 1/4 分割ライン付近に位置する。溝心の国土座標値はX=-145,099.25、Y=-19,890.00
S D 111	南北溝	長さ 7.3 以上、 幅 3.5	0.3	8世紀後半土師器杯A・皿A・椀A・杯Bカ皿B・杯C・皿C・高杯・壺B・甕、須恵器杯Aカ皿A・杯Bカ皿B・皿C・杯カ皿蓋・壺・甕、圈足円面硯、竈、製塩土器、軒平瓦 (型式不明)、丸瓦、平瓦、埴、鉄釘、刀子	溝の東肩がS D 109西端とほぼ揃う位置にあたる。重複関係からS E 504～506、S X 803・804よりも古い。
S D 112	東西溝	長さ 6.0 以上、 幅 1.0 以上	0.1～0.4	8世紀後半土師器杯Aカ皿A・甕、須恵器杯Bカ皿B・杯カ皿蓋・甕、土馬、鉄釘	重複関係からS B 218、S A 221よりも新しく、S X 804よりも古い。
S K 604	不整長方形	東西 3.2× 南北 1.5	0.1	弥生土器壺・甕、古墳時代土師器片、8世紀土師器杯カ皿・甕、須恵器杯Bカ皿B・甕	
S K 605	不整円形	東西 1.1× 南北 1.2	0.6	古墳時代土師器甕、8世紀後半土師器杯カ皿・杯カ皿蓋・甕、須恵器杯カ皿・壺・甕、丸瓦、平瓦	
S K 606	不整形	東西 1.6× 南北 1.8	0.25	古墳時代土師器高杯、8世紀土師器杯カ皿・甕、須恵器杯Aカ皿A・杯カ皿蓋・壺・甕、製塩土器、平瓦、丸瓦、鞆羽口	
S K 607	不整形	東西 1.4× 南北 1.1	0.4	8～9世紀土師器杯カ皿・甕、須恵器杯Aカ皿A・壺・壺蓋・甕、黒色土器A類杯、製塩土器、丸瓦、平瓦	重複関係からS X 803より古い。
S X 803	不整形	東西 4.6 以上× 南北 4.5 以上	0.6～1.0	8～9世紀土師器杯カ皿・甕、須恵器杯カ皿・杯カ皿蓋・甕、製塩土器、平瓦	重複関係からS D 111・S A 223・S K 607よりも新しい。
S X 804	不整形	東西 1.2 以上× 南北 0.5 以上	0.1～0.2	8～9世紀土師器杯カ皿・皿C・甕、須恵器杯Bカ皿B・杯カ皿蓋・甕、黒色土器A類杯カ椀、丸瓦、平瓦	重複関係からS D 111・112・S B 218・S A 221・S E 508より新しい。

ある。埋土は灰茶褐色粘質土で、8～9世紀の土師器、須恵器、瓦、11世紀前半の土器が出土した。溝心の国土地標値はX=-145,099.25 m、Y=-19,890.00 mであることから、S D 109・110ともに一条南大路北側溝心と一条条間南小路南側溝心を基準にした場合の坪の南北1/4ライン付近に位置する。S D 111は発掘区南端中央で検出した南北方向の素掘りの溝である。溝幅は3.5mと広く、埋土は上層の炭化物を含む暗灰褐色粘砂、下層の灰褐色砂質土と黄灰色粘土の混合土に分かれ、8世紀後半の土師器、須恵器、土製品、瓦、金属製品等が出土した。重複関係から井戸S E 504～506、S X 803・804よりも古い。西二坊大路東側溝心と西二坊坊間西小路西側溝心を基準にした場合の坪の東西1/4ラインよりもやや東側に位置する。S D 112は発掘区南西隅で検出した西から南東に向かう素掘りの溝で発掘区外に続く。埋土は茶灰色シルトと黄褐色粘土ブロックの混合土で、8世紀後半の土師器、須恵器、瓦等の小片が出土した。重複関係からS X 804より古く、S B 218・S A 221よりも新しい。

井戸(S E 503～509) S E 503は発掘区北東部で、S E 504～508は発掘区南端で、S E 509は発掘区中

央で検出した。S E 503の井戸枠の構造は、方形縦板組横棧留で、その下には基盤枠として方形横板組が2段と、枠の集水施設として曲物1段と浄水用の礫敷が設置されている。灰色粘土と灰色砂が互層に堆積する枠内埋土からは、8世紀末～9世紀初頭の土師器、須恵器等の他、銅製鈴及び丸軻各1点が出土した。S E 504～506は重複しており、ほぼ同じ場所でS E 504→505→506の順に造り替えられている。S E 504・505ともに枠は抜き取られているが、S E 505は井戸底の集水施設として据えられた長円形の曲物とその中に敷かれた礫敷が残存していた。曲物は長軸が北でやや東に振れた位置になるよう設置され、曲物の裏込め上面には須恵器甕片と「理」の刻印平瓦を含む瓦片が敷かれており、その形状からこの上には方形に組まれた井戸枠があったことが推測できる。曲物内からは8世紀後半の土師器等が出土した。S E 506の井戸枠の構造は、方形縦板組横棧留で、枠内は、上から灰色粘質土、灰色粘土と灰色粘砂の混合土、暗灰色粘土の順に堆積している。枠底直上で8世紀末～9世紀初頭頃の底部外面に墨書(記号カ)がある土師器皿Aが1点出土した。枠内からは、他に8世紀後半～9世紀

H J 第625次調査 検出遺構一覧表(2)

遺構番号	棟方向	規模(間) 桁行×梁行	桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法(m)		備考
					桁行	梁行	
S B 208	南北	3×2	5.1	4.2	北から 1.5-1.8-1.8	東から 2.25-1.95	柱穴の深さ 0.3～0.5 m。
S B 209	東西	2×1	3.9	2.85	東から 1.8-2.1	2.85	柱穴の深さ 0.1～0.15 m。重複関係から S E 503 より古い。
S B 210	南北	3×2	4.5	3.3	1.5 等間	1.65 等間	柱穴の深さ 0.1～0.2 m。重複関係から S B 213・S D 109 より古い。
S B 211	南北	4×2	6.6	3.3	北から 1.8-1.5-1.65	東から 1.5-1.8	南廂(廂の出 1.65 m)。柱穴の深さ 0.3～0.5 m。重複関係から S B 212・213 より古い。
S B 212	東西	3×2	4.95	4.5	1.65 等間	2.25 等間	柱穴の深さ 0.1～0.2 m。重複関係から S B 211 より新しい。
S B 213	東西	3×1	6.15	2.55	東から 1.95-1.95-2.25	2.55	柱穴の深さ 0.1～0.2 m。重複関係から S B 210・211 より新しい。
S B 214	南北	3×2	6.3	3.9	2.1 等間	東から 2.1-1.8	柱穴の深さ 0.1～0.2 m。
S B 215	南北	3×1	4.5	3.0	1.5 等間	3.0	柱穴の深さ 0.1～0.2 m。
S B 216	南北	3×2	5.1	4.2	北から 1.65-1.8-1.65	2.1 等間	柱穴の深さ 0.1～0.2 m。
S B 217	南北	2×1	3.45	2.1	北から 1.65-1.8	2.1	柱穴の深さ 0.2～0.3 m。
S B 218	南北	2以上×2	3.6以上	3.45	1.8 等間	東から 1.8-1.65	柱穴の深さ 0.2～0.3 m。重複関係から S D 112・S X 804 より古い。
S A 219	南北	4	7.2		1.8 等間		柱穴の深さ 0.1～0.2 m。
S A 220	東西	3	4.95		1.65 等間		柱穴の深さ 0.1 m。重複関係から S E 508 より古い。
S A 221	東西	3	5.4		1.8 等間		S D 112・S X 804 より古い。柱穴の深さ 0.1 m以上。
S A 222	東西	4以上	6.0以上		東から 1.65-1.65-1.35-1.35		柱穴の深さ 0.2 m。坪内南北 1/4 ライン付近に位置する。
S A 223	東西	3	6.15		東から 2.25-2.1-1.8		柱穴の深さ 0.1～0.2 m。S X 803 より古い

H J 第 625 次調査 検出遺構一覧表 (3)

遺構番号	掘形			井戸枠			主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	構造	内法 (m)	底部施設 (m)		
S E 503	隅丸方形	東西 3.1 × 南北 3.0	2.4	方形縦板 組横棧留	一辺 0.73	方形横板組 2段 (一 辺 0.61) + 曲物 (径 0.56、 高さ 0.42) ・曲物内礫敷	(枠抜取坑) 8世紀後半～9世紀初頭土 師器杯Aカ皿A・椀E・高杯・甕、須惠 器杯Aカ皿A・杯Bカ皿B・壺・甕、丸 瓦、平瓦、鉄釘 (枠内) 8世紀後半～9世紀初頭土師器 杯Aカ皿A・杯Bカ皿B・皿C・椀A・ 高杯・甕、須惠器杯Aカ皿A・杯Bカ皿B・ 杯C・皿C・杯カ皿蓋・鉢A・甕・ミニ チュア壺A、製塩土器、竈、丸瓦、軒丸 瓦 (6225・6314 B)、軒平瓦 (6641 C)、 平瓦、塼、銅鈴、銅製丸軛、鉄滓、横櫛、 曲物底板、桃核 (掘形) 8世紀後半土師器杯Aカ皿A・ 杯Bカ皿B・皿C・壺B・高杯・甕、須 惠器杯A・杯B・杯C・皿C・椀A・杯カ 皿蓋・甕・壺・盤、製塩土器、軒丸瓦 (型 式不明)、平瓦、塼、土馬	枠上部は抜 き取られて いる。 横棧2段残 存。曲物側 面に一辺1 cm前後の孔 が多数ある。 S B 209よ り新しい。
S E 504	隅丸長方形?	東西 1.4 以上 × 南北 1.8	1.1	抜き取り			(枠抜取坑) 8世紀後半土師器椀A・甕、 須惠器杯カ皿・皿B・壺・甕 (口縁外面 線刻)、丸瓦、平瓦、鉄釘	S E 505・ 506よりも 古く、S D 111よりも 新しい。
S E 505	隅丸長方形?	東西 0.9 以上 × 南北 1.1 以上	2.0	抜き取り (方形枠 組)		曲物1段 (長径0.58、 短径0.38、 高さ0.28) ・曲物内礫敷	(枠抜取坑) 8世紀後半土師器杯Aカ皿 A・甕、須惠器杯Aカ皿A・杯Bカ皿B (底 部外面墨書)・壺・甕、丸瓦、平瓦、塼 (曲物内) 8世紀後半土師器杯カ皿・皿C・ 甕、須惠器杯Bカ皿B・甕・壺、製塩土 器、軒丸瓦 (6311 A)、丸瓦、平瓦、塼、 桃核 (掘形) 8世紀後半土師器杯カ皿・甕・ 須惠器杯カ皿・壺・甕、丸瓦、平瓦、刻 印平瓦 (凹面「理」)	曲物下と側 面に板材あ り。 S E 506よ りも古く、 S D 111・ S E 504よ りも新しい。
S E 506	隅丸長方形	東西 3.0 × 南北 1.4	1.9	方形縦板 組横棧留	東西 0.77 × 南北 0.83		(枠抜取坑) 8世紀後半～9世紀初頭土 師器杯Aカ皿A・杯Bカ皿B・甕、須惠 器杯Aカ皿A・杯Bカ皿B・杯C・壺・甕、 竈、軒丸瓦 (6291 A)、軒平瓦 (6721 C)、 丸瓦、平瓦、塼、鞆羽口、砥石 (枠内) 8世紀後半～9世紀初頭土師器 杯A・皿A (底部外面墨書)・椀A・甕、 須惠器杯Bカ皿B・杯C・杯カ皿蓋・壺 E・壺M・甕C、製塩土器、軒丸瓦 (型 式不明)、平瓦、桃核 (掘形) 8世紀後半土師器杯A・皿A、 須惠器皿A・杯Bカ皿B・杯C・皿C・ 杯L・杯カ皿蓋・甕・壺・鉢、軒丸瓦 (6228 A・6275 A・6311 A a・型式不明)、 丸瓦、平瓦、塼	枠上部は抜 き取られて いる。 S D 111・ S E 504・ 505よりも 新しい。
S E 507	不整円形	東西 1.9 × 南北 1.7	1.2	抜き取り		方形横板組 1段 (東西 0.60×南北 0.52)・礫敷	(枠抜取坑) 8世紀後半土師器杯A (底 部外面線刻)・杯C・皿A・椀A・高杯・甕、 須惠器杯A・杯B・皿A・皿C・壺・甕、 製塩土器、軒丸瓦 (6281 B b、6311 A a・型式不明)、丸瓦、平瓦、塼、砥石 (枠内) 8世紀後半土師器皿A・杯Bカ 皿B・皿C・杯C・甕、須惠器甕、製塩 土器、平瓦 (掘形) 須惠器杯カ皿	枠抜取部分 出土軒丸瓦 がS E 506 掘形出土の ものと接合 する。

H J 第 625 次調査 検出遺構一覧表 (4)

遺構番号	掘形			井戸枠			主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	構造	内法 (m)	底部施設 (m)		
S E 508	隅丸方形	東西 2.0 × 南北 2.1	2.0	方形縦板 組横棧留	東西 0.75 × 南北 0.72		(枠抜取坑) 8世紀後半～9世紀初頭土師器杯A (底部外面線刻)・皿A・杯B・皿C・高杯・甕、須恵器杯A・杯B・皿A・壺N・甕・鉢D・鉢E・横瓶、丸瓦、平瓦、埴、砥石、鉄釘 (枠内) 8世紀後半～9世紀初頭土師器皿A・碗A・杯C・杯カ皿蓋・高杯・甕、須恵器杯A・皿A・壺・甕、黒色土器A類碗カ、製塩土器、軒平瓦 (6721 A) 丸瓦、平瓦、刀子、桃核 (掘形) 8世紀後半土師器杯カ皿・皿C・杯カ皿蓋、須恵器杯Aカ皿A・杯Bカ皿B・杯カ皿蓋・甕・壺、軒丸瓦 (6311 B a)、丸瓦、平瓦	枠上部は抜き取られている。横棧2段残存。上段曲物裏込め上面と上下段曲物底礫敷。S X 804 よりも古く、S A 220 より新しい。
S E 509	隅丸方形	東西 2.0 × 南北 2.1	0.9 以上	抜き取り			(枠抜取坑) 古墳時代土師器高杯・甕、8世紀土師器皿A・皿C・甕、須恵器杯Bカ皿B (底部外面「美」刻印)・皿C・杯カ皿蓋・壺・甕、鉄釘、鉄滓	

初頭の土師器、須恵器、軒丸瓦 (型式不明) 等が出土した。S E 507 は方形横板組 1 段と礫敷が残存していたのみで、他の枠材は抜き取られていた。井戸枠抜き取坑の埋土中には 8 世紀後半の土師器、須恵器、瓦片が多く含まれ、その中の軒丸瓦 (6311 型式 A 種) が、先述の S E 506 掘形出土のものと同接することから、S E 506 の構築時期と S E 507 の廃絶時期が同時期であったことがわかる。S E 508 の井戸枠の構造は方形縦板組横棧留で、枠底には集水施設として曲物が 2 段設置されている。上段曲物裏込め上面と上下段曲物底には、径 5 ～ 10cm 大の円礫がまばらに敷かれていた。枠内は、灰色粘砂と青灰色粘砂の混合土が堆積しており、8 世紀末～9 世紀初頭の土師器、須恵器等が出土した。重複関係から S X 804 より古く、S A 220 よりも新しい。S E 509 は枠がすべて抜き取られて残存しない。枠抜き取坑の埋土中からは 8 世紀の土師器、須恵器、瓦等が出土した。

土坑 (S K 604 ～ 607) S K 604 ～ 605 は発掘区北半で、S K 606 ・ 607 は発掘区南東隅で検出した土坑である。S K 604 は炭化物を含む暗褐色粘砂の埋土から 8 世紀の土器小片等が出土した。S K 605 は埋土が上層の灰褐色砂質土と下層の灰色砂と灰褐色粘土の混合土に分かれ、8 世紀後半の土器小片等が出土した。S K 606 は埋土が上層の茶灰色砂と下層の青灰色粘土と灰色砂の混合土に分かれ、8 世紀の土師器、須恵器小片等が出土した。S K 607 は埋土が灰色砂と灰褐色粘土の混合土で 8 ～ 9 世紀の土師器、須恵器、黒色土器 A 類、瓦小片が出土した。

溝状遺構 (S X 803 ・ 804) S X 803 ・ 804 は発掘区

南端で検出した溝状に広がる遺構で、発掘区外に続く。埋土が同じ灰茶色砂質土であることから、発掘区南側で接続し、一連の遺構になることが考えられる。埋土中からは 8 ～ 9 世紀の土師器、須恵器小片等が出土した。S X 803 ・ 804 とともにそれぞれ重複する遺構の中では、一番新しい。

この他、建物としてはまとまらない多数の小柱穴や 17 世紀以降の耕作溝がある。

IV 出土遺物

土器類が遺物整理箱で 35 箱、瓦類が 19 箱、木・金属・石製品が 5 箱、計 59 箱分の遺物が出土した。出土した遺物には、弥生土器、古墳時代土師器、石製品、鑄造関係遺物、8 ～ 9 世紀の土師器、須恵器、黒色土器 A 類、製塩土器、土製品、圈足円面硯、瓦埴、鑄造関係遺物、金属製品、石製品、木製品、11 世紀土師器、黒色土器 B 類などがある。

以下、主なものについて述べる。

S K 03 出土土器 S K 03 から出土した土器には、土師器甕・壺・高杯・鉢がある。大半が破片であるが、図示の甕 (1) はほぼ完存で最上層埋土から出土している。口径 16cm、器高 24.6cm で、口縁部はやや内彎気味に外側へ広がり、端部の内面がわずかに丸く肥厚する。体部は球形で、体部外面はハケ調整しており、煤が付着している。体部内面はヘラケズリしており、布留式前半の新しい様相を示す。

墨書土器 S E 506 枠内から 3 点出土している。1 点は 8 世紀末～9 世紀初頭の土師器皿 A で、底部外面に記号とみられる「+」の墨書がある (2)。他 2 点は土師器杯カ皿と須恵器杯 B の小片で、いずれも底部外面に文字の一部とみられる墨書がある。

刻印土器 S E 509 梓抜き取り坑からは底部外面に「美」の刻印がある須恵器杯Bの破片が1点出土している(3)。本来は「美濃」または「美濃国」と刻印されていたとみられる。近隣の右京三条三坊八坪(H J 第257-1次調査)においても「濃」の刻印がある須恵器高杯や美濃産とみられる須恵器杯Lが出土している。この他、口縁部や底部外面に「x」などの記号とみられる線刻がある須恵器杯B、杯蓋、甕、壺や土師器杯か皿が計10点ある。

刻印平瓦 S E 505 曲物裏込め上面から「理」(j種)¹⁾の刻印のある平瓦が1点出土した。刻印は平瓦凹面の狭端隅に押捺されている。この平瓦は、凹面狭端面を面取りし、凸面には縦縄タタキ痕と離れ砂が確認できる。

管玉を包含する丸瓦 S E 508 枠内から管玉1点と管玉の痕跡1箇所を有する丸瓦片が1点出土した。この丸瓦は玉縁凸面に2条の凸線があり、同面側縁を面取りする。焼成は軟質で灰~青灰色を呈する。管玉は観察と蛍光X線分析の結果、粘土による製品であると考えられる²⁾。

V 調査所見

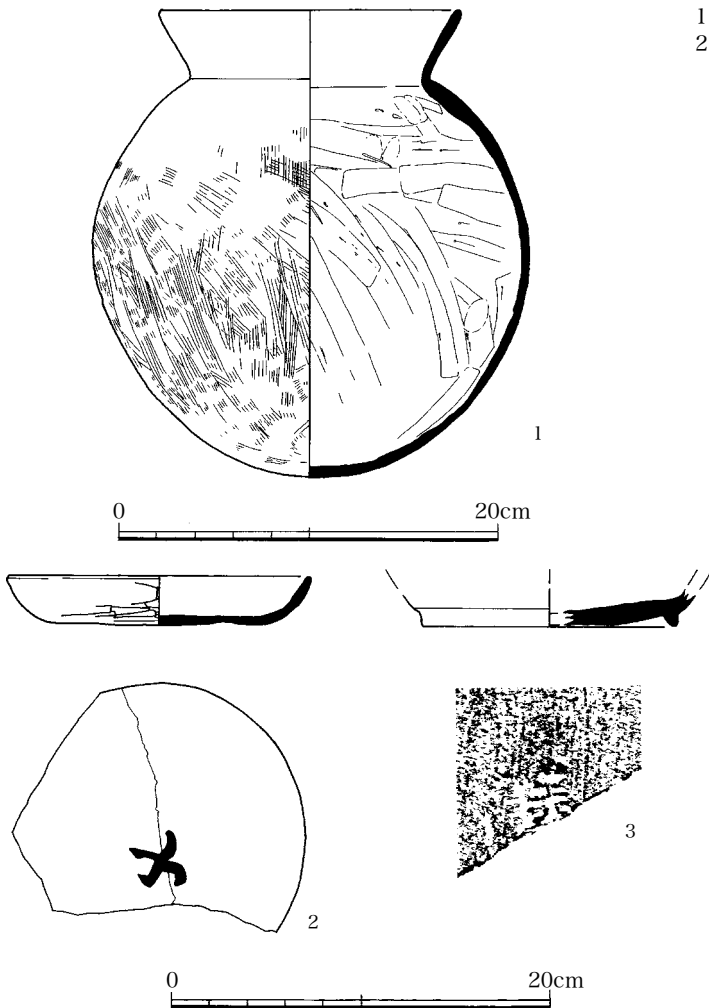
平城京以前については、弥生時代前期頃に埋没する河川

が流れており、河川埋土等からの弥生土器出土により、近隣に弥生時代の遺跡が存在することがわかった。また、古墳時代前期の土坑及び同時期とみられる溝を検出した。南隣接地の調査(市H J 第578・587次調査)では弥生・古墳時代の遺構が見つかっていないことと今回発掘区北半に集中して見つまっている点から、両時代ともに遺跡の中心は、今回の発掘区北側にあることが予想される。

奈良時代については、重複関係から4時期以上の変遷があることがわかった。今回の発掘区は十三坪の南西部分にあたり、出土遺物の時期から奈良時代後半から平安時代初頭にかけて宅地として利用されていたとみられる。なお、坪の南北1/4ライン付近にあたる位置で東西方向の溝S D 109とその南側でS D 109西端と東肩がほぼ揃う位置で南北方向の溝S D 111を検出していることから、宅地内を溝で区画していた時期があることがわかる。

平安時代以降については、11世紀前半の東西方向の溝S D 110を検出した。南隣接地の調査においても、11世紀末から15世紀の遺構がみつかっており、調査地周辺には11世紀以降の遺構が広がっているものとみられる。(久保清子)

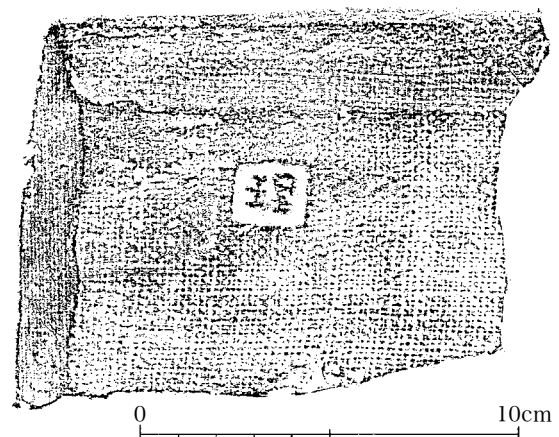
1) 奈良文化財研究所『奈良国立文化財研究所V 瓦編5』1977
 2) 分析に関しては奈良県立橿原考古学研究所奥山誠義主任研究員にご協力をいただいた。



H J 第625次調査 S K 03・S E 506・509 出土土器 (1/4・3の拓本は1/1)



H J 第625次調査 S E 508 出土管玉入り丸瓦



H J 第625次調査 S E 505 出土刻印平瓦 (1/2)



H J 第 625 次調査発掘区 垂直モザイク写真 (右が北)



西発掘区全景 (南西から)



東発掘区全景 (南から)



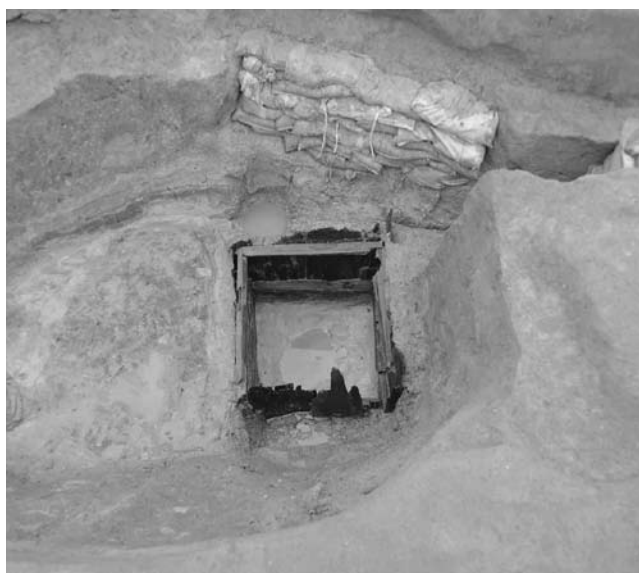
S K 03 西半掘 (西から)



S E 503 (東から)



S E 505 (北から)



S E 506 (南から)



S E 507 (北から)



S E 508 (東から)

3. 平城京跡（右京三条三坊五坪）の調査 第 620 次

事業名	宅地造成	調査期間	平成 21 年 4 月 8 日～4 月 24 日
届出者名	ヤマトラ	調査面積	100㎡
調査地	奈良市宝来一丁目 84 番 1・85 番 1 の一部	調査担当者	中島和彦・大原 瞳

I. はじめに

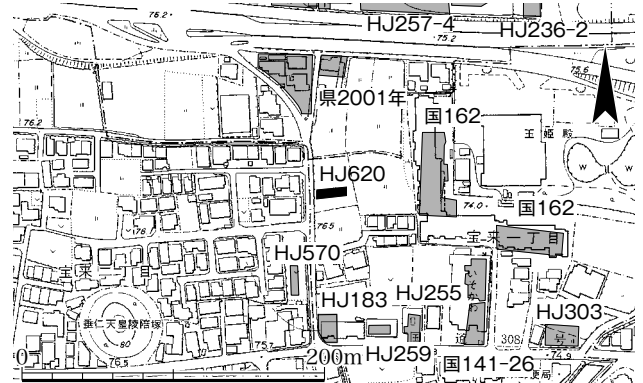
平城京第 620 次調査地は、条坊復原によると右京三条三坊五坪の西端北寄りに位置する。現状は水田で、発掘区西側にある南北道路は、西三坊坊間路東側溝の位置を踏襲した遺存地割として残る。五坪内の調査例は、過去 6 回実施されており、奈良～平安時代の掘立柱建物・柱列・土坑・井戸および中世の建物・柱列・溝が確認されている。今回は五坪北西部の土地利用の様相を把握する目的で調査を実施した。

II. 基本層序

発掘区内の基本層序は、上から耕作土の黒灰色土 (0.2 m)、淡灰色砂質土 (0.05 m)、淡褐色砂質土 (0.1 m)、橙色粘質土 (0.05～0.1 m)、黄灰色粘質土 (0.1～0.15 m)、灰黄色粘質土 (0.1～0.25 m) と続いて、発掘区西半では現地表面下約 0.4 m で地山の明黄褐色粘質土となる。発掘区東半は南東方向に地形が一段低くなり、灰黄色粘質土の下にさらに茶褐色土 (0.1 m)・黄茶色粘質土 (奈良時代整地層 II、0.15 m)、橙灰色粘質土 (0.1 m)・灰色シルト (奈良時代整地層 II、0.1 m) が堆積して、現地表面下約 1.1～1.2 m で明黄褐色粘質土の地山に至る。整地層 I は 8 世紀代、整地層 II は 8 世紀後半の土器類を含む。遺構面の標高は 73.2～73.4 m、発掘区東半の最も低い地山上面の標高は 72.5 m である。遺構検出作業は奈良時代整地層 II の上面と地山上面の二回に分けて行った。

III. 検出遺構

検出遺構には弥生時代の井戸 1 基 (S E 01)・古墳時代の井戸 1 基 (S E 02)・8～9 世紀の掘立柱建物 2 棟 (S B 03・04)・掘立柱列 2 条 (S A 01・02)・南北溝 1 条 (S D 03)・土坑 5 基 (S K 04～08)・甕据付穴群 (S X 09)、13～14 世紀頃の素掘溝などがある。なお、各遺構の概要は一覧表にまとめた通りである。以下、主要



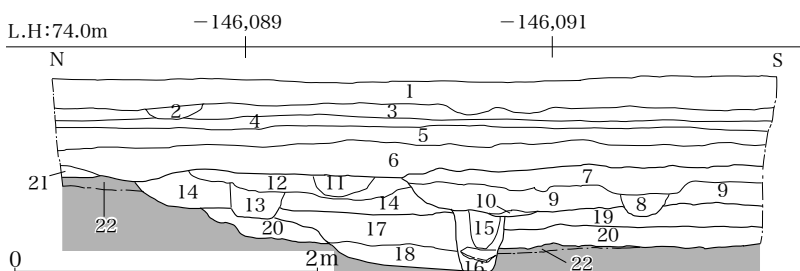
H J 第 620 次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

な遺構について概述する。

弥生時代の遺構 S E 01 は平面隅丸方形、断面形状は逆台形を呈す。埋土は上層の黒灰色粘質土、下層の淡黄褐色粘質土の 2 層に分けられ、上層から弥生時代後期前半の短頸壺が 1 点出土。

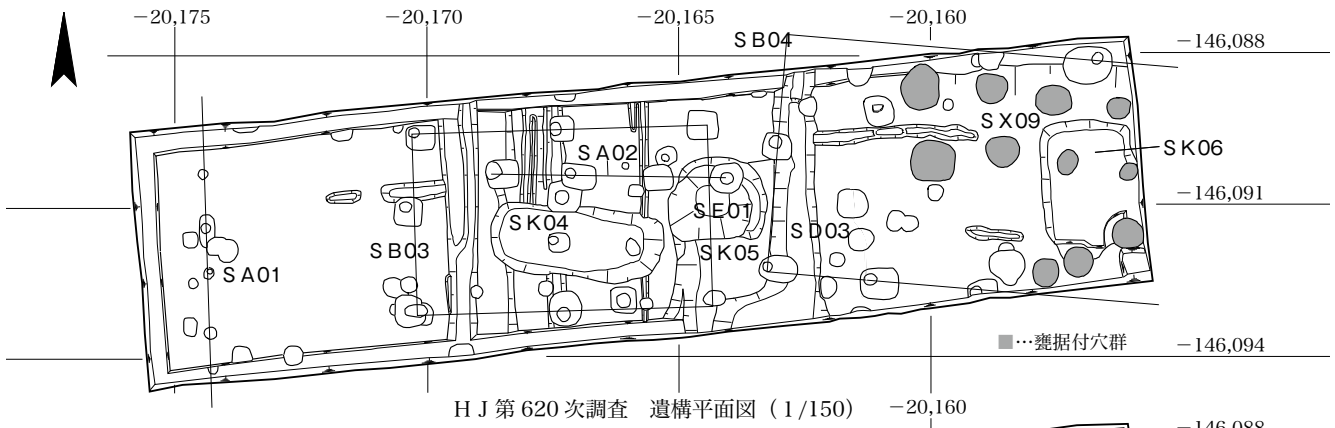
古墳時代の遺構 S E 02 は整地層下の地山上面で検出した。井戸枠の構造は遺存状態から一木刳り貫きと考えられる。復原できる井戸枠の内法は 0.5 m。枠内から古墳時代前期末～中期前半の土師器甕の口縁部片が出土。

奈良時代の遺構 奈良時代は発掘区東半の低い一帯を整地しており、遺構は整地層 I または II の上面から掘り込まれる。整地層 I 上面から掘り込まれる遺構には、S K 07・08 がある。S K 07 は平面楕円形の土坑で、発掘区外東に続く。埋土から 8 世紀前半～中頃の土器が出土した。さらにこの部分は整地層 II によって再度整地されており、この上面から掘り込まれる遺構には S B 04・S D 03・S K 05・06・S X 09、西半では地山上面で検出した S A 01・S B 03・S K 04 がある。S A 01 は南北 4 間以上 (3.9 m) の掘立柱列で、発掘区外北と南に続く。S B 04 は桁行 3 間以上 (6.3 m 以上)、梁行 2 間 (4.8 m) の東西棟建物である。建物の軸は、国土方眼方位に対



H J 第 620 次調査 発掘区東壁土層図 (1/50)

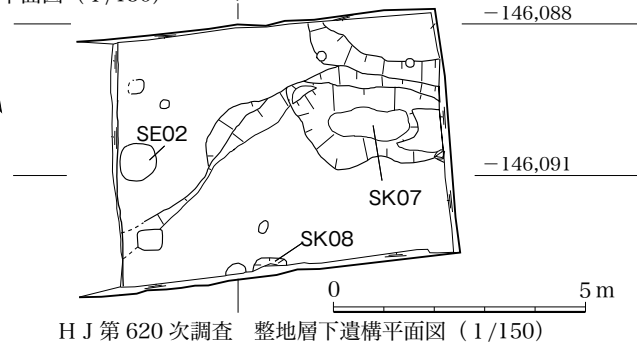
- | | |
|---------------|------------------|
| 1 黒灰色土 | 12 茶褐色土(整地層II) |
| 2 淡灰色砂質土 | 13 橙茶灰色土(整地層II) |
| 3 淡褐色砂質土 | 14 黄茶色粘質土(整地層II) |
| 4 橙色粘質土 | 15 灰褐色土(柱穴採取) |
| 5 黄灰色粘質土 | 16 黄白色粘質土(柱穴掘形) |
| 6 灰黄色粘質土 | 17 灰黄色粘質土(SK07) |
| 7 茶褐色土(SK06) | 18 灰色シルト(SK07) |
| 8 灰褐色土(SK06) | 19 橙灰色粘質土(整地層I) |
| 9 暗茶褐色土(SK06) | 20 灰色シルト(整地層I) |
| 10 黒灰色土(SK06) | 21 淡灰色砂質土 |
| 11 暗褐色土 | 22 明黄褐色粘質土(地山) |



し北で東に振れている。S X 09 は S B 04 の内部北寄りの甕据付穴群で、平面円形ないし楕円形の土坑が南北 4 列、東西 2 列に並ぶ。土坑群は直径 0.3 ~ 0.9 m、深さ 0.15 ~ 0.3 m、掘形は丸底を呈し、埋土は暗灰色土である。S B 04 が発掘区外東に延びることから、さらに東へ続くものと想定できる。埋土から須恵器大甕の破片が出土しており、土坑形状や配置関係から、S X 09 は貯蔵用の埋甕遺構と考える。また、S B 04 の南辺付近にも類似した土坑群があり、これらも同様に甕据付穴群の可能性はある。S D 03 は長さ 5.0 m 以上、幅 0.8 m の南北溝である。発掘区南端で溝幅が 1.3 m と広がる。溝底は北から南へと勾配を下げており、南へ向けて排水していたものとする。埋土から 8 世紀末頃の土器類が出土した。

IV. 出土遺物

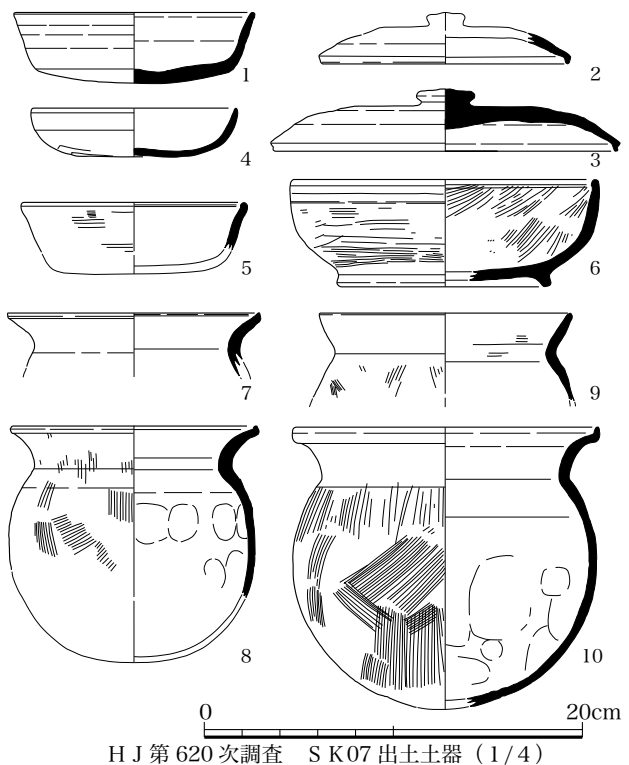
土器類が遺物整理箱 20 箱、瓦類が 2 箱の計 22 箱が出土した。土器類では弥生土器、古墳時代の土師器、8 世紀 ~ 9 世紀の土師器・須恵器・製塩土器・線刻土器・墨書土器、9 世紀の灰釉陶器、13 ~ 14 世紀の土師器・瓦質土器・国産陶器などがあり、瓦類では 8 世紀の軒平瓦 6691 型式 A 種・丸瓦・平瓦が出土した。以下、S K 07 出土土器について概述する。S K 07 からは 1 箱分の土器が出土し、1 ~ 3 が須恵器で、4 ~ 10 が土師器である。1 は杯 A で、口縁部内外面はロクロナデ調整、底部外面はロクロケズリ調整である。口径 12.4cm、器高 3.7cm。2・3 は杯蓋で、2 は口径 13.4cm、残存高 2.5cm、3 は口径 18.6cm、器高 3.3cm。4 は杯 E とみられる器形で、口縁部外面から底部外面には粗いヘラケズリ調整が残る。口径 11.0cm、器高 2.55cm。5 は杯 A で、口縁部外面に横方向のヘラミガキが僅かに残る。口径 12.0cm、残存高 2.5cm。6 は杯 B としたが、内湾する口縁部はあまり類例がない。口縁部内面は二段の斜放射状暗文、口縁部外面は横方向のヘラミガキを密に施す。口径 16.8cm、器高 5.7cm。7 ~ 10 は甕 A である。口縁部形態には、外反する口縁部と内傾もしくは直立する端面を持つ (7・8・10) と、や



や内湾気味の口縁部と丸くおさめた端部を持つ (9) がある。これらは 8 世紀前半 ~ 中頃の土器とみられる。

V. 調査所見

今回の調査では、弥生時代後期前半および古墳時代前期末 ~ 中期前半の井戸を検出した。調査地北東には菅原東遺跡が展開し、近接する市 H J 第 570 次調査においても古墳時代前期の溝を検出していることから、調査地近辺においても同時期の遺構の広がりが見られる。



奈良時代では平城京の宅地造成に伴い、S D 03 以東の低い一帯が整地されて土地利用が大きく変容することが判明した。坪内の利用時期は、S K 07 出土土器から少なくとも8世紀中頃以前には利用されていたと考える。その後8世紀後半になると整地層Ⅱが形成され、この上

面に建物等が構築される。整地層Ⅱ上面にある遺構は、重複関係から3時期以上の変遷が窺える。S D 03 から8世紀末頃の土器が出土しており、S B 04 は重複関係からこれよりも新しいことから、平城京廃都後も宅地利用がしばらく継続していたと推定できる。(大原 瞳)

H J 第 620 次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模(間)	桁行全長	梁行全長	柱間寸法		備 考
		桁行×梁行	(m)	(m)	桁行(m)	梁行(m)	
S A 01	南北	4以上	3.9以上		北から1.0-1.0-1.0-0.9		
S A 02	東西	3	4.8	1.6	1.6等間		柱穴の深さ0.2~0.5m。重複関係からS K 05・S E 01より新しい。配置関係からS B 03とは並存せず。
S B 03	東西	2×2	6.0	3.6	3.0等間	北から1.5-2.1	柱穴の深さ0.05~0.3m。配置関係からS A 02と並存せず。S A 02との前後関係は不明。
S B 04	東西	3以上×2	6.3以上	4.8	2.1等間	2.4等間	柱穴の深さ0.3~0.4m。建物内部に甕据付穴群S X 09を伴う。発掘区外東に延びる。重複関係からS D 03・整地層Ⅱより新しい。

遺構番号	掘 形			主な出土遺物	備 考
	平面形	平面規模(m)	深さ(m)		
S E 01	隅丸方形	南北1.6×東西2.0	1.5	弥生時代後期前半の短頸壺1点	素掘り井戸。掘形の断面形状は逆台形を呈す。S A 02・S K 05・整地層Ⅰより古い。
S E 02	円形	直径0.7	0.7	古墳時代前期末~中期前半の土師器甕の口縁部片1点	井戸枠の構造は一本刳り貫きか。復元できる内法は0.5m。整地層Ⅰより古い。
S D 03	南北溝	長さ5.0以上×幅0.8~1.3	0.3~0.5	8世紀末頃の土師器杯・皿・甕、須恵器杯・皿・杯蓋・壺・甕・平瓶、瓦	S B 04より古く、S K 05・整地層Ⅱより新しい。
S K 04	楕円形	南北1.4×東西3.4	0.2	8世紀後半~末頃の土師器杯・皿・甕、須恵器杯・皿・壺	
S K 05	不整形	南北3.3以上×東西1.9以上	0.3	8世紀代の土師器杯・皿・甕、須恵器皿・甕・壺、瓦	発掘区外南に延びる。S A 02・S D 03より古く、S E 01・整地層Ⅱより新しい。
S K 06	不整形	南北2.7×東西1.8以上	0.2	8世紀代の土師器杯・皿・甕、須恵器杯・甕、瓦	S X 09より古く、整地層Ⅱより新しい。
S K 07	不整形	南北2.0×東西3.6以上	0.2~0.4	8世紀前半~中頃の土師器杯・皿・甕、須恵器杯・杯蓋・甕	整地層Ⅱより古く、整地層Ⅰより新しい。
S K 08	不整形	南北0.3以上×東西0.8	0.5	出土遺物なし	整地層Ⅱより古く、整地層Ⅰより新しい。
S X 09	円形	直径0.3~0.9	0.2~0.3	8世紀後半以降の土師器・須恵器・瓦	甕据付穴群。南北4列、東西2列の計8基検出。S K 06・整地層Ⅱより新しい。



H J 第 620 次調査 発掘区全景(東から)



H J 第 620 次調査 発掘区全景(西から)



H J 第 620 次調査 S D 03・S K 05(北から)



H J 第 620 次調査 整地層Ⅱ下の遺構(西から)

4. 平城京跡（右京三条一坊四坪）の調査 第621次

事業名	工場新築	調査期間	平成21年5月12日～5月29日
届出者名	積水化学工業株式会社	調査面積	190㎡
調査地	奈良市三条大路四丁目1-1	調査担当者	秋山成人

I はじめに

平城京第621次調査地は、条坊復原によると朱雀大路の西に面する右京三条一坊四坪の南東に相当する。調査地の北側で行われた国第288次調査では、弥生時代の溝、奈良時代の掘立柱建物などが検出されている。また、国道308号線拡幅工事に伴う県2006～2009調査では、弥生時代後期の土坑、飛鳥時代の下ツ道東西両側溝、奈良時代の朱雀大路東西両側溝・三条大路北側溝が確認されている。本調査は、奈良時代の四坪内の様相および弥生時代の遺構の広がりを確認する目的で実施した。

II 基本層序

発掘区内の基本層序は、上からアスファルト舗装、碎石、造成土、黒灰色土（旧耕作土）、黄灰色砂質土、淡黄灰色砂質土と続き、現地表下約1.25mで黄灰色粘土の地山となる。また、発掘区中央には地山上面に灰色粗砂が堆積する。地山は、南から北に向かって緩やかに低くなり、標高は63.1～63.4mである。

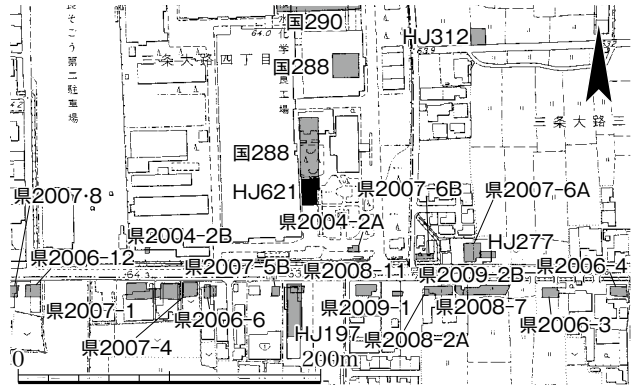
遺構検出作業は、灰色粗砂および地山上面で行った。

III 検出遺構

検出遺構には、弥生時代後期の掘立柱建物（S B 01）1棟・溝（S D 04～11）8条・土坑（S K 12）1基・性格不明の遺構（S X 02・03）2基、奈良時代の掘立柱建物（S B 13・14）2棟・掘立柱列（S A 15・16）2条・溝（S D 17）1条・土坑（S K 18・19）2基がある。詳細は次頁の一覧表にまとめた。以下、概要を記す。

弥生時代の遺構 検出した溝は、重複関係からみて、S D 08 → S D 09 → S D 10 → S D 11 の順で新しいことが判明した。S D 04～07は南北方向に延びる素掘りの溝で、規模は幅0.1～0.2m、深さ0.1～0.2m。断面はU字形で、埋土は灰褐色土である。このうち、溝S D 04は、国第288次調査で検出のS D 2603に接続する。溝S D 06から、弥生時代末の壺が出土した。溝S D 09・10から弥生時代後期後半の広口壺・台付鉢・高杯の破片が出土した。また、溝S D 11からは、弥生時代後期後半の壺・甕の破片が出土した。

なお、溝S D 09・10によって区画される地山の高まり（S X 02）と、溝S D 10・11で区画される部分（S X 03）の計2箇所がある。この部分は、後世の削平もあ



H J 第621次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

り、墓坑などの遺構は確認できなかった。

奈良時代の遺構 建物S B 14は、国第288次調査検出のS B 2601につながり、桁行3間・梁行2間の南北棟建物であることが判明した。また、建物S B 13の東側妻柱列と建物S B 14の西側妻柱列は、約2.1mの間隔において概ね柱筋を揃えている。柱列S A 15・16は、建物S B 14の東側と南側を遮蔽する位置にある。溝S D 17は、坪内を南北に3分割した際の南から3分の1付近に位置し、宅地を区画する溝の可能性がある。

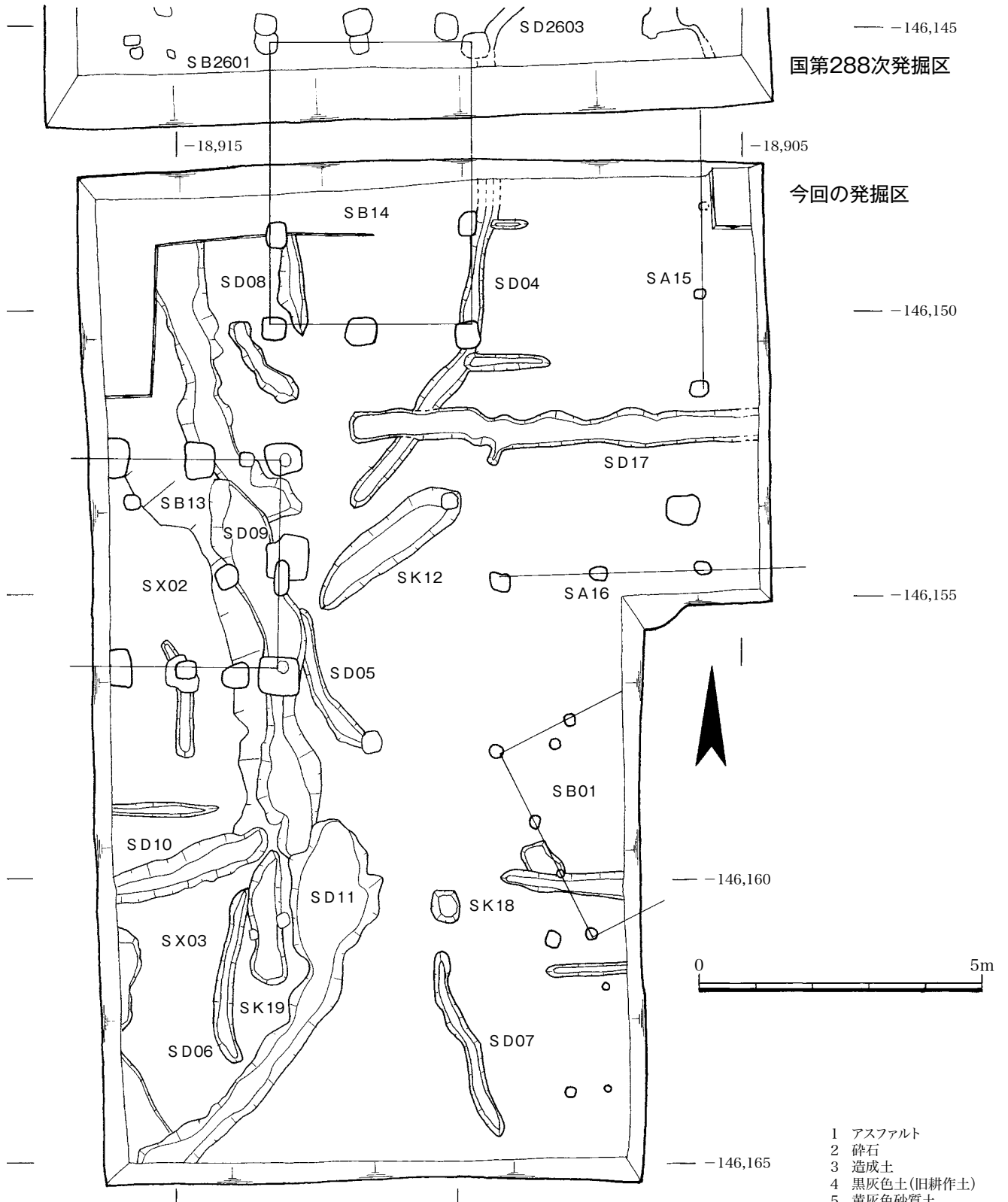
IV 出土遺物

遺物整理箱6箱分が出土した。弥生土器がほとんどを占め、後期後半の長頸壺・広口壺・小型甕・台付鉢・高杯と後期末の直口壺がある。奈良時代の遺物は、土師器・須恵器・製塩土器・および丸瓦・平瓦が少量あるが、詳細な時期は不明である。

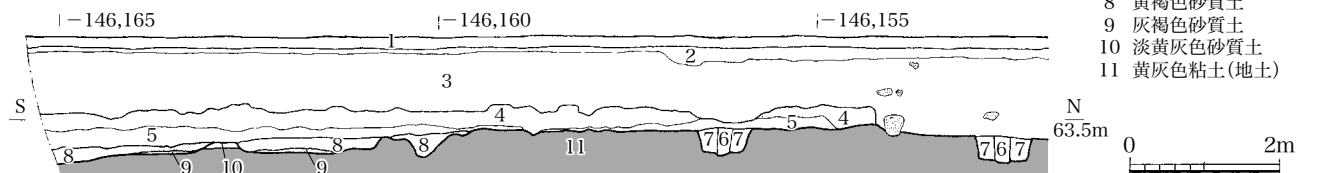
V 調査所見

弥生時代の遺構としては、複数の溝と土坑を確認した。溝は主に発掘区西側を中心に分布し、そこから発掘区外へと延びる。これらの溝には重複関係がみられ、発掘区の南側で検出した溝ほど時期が新しくなる傾向が確認できる。また、これらで区画されたS X 02・03は、墳丘や埋葬施設こそみられないが、状況からみて周溝墓である可能性がある。

奈良時代の遺構は、朱雀大路に面している四坪内であるにも関わらず、遺構密度は比較的希薄である。本調査では、坪内を南北に区画するとみられる東西溝を新たに検出したことにより、坪内を分割して宅地として利用していた時期があることが推定できた。（秋山成人）



H J 第 621 次調査 発掘区遺構平面図 (1/100)



H J 第 621 次調査 発掘区西壁土層図 (1/100)

- 1 アスファルト
- 2 碎石
- 3 造成土
- 4 黒灰色土(旧耕作土)
- 5 黄灰色砂質土
- 6 褐灰色土 SB13柱痕
- 7 黄灰色土 SB13掘形
- 8 黄褐色砂質土
- 9 灰褐色砂質土
- 10 淡黄灰色砂質土
- 11 黄灰色粘土(地土)

H J 第 621 次調査 遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模	桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法 (m)		備考
		桁行×梁行			桁行	梁行	
S B 01	北で西に 28°振れる	3×1 以上	3.6	2.4 以上	北から 1.4-1-1.2	1.4	柱穴の径 0.1 ~ 0.2 m、深さ 0.2m
S B 13	東西	2 以上×2	3.0 以上	3.6	1.5	1.8	柱穴一辺 0.8 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m
S B 14	南北	3×2	4.95	3.6	1.65	1.8	柱穴一辺 0.4 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m
S A 15	南北	2 以上	3.3		1.65		柱穴一辺 0.2 ~ 0.3 m、深さ 0.2 m ~ 0.3
S A 16	東西	2 以上	3.6		1.8		柱穴一辺 0.3 m、深さ 0.2 ~ 0.4 m S B 04 より新しい

遺構番号	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	主な出土遺物・備考
S X 02	平面方形	東西 2.5 以上、南北 7 以上	0.3	主軸は北で西に振れる。東辺は S D 09、南辺 S D 10 で区画される 北辺は既存建築物排水溝掘形により削平されている
S X 03	平面不整形	東西 3.3 以上、南北 4.5 以上	0.3	北辺は S D 10、東辺から南辺にかけて S D 11 で区画される

遺構番号	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
S D 04	断面U字形	幅 0.4、長さ 6 以上	0.2	灰褐色土		重複関係から S D 17 より古い
S D 05	断面U字形	幅 0.4、長さ 2.5	0.1	灰褐色土		
S D 06	断面U字形	幅 0.3、長さ 3.2	0.1	灰褐色土	直口壺 (弥生末)	
S D 07	断面U字形	幅 0.3、長さ 3.3	0.2	灰褐色土	土器小片 (弥生)	
S D 08	断面逆台形	幅 0.9、長さ 6 以上	0.2	赤褐色土	広口壺 (弥生後期)	重複関係から S D 09 より古い
S D 09	断面逆台形	幅 1.0、長さ 6.7 以上	0.3	褐色土	広口壺 (弥生後期)	重複関係から S D 11 より古い
S D 10	断面逆台形	幅 0.7、長さ 2.8	0.3	褐色土	広口壺 (弥生後期)	発掘区外西側へ延びる
S D 11	断面逆台形	幅 0.5 ~ 1.5、長さ 7 以上	0.2	暗褐色土	広口壺 (弥生後期)	発掘区外南西へ延びる
S K 12	平面不整形	幅 0.8、長さ 3.2	0.3	褐色土	長頸壺 (弥生後期)	
S D 17	断面逆台形	東西 0.6、長さ 7 以上	0.1	淡灰色土	土師器甕、製塩土器小片 (8世紀)	坪内を南北 1/3 に分割する付近に位置する
S K 18	平面不整形	東西 0.5、南北 0.6	0.2	淡灰色土	須恵器甕・丸瓦・平瓦小片 (8世紀)	
S K 19	平面不整形	東西 0.6、南北 2.4	0.1	淡灰色土	須恵器甕小片 (8世紀)	



発掘区全景 (北東から)



S X 02・03 (南西から)



発掘区全景 (北から)



S X 02・03 (北西から)

5. 平城京跡（左京四条五坊八坪）の調査 第 624 次

事業名	J R奈良駅周辺整備事業	調査期間	平成 21 年 8 月 19 日～9 月 9 日
届出者名	奈良市長	調査面積	153㎡
調査地	三条本町地内	調査担当者	武田和哉・松浦五輪美

I. はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では、左京（外京）の四条五坊八坪の北辺中央付近に該当している。調査地周辺では過去に調査事例が数件あり、調査地の西約 90 m の地点では、江戸時代および時期不明の土坑を検出している¹⁾。また、調査地の西隣約 30 m の地点でも江戸時代の土坑を数基検出しているが、遺構の密度が低いという所見が得られている²⁾。

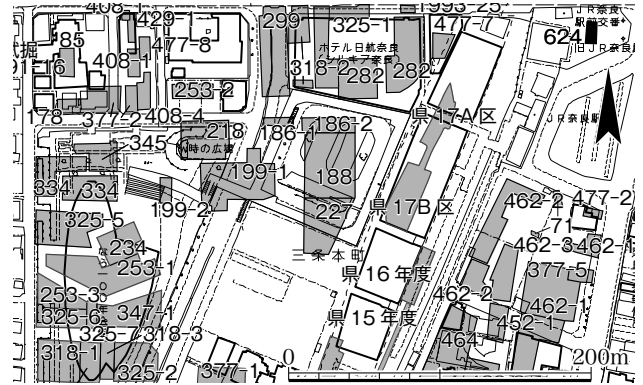
II. 基本層序

基本層序は、アスファルト・クラッシャーおよび造成土 (0.9～1.2 m) 以下、黒灰色土 (0.1～0.2 m＝旧水田土)、黒灰色粘土 (約 0.1 m)、などが堆積し、地表下約 1.2～1.5 m で黄灰色シルト (粘土) または暗青灰色砂礫の地山層に達する。地山上面の標高は発掘区北側では約 65.6 m、また発掘区南側では約 65.4 m である。

III. 検出遺構

遺構検出は地山上面で実施した。以下に主要遺構の概要を記す。規模や出土遺物の詳細は別表に示す。

S E 01 は、発掘区北側で検出した平面楕円形の素掘りの井戸。遺構の重複関係から、後述の S E 02 より古い。S E 02 は、発掘区北側で検出した平面隅丸方形の素掘りの井戸で、北半は発掘区外へと続く。S E 03 は発掘区北西角で検出した平面円形の素掘りの井戸で、西半は発掘区外へと続く。S K 04 は発掘区北半部で検出した



H J 第 624 次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

平面楕円形の土坑。S E 05 は発掘区北半部で検出した平面楕円形の素掘りの井戸。S K 06 は発掘区北半部で検出した平面円形の土坑。S E 07 は発掘区北西角付近で検出した井戸で、西半は発掘区外へと続く。鉄道用枕木を使用して覆いをした状態で検出されており、石組みの井戸枠内からガラス・煉瓦の破片等が出土したことから、20 世紀以降に埋められたとみられる。S E 08 は発掘区西壁中央付近で検出した平面円形の井戸で、西半は発掘区外へと続く。S E 09 は発掘区ほぼ中央で検出した平面円形の井戸で、鉄道軌道敷用のクラッシャーで埋められていることから、前述の S E 07 同様に 20 世紀以降に埋められたとみられる。S K 10 は発掘区中央やや南寄りで検出した平面円形の土坑。わずかに薄い曲物様の板が壁面に推当てられていた。S K 11 は発掘区南半

H J 第 640 次調査 検出主要遺構一覧表

遺構番号	掘 形			井戸枠		主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	構造	内法 (m)		
S E 01	楕円形	長径 1.8×短径 1.5	1.0 以上	素掘り	—	土師器、瓦質土器、陶磁器 (17～18 世紀)、丸瓦、平瓦、棧瓦、土管、鉄滓、砥石、硯石	
S E 02	隅丸方形	東西 1.8×南北 1.5 以上	1.0 以上	抜き取り・不明	—	土師器、瓦質土器、陶磁器 (17～18 世紀)、輸入陶磁器 (明代龍泉窯系青磁)、円盤形土製品、丸瓦、軒丸瓦 (巴紋・13 世紀以降)、軒平瓦 (17 世紀以降)、平瓦、棧瓦、土管、鉄滓、輪羽口、硯、種実	S E 01 より新しい
S E 03	円形	径 1.8	1.0 以上	素掘り	—	土師器、瓦質土器、陶磁器 (17～18 世紀)、円盤形土製品、土管、丸瓦、平瓦、棧瓦、鉄滓、下駄	
S K 04	楕円形	長径 1.8×短径 1.5	0.2	素掘り	—	土師器、瓦質土器、陶磁器 (17～18 世紀)、丸瓦、平瓦、棧瓦、土管、鉄滓	
S E 05	楕円形	長径 1.7×短径 1.4	0.8 以上	素掘り	—	土師器、瓦質土器、陶磁器 (17～18 世紀)、円盤形土製品、軒丸瓦 (巴紋・13 世紀以降)、丸瓦、平瓦、棧瓦、鉄釘、曲物側板、曲物底板、柄杓柄、輪羽口	深部の掘形は円形
S K 06	円形	径 1.5	0.5 以上	素掘り	—	土師器、瓦質土器、陶磁器 (17～18 世紀)、丸瓦、平瓦、棧瓦、鉄滓、硯石、棧瓦、炭	
S E 07	円形	径 1.2	0.4 以上	石組み	径 0.5	土師器、瓦質土器、陶磁器 (18～19 世紀)、丸瓦、平瓦、棧瓦、土管、鉄滓	
S E 08	円形	径 1.5	0.5 以上	素掘り	—	土師器、瓦質土器、丸瓦、平瓦、棧瓦、土管、キセル、炭	
S E 09	円形	径 1.2	0.5 以上	石組み	径 0.6	土師器、瓦質土器、陶磁器 (18～19 世紀)、墨書土器 (19 世紀)、軒平瓦 (15～16 世紀)、丸瓦、平瓦、棧瓦、鉄滓、硯、炭、	
S E 10	円形	径 1.2	0.2	曲物	径 1.2	道具瓦、土管、鉄滓	
S K 11	隅丸方形	東西 1.5×南北 1.6	0.3	素掘り	—		
S E 12	円形	径 1.3	0.5 以上	素掘り	—	陶磁器 (17 世紀以降)、鉄滓、炭	

部で検出した平面隅丸方形の土坑埋土から遺物はほとんど出土せず、時期は不明。SE 12は発掘区南辺中央で検出した平面円形の素掘りの井戸で、南半は発掘区外へと続く。江戸時代の陶磁器片が出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。

IV. 出土遺物

遺物整理箱 21 箱分の遺物が出土した。その大半を江戸時代の土師器・陶磁器・瓦の破片、鞆羽口、鉄滓などの铸造関連遺物が占めている。このほかに、製塩土器(時期不明)、軒棧瓦(17世紀以降)、木製品(時期不明)、鉄片(時期不明)などが少量出土した。

V. 調査所見

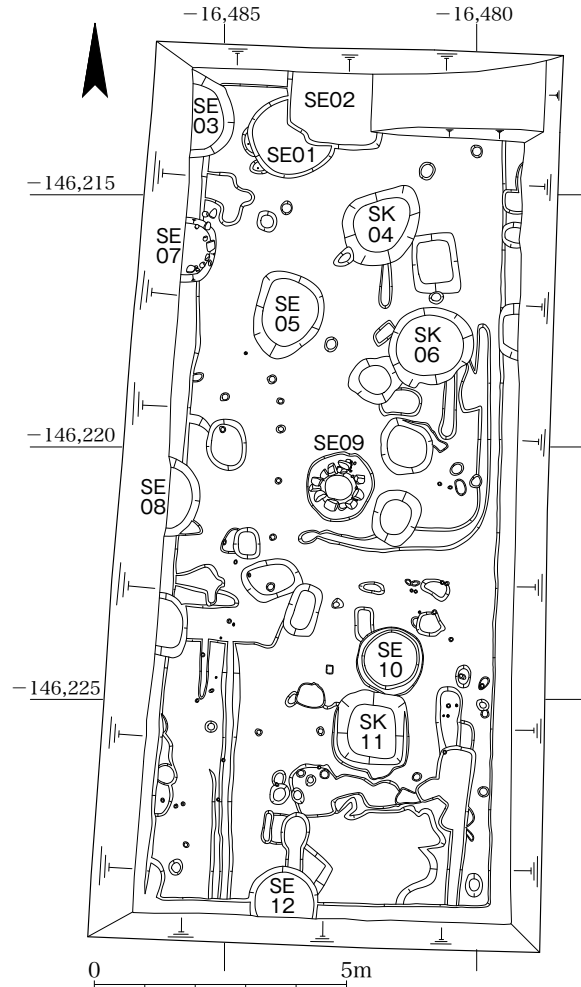
本調査では、江戸時代の土坑や井戸などの遺構を数多く検出した。隣接する泉 2003 年度調査の所見とは異なり、遺構密度は高い。江戸時代の井戸は素掘りのものばかりである。土坑も、平面円形または楕円形を呈し、深さは概ね 0.5 ~ 0.6 m に留まり、底は平坦に掘られる傾向にある。ほとんどの遺構の埋土には鉄滓や鞆羽口などの铸造関連遺物が数多く含まれる点が特徴的である。

江戸時代の三条村の絵図面によれば、調査地付近は弥勒堂町に該当している³⁾。また『奈良坊目切解』によれば、弥勒堂町は当初は田畑であったところを、江戸時代初期の寛永年間に開発がなされて、寛文年間(1661 ~ 1672)頃には建物が「続き建つ」状況になっていたと記す⁴⁾。しかし、本調査では明確な建物跡遺構は検出できなかった。これは、発掘区が当時の三条通りからやや南側に離れた場所に位置しているからかもしれない。

大量の铸造関連遺物が出土したことからみて、調査地付近には鍛冶場などの工房があったと推測されるが、この点については『奈良坊目切解』には言及がない。これらの遺物は、当時の弥勒堂町内の状況を知る上では大きな手がかりである。

(武田和哉)

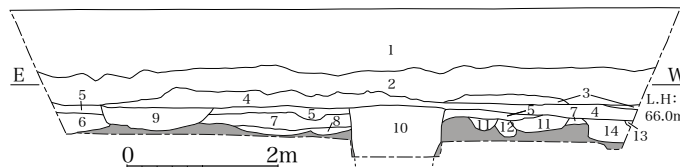
- 1) 奈良市教育委員会「平城京左京四条五坊八坪の調査第 477-7 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告平成 14 年度』2006
- 2) 奈良県立橿原考古学研究所「平城京左京四条五坊八坪」『奈良県遺跡調査概報 2003 年度(第一分冊)』2004
- 3) 三條農家組合・三條水利組合編『三條村史』2006
- 4) 村井古道『奈良坊目切解』巻六・弥勒堂町条



H J 第 624 次調査発掘区遺構平面図 (1/150)



発掘区全景(南から)



- | | |
|--------------------------|------------------------------|
| 1 : アスファルト・クラッシュャー・地盤改良土 | 9 : 黒灰色粘質土(土坑埋土) |
| 2 : 造成土 | 10 : 暗灰色土+地山ブロック(井戸 SE12 埋土) |
| 3 : 暗灰褐色粘質土(旧耕作土) | 11 : 暗灰色砂質土(素掘溝埋土) |
| 4 : 黒灰色粘土(旧耕作土) | 12 : 黒灰色土(溝埋土) |
| 5 : 黒灰色土(旧耕作土) | 13 : 暗黄褐色粘土(土坑埋土) |
| 6 : 黒灰色粘土 | 14 : 黒灰色粘質土(土坑埋土) |
| 7 : 暗黄褐色粘質土 | 地山 : 黄灰色シルト(粘土) |
| 8 : 暗黄褐色砂質土 | または暗青灰色砂礫 |

H J 第 624 次調査発掘区南壁土層図 (1/100)

6. 平城京跡（左京四条一坊三坪）の調査 第 627 次

事業名	宅地造成	調査期間	平成 21 年 12 月 26 日～平成 22 年 1 月 5 日
届出者名	株式会社 Z E R O 代表取締役 田中久美子	調査面積	150㎡
調査地	奈良市四条大路三丁目 984・992	調査担当者	鐘方正樹 中島和彦

I はじめに

調査地は、左京四条一坊三坪の西半部のほぼ南北中央にあたる。調査地の南約 200 m の五条一坊一坪の市 H J 第 65 次調査では、一坪利用の宅地が見つかった。また北西約 70 m の地点の市 H J 第 328 次調査では、朱雀大路と四条条間路とともに、弥生時代の溝が検出されている。今回の調査は、三坪内の様相確認の他、平城京以前の遺構の確認を目的とした。

II 基本層序

発掘区内の層序は、発掘区西端で上から耕作土（1）、灰色砂質土（2）、奈良時代整地土の暗黄灰色シルト（3）とつづき、地表下約 0.5 m でにぶい黄色シルト（7）の地山となる。地山面は発掘区東側に向かい高くなり、東端は西端に比べ約 0.2 m 高く、耕作土直下で地山面となる。地山面の標高は 60.9～61.1 m である。

III 検出遺構

掘立柱建物 1 棟、掘立柱列 3 条、溝、河川等がある。詳細は遺構一覧表に記す。

掘立柱建物・列は、いずれも柱穴規模から中小規模の建物群になると考えられるが、発掘区外につづき全容は不明である。東西柱列 S A 02 は S B 01 の北側妻柱列と柱筋が揃い、西端で S A 03 と接続することから、これらは一連の遺構と考えられる。

S D 06 は、幅 1.5～2.0 m、深さ約 0.2 m の L 字状の溝で、東西約 7.0 m 分、南北約 5.0 m 分を検出した。発掘区外西側と北側につづく。奈良時代の整地土（3）の下で検出した。出土遺物には 8 世紀後半以降の土師器高杯・甕、須恵器杯・杯蓋・鉢・壺が少量ある。

河川 1 は、北西から南東方向に斜行し、西岸から約 3.3 m 分を検出した。深さは約 0.5 m で、灰色砂で埋まる。上層から土師器の小片が 3 点出土した。重複関係から奈良時代以前の流路であるが、詳細な時期は不明である。

IV 出土遺物

土器類・瓦類がいずれも遺物整理箱 1 箱分ある。土器類の多くは整地層から出土で、8 世紀後半の土師器、須恵器の他、製塩土器少量と円面硯 1 点がある。瓦類は丸瓦と平瓦のみで、軒瓦、道具瓦等は出土していない。

V 調査所見



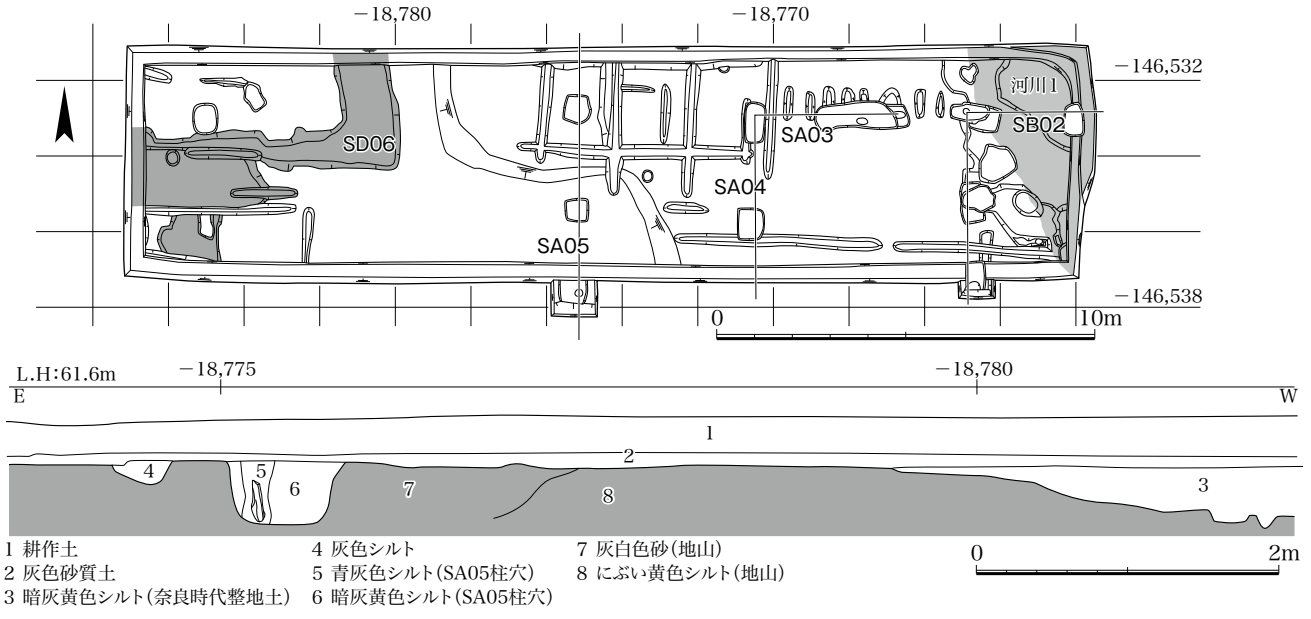
H J 第 627 次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

調査の結果、奈良時代の遺構の存在を確認したが、いずれも発掘区外につづき詳細は不明である。一方、三坪北側の四条条間小路は、北西側の市 H J 第 328 次調査成果から道路心座標が $X = -146,470.36$ 、 $Y = -18,804.3$ と判明している。これを基に三坪の南北中心線を求めると、おおよそ発掘区のすぐ南の $X = -146,538$ 付近と推定できる。S B 02 と S A 03・04 はいずれもその位置関係から、三坪の南北中心線をまたいで築かれていることがわかる。

(中島和彦)



発掘区全景（西から）



発掘区遺構平面図 (1/200)・南壁土層図 (1/50)

H J 第 627 次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模 (間)	桁行全長	梁間全長	桁行柱間寸法	梁間柱間寸法	備考
		桁行 × 梁間	m	m	m	m	
SB02	南北	2 以上 × 1 以上	4.8 以上	2.7 以上	2.4 等間	2.7	
SA03	東西	2	3.6		1.8 等間		東側 1 間分は、柱穴 2 個分の布掘
SA04	南北	1 以上	3.0		3.0		北端で S A02 と接続
SA05	南北	2 以上	4.8		2.4 等間		



発掘区全景 (北東から)

7. 平城京跡（右京五条大路）の調査 第628次

事業名	西ノ京地区歴史的環境整備事業	調査期間	平成22年1月20日～2月19日
届出者名	奈良市長	調査面積	110㎡
調査地	奈良市西ノ京町188、五条町325-1他	調査担当者	秋山成人

I はじめに

本調査地は、条坊復原では右京五条二坊五坪と五条大路に該当し、南側は薬師寺旧境内の北辺と接する。調査地東側を南流する秋篠川の東・西側の水田には五条大路の痕跡を示すとみられる畦畔が断続的に残っているが、過去の調査で五条大路の遺構を検出した例はない。地形的には、西の京丘陵東側の台地東縁辺部から秋篠川に合流する大納言川の南側に広がる沖積地で、現況は宅地および水田・畑である。調査対象地の東側は秋篠川の堤防に接しており、そこから幅約12m、高さ0.9～1.3mの堤防状の高まりが西へ約120m延び、台地東縁辺部へ繋がっている。堤防の北側水田の標高は約61.0m、南側は60.6m。今回は、五条大路関連遺構の検出を目的に、第1～3・7発掘区を、東西に延びる堤防の性格を把握するために第4・5発掘区を設定した。また、対象地東側の一面に墳丘状の高まりが残っていたため、この性格を明らかにするため第6発掘区を設定し調査を行った。

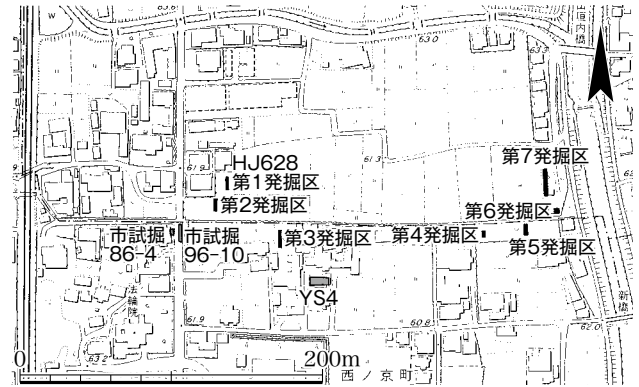
II 基本層序

第1・2発掘区 上から造成土、黒灰色土（旧耕作土）、暗灰色粘土と続き、地表下約1.3mで黄灰色粘土の地山となる。遺構面は地山上面で、標高は約60.8mである。

第3発掘区 発掘区中央付近では黒灰色土（旧耕作土）の下が黄灰色粘土の地山となる。発掘区北半の河川跡部分では上から淡褐色土・淡灰色土・灰色土・灰褐色土・黄褐色土（以上埋立土）暗灰色土・灰色粘土・灰色砂の順で堆積する。遺構面は埋立土上面と地山上面で、標高はそれぞれ約61.6mと約61.5mである。

第4発掘区 黒灰色土（旧耕作土）、黄褐色粘土・黄灰色粘土・淡灰色砂・黄褐色粘砂・暗灰色土・灰白色粘土・淡灰白色粘土・暗灰白色粘土（以上堤盛土）、灰色粘土、青灰色粘土（以上谷堆積土）の順で堆積する。堤の南側は表土の下に暗灰色砂質土、褐灰色砂質土、灰色砂が堆積、北側は表土の下に淡褐灰色土、灰褐色土、灰色砂が堆積する。盛土上面の標高は高い所で約61.3m。

第5発掘区 上から黒灰色土（耕作土）、白色砂（堤状堆積土）、灰色粘土・青灰色粘土（谷堆積土）の順で堆積する。白色砂（堤状の堆積土）の南側では表土の下に淡褐灰色土、灰褐色土、褐灰色砂質土、北側では表土



H J 第628次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

の下に灰褐色土、灰色砂、灰色砂礫が堆積する。白色砂上面の標高は高い所で61.8mである。

第6発掘区 上から造成土、黒灰色土（旧耕作土）、灰色砂・褐色砂・白色砂（河川堆積土）、灰色粘土（谷堆積土）の順で堆積する。谷堆積土上面の標高は約60.2m。

第7発掘区 上から黒灰色土（旧耕作土）、赤褐色土（床土）、灰白色砂、白色砂、褐色土（河川堆積土）、灰色粘土・青灰色粘土（谷堆積土）の順で堆積する。谷堆積土上面の標高は約60.2mである。

III 検出遺構

各発掘区で検出した遺構の詳細は遺構表にまとめた。

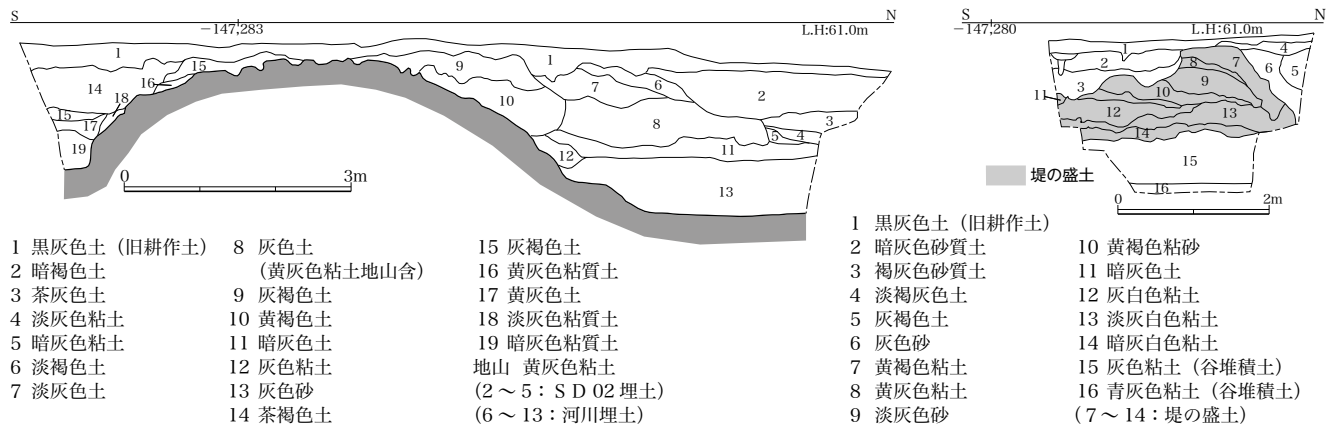
第1・2発掘区 ほぼ全域で粘土採掘坑群を検出した。埋土から8世紀代の土器片・瓦片、12世紀の土師器片、15世紀後半の瓦質播鉢が出土した。

第3発掘区 土坑S X 01、素掘り溝S D 02、河川跡を検出した。S X 01は北肩を確認しただけで規模や性格は不明。検出面からの深さは1.3m、埋土から12世紀中頃の土師器皿片等が出土。S D 02は、河川跡と重複して検出した東西方向の溝で、河川跡よりも新しい。溝底には18世紀代の国産磁器片を包含する暗灰～淡灰色粘土（厚さ約0.2m）が堆積していた。河川跡は、検出面からの深さは1.8m、川底は広く平坦な形状を呈す。堆積土は大きく上下2層に分かれ、下層は粘土と砂の互層で、上層は人為的な埋土である。下層から8世紀代の土器・瓦片とともに14世紀の瓦質土器片が出土した。

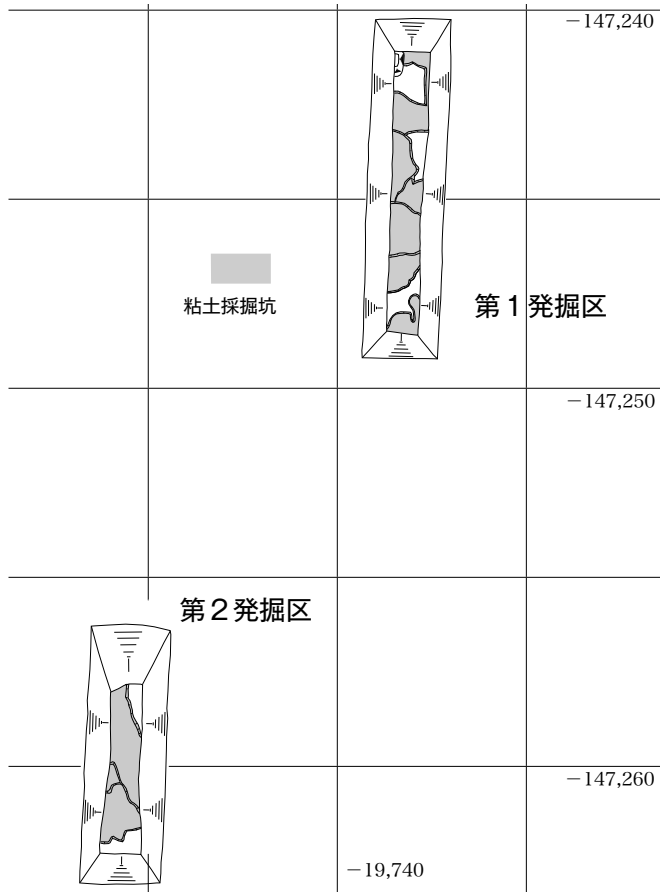
第4発掘区 堤S X 03と谷地形を確認した。S X 03は、谷地形の堆積土の上に砂と粘土で積まれており、南北幅3.1m以上、東西1.9m以上ある。高さは1.2m分

H J 第 628 次調査 検出遺構一覧表

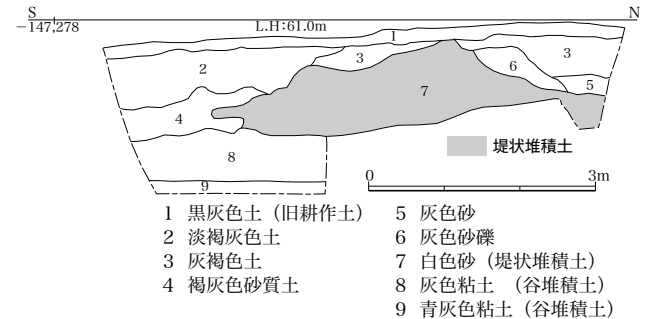
発掘区	遺構名	形状	平面規模 (m)	深さ・高さ (m)	出土遺物
第1・2発掘区	粘土採掘坑	平面不整形	東西 0.7 以上 南北 1 以上	0.1 以上	8世紀の土師器皿・須恵器杯・甕、奈良・平安時代の丸瓦・平瓦、12世紀の土師器皿、15世紀後半の擦鉢
第3発掘区	S X 01	不明	東西 1.2 南北 3.6	1.3	奈良・平安時代の丸瓦・平瓦、12世紀中頃の土師器皿・羽釜・瓦器碗・白磁皿
	S D 02	断面逆台形	東西 0.8 以上 南北 3.1 以上	0.9	18世紀の肥前産磁器碗
	河川跡	断面U字形	東西 1.2 以上 南北 6.2 以上	1.8	8世紀の須恵器甕、奈良・平安時代の丸瓦・平瓦・磚、12世紀の土師器皿・瓦器碗、14世紀の瓦質土器鉢
第4発掘区	S X 03	断面台形	東西 1.9 以上 南北 3.1 以上	1.2	8世紀の須恵器甕、土師器甕、奈良・平安時代の丸瓦・平瓦、12世紀の瓦器碗、15世紀の瓦質土器鉢
第5発掘区	S X 04	断面台形	東西 1.3 南北 4.2	1	堤状堆積北斜面上に堆積する褐色砂から17世紀後半の土師器皿・肥前産陶磁器碗



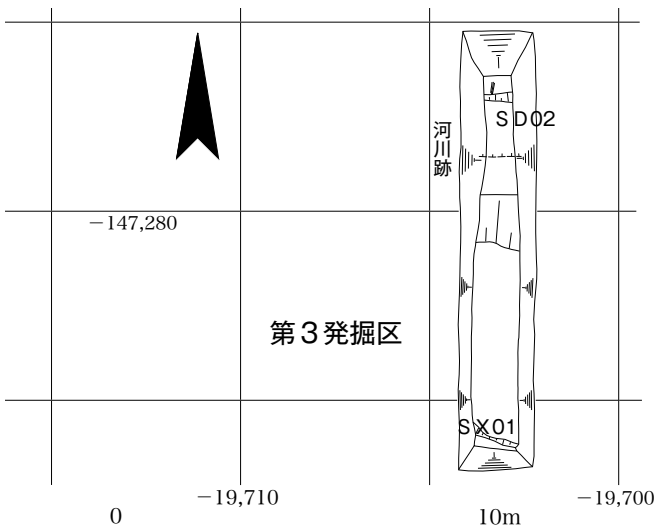
H J 第 628 次調査 第 3 発掘区西壁断面図 (1/100)



H J 第 628 次調査 第 4 発掘区西壁断面図 (1/100)



H J 第 628 次調査 第 5 発掘区西壁断面図 (1/100)



H J 第 628 次調査 第 1 ~ 3 発掘区遺構平面図 (1/200)

を確認した。8世紀代の土器片・瓦片とともに、15世紀の瓦質土器鉢片が出土した。

第5発掘区 谷地形と東西方向の堤 S X 04 を検出。S X 04 は、谷の堆積土の上に白色砂で積み上げられており、高さは1m分を確認した。

第6・7発掘区 秋篠川の洪水層および谷地形の堆積土を確認したが、遺構は検出できなかった。

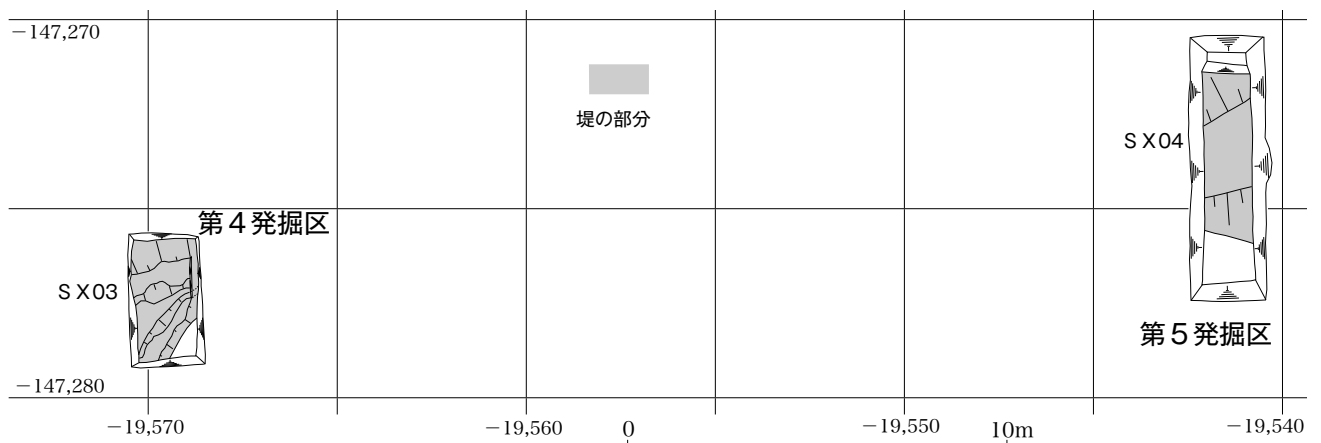
IV 出土遺物

遺物整理箱5箱分が出土した。土器類には、8世紀の土師器椀・皿・甕、須恵器甕、圈足円面硯、11世紀の土師器皿、12世紀の瓦器椀・皿、土師器皿・羽釜、白磁皿、14～16世紀の瓦質土器鉢・播鉢、17世紀の土師器皿、17～18世紀の肥前産陶磁器椀・皿・瓶がある。瓦類には、奈良～平安時代の丸瓦・平瓦・平安時代後期の偏行唐草文軒平瓦・塼、18世紀の棧瓦がある。

V 調査所見

第4・5発掘区で検出した堤は一連のものと考えられ、現状の堤防上の高まりはそれを踏襲したものであろう。第3～4発掘区の間南北10～15m幅の畦畔が東西に長く延びており、堤の遺存地割りである可能性が高く、堤は第3発掘区まで続いていたと考えられる。さらに、第3発掘区の西20m地点には薬師寺の北辺を限る築地塀が部分的に残っており、築地と堤はほぼ同じ位置にあることもわかる。このことから、堤は本来は薬師寺北面築地を踏襲して構築され、大納言川や秋篠川の氾濫や第3発掘区で検出した河川の制御や、薬師寺寺内と南側にある集落の防御等を目的としていたことが推察される。

本調査では、五条大路関連遺構は検出できなかった。ただし、過去の京内の大路の調査例を参考に五条大路を45大尺で推定復原すると、第3発掘区で検出した河川付近に南側溝が位置する計算となるので、この河川が南側溝を踏襲している可能性も排除できない。(秋山成人)



H J 第 628 次調査 第 4 ～ 7 発掘区遺構平面図 (1/200)



第1発掘区(北から)



第4発掘区(南西から)



第2発掘区(北から)



第5発掘区(北から)



第3発掘区(北東から)



第6発掘区(西から)



第3発掘区(南から)



第7発掘区(北から)

8. 平城京跡（左京二条五坊北郊）の調査 第 629 次

事業名	個人住宅新築	調査期間	平成 22 年 2 月 1 日～2 月 5 日
届出者名	個人	調査面積	26㎡
調査地	奈良市法蓮町 717 番 4	調査担当者	安井宣也

I はじめに

調査地は、佐保川右岸の沖積平野の北縁に位置し、平城京の条坊復原では左京二条五坊北郊の西辺南寄りにあたる。現状は宅地である。

調査地のすぐ南に市 H J 第 600 次調査¹⁾ (平成 19 年度) の西発掘区がある。地山上面 (標高 69.2～69.8 m) で古墳時代中期後半の古墳 S X 01 と土坑 S K 02、平安時代の柱穴と平安時代前葉に埋没する旧河川、地山や旧河川の上を覆う整地層上面で鎌倉時代初頭の溝 S D 03・04、井戸 S E 05・土坑 S K 06 を検出したことから、古墳 S X 01 が平安時代前葉まで残存していたことや、平安時代中葉以降に開発されて居住地化したことが判明した。

このうち、古墳 S X 01 は全長約 15 m の西向きの方後円墳で、墳丘の南辺部分と周濠の一部を検出した。墳丘の大半は削平されているが、後円部は基底部分、前方部は 2 段目の斜面下部までが残存していた。周濠は幅 1.8 m で、くびれ部及び前方部の南面が旧河川の侵食で失われていた。底面の標高は、後円部南面が 69.0 m、前方部前面が 68.7 m である。周濠内や墳丘に面した旧河川から、この古墳に伴うものとみられる埴輪編年 IV 期の埴輪が出土した。葺石はみられなかった。

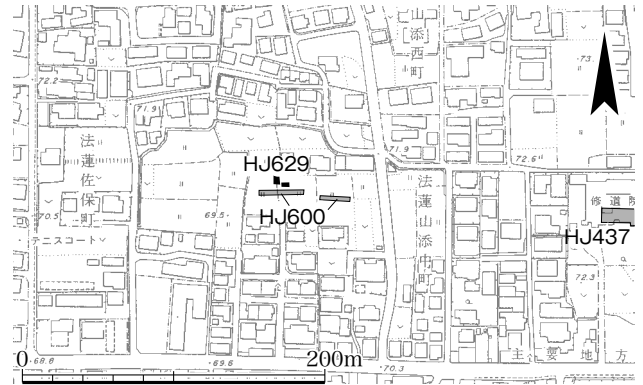
今回の調査地内では、古墳 S X 01 の後円部・くびれ部と周濠の存在が想定されたので、埋葬施設の確認を目的として A 発掘区を、くびれ部付近の墳丘裾と周濠の確認を目的として B 発掘区をそれぞれ設定した。なお、遺構番号は市 H J 第 600 次調査の続き番号とする。

II 基本層序

A 発掘区では、造成土 (厚さ 0.9 m)、耕作土 (厚さ 0.3 m)、水田床土 (厚さ 0.1 m) の下で沖積層の地山上面となる。B 発掘区では、造成土 (厚さ 1.0 m)、耕作土 (厚さ 0.1～0.2 m)、水田床土 (厚さ 0.2 m)、暗灰黄色砂質シルトやオリーブ褐色シルト質砂 (厚さ 0.1 m) の下で沖積層の地山上面となる。地山上面の標高は、A 発掘区が 69.8 m、B 発掘区が 69.6～69.8 m である。

III 検出遺構

A 発掘区 地山上面で時期不明の溝 S D 07、平安時代以降の柱穴と耕作溝を検出した。S D 07 は北西から南東へ斜行する幅 0.6 m、深さ 0.2 m の溝で、埋土中から



H J 第 629 次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

土師器片が 1 点出土した。形状からみて、古墳時代以前の遺構の可能性がある。なお、古墳 S X 01 の埋葬施設とみられる遺構はなかった。

B 発掘区 地山上面で古墳 S X 01 の周濠、地山上面を覆う土層の上面で平安時代以降の柱穴と鎌倉時代初頭頃の溝 S D 08 を検出した。古墳 S X 01 の周濠は幅約 1.8 m、深さ 0.1 m の浅い凹みで、層位と位置から認識した。墳丘裾は後世の変更が著しく、発掘区西壁付近でわずかに残る程度である。底面の標高は 69.6 m である。出土遺物はない。S D 08 は重複関係から柱穴より新しく、12～13 世紀頃の土器片が出土した。

III 出土遺物

遺物整理箱 1 箱分があり、主なものに水田床土から出土した古墳時代の円筒埴輪、8～9 世紀の須恵器甕・壺、灰釉陶器壺、平瓦、12 世紀頃の白磁碗と、溝 S D 08 から出土した 12～13 世紀頃の土師器皿、瓦器碗、白磁碗がある。いずれも小片で、円筒埴輪・土師器・瓦器は摩耗が著しい。白磁碗は輸入品で口縁部は玉縁状である。

IV 調査成果

古墳 S X 01 については、後円部の埋葬施設が残存せず、北側くびれ部の墳丘裾や周濠の遺存状態が悪いことや、市 H J 600 次調査地と比べて周濠の幅はほぼ同じながら底面の標高が高いことがわかった。墳丘や周濠の遺存状態から、墳丘の規模は全長約 15 m、後円部径約 9 m、前方部幅約 7 m で、幅 1.8 m の周濠が墳丘の周囲を鍵穴形に巡ると想定される。なお、B 発掘区の地山上面を覆う土層は平安時代中葉以降の整地土とみられる。(安井宣也)

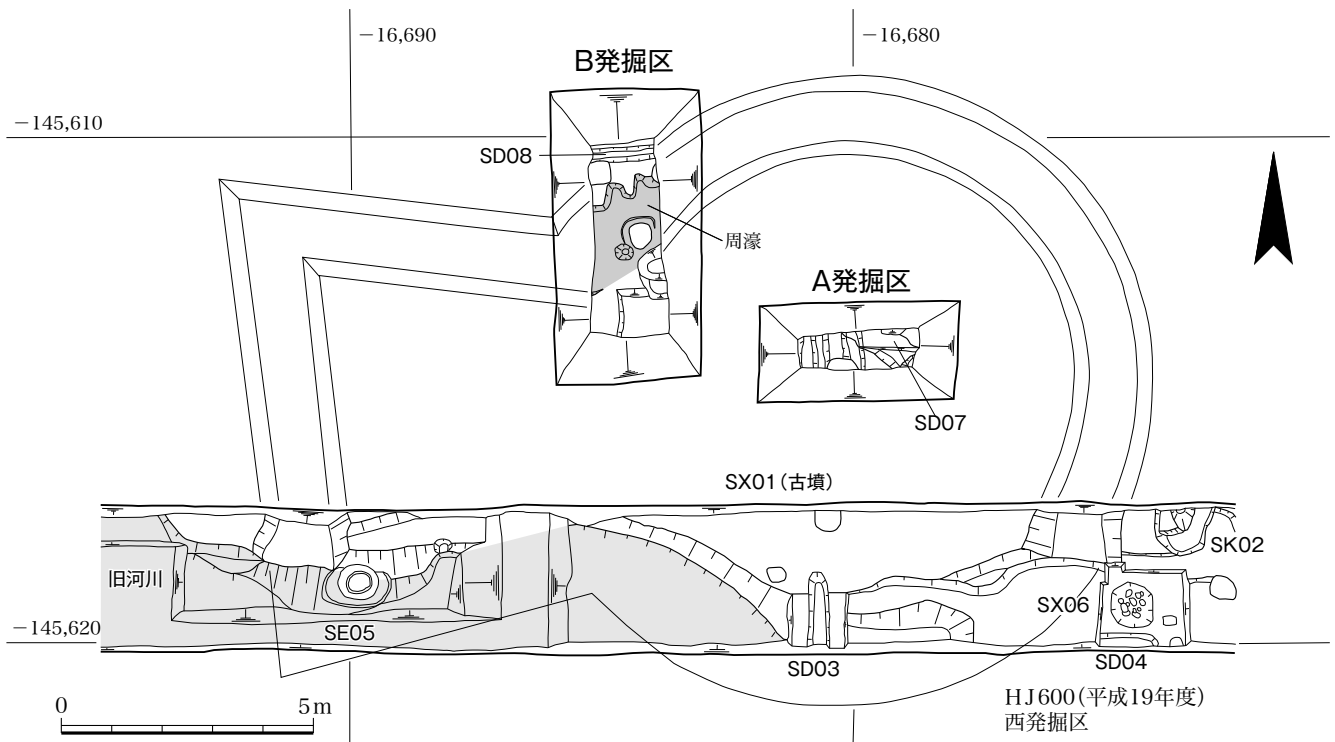
1) 奈良市教育委員会「平城京跡（左京二条五坊北郊）の調査 第 600 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 19 年度』2010



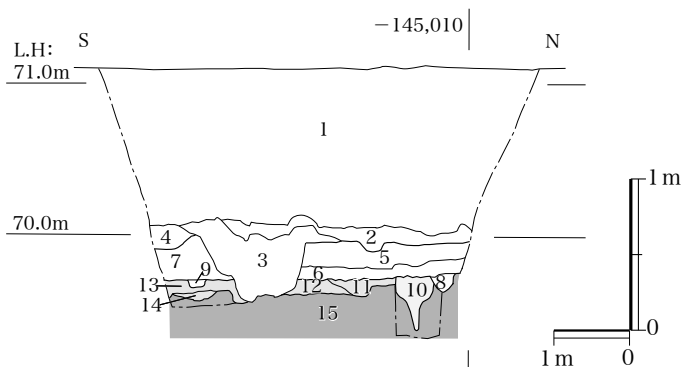
A 発掘区全景 (北東から)



B 発掘区全景 (北東から)



H J 第 629 次調査 発掘区遺構平面図 (1/150)



- | | |
|-----------------|---------------|
| 1 造成土 | 2 近年の耕作土 |
| 2 オリーブ黒色シルト質砂 | 3 近年の水路の埋め立て土 |
| 3 5・11・15層ブロック | 4 耕作土 |
| 4 オリーブ黒色シルト質砂 | 5~7:水田床土 |
| 5 灰色砂質シルト | 8・9:耕作溝埋土 |
| 6 暗灰黄色砂質シルト | 10:柱穴埋土 |
| 7 灰色砂質シルト | 11~14:整地土 |
| 8 オリーブ褐色砂質シルト | 15:地山(沖積層) |
| 9 暗オリーブ褐色砂質シルト | |
| 10 黄灰色砂質シルト | |
| 11 暗灰黄色砂質シルト・粘土 | |
| 12 オリーブ褐色シルト質砂 | |
| 13 暗灰黄色砂質シルト・粘土 | |
| 14 オリーブ褐色シルト質砂 | |
| 15 灰白色砂質シルト・粘土 | |

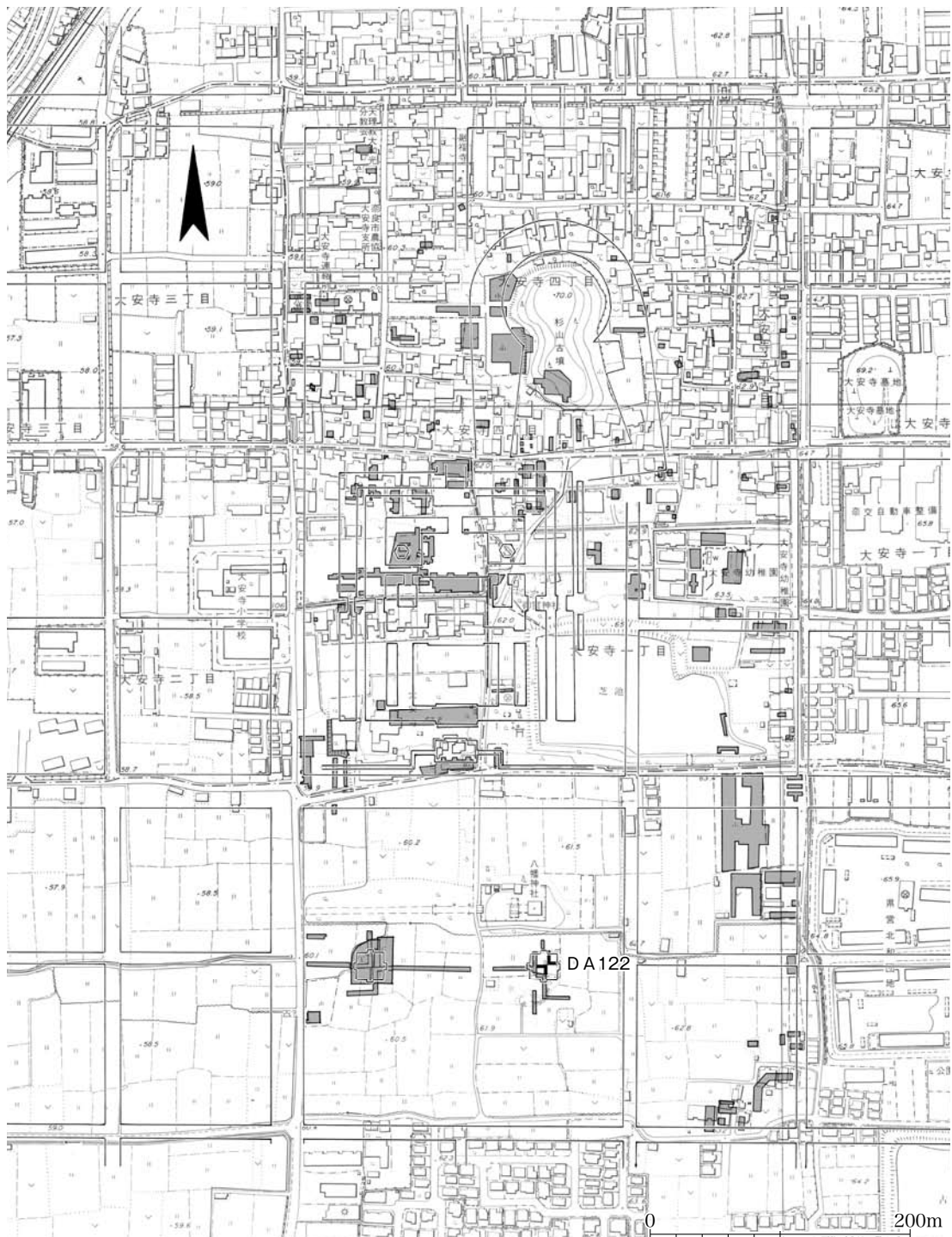
H J 第 629 次調査 B 発掘区西壁土層断面図 (縦: 1/50、横: 1/100)

9. 史跡大安寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、平成 21 年度に史跡大安寺旧境内において 1 件の調査を実施した。第 122 次調査は、遺跡範囲確認を目的として、東塔跡地区で実施したものである。

平成 21 年度史跡大安寺旧境内 発掘調査一覧表

調査回数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
DA122	史跡大安寺旧境内保存整備事業	東九条町 1326	H21.11.16～12.15	80㎡	山前



平成 21 年度史跡大安寺旧境内 発掘調査位置図 (1/5,000)

東塔跡の調査 第122次

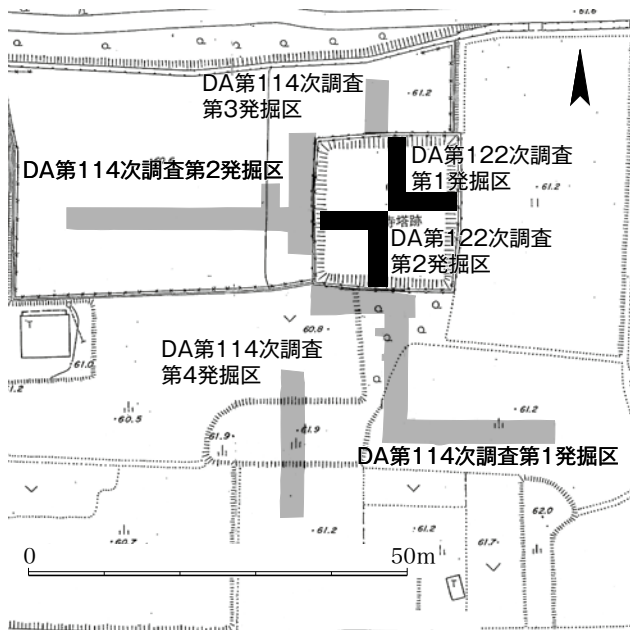
I はじめに

史跡大安寺旧境内保存整備事業に係る東塔地区の発掘調査を平成18年度から行っている。本年度は、基壇上の確認調査を行った。

東塔跡については過去2回の調査が行われている。昭和49年に現土壇の擁壁工事に際して行われた小規模な調査では、土壇南西裾で基壇化粧の一部（延石）が確認されている。このことから、現在の擁壁ブロックで囲まれた土壇が東塔基壇とほぼ一致すると推定された。

DA第114次調査(平成18年度)では、東塔基壇(南・北・西階段および基壇辺)のほか、溝、石敷き、古墳時代以前の柱穴群、溝、土坑、流路、奈良～平安時代の柱列、溝、土坑、鎌倉時代以降の池状遺構、江戸時代以降の盛土を検出した。この調査の結果、東塔基壇の規模が西塔と同規模であったこと、基壇の東辺が1.5mほど大きく削られていること、基壇の構造が西塔と同じ壇上積基壇であることが新たに確認された。また、南階段前の石敷きは9世紀後半～10世紀後半までの間に敷設されたもので、幅が0.8mと狭く、形状的にも上面が曲面をなしており歩きにくいことから、装飾的もしくは一時的なものとしての可能性が高い。また、文献史料に出てくる鎌倉期の東塔の修理については調査成果から事実と判断でき、13世紀中頃の修理の際に用いられた瓦とみられる「大安寺寶塔」などの文字瓦が焼土中から多量に出土したことは、修理後最終的に焼け崩れたことが考えられている。

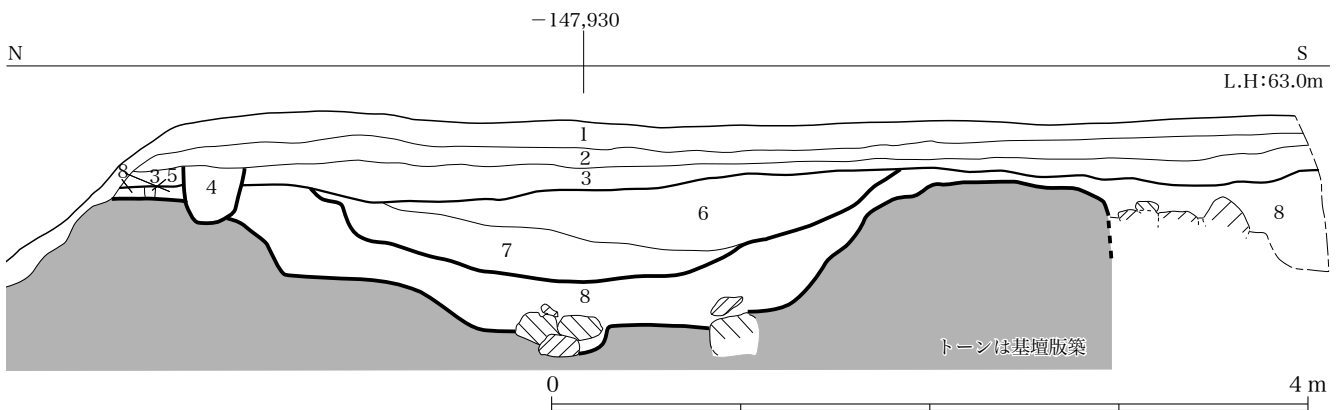
本調査では、東塔基壇の様相の確認を目的に、推定基壇中心を交点として東西南北に幅2.5m、長さ9mまたは9.5mの発掘区を北東部(第1発掘区)と南西部(第2発掘区)の2箇所を設定した。



発掘位置図 (1/1,000)

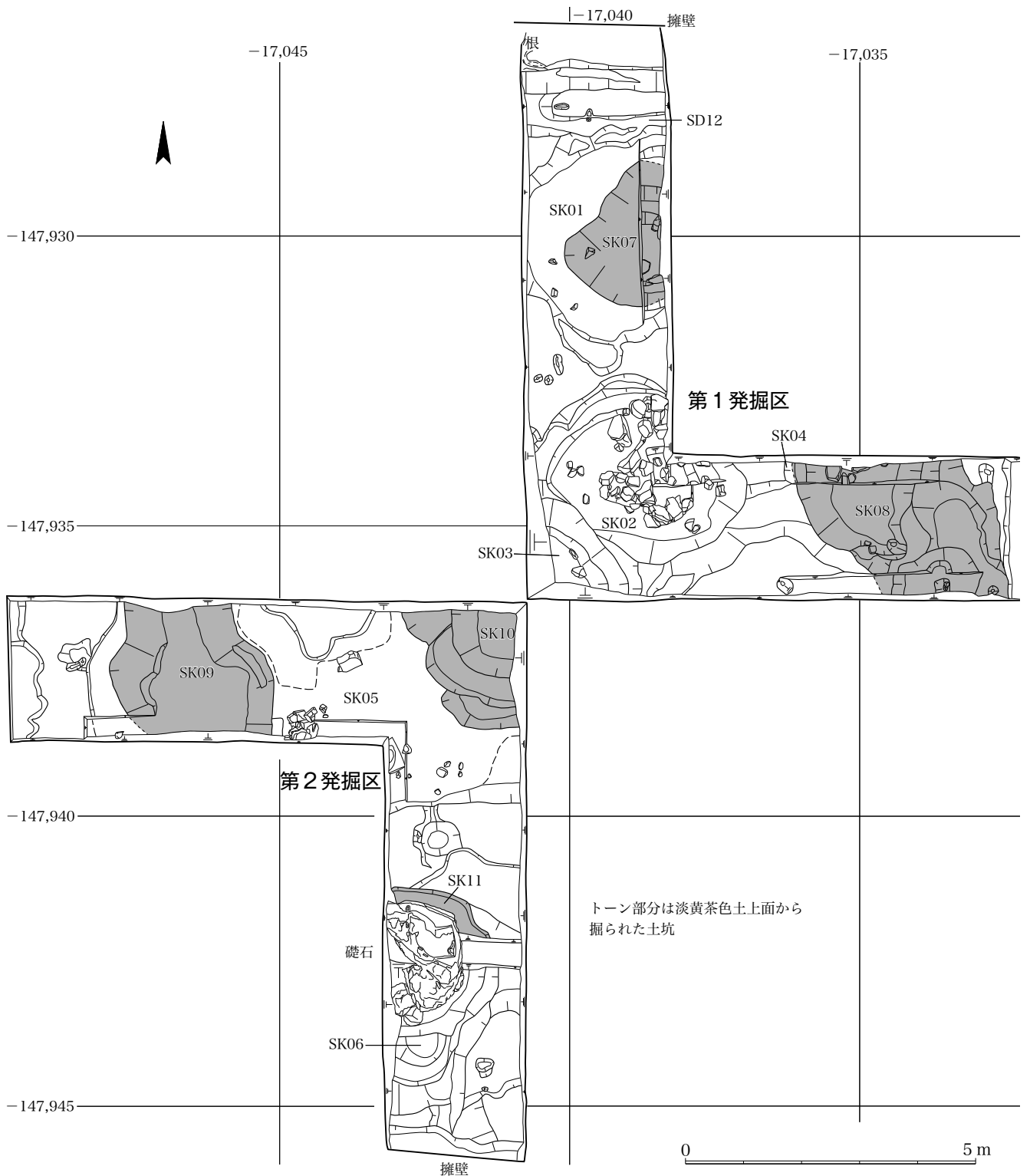


発掘区全景 (南から)



- | | | |
|--------------|-----------------|-------------------------|
| 1. 暗灰色土 (表土) | 4. 灰色土 | 7. 淡茶色土 (瓦多く含む) |
| 2. 灰茶色土 | 5. 暗茶灰色土 | 8. 淡黄茶色土 (凝灰岩片を含む) |
| 3. 濁茶色土 | 6. 赤褐色土 (瓦多く含む) | (6・7はS K07埋土 8はS K01埋土) |

DA第122次第1発掘区東壁土層図 (1/40)



DA第122次調査 発掘区平面図 (1/100)

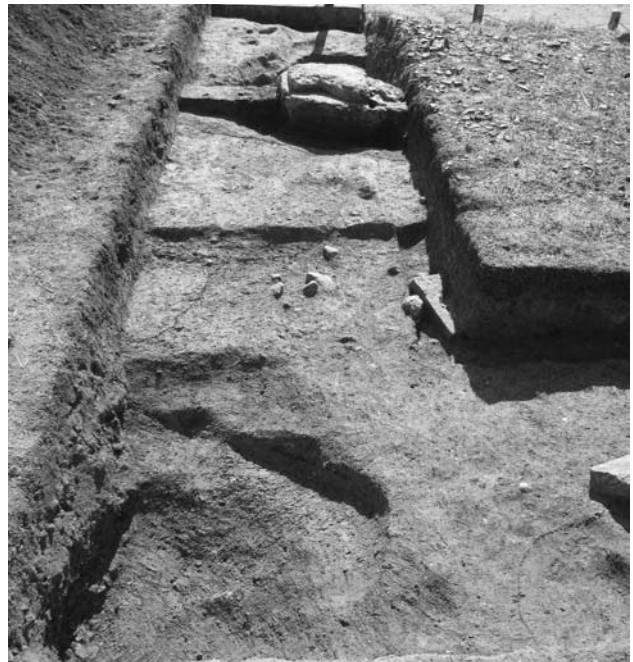
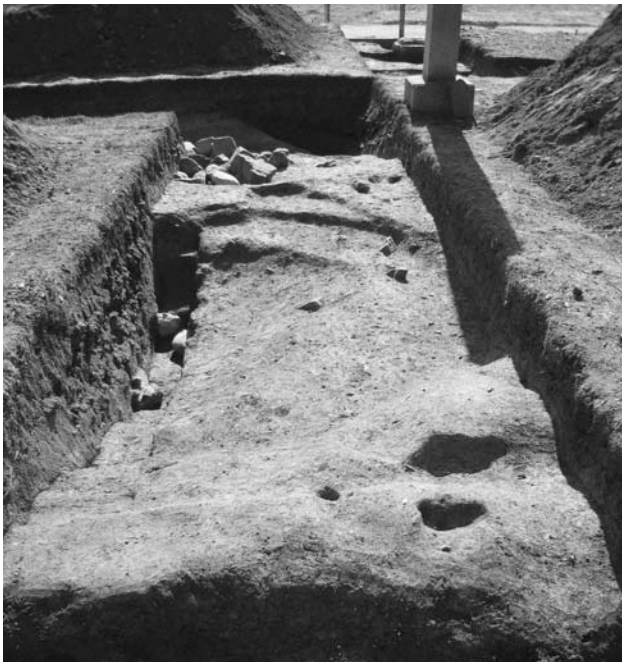
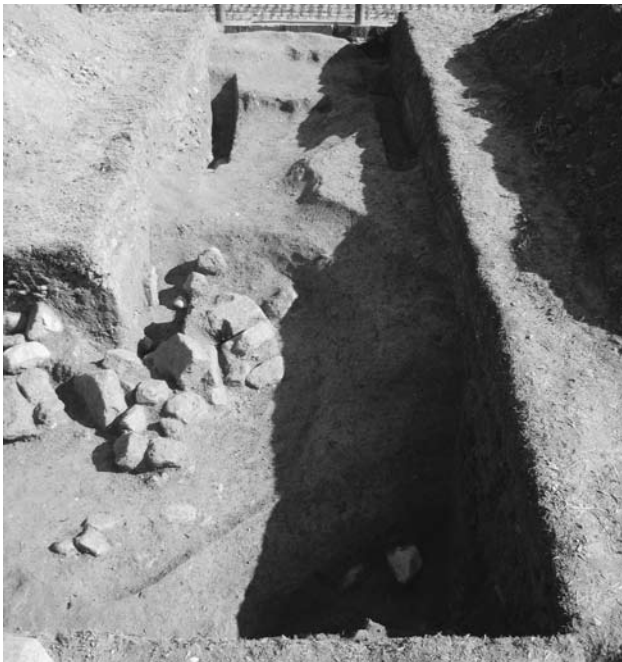
II 基本層序

基壇上の基本層序は、上から暗灰色土（表土）、灰茶色土、濁茶色土、凝灰岩片を多く含む淡黄茶色土と続き、版築による基壇の築成土に至る。遺構面は淡黄茶色土上面と基壇築成土上面で、それぞれの上面の標高は約62.5 m、62.4 mである。

III 検出遺構

淡黄茶色土上面で礎石および土坑（SK07～11）、溝SD12、基壇築成土上面で土坑（SK01～06）を検出した。以下、検出面ごとに述べる。

基壇築成土上面の検出遺構 南側柱列中の間の柱位置にあたる花崗岩製の礎石を検出した。南北約2.0 m、東



第1発掘区南半(上)西から・同東半(下)北から

第2発掘区北半(上)東から・同東半(下)北から

西約1.2mが残存しており、概ね南西半が割りとられている状態である。柱座と東側の地覆座が認められる。厚さ約1.0mで根石の上に座っており、版築層に埋まる状態で据えられている。残存礎石上面天端の標高が62.69m、柱座の基底が62.56mである。

土坑を6基検出した(SK 01～06)。これらは心礎、北東・南西の四天柱、東西南北それぞれの側柱の礎石を抜きとった痕跡とみられる。平面規模は概ね直径3.0m、深さ0.6～0.8mの碗状を呈する。底部には人頭大またはそれ以上の川原石を用いた根石が、版築層に埋まる状態で据えられている。土坑SK 01～06内は凝灰岩片

を含む淡黄茶色土で埋められており、基壇全体をある程度の高さまで淡黄茶色土で覆っている。根石の上端の標高は61.7m前後である。埋土から8世紀の須恵器、13世紀の土師器、17世紀前半頃の土師器が出土した。

淡黄茶色土上面の検出遺構 四天柱以外の礎石抜き取り位置には、土坑(SK 07～11)がある。幅2.5～3.2m、深さ約0.5mで碗状を呈する。これらは多量の丸・平瓦で埋められており、17世紀の染付碗片も混じっている。溝SD 12は幅0.4m、深さ0.3mである。長さ2.5m分を確認した。重複関係から淡黄茶色土より新しい。

IV 出土遺物

遺物整理箱で23箱分あり、そのほとんどが丸・平瓦である。8～9世紀の須恵器、緑釉陶器、丸・平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、13～14世紀の土師器、丸・平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、17世紀の土師器、染付がある。以下、主なものについて述べる。軒瓦の大半はSK 07～11で出土した。

8世紀～9世紀の軒丸瓦は6138型式C a種1点、6138型式C b種2点、51型式A d種3点、軒平瓦は6575型式B種1点、6664型式A種2点、6667型式A種1点、6712型式A種3点、6712型式B種4点、6716型式F種1点、型式不明2点、13～14世紀の軒丸瓦は173型式A種4点、174型式A種10点、新形式1点(1)、型式不明25点、軒平瓦は274型式A種2点、274型式B種29点、新形式7点(2・3・4)、型式不明9点である。

1は右巻きの三巴紋で、巴同士は頭部は分離する。尾は圈線につかない。内圈線のみある。内圈線の外側に珠紋をめぐらす。巴紋は尖り気味であるSK 07から1点



出土礎石(東から)

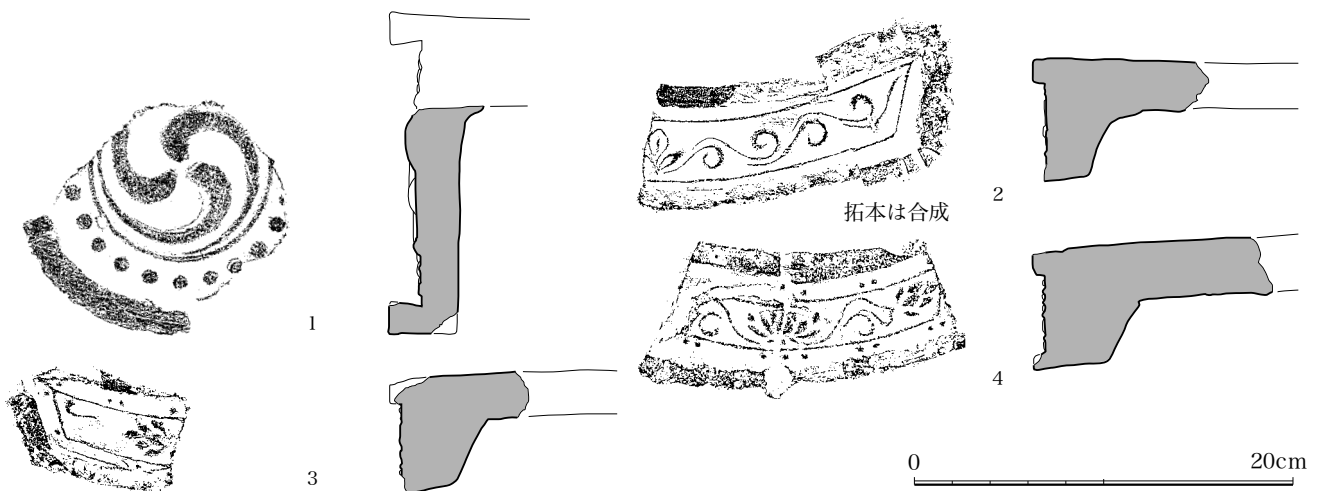
出土。2は3弁の花紋状の中心飾をもつ均整唐草紋軒平瓦。5回反転である。顎面と顎部瓦当裏面はヨコケズリ、凸面平瓦部はタテケズリを施すSK 03から1点、SK 09から2点、SK 10から2点、計5点出土。4は横視した蓮華紋の中心飾をもつ均整唐草紋軒平瓦。唐草と蕾状を交互に配置する。顎貼り付け技法。顎面はヨコケズリ、顎部瓦当裏面はヨコナデ、凸面平瓦部はタテナデ、凹面平瓦部は荒くヨコケズリを施すが布目が残る。SK 10から1点出土。3は紋様構成から4の向かって左部分の可能性が高いと考える。SK 08から1点出土。

V 調査所見

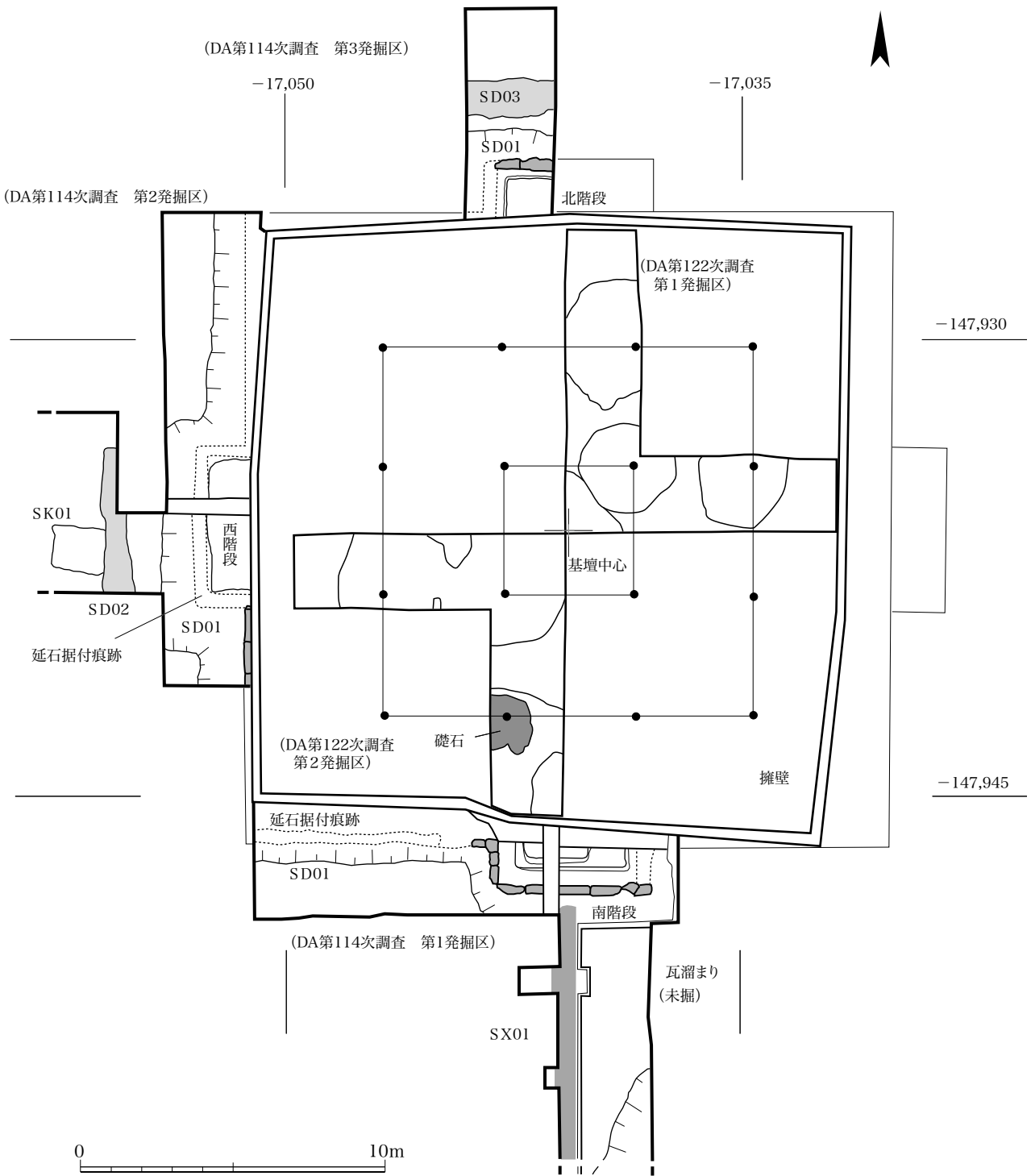
礎石は現地表面から約8cmの深さで柱座の一部が現われた。位置・方向・据付状態からみて、原位置を保っていると判断される。したがって現地表面は築成当初より若干高いことがわかる。「奈良縣に於ける指定史蹟第二冊¹⁾」の記事には「東塔の土壇は・・南端に近く一個の礎石片が埋没している外・・」と見え、また、黒田氏の著書²⁾にも「東塔の南辺に一個の礎石片を埋没している外は一切の礎石を失っている」との記述がある。今回の調査で検出した礎石はこれらの記事に記載されているものと同じであろう。

礎石の抜き取り時期については、17世紀前半頃の土器が出土しているので、この時期の可能性が高いと考える。礎石を抜き取った後には凝灰岩を多量に含む淡黄茶色土で埋められるとともに、基壇全体をある程度の高さ(現状では約0.1m)まで覆っている。ここに含まれる凝灰岩は整形加工が認められるものも多く、基壇化粧に用いられたものが壊され、廃棄された可能性が考えられる。

四天柱以外の礎石抜き取り位置にはSK 07～11が



DA第122次調査出土軒瓦実測図・拓本(1/4)



大安寺東塔基壇周辺遺構概略図 (1/200)

ある。

これらの土坑は13世紀の修復に用いられたと考えられる軒瓦、丸・平瓦で埋められているが、17世紀の染付も混じる。出土遺物からみて礎石抜き取り穴との時期差も認められないことから、抜き取り穴が埋められず窪んでいたところに瓦を廃棄した可能性もある。

礎石やその抜き取り痕跡の配置から、東塔の初重の平

面規模は一辺約12m(40尺)の方三間となる可能性が高く、基壇の高さについては、礎石を確認しており、その礎石の柱座基底部から、約1.8m(6尺)とみることができ、西塔の復原寸法とほぼ一致することが確認できた。

(山前智敬)

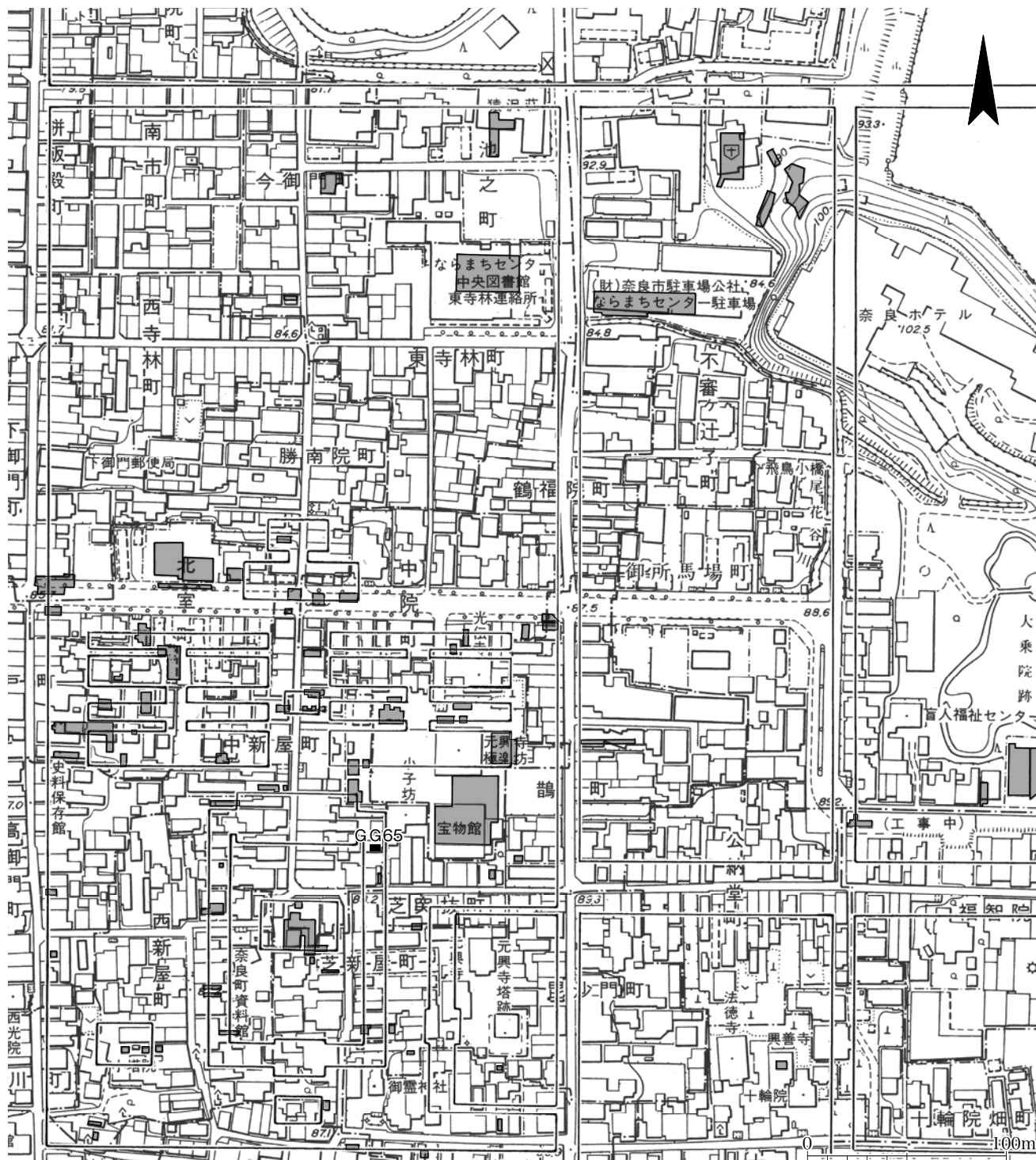
- 1) 内務省『史蹟調査報告書第四 奈良縣に於ける指定史蹟第2冊』昭和3年 内務省
- 2) 黒田昇義『大和の古塔』昭和18年 天理時報社

10. 元興寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、平成 21 年度に元興寺旧境内において 1 件の調査を実施した。第 65 次調査は賃貸住宅新築にかかわる調査であり、東面回廊推定地において実施した。

平成 21 年度元興寺旧境内 発掘調査一覧表

調査回数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
G G 6 5	賃貸住宅新築	中新屋町 40-2 他	H21.7.13～7.24	10	中島



元興寺旧境内の調査 発掘調査位置図 (1/3,000)

東面回廊推定地・奈良町遺跡の調査 第65次

I はじめに

調査地は、元興寺旧境内の東面回廊推定地で、東面回廊が講堂に接続するため西に折れる部分にあたる。調査地の南隣接地では、市GG第43次調査が行われており、16世紀後半頃の盛土が確認されたが、東面回廊は検出できなかった。今回の調査は、東面回廊とともに中世以降の土地利用の確認を目的とした。

II 基本層序

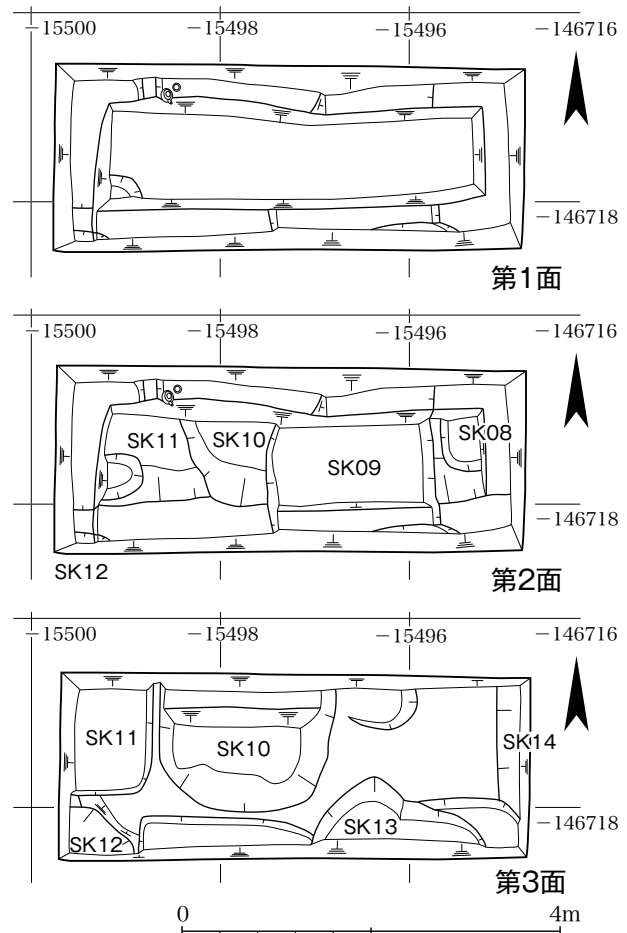
発掘区内の層序は、上から表土層（1. 黒褐色土）、整地層I（6. 灰褐色土、7. 淡灰褐色土）、整地層II（9. 明黄褐色土）、整地層III（11. 暗オリーブ灰色土）、整地層IV（17. 淡灰褐色土）、整地層V（18～21の茶褐色粘質土と黄橙色粘土の互層）、整地層VI（22・23の茶褐色系の粘質土、24. 灰色粘質土）で、現地表下1.8mで黄褐色砂礫の地山に至る。地山上面はおおむね平坦で、標高は86.6mである。

整地層I上面が19世紀前半、整地層II上面が19世紀頃、整地層III上面が時期不明、整地層IV上面が17世紀前半、整地層V上面が16世紀後半以降の遺構面である。整地層V上面は硬く締まり、16世紀頃の土器が出土する。整地層VIの23層からは15世紀後半以降の土器が少量出土しており、堆積土の多くは中世後半以降のものである。遺構検出は整地層III上面（第3面）と整地層V上面（第2面）・地山上面（第1面）で行った。

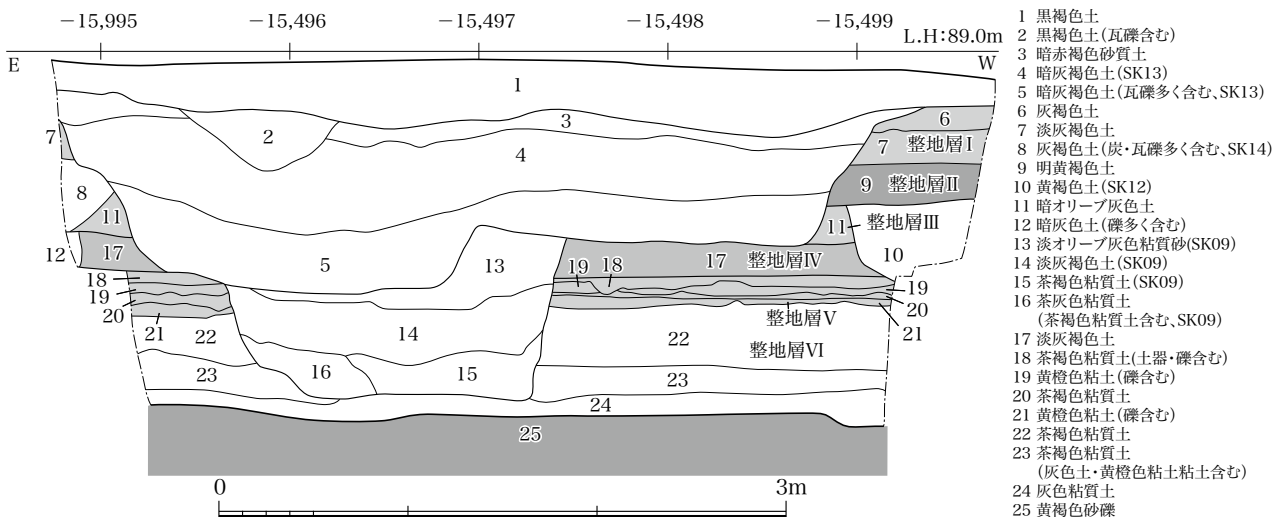
III 検出遺構

遺構には、土坑が7基あり、第3面では5基（SK10～14）、第2面では2基（SK08・09）を検出し、第1面では遺構はなかった。なお遺構番号は市GG第

43次調査報告からの続き番号とした。検出遺構の詳細は一覧表に記す。多くの遺構は発掘区外に続き、全容が判明するものはない。検出したのは江戸時代以降の遺構のみで、中世の遺構は確認していない。



GG第65次調査 発掘区遺構平面図 (1/80)

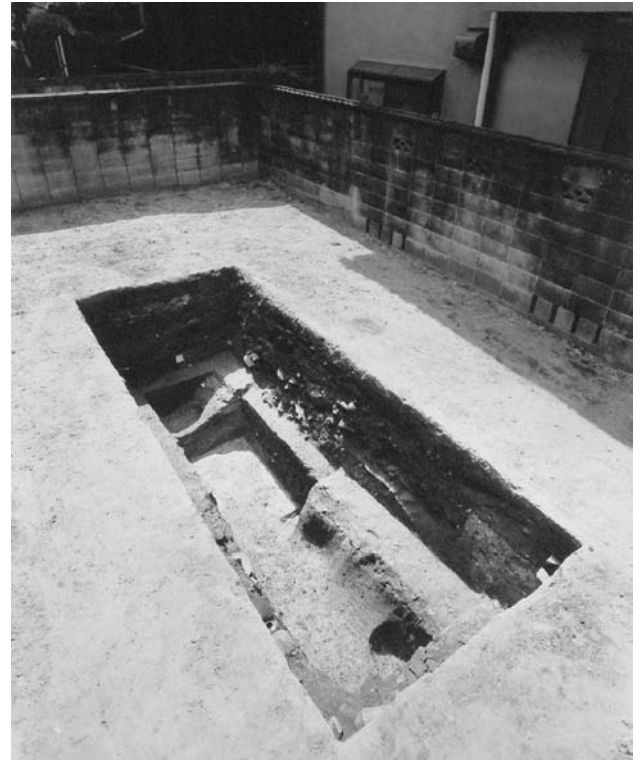


GG第65次調査 発掘区南壁土層図 (1/40)

- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土(瓦礫含む)
- 3 暗赤褐色砂質土
- 4 暗灰褐色土(SK13)
- 5 暗灰褐色土(瓦礫多く含む、SK13)
- 6 灰褐色土
- 7 淡灰褐色土
- 8 灰褐色土(炭・瓦礫多く含む、SK14)
- 9 整地層I
- 10 整地層II
- 11 整地層III
- 12 整地層III
- 13 整地層IV
- 14 整地層IV
- 15 整地層IV
- 16 整地層IV
- 17 整地層IV
- 18 整地層V
- 19 整地層V
- 20 整地層V
- 21 整地層V
- 22 整地層VI
- 23 整地層VI
- 24 整地層VI
- 25 整地層VI



発掘区全景 (第1面 北西から)



発掘区全景 (第2面 北西から)

G G 第65次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主要出土遺物	備考
S K 08	不明	東西 0.8 以上 × 南北 1.2 以上	0.6	17 世紀中頃	土師器皿・羽釜、瓦質土器深鉢、国産陶器 (肥前産椀)、平瓦、鉄滓	17 層上面から掘削、第 2 面で検出
S K 09	長方形 または 長楕円形	東西 1.8 × 南北 1.5 以上	0.9	17 世紀末～ 18 世紀初め	土師器皿・羽釜、瓦質土器深鉢、国産陶器 (肥前産椀・盤、信楽産播鉢、備前産甕・鉢、国産磁器 (肥前産碗・皿)、輸入陶磁器 (青花碗、白磁皿、青磁碗)、軒丸瓦 (右巻巴紋 1)、軒平瓦 (唐草紋 3)、丸瓦、平瓦、棧瓦、道具瓦 (板塀瓦)、鉄釘 3、鞆羽口、鉄滓、舟形五輪塔 1	17 層上面から掘削、第 2 面で検出
S K 10	隅丸長方形 か	東西 1.8 × 南北 1.3 以上	1.2	18 世紀末	土師器皿・鉢・焙烙、瓦質土器播鉢・深鉢・方形鉢・舌出し・蓋・焜炉、国産陶器 (肥前産椀・皿、信楽産播鉢・甕・碗・皿・鍋他、堺産播鉢、丹波産播鉢・鉢、備前産壺・甕・鉢、常滑産甕、産地不明壺他)、国産磁器 (肥前産碗・皿・鉢他)、輸入陶磁器 (青花碗・皿) 土人形、軒丸瓦 (左巻巴紋 6、不明 1)、軒平瓦 (唐草紋 1)、軒棧瓦 1、丸瓦、平瓦、棧瓦、鉄釘 2、銅線 2、鉄滓、砥石 (流紋岩)、動物遺存体 (獣骨、魚鱗、貝殻)	6 または 7 層上面から掘削、第 1 面で検出
S K 11	隅丸方形 か	東西 0.9 以上 × 南北 1.2 以上	1.3	18 世紀末	土師器皿・焙烙、瓦質土器鉢類、国産陶器 (肥前産椀、信楽産播鉢・甕・壺・灯明皿・鍋)、国産磁器 (肥前産碗・皿)、輸入陶磁器 (青花大皿、白磁皿)、軒丸瓦 (左巻巴紋 1、右巻巴紋 1)、軒平瓦 (唐草紋 1)、丸瓦、平瓦、棧瓦、鉄釘 1、鉄滓、動物遺存体 (貝殻)	7 層上面から掘削、第 1 面で検出
S K 12	不明	東西 0.6 以上 × 南北 0.5 以上	0.4	19 世紀代		11 層上面から掘削、第 1 面で検出
S K 13	不明	東西 4.3 × 南北 0.7 以上	0.8	19 世紀 後半か?	土師器皿・焙烙、瓦質土器鉢類・土管、軒丸瓦 (左巻巴紋 1)、軒平瓦 (唐草紋 1)、軒棧瓦 (唐草紋 2)、丸瓦、平瓦、棧瓦、鉄釘、鉄滓、動物遺存体 (獣骨、魚鱗)	6 層上面から掘削、第 1 面で検出
S K 14	不明	東西 0.4 以上 × 南北 2.0 以上	0.6	19 世紀代	国産陶器 (信楽産甕)、動物遺存体 (魚鱗)	9 層上面から掘削、第 1 面で検出

S K 09～11・13 は比較的規模の大きな塵芥処理用の土坑と考えられ、大量の遺物が出土した。S K 09 からは、遺物整理箱 1 箱分の板塀瓦が出土しており特徴的である。

IV 出土遺物

遺物整理箱 6 箱の土器類と 10 箱の瓦類、3 箱の石・金属製品がある。多くは江戸時代のもので、遺構出土のものについては、遺構一覧表に記した。以下土坑 S K



発掘区全景 (第3面 北西から)

10 出土の土器類について報告する。

S K 10からは、遺物整理箱2箱分の約560点の土器が出土し、その内訳は出土土器組成表に記した。肥前磁器等から、18世紀末前後のものと考えられる。


土師器皿は大きくa～c類の3群に分けられる。a類(1～4)はやや平坦な底部から屈曲して口縁部につづく。口縁部は直線的なものや少し外反するものがある。口縁部のヨコナデ調整は内外面とも幅広く施され、内面のヨコナデとナデ調整との境は明瞭で、沈線風になるものがある。胎土は橙色系である。b類(5～10)は丸みのある底部で、底部と口縁部の屈曲がなく扁平な感じを受ける器形である。口縁部のヨコナデ調整は、端部のみのもので、内面に広く及ぶものがある。口径は6～10cm代のものがあるが、6・7cm代のものが多い。胎土は黄橙色系のものが多い。c類(11～14)は平らな底部で、やや丸みをもって口縁部に屈曲する。口縁部のヨコナデ調整は内外面とも幅広く施され、最後に外側に引き出され、上から見ると「の」字状になる。口径は7～11cm代のものがある。胎土は灰白色系のものが多い。

瓦質土器は土師質焼成のものが多い。19は三足の風炉と考えられ、灰白色の胎土である。底部外面には、「深草 菱吉」のスタンプがあり、京都深草産と考えられる。

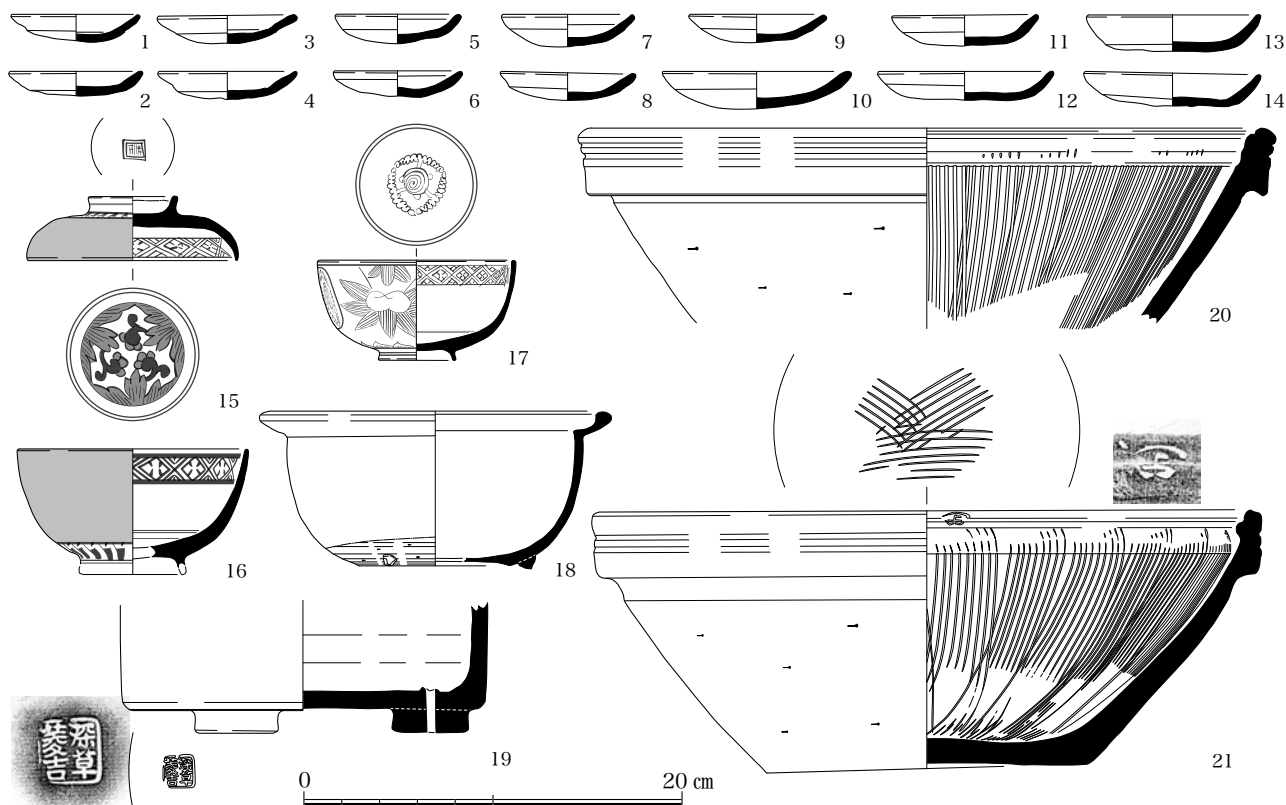
国産陶器には信楽産が多く、主体はいわゆる京・信楽系の陶器とされるものである。18は鉄釉の鍋で、この他灰釉系の碗皿類・鉄釉系の壺類がある。20・21は堺

G G 第 65 次調査 S K 10 出土土器組成表

種類	産地等	器種	点数	比率	
土師器		皿	92	16.58	
		(a類)	16	2.85	
		(b類)	60	10.70	
		(c類)	17	3.03	
		鉢	1	0.18	
		焙烙	13	2.32	
小計			107	19.07	
瓦質土器		搦鉢	2	0.36	
		深鉢	11	1.96	
		方形鉢	15	2.67	
		鉢類	41	7.31	
		舌出し	6	1.07	
		蓋	1	0.18	
		焜炉類	3	0.53	
小計			79	14.08	
国産陶器	肥前	碗	15	2.67	
		皿	1	0.18	
		小計	16	2.85	
	備前	甕	2	0.36	
		壺	1	0.18	
		鉢	1	0.18	
	小計		4	0.71	
	堺	搦鉢	19	3.39	
	丹波	搦鉢	1	0.18	
		鉢	2	0.36	
		小計	3	0.53	
	常滑	甕	1	0.18	
	瀬戸・美濃	皿	1	0.18	
	信楽 (焼締・鉄釉)	搦鉢	9	1.60	
		壺・甕	29	5.17	
		小計	38	6.77	
		碗	10	1.78	
	信楽 (京焼系)	皿	8	1.43	
		灯明皿	2	0.36	
		灯明受	1	0.18	
		鉢	31	5.53	
		蓋物	4	0.71	
		蓋	1	0.18	
		銅	20	3.57	
		鍋蓋	2	0.36	
		急須・土瓶	5	0.89	
		壺	12	2.14	
		鬺甕	1	0.18	
		水滴	1	0.18	
		小計	98	17.47	
		産地不明	壺	13	2.32
			鉢	1	0.18
			小鉢	7	1.25
搦鉢	1		0.18		
植木鉢	1		0.18		
瓶	1		0.18		
鍋	2		0.36		
小計	26	4.63			
小計			206	36.72	
国産磁器	肥前	碗	100	17.83	
		碗蓋	8	1.43	
		筒茶碗	9	1.60	
		小碗	5	0.89	
		皿	21	3.74	
		鉢	16	2.85	
		瓶	4	0.71	
		蓋	1	0.18	
		杯	1	0.18	
		仏飯器	1	0.18	
		小計	166	29.59	
		産地不明	蓋	1	0.18
	小計			167	29.77
輸入陶磁	青花	碗	1	0.18	
		皿	1	0.18	
小計			2	0.36	
合計			561	100.00	

産の搦鉢で、搦鉢の主体を占める。21は片口部分があり、その内面には「」の刻印がある。

肥前産の磁器には青磁染付の蓋付き碗(15・16)、濃のない「素描」の碗(17)の他、タコ唐草文の筒形碗、菊散らし文の丸碗などがある。



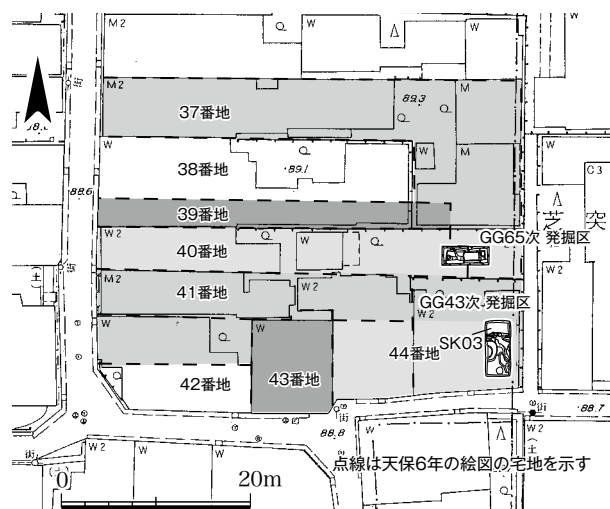
GG第65次調査 SK 10出土土器 (1/4)

V 調査所見

調査の結果、元興寺東面回廊は確認できなかったが、中世以降の土地利用の状況が一部明らかになった。南側の市GG第43次調査の成果と合わせると、調査地周辺は15世紀後半～16世紀末に大きく盛土されることがわかる。この時期の遺構面の18層上面は硬く締まり、同様な層は南側の調査区でもほぼ同じ標高で確認できる。以後江戸時代には随時盛土され、遺構面が形成される。

今回の発掘区で検出された遺構は江戸時代の塵芥処理用の土坑が多く、宅地の奥側の特徴を示している。一方、市GG第43次調査区の北側では、幅1m以上の東西方向の溝状の土坑SK 03が検出され、その南岸は石積みで護岸される。この土坑は現在の地番の41番地と44番地の境界線上にあり、さらに土坑を西に延長すると、41番地と43番地の境界を経て、41番地内にある南北2軒の境界に達する。おそらく土坑SK 03は41番地の南側を画する遺構と考えられ、西側の中新屋町の通りに間口をもつ東西方向に細長いかつての41番地が復原できる。土坑は出土土器から16世紀後半～17世紀前半に築かれ、17世紀前半～19世紀前半頃までには埋没することが判明している。

中新屋町には、江戸時代の家別の間口奥行きを記した史料(明和九年(1772年))と町絵図(天保六年(1835年))が残る。44番地の東側の宅地は、前者では奥行き



発掘区と周辺の宅地図 (1/800)

3間4尺、後者では5間4尺で、この間に北側に拡大している。また40番地の奥行きは前者では22間3尺、後者では18間4尺で、奥側が38番地の住人の土地となっている。このことから、調査地は18世紀後半には40番地住人宅内、19世紀前半には38番地と40番地住人の宅地境となる。18世紀末の土坑SK 10・11は、この所有者の変化にともなう廃棄物処理にともなうものとも考えられよう。また市GG第43次調査検出の土坑SK 03の埋没年代もこの間とすれば矛盾はない。(中島和彦)

1) 安彦勘吾「中新屋町有文書」『奈良市古文書調査目録(八)』奈良市教育委員会 1992

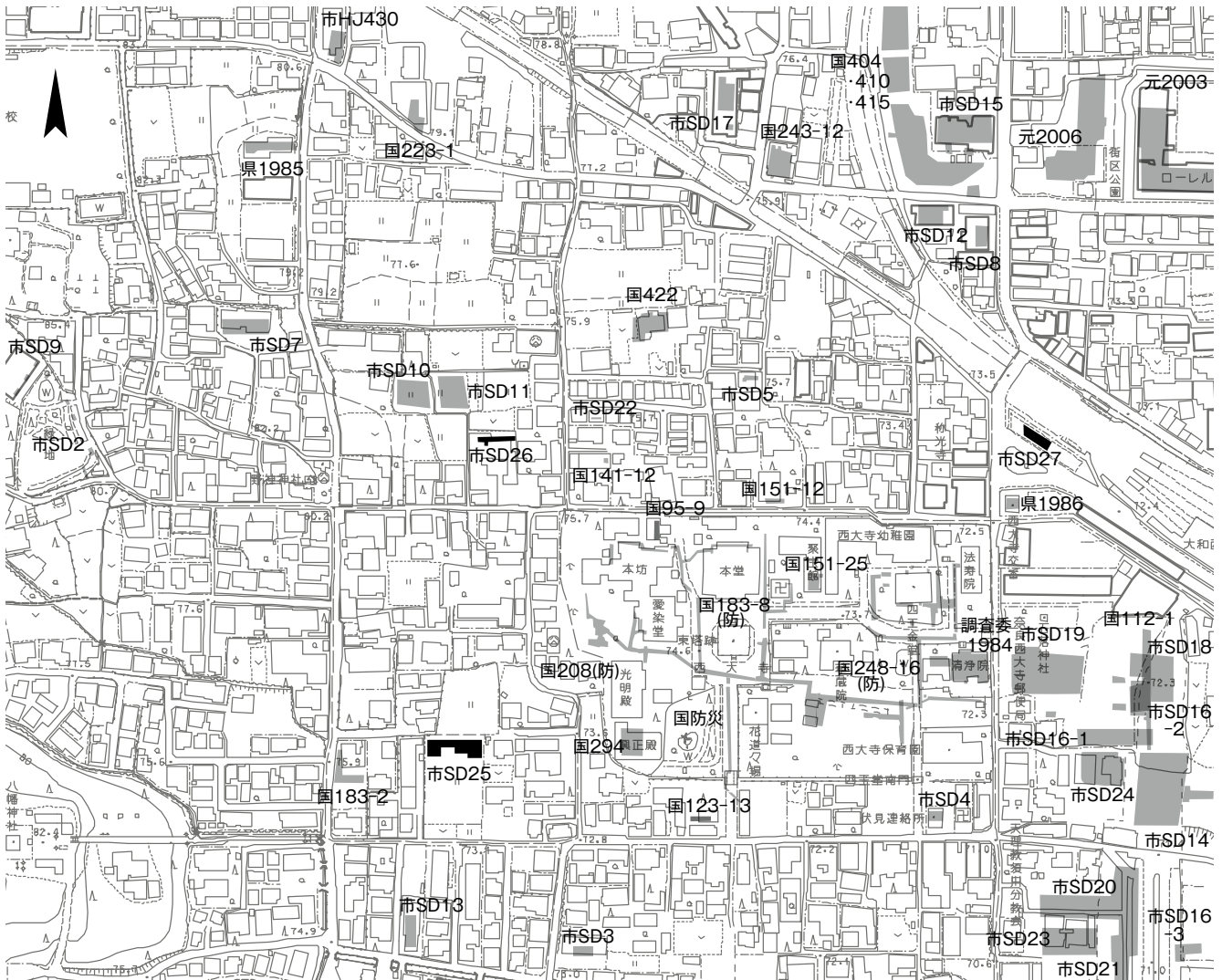
11. 西大寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、平成 21 年度に西大寺旧境内において計 3 件の調査を実施した。第 25・26 次調査は個人住宅新築・道路工事にかかわる調査、また 27 次

調査は駐輪場建設に伴い実施した。詳細は下表の通りである。このうち 25 次調査については、平成 24 年度に別途報告書の刊行を予定しているので、本書では割愛する。

平成 21 年度西大寺旧境内 発掘調査一覧表

調査次数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者	摘要
SD 2 5	個人住宅新築	西大寺新田町 2564- 1 他	H21.4.8 ~ 7.14	321	久保邦・中居	H24 年度に別途報告書を刊行予定
SD 2 6	個人住宅新築・道路工事	西大寺新田町 536 番 他	H21.8.24 ~ 8.31	44	中島	本書で報告
SD 2 7	駐輪場建設	西大寺国見町一丁目 224 番地 1 の一部 他	H21.11.9 ~ 11.10	78	中島	本書で報告



西大寺旧境内の調査 発掘調査位置図 (1/4,000)

(1) 正倉院跡推定地の調査 第26次

I はじめに

調査地は、西大寺旧境内の正倉院跡推定地にあたる。調査地の北側の水田では、市SD第10・11次調査が行われており、15～16世紀の井戸、古代または中世の掘立柱等建物が検出されている。今回の調査は、正倉院関連の遺構と中世の遺構の有無の確認を目的とした。

II 基本層序

発掘区内の地山面は南西から北東に向かい下降しており、北東隅ほど堆積土が厚い。西側では、厚さ約0.45mの耕作土直下で明黄褐色砂礫の地山が現れ、東側では15世紀以降の遺物包含層が厚さ約0.6mあり、地表下約0.9mで地山となる。地山面の標高は西端が76.5m、東端が75.7mである。遺構検出は地山上面で行った。

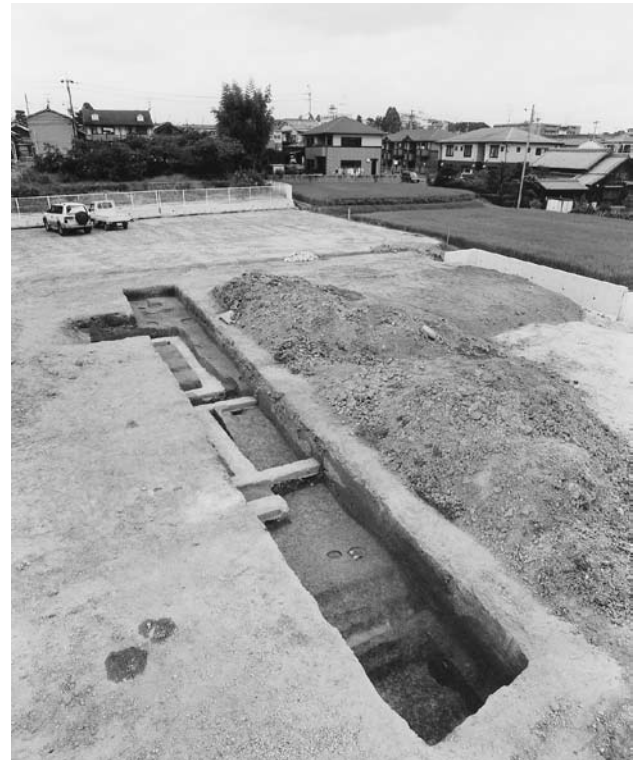
III 検出遺構

遺構には柱穴4基、土坑3基、溝4条、井戸2基がある。各遺構の規模等は末尾の遺構一覧表に記す。

掘立柱建物は、発掘区が狭く復原できなかったが、柱穴1・2は形状・規模等から古代のものと考えられる。

土坑SK03は、平面円形の小土坑で、底から瓦器腕1点と瓦質土器の播鉢の口縁部の破片が1点出土した。瓦器腕は伏せて出土したが、内容物はなかった。

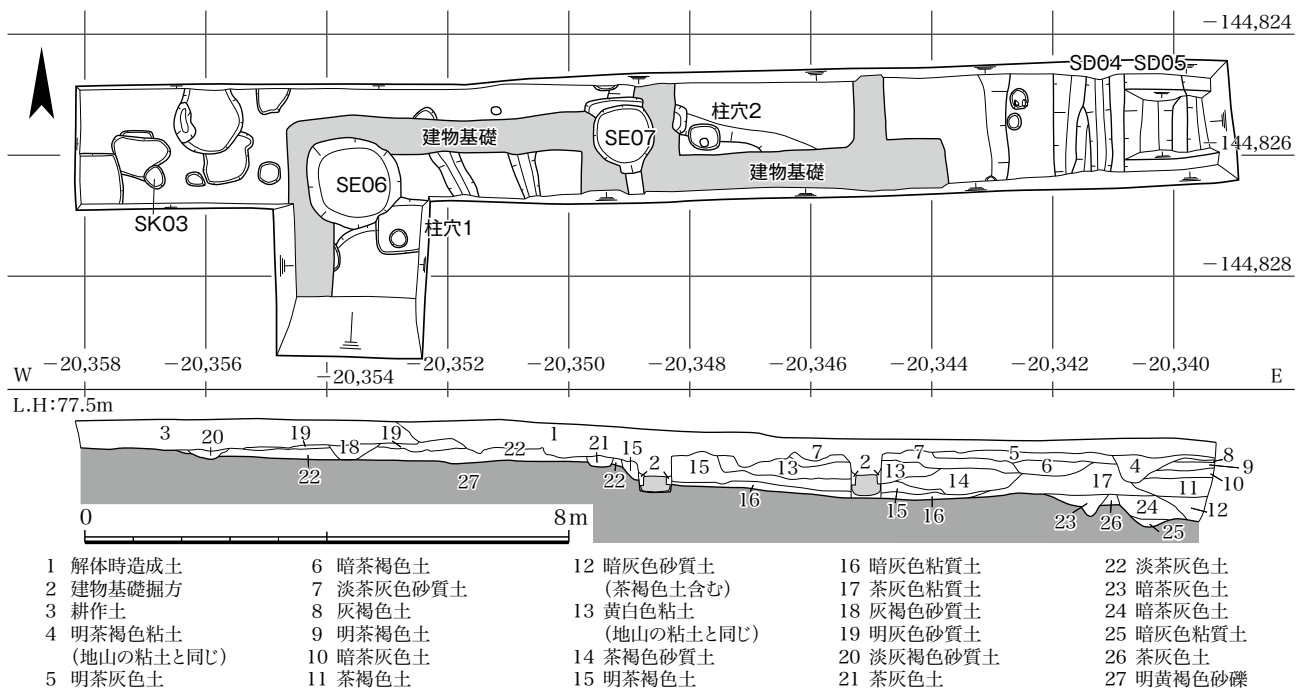
発掘区東端の南北溝SD05からは、14世紀後半頃の土器が多量に出土した。西側のSD04からも、ほぼ同時期の土器が少量出土した。SD05の東側には、遺



発掘区全景（南東から）

構または地下げに伴うと考えられる東側への落ち込みがあり、SD05の東肩が失われている。

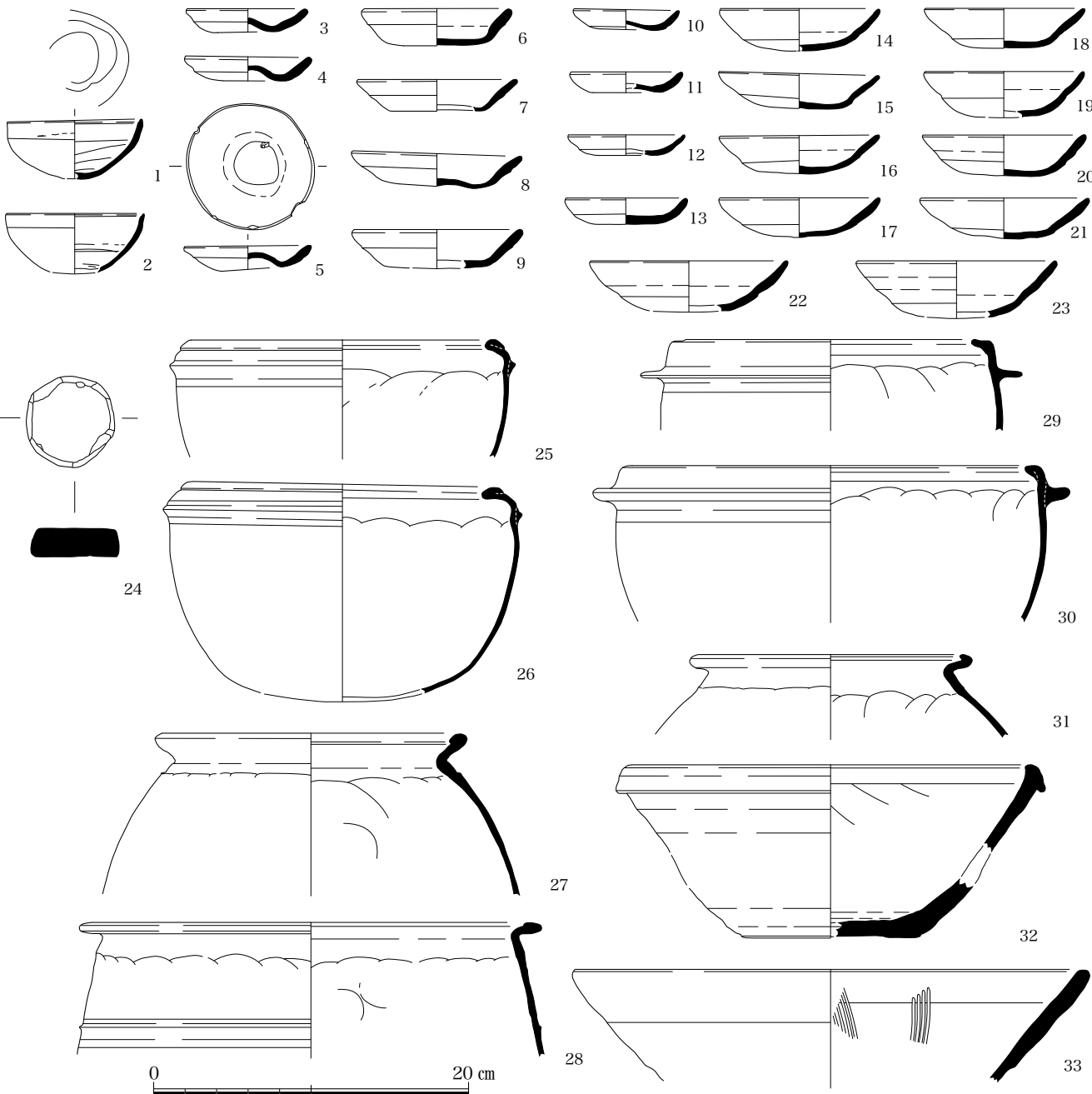
井戸SE06とSE07は、いずれも井戸枠が残存せず、深さ2.5mほど掘削したが底には至らなかった。15世紀後半頃の土器と共に瓦が少量出土した。



SD第26次調査 発掘区遺構平面図・土層図 (1/125)

S D第26次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主要出土遺物	備考
S K 03	不整形円形	径約 0.35m	0.3	14 世紀後半	瓦器碗・瓦質土器搗鉢、不明石製品	
S D 04	南北方向	幅 0.6× 長さ 5.0 以上	0.3	14 世紀後半	土師器皿・羽釜、軒平瓦 1 (6764A)、丸瓦、平瓦、サヌカイト剥片 1	
S D 05	南北方向	幅 1.0× 長さ 5.0 以上	0.5	14 世紀後半	土師器皿・羽釜・甕、瓦器碗、瓦質土器搗鉢・鉢類、須恵器鉢 (東播産)、東海産陶器甕、円盤形土製品、刻印瓦 1 (平瓦凹面に「西」の陽刻)、丸瓦、平瓦、凝灰岩、鉄滓	
S E 06	不整形円形	径約 1.8m	2.8 以上	15 世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦器碗、瓦質土器搗鉢・浅鉢・深鉢・風炉・蓋・鉢類、須恵器 (東播産) 甕、国産陶器 (常滑産甕・瀬戸美濃産皿、産地不明碗)、輸入陶磁器 (青磁碗・白磁皿)、軒丸瓦 3 (6139A・西大寺 190 型式、型式不明)、丸瓦、平瓦、用途不明道具瓦 1、埴 1、特殊埴 1、砥石 1 (片岩)、鉄滓、漆碗 1、箸 4、桃種 1	井戸枠は残存しない
S E 07	不整形円形	径約 1.0m	2.6 以上	15 世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦質土器搗鉢・深鉢・鉢類、国産陶器 (信楽産甕)、軒丸瓦 1 (左巻巴紋)、軒平瓦 4 (6732K・6732M・西大寺 317 型式、型式不明 2)、刻印瓦 1 (平瓦凹面に「西」の陽刻)、丸瓦、平瓦、雁振瓦、埴 2、土管、凝灰岩、砥石 2 (ホルンフェルス)、鉄滓、用途不明鉄製品	井戸枠は残存しない



S D第26次調査 出土土器 (S K 03 ; 1、33、S D 05 ; 2~32 1/4)

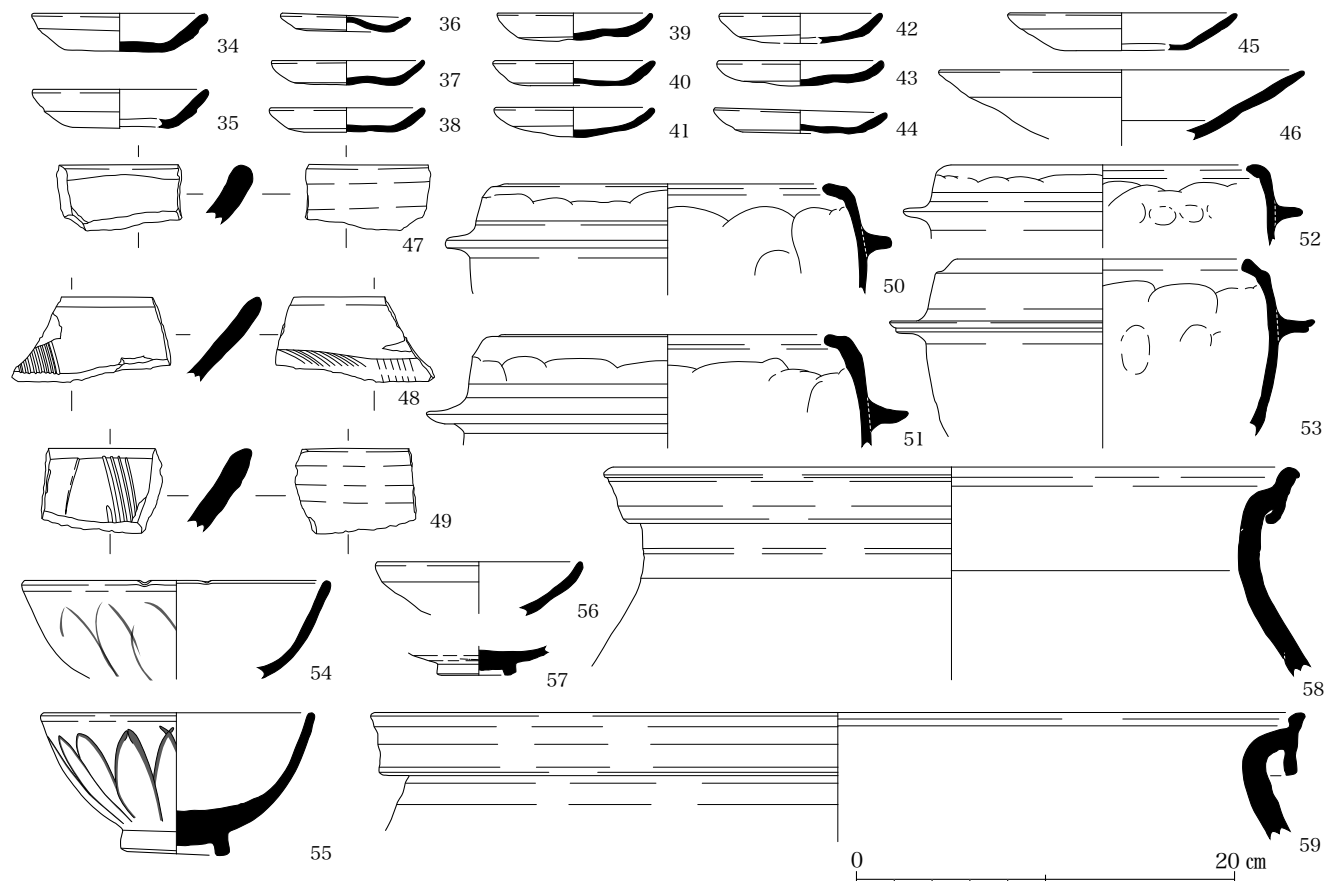
IV 出土遺物

土器類が遺物整理箱3箱、瓦類が3箱、石製品・石器が合わせて1箱ある。遺構出土のものについては、遺構一覧表に記す。以下14世紀前半のSK03、SD05と、15世紀前半のSE06、SE07出土土器について記す。

SK03からは、瓦器椀(1)と瓦質土器播鉢(33)が供伴して出土する。SD05からも、同型式の瓦器椀(2)が出土する。土師器皿は、胎土の色調から、赤褐色系(3~9)と、白色系のもの(10~23)に二分され、後者が多い。土師器羽釜(25~31)は、口縁を内側に折り曲げる大和H型が多い。須恵器鉢(32)は東播系のもの。円盤形土製品は(32)平瓦を再利用したもの。

SE06出土の土師器皿は、胎土・器形から深手で前代の赤褐色系の系譜を引くもの(34・35)と、浅手のもの(35~46)とに分かれる。土師器羽釜(51~53)は、大和H型が多い。瓦質土器播鉢(47~49)は、口縁端部が丸いものと面をとるものとがある。瓦器椀(56)は内外面のヘラミガキ調整がない。青磁碗は(54~55)龍泉窯系のもの、白磁皿(57)は陶器質の胎土で、高台部分は露胎。常滑産陶器甕(59)とSE07出土の信楽産甕(58)は、いずれも形態から古い時期のもの。

V 調査所見



SD第26次調査 出土土器 (SE06; 34~49、51~57、59、SE07; 50、58 1/4)

調査の結果、柱穴を検出し古代の遺構の存在が確認できたが、調査面積が狭く建物を復原するには至らなかった。また室町時代の井戸・土坑・溝を検出しており、北側の調査地部分を含め一帯が、14世紀以降に居住地として再開発されていることを確認した。(中島和彦)

SD第26次調査 出土土器組成表

種類	産地等	器種	SD05		SE06	
			点数	比率	点数	比率
土師器		皿	175	50.43	119	50.42
		(赤色系)	69	19.88	7	2.97
		(白色系)	106	30.55	0	0.00
		(灰色系)	0	0.00	112	47.46
		羽釜・甕	154	44.38	34	14.41
	小計	329	94.81	153	64.83	
瓦器		椀	7	2.02	1	0.42
		播鉢	3	0.86	16	6.78
瓦質土器		浅鉢	0	0.00	3	1.27
		深鉢	0	0.00	2	0.85
		鉢類	4	1.15	32	13.56
		風炉	0	0.00	6	2.54
		蓋	0	0.00	3	1.27
		小計	7	2.02	62	26.27
須恵器		鉢	3	0.86	0	0.00
		甕	0	0.00	2	0.85
	小計	3	0.86	2	0.85	
国産陶器		東海	1	0.29	0	0.00
		常滑	0	0.00	7	2.97
		瀬戸	0	0.00	1	0.42
		信楽	0	0.00	0	0.00
		産地不明	0	0.00	1	0.42
		小計	1	0.29	9	3.81
輸入陶磁		青磁	0	0.00	7	2.97
		白磁	0	0.00	2	0.85
		小計	0	0.00	4	1.84
	合計	347	100.00	236	100.00	

(2) 西大寺寺地の調査 第27次

I はじめに

調査地は、西大寺旧境内の右京一条三坊二坪にあたり、西側には西三坊坊間東小路が推定される。調査地の南側約50mの地点では、昭和61年度に榎原考古学研究所による発掘調査が行われ、平安時代頃の河川跡を検出している。また、その調査では地山面までの深さが約4.2mあり、造成土も約2.0mと厚いことが判明した。そのため今回の調査は、事前に遺構面の深さを確認する試掘調査を3箇所で行い、基礎掘削工事によって影響を受ける部分について、発掘調査を実施した。

II 基本層序

発掘区内の層序は、北西部隅で、厚さ約0.6mの造成土直下が青灰白色シルトの地山となる。地山面は北から南に向かって下がり、南側では約0.4mほど低く、部分的に耕作土が残る。発掘区南端から北側約4.0m分は、地下げによって地山がさらに一段落ち込むが、遺構面まで基礎掘削が及ばないことから耕作土上面で調査を止めた。地山面の標高は71.7～72.15mである。

III 検出遺構

遺構は土坑1基のみで、他は近代の攪乱坑である。

土坑は、東西約0.7m、南北約0.9m、深さ約0.15mの平面不整形で、奈良時代の須恵器、鎌倉時代の土師器・瓦器が6点、平瓦片他が4点出土したが小片のため詳細な時期は不明。

IV 出土遺物

奈良・鎌倉時代の土器類と瓦類が遺物整理箱1箱分ある。多くは耕作土・攪乱坑出土である。

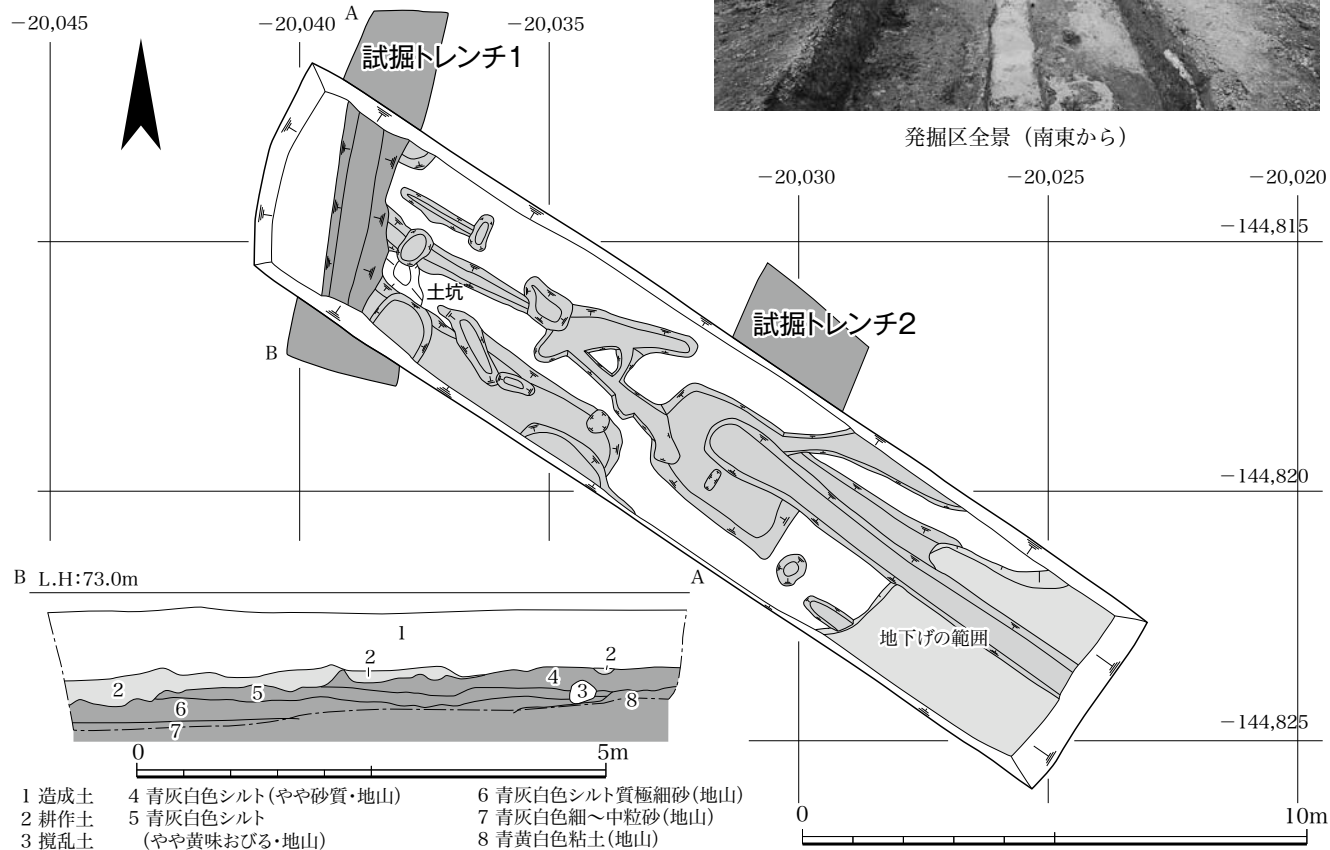
V 調査所見

調査の結果、地山面を確認したが、顕著な遺構は確認できなかった。発掘区内では耕作土が残る部分が僅かで、遺構面は近代に大きく削平をうけたと考えられる。また発掘区内には、攪乱坑が広範囲に広がっており、遺構が失われていることが考えられる。

(中島和彦)



発掘区全景 (南東から)



発掘区遺構平面図 (1/150・淡い網かけ部分は攪乱坑)・試掘トレンチ1西壁土層断面図 (1/80)

12. 菅原寺旧境内の調査 第5次

事業名	庫裡建設	調査期間	平成21年8月17日～8月21日
届出者名	(宗) 喜光寺	調査面積	44㎡
調査地	奈良市菅原町 516-2、516-3	調査担当者	秋山成人

I はじめに

菅原寺旧境内では、国1969年の調査において、金堂と考えられる遺構が、現本堂と重複する位置で確認されている。調査地はこの金堂と考えられる建物跡の北約55mの位置にあたる。調査地から北へ約10mの地点では、市KK第2次調査が行われ、奈良時代から江戸時代までの各時代の遺構を検出しているが、主要伽藍に係のある遺構は検出されていない。本調査は、本堂北側の伽藍に係する遺構の確認を目的として実施した。

II 基本層序

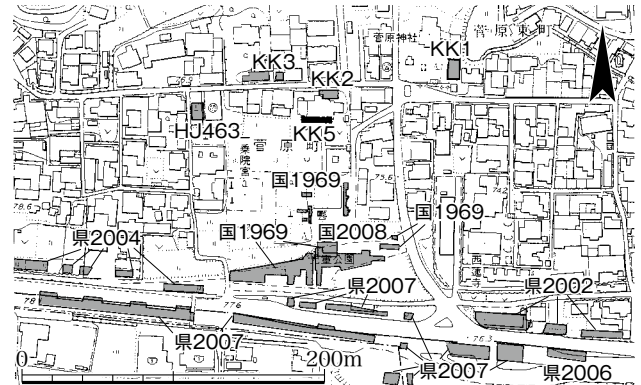
発掘区の基本層序は、上から造成土、灰色土(旧耕作土)、赤灰色土の順で堆積し、現地地表下約0.2mで黄灰色粘土の地山となる。地山は南から北に向かって低くなり、標高は発掘区東側の南辺で76.5m、北辺で75.6mである。遺構検出は、地山上面で行った。

III 検出遺構

検出した遺構は、奈良時代の掘立柱列(SA01・02)2条・井戸(SE03)1基・土坑(SK04・05)2基、室町時代の土坑(SK06)1基、江戸時代の土坑(SK07)1基である。詳細は下記の一覧表にまとめた。

IV 出土遺物

遺物整理箱1箱分の土器と7箱分の瓦類が出土。土器はほとんどが小片で、8世紀の土師器甕・皿、須恵器甕・



KK第5次調査 発掘区位置図(1/5,000)

杯・杯蓋、13世紀の瓦器椀、17世紀の土師器皿などがある。瓦類は8世紀の軒平瓦(6663B)丸瓦・平瓦・塼、13～14世紀の丸瓦・平瓦・軒平瓦(「菅原寺」銘)、15世紀以降の土管、時期不明の軒丸瓦がある。

V まとめ

調査の結果、掘立柱列SA01は出土遺物からみて奈良時代前半の遺構とみられ、市KK第2次調査の建物と同様に、菅原寺創建以前の遺構である可能性がある。

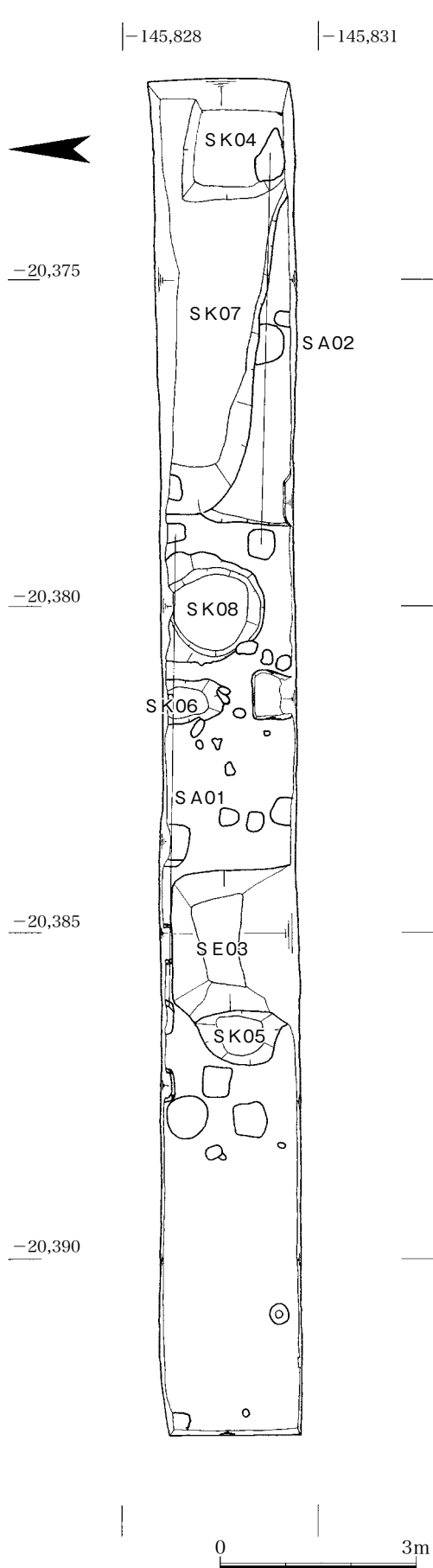
井戸SE03の枳抜き取り痕跡には、奈良時代後半の土器が含まれる。ただし、菅原寺との関連は明らかでなく、伽藍に直接関わる遺構を検出できなかった。発掘区の東側には室町時代以降の土坑が大きく広がり、奈良時代の遺構が削平されていると考えられる。(秋山成人)

KK第5次調査 検出遺構表

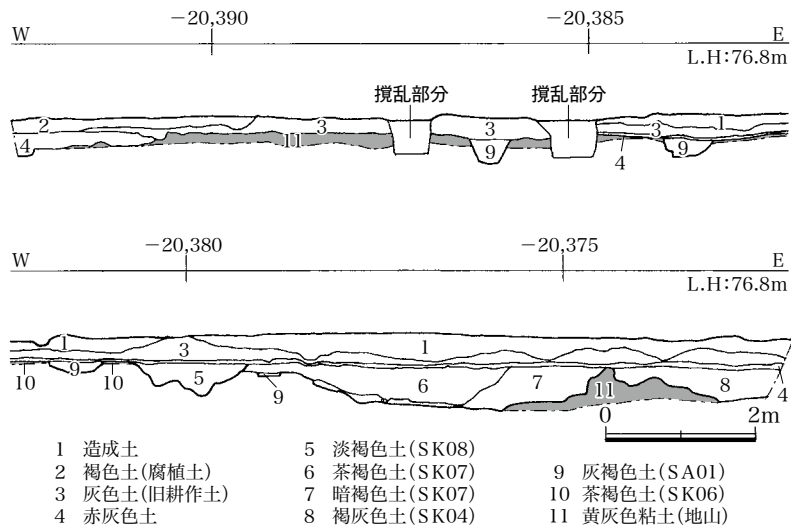
遺構番号	棟方向	規模(間)		全長(m)	柱間寸法(m)		備考
		東西	南北		2.4等間	3等間	
SA01	東西	3以上		7.2以上	2.4等間		柱穴掘形一辺約0.7m、深さ約0.4m、8世紀前半：土師器高杯・皿、須恵器甕小片
SA02	東西	2以上		6以上	3等間		柱穴掘形一辺約0.5m、深さ約0.2m、8世紀：須恵器壺小片

遺構番号	平面形	掘形		井戸枳		主な出土遺物・備考	
		平面規模(m)	深さ(m)	構造	内法(m)		
SE03	隅丸方形	東西2.4×	南北1.8以上	2.4	抜取られ不明		8世紀後半：土師器皿・甕、製塩土器、須恵器杯・杯蓋・壺・甕、墨書土器、転用硯、丸瓦の小片

遺構番号	平面形	平面規模(m)		深さ(m)	埋土	出土遺物	備考
		東西	南北				
SK04	不整形	東西3.0以上、	南北1.8以上	0.8	褐色土	8世紀：須恵器甕小片・丸瓦	重複関係からSA02より新しい
SK05	不整形	東西0.8以上、	南北1.9以上	1.7	暗灰色土	8世紀：土師器甕・須恵器杯小片	重複関係からSE03より古い
SK06	不整形	東西0.7、	南北0.8以上	0.2	茶褐色土	8世紀：土師器高杯	重複関係からSA01より新しい
SK07	不整形	東西4.2以上、	南北1.5以上	0.5	褐色土	8世紀：6663B、13～14世紀：瓦器椀・土師器皿・軒丸瓦・「菅原寺」銘軒平瓦・丸瓦・平瓦、時期不明：軒平瓦(型式不明)	
SK08	不整形	東西1.7、	南北1.9	0.6	淡灰色土	18世紀：土師器皿	



KK第5次調査 遺構平面図 (1/100)



KK第5次調査 北壁土層図 (1/100)



発掘区全景 (北西から)



発掘区全景 (東から)

13. 古市遺跡の調査 第8次

事業名	第10号市営住宅建替事業	調査期間	平成21年4月13日～4月28日
届出者名	奈良市長	調査面積	195㎡
調査地	古市町1611番地他	調査担当者	武田和哉・松浦五輪美

I. はじめに

調査地は、現在の古市遺跡の想定範囲の北東隅付近に該当している。調査地周辺では過去に調査事例が数件あり、調査地北辺を西流する能登川を隔てて調査地の北約100mの南紀寺遺跡内で実施した市MK第4次調査では、古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物・溝・土坑や、飛鳥時代の掘立柱塀や溝などの遺構が検出されている¹⁾。また、調査地の西約200mで実施した市FS遺跡第3次調査では、古墳時代の竪穴住居と奈良時代の掘立柱建物跡などを検出している²⁾。こうした成果を踏まえつつ、今回の調査では、敷地内に5ヶ所の発掘区を設定し、合計195㎡の面積について発掘調査を実施した。

II. 基本層序

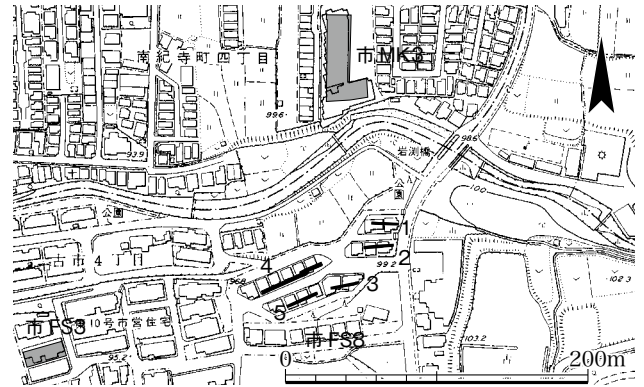
基本層序は、各発掘区ごとに異なっている。

第1発掘区では、造成土(0.4～0.5m)の下に、暗灰色土(0.1～0.2m=旧水田土)または明茶灰色粘質砂土があり、地表下約0.6mで灰褐色もしくは黄褐色粘土の地山に達する。粘土層は発掘区の南側のみで残存しており、残りの部分は砂礫の層となっている。

第2発掘区では、造成土(0.2～0.6m)以下、暗灰色土(約0.1m=旧水田床土)、黄褐色粘土+礫(約0.1～0.2m)、茶灰色砂(0.1～0.2m)、淡茶灰色砂+礫(0.3～0.4m)と続く。その下層は同様の礫を含む砂が主体となった堆積層が地表下約1.5mまで続くことを確認したが、遺構面は確認できなかった。

第3発掘区では、造成土(0.3～0.6m)以下、暗灰色土(0.15～0.2m=旧水田土)、暗茶灰色土(約0.1m=旧水田床土)、茶褐色粘土(0.1～0.2m)、茶灰色土+礫(0.1～0.3m)と続き、地表下約0.8mで比較的安定した茶灰色土(0.2～0.3m)の層に達する。この上面で遺構検出を行った。この層の下には茶灰色土(約0.4m)、茶褐色粘質土(約0.2m)が堆積し、さらにその下には茶灰色砂礫が0.5m以上堆積していることを確認した。

第4発掘区では、東側と西側で様相が異なっている。東半では造成土(0.2～0.3m)以下、暗灰色土(0.1～0.2m=旧水田土)、暗灰褐色土(0.1～0.3m)、暗灰色粘質土(0.05～0.1m)、淡黄灰色砂質土と続き、地表下0.6



FS 第8次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

～0.7mで黄灰色粘土(約0.2m=遺物包含層)に達する。この層は一見して第1発掘区の地山に似ており、同層上面で遺構検出を実施したが、遺構は確認できなかった。その下層は礫を含む砂が主体の堆積層がいくつか堆積しており、概ね地表下約1.5m付近まで続いていた。

一方の第4発掘区の西半部分は南隣の第5発掘区と様相が似ている。その層序は、造成土(0.3～0.4m)以下、黒灰色粘土(約0.1m=旧水田土)、暗灰色土+黄褐色土(約0.1m)、茶灰色土+黄褐色土(約0.1m)と続き、地表下約0.9mで暗灰褐色粘質土の層に達する。その下は灰色砂礫の層など、砂と礫が主体となった堆積層が地表下約1.5m付近まで続いていることを確認した。

第1発掘区南側で検出した地山上面の標高は約96.9mである。また、第5発掘区で検出した砂礫を主体とした層の標高は約96.5mである。

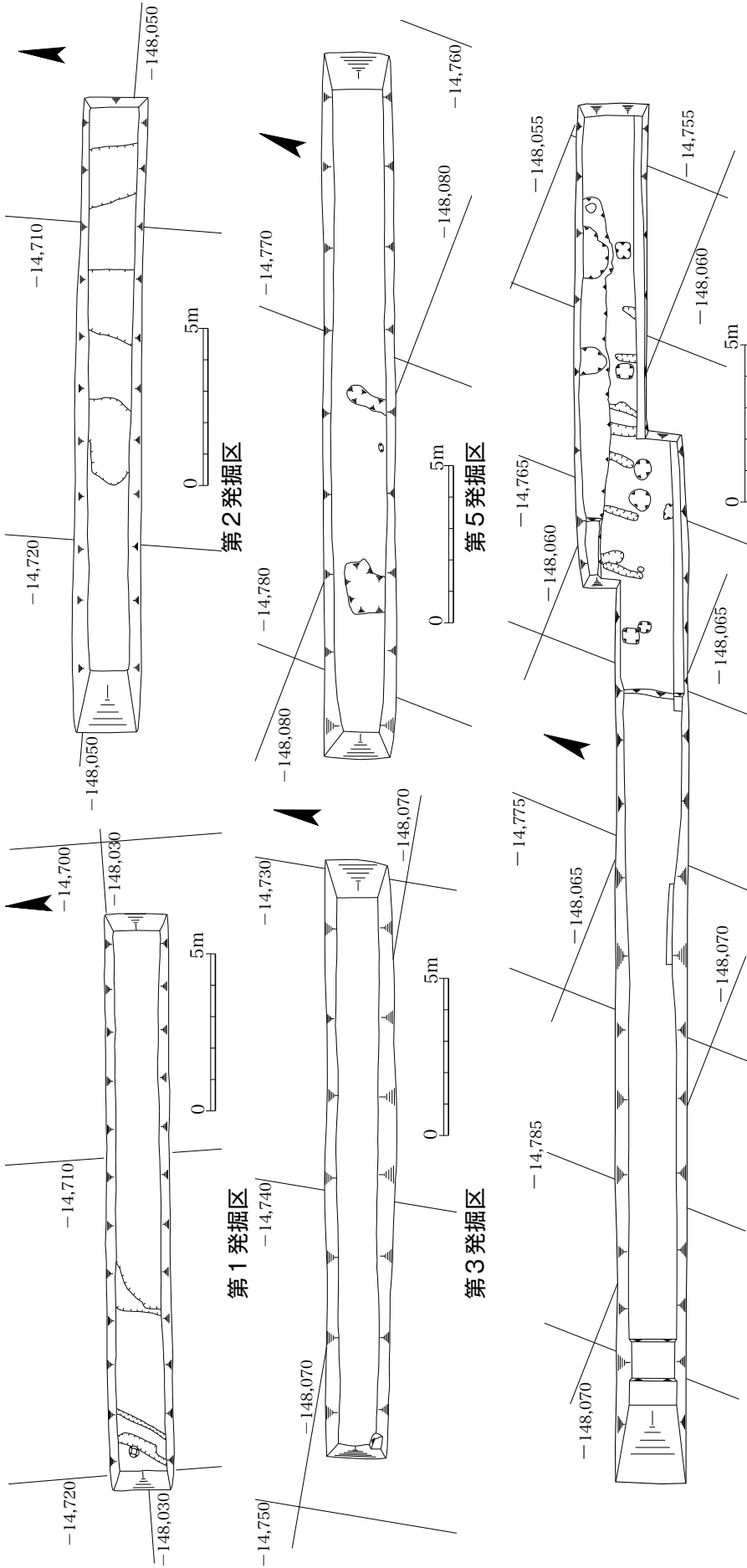
III. 検出遺構

各発掘区とも、旧水田土の下層もしくは地山上面において遺構検出作業を行ったが、遺構は確認できなかった。

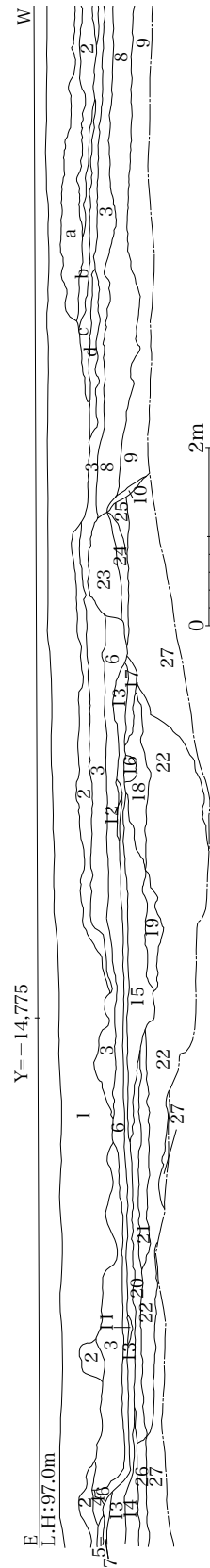
ただし、第4発掘区の中央付近では、地表下約0.8mで遺物を包含する層を確認し、8世紀の土器や時期不明の土馬の破片が出土したが、小片のため詳細な時期は特定できない。なお、この層は土層観察の結果、遺構の埋土ではないことを確認した。

IV. 出土遺物

遺物整理箱2箱分の遺物が出土した。その内訳は、8世紀の土師器、12～13世紀の瓦器片、18世紀以降の陶磁器の破片、時期不明の土師器、土馬の破片、石器(サヌカイト)の破片である。出土遺物の大半は、摩滅が著



F S 第8次調査 第1～5発掘区 遺構平面図 (1/200)



- a 黒灰色土
- b 暗黄灰色粘質土 (旧床土)
- c 暗茶灰色土 (<<らい>>)
- d 暗茶灰色土 (旧水田土)
- 1: 造成土
- 2: 暗灰色土 (旧水田土)
- 3: 暗灰褐色土
- 4: 茶灰色砂礫
- 5: 灰色土
- 6: 暗茶灰色粘質土
- 7: 暗茶灰色土 (遺物包含層)
- 8: 暗茶灰色土
- 9: 灰褐色粘土
- 10: 茶褐色土
- 11: 灰褐色粘質土
- 12: 灰褐色粘土 (遺物包含層)
- 13: 黄灰色粘土 (茶褐色粘土混)
- 14: 茶褐色砂質土 (茶褐色粘土混)
- 15: 淡黄灰色砂質土
- 16: 黄褐色粘土 (素掘埋土)
- 17: 黄褐色土
- 18: 暗茶褐色土 (遺物包含層)
- 19: 暗灰褐色土
- 20: 明茶灰色砂質土または粘土
- 21: 茶褐色粘土
- 22: 茶褐色粘質土 (やや砂質)
- 23: 暗茶褐色粘質土
- 24: 暗茶褐色粘質土 (やや砂質)
- 25: 暗茶褐色砂質土 (やや暗い)
- 26: 茶褐色砂質土
- 27: 暗灰褐色粘砂土

F S 第8次調査 第4発掘区南東壁中央部 土層断面図 (1/80)

しく時期の特定できない土器片が占めている。

V. 調査所見

本調査では、遺構を確認することができなかった。土層観察の結果、土石流の痕跡と思われる径10～20cm程度の礫を含んだ層が各発掘区で確認されている。これらの層の一部には土器の破片を含んでいることがあるが、小片である上に摩滅しており、時期を特定することは困難である。こうしたことから、調査地の東方から流

出してきた土石流等の影響により、遺構は残存していないと判断される。ただし、第4発掘区の中央付近で確認した包含層の存在は、能登川上流あるいは標高の高い調査地の上流域に、奈良時代などの遺構が存在していることをうかがわせるものであると言えよう。（武田和哉）

- 1) 奈良市教育委員会「南紀寺遺跡の調査 第3次」
『奈良市埋蔵文化財調査概要報告平成4年度』1993
- 2) 奈良市教育委員会「古市遺跡の調査 第3次」
『奈良市埋蔵文化財調査概要報告平成8年度』1997



第1発掘区全景（東から）



第2発掘区全景（北東から）



第3発掘区全景（西から）



第4発掘区全景（東から）



第4発掘区全景（西から）



第5発掘区全景（西から）

14. 平成 21 年度実施 小規模調査・試掘等一覧

調査回数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積	届出者・通知者/事業内容	届出受理番号
2009-1	平城京跡(左京二条七坊七坪)、奈良町遺跡	西笹鉾町 43-1,-2,-3、東笹鉾町 75、中御門町 28,41	H21.5.13	16㎡	(宗)天理教梅谷大教会/教会新築	H20.3242
	調査結果・措置: 現地表下 0.8~1.2 m (標高 79.1~79.6 m) で地山上面を確認。地山上面で鎌倉時代以前の掘立柱列と鎌倉時代の溝を検出。設計を変更し、遺構面の保護層を確保して工事着手。					
2009-2	あやめ池(上池)古墳状隆起	あやめ池北一丁目 1291 番地 1 号他	H21.6.24~6.25	9㎡	近畿日本鉄道株式会社/区画整理事業	H16.4006
	調査結果・措置: H20 年度に踏査した結果、古墳の存在が疑われたため、試掘を実施したが、丘陵の尾根上の隆起であり、古墳ではなかった。工事着手。					
2009-3	西大寺旧境内	西大寺国見町一丁目 2196-1	H21.11.4	2.3㎡	近畿日本鉄道株式会社/駅舎増築工事	H19.3172
	調査結果・措置: 現地表下 1.8 m (標高 70.5 m) まで掘削し、旧建物の攪乱が及んでいることを確認。工事着手。					
2009-4	新薬師寺旧境内、奈良町遺跡	高畑町 611-3	H21.11.16~11.18	42㎡	個人/個人住宅新築	H21.3268
	調査結果・措置: 現地表下 0.6~0.8 m (標高 121.5~121.7 m) で地山上面を確認。地山上面で奈良時代の柱穴と平安時代後半以降の柱穴・土坑を検出。基礎掘削工事は遺構面まで及ばないことを確認し、工事着手。					
2009-5	平城京跡(左京三条大路)	油阪地方町~上三条町地内	H21.11.24~H22.1.24	29㎡	奈良市長/三条線(上三条工区)街路改良事業	H19.3066
	調査結果・措置: 5 発掘区を設け、調査。現地表下 1.1~1.3 m (標高 69.9~74.4 m) で地山上面を確認。地山上面で中・近世の土坑・溝を検出。工事着手。					
2009-6	平城京跡(左京三条大路)	大宮一丁目地内	H22.1.25	2.5㎡	奈良市長/大宮三条本町線街路改良事業	H19.3065
	調査結果・措置: 現地表下 0.7 m (標高 65.6 m) で地山上面を確認。地山上面で時期不明の溝を検出。工事着手。					
2009-7	平城京跡(左京三条大路)	三条本町地内	H22.2.2	4.5㎡	奈良市長/J R 奈良駅前周辺整備事業	H21.3095
	調査結果・措置: 現地表下 1.5 m (標高 65.3 m) で地山上面を確認。地山上面で時期不明の耕作溝 2 条を検出。工事着手。					
2009-8	平城京南方遺跡	北之庄西町一丁目 5-4	H22.2.23~2.24	45㎡	有限会社真紀ホーム/工場建設	H21.3453
	調査結果・措置: 現地表下 0.9 m (標高 54.2 m) で平安時代以前の旧河川を確認。旧河川上面で鎌倉時代の耕作溝を検出。工事着手。					

15. 平成 21 年度実施 工事立会一覧

(1) 平成 21 年度文化財保護法第 93 条の 1、第 94 条の 1 の埋蔵文化財届出書および通知に伴う工事立会

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
1	H20.3140	右京北辺三坊六坪・一条北大路	西大寺北町一丁目 378-1	個人	共同住宅新築	宅地	H21.4.2	GL-1.3m まで掘削、地山確認、土坑・溝および土師器の破片確認
2	H20.3434	左京二条六坊九坪	法蓮町 1095-5	個人	個人住宅新築	宅地	H21.4.3	GL-0.4m まで掘削、盛土内
3	H20.3455	右京二条四坊七坪	青野町 229-3	個人	個人住宅新築	宅地	H21.4.6	GL-0.4m まで掘削、盛土内
4	H20.3472	左京三条五坊十二坪	油阪地方町 4-1、4-3	個人	店舗新築	宅地	H21.4.7	GL-1.4m まで掘削、地山確認
5	H20.3445	右京八条三坊二坪、奈良町遺跡	西九条町一丁目 3-14	個人	賃貸住宅新築	休耕地	H21.4.8	GL-0.3~0.4m まで掘削、耕作土内
6	H20.3438	元興寺旧境内、奈良町遺跡	西寺林町 22 番南市町 10 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.4.8	GL-0.4m まで掘削、盛土内
7	H20.3334	左京五条大路(東一坊)	柏木町 519-19、519-20	個人	店舗新築	宅地	H21.4.10	GL-0.6m まで掘削、池の堤確認
8	H20.3430	池田遺跡	池田町 175 番 1	個人	青空駐車場	宅地	H21.4.13	GL-0.35m まで掘削、褐色土から須恵器甕の小片 1 点出土
9	H20.3389	右京三条一坊十五坪	二条大路南五丁目 441-3、464、466	個人	店舗新築	宅地	H21.4.13	GL-0.7m まで掘削、盛土内
10	H20.3369	左京四条三坊八・九坪・四坊四坊二坪・東三坊大路	三条栄町~三条添川町地内	奈良市水道事業管理者	水道工事	道路	H21.4.14	GL-1.9m まで掘削、盛土内
11	H20.3456	左京東四坊大路(九条)	東九条町 236-9 他	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	H21.4.15	GL-0.2m まで掘削、盛土内
12	H20.3458	東七坊二条大路・奈良町遺跡	油留木町 20 番地	個人	ガレージ拡張	宅地	H21.4.16	GL-0.75m まで掘削、盛土内
13	H20.3386	右京西一坊坊間路(四条)	四条大路四丁目	奈良市長	河川工事	道路	H21.4.17	GL-1.4m まで掘削、灰色土内
14	H20.3460	古市遺物散布地	古市町 670 番 1	KDDI (株)	携帯電話用無線基地局新設工事	畑地	H21.4.21	GL-1.95m まで掘削、地山確認
15	H20.3415	赤田横穴墓群	敷島町 546 番 89	個人	個人住宅新築	宅地	H21.4.21	GL-0.25m まで掘削、盛土内

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
16	H20.3474	奈良町遺跡	肘塚町 177-3 ~ 173-3	大阪ガス(株)	ガス管敷設	道路	H21.4.22	GL-0.86m まで掘削、-0.46m 下で地山確認
17	H20.3412	左京四条三坊七坪	三条栄町 178 番 7、178 番 8	個人	個人住宅新築	宅地	H21.4.22	GL-2.1m まで掘削、地山確認
18	H20.3403	左京四条一坊一坪	四条大路三丁目 942-2 他	大和情報サービス(株)	店舗新築	畑地	H21.4.23	GL-0.2m まで掘削、盛土内
19	H20.3441	西隆寺旧境内	西大寺東町一丁目 40-8	個人	賃貸住宅新築	宅地	H21.4.27	GL-0.2m まで掘削、盛土内
20	H20.3467	遺物散布地	山陵町 652-3、652-9	個人	個人住宅新築	宅地	H21.4.30	GL-0.6m まで掘削、盛土内
21	H20.3440	左京二条五坊北郊	法蓮町 717 番 6	個人	個人住宅新築	宅地	H21.4.30	GL-0.3m まで掘削、盛土内
22	H20.3411	左京四条五坪十六坪	三条町二丁目 473-1、2	個人	店舗付個人住宅新築	宅地	H21.5.8	GL-1.2 ~ 1.3m まで掘削、地山確認
23	H20.3414	右京四条一坊十一坪	四条大路五丁目 200-1	(株)新日本ハウス	道路工事	畑地	H21.5.8 H21.5.11	GL-1.0m まで掘削、盛土内 GL-0.85m まで掘削、盛土内
24	H20.3225	奈良町遺跡	紀寺町 387 番地の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H21.5.11	GL-0.8m まで掘削、盛土内
25	H21.3040	左京四条一坊一坪	四条大路三丁目 954-1 他	(株)ローソン	看板設置	宅地	H21.5.12	GL-1.25m まで掘削、地山確認
26	H20.3413	左京九条二坊十坪	西九条町二丁目 13 番 5 の一部	個人	共同住宅新築	駐車場	H21.5.14	GL-0.4m まで掘削、盛土内
27	H20.3459	左京八条三坊九坪 (東市跡推定地)	東九条町 956 番 2	KDDI (株)	携帯電話用無線基地局新設工事	宅地	H21.5.15	GL-2.3m まで掘削、廃棄物の投棄攪乱の範囲内
28	H20.3330	左京四条五条六坊七坪	三条本町 1022 番	(株)京都銀行	店舗新築	宅地	H21.5.18	GL-1.1m まで掘削、旧耕土確認
29	H20.3466	左京三条六坊四坪、奈良町遺跡	下三条町 43 番地	個人	店舗付個人住宅	宅地	H21.5.18	GL-1.2m まで掘削、灰色粘質土または明茶褐色土確認
30	H20.3424	左京五条五坊十六坪	大森町 14 番 1 号	個人	自己用住宅	宅地	H21.5.20	GL-0.2m まで掘削、盛土内
31	H21.3056	左京四条一坊一坪	四条大路三丁目 953-2	大和情報サービス(株)	広告塔設置	宅地	H21.5.20	GL-1.2m まで掘削、-1.0m 付近で地山確認
32	H21.3070	古市城跡	古市町 2156 番 4	個人	個人住宅新築	宅地	H21.5.26	GL-0.4m まで掘削、-0.3m 下で地山確認
33	H20.3447	左京九条二坊十五坪	西九条二丁目 11-1	個人	共同住宅新築	宅地	H21.5.27 H21.6.4	GL-0.8m まで掘削、一部で地山確認、柱穴・土坑あるいは溝の一部を検出、土器片出土、遺構面あり 工事状況の確認
34	H21.3016	左京一条六坊三坪	法蓮町 1268 番 3 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H21.5.29	GL-0.5m まで掘削、-0.3m 付近で地山確認
35	H21.3077	右京四条一坊十一坪・西一坊坊間西小路	四条大路五丁目 200-1	US 建築デザイン研究所	分譲住宅新築	宅地	H21.6.1	GL-0.4m まで掘削、盛土内
36	H21.3021	右京五条三坊十三坪	五条三丁目 769-2 他	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.2	GL-0.2m まで掘削、盛土内
37	H21.3032	左京東三坊大路 (三条)	芝辻町四丁目 2-7 他	西日本電信電話(株)	電話地下埋設工事の試掘	道路	H21.6.5	GL-1.5m まで掘削、河川堆積とみられる明青灰色粘砂確認
38	H21.3062	左京四条五坊十四坪	杉ヶ町 54-1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.5	GL-0.4m まで掘削、灰色砂質床土内
39	H20.3462	右京五条四坊十五坪	平松五丁目 13 他	大阪ガス(株)	ガス管敷設	道路	H21.6.8 H21.6.12	GL-0.8 ~ 1.0m まで掘削、GL-0.4 ~ 0.6m 付近で地山確認 北半 GL-0.8m まで掘削、盛土内、南半 GL-0.55m 下で大阪層群の粘土層及び砂層
40	H21.3035	元興寺旧境内、奈良町遺跡	西新屋町地内	奈良市水道事業管理者	水道管理設	道路	H21.6.8	GL-0.8 ~ 0.9m まで掘削、既設埋設管掘り方内
41	H20.3439	左京東五坊坊間西小路 (三条)	大宮町一丁目 5	大阪ガス(株)	ガス管敷設	道路	H21.6.9	GL-1.5m まで掘削、盛土内
42	H20.3444	左京四条六坊六坪	柳町 8 番他	個人	共同住宅新築	宅地	H21.6.10	GL-0.5m まで掘削、遺構・遺構面および遺物確認
43	H21.3059	右京三条二坊十三坪	尼辻北町 271-2 他	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.12	工事先行、GL-0.4m まで掘削、盛土内
44	H21.3116	右京北辺三坊六坪	西大寺北町一丁目 378-3	(株)吉川商事	分譲住宅新築	宅地	H21.6.13	GL-0.56m まで掘削、地山確認、遺構面あり
45	H21.3076	奈良町遺跡	紀寺町 1064-9	(株)日本中央住販	分譲住宅新築	宅地	H21.6.15	GL-0.5m まで掘削、盛土内
46	H21.3065	古市遺跡	古市町 1675 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.15	GL-0.3 ~ 0.6m まで掘削、盛土内
47	H21.3117	右京北辺三坊六坪	西大寺北町一丁目 378-10	(株)吉川商事	分譲住宅新築	宅地	H21.6.16	GL-0.2m まで掘削、盛土内、GL-0.9m まで地盤の表層改良
48	H21.3120	右京北辺三坊六坪	西大寺北町一丁目 378-2	(株)吉川商事	分譲住宅新築	宅地	H21.6.16	GL-0.5m まで掘削、暗黄褐色土内 (包含層または遺構埋土)、GL-0.9m まで地盤の表層改良
49	H12.3145	左京五条四坊十六坪	大森町	奈良市	区画整理事業	工事用地	H21.6.17	GL-0.5m まで掘削、盛土内
50	H21.3006	左京三条六坊二坪、奈良町遺跡	高天市町 45	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.17	GL-0.3m まで掘削、盛土内
51	H21.3064	左京二条五坊北郊・東四坊大路	法蓮町 717 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.17	GL-0.3m まで掘削、盛土内
52	H21.3096	左京四条三坊七坪	三条栄町 158 番 12	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.18	GL-0.4m まで掘削、盛土内
53	H20.3408	右京三条一坊四坪	三条大路四丁目 1-1	積水化学(株)	工場増築	工場	H21.6.18	GL-0.38m まで掘削、盛土内
54	H21.3078	右京西一坊大路 (七条)	六条町 98-1	大阪ガス(株)	ガス管敷設	道路病院敷地	H21.6.18	GL-1.7 ~ 2.1m まで掘削、暗灰黒色土・盛土内
55	H21.3082	左京一条三坊二坪	恋の窪三丁目 1 番 16-1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.22	GL-0.3m まで掘削、盛土内
56	H21.3057	右京三条三坊七坪・西三坊坊間路	菅原町 460	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.23	工事先行、GL-0.4m まで掘削、盛土内

平成21年度実施 工事立会一覧

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
57	H21.3119	右京一条北大路(西三坊)	西大寺北町一丁目378-1	㈱吉川商事	分譲住宅新築	宅地	H21.6.25	GL-0.2m まで掘削、盛土内
58	H21.3118	右京北辺三坊二坪	西大寺北町一丁目378-4	㈱吉川商事	分譲住宅新築	宅地	H21.6.26	GL-0.3m まで掘削、盛土内
59	H21.3053	左京一条三坊二坪	法華寺町 1172 番 2	秋田工務店(株)	分譲住宅新築	宅地	H21.6.26	GL-0.3m まで掘削、盛土内
60	H21.3122	左京五条一坊・東一坊大路	柏木町 529 番 1 の一部	㈱日本中央住販	分譲住宅新築	宅地	H21.6.29	GL-0.2m まで掘削、盛土内
61	H21.3014	左京四条一坊五坪・東一坊坊間路	南新町 78 番地の 1	㈱あかしや	事務所及び作業場、倉庫の建替工事	宅地	H21.6.29	GL-1.3m まで掘削、水田耕土内
62	H21.3098	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目 989-6	㈱ R & K	分譲住宅新築	宅地	H21.6.30	GL-0.2m まで掘削、盛土内
63	H21.3058	左京五条四坊四坪	大安寺七丁目 868-1 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H21.6.30	GL-1.0m まで掘削、地山確認、遺構面あり
64	H21.3086	西三坊坊間路	六条一丁目 711 番 1	個人	分譲住宅新築	宅地	H21.7.2	GL-0.4 ~ 0.65m まで掘削、盛土内
65	H20.3475	左京七条四坊十三・十四坪・東四坊大路	東九条町 1112-1	㈱中川政七商店	事務所新築	荒蕪地	H21.7.6	GL-0.9m まで掘削、盛土内
66	H21.3091	左京九条三坊八坪・東三坊坊間路	西九条町二丁目 1 番 6	個人	共同住宅新築	宅地	H21.7.6	GL-0.3m まで掘削、盛土内
67	H21.3085	左京四条四坊十一坪	三条大宮町 347-15	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.6	GL-0.7m まで掘削、旧耕作土内
68	H21.3023	左京四条四坊一坪	三条添川町 3 番 12 号	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.6	GL-0.35m まで掘削、表土内
69	H21.3088	左京二条五坊六坪	法蓮町 62-2 他	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.6	GL-0.3m まで掘削、盛土内
70	H20.3313	左京東四坊坊間小路(一条)	法蓮町 1951 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.7	GL-0.8m まで掘削、-0.4m 下で地山確認
71	H21.3103	左京五条三坊八坪	恋の窪二丁目 20-25	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.8	GL-0.35m まで掘削、盛土内
72	H21.3081	広大寺池遺跡	今市町 271 番地先	奈良市長	道路工事	宅地	H21.7.9 H21.7.14	GL-2.0m まで掘削、-0.5 ~ 0.7m 付近で地山確認
73	H21.3037	左京五条四坊十四坪	大森町~大安寺六丁目 17-5	大阪ガス(株)	ガス管敷設	道路	H21.7.13	GL-0.65m まで掘削、盛土内
74	H20.3465	左京四条六坊十五坪、奈良町遺跡	三条町 582 番地	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.14	GL-0.45m まで掘削、盛土内
75	H21.3125	矢田原遺跡	矢田原町 1267	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.15	GL-0.1 ~ 0.3m まで掘削、地山確認
76	H21.3164	左京二条四坊十五坪・東四坊大路	法蓮町 328-30	㈱アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H21.7.18	GL-0.4m まで掘削、盛土内
77	H21.3146	右京六条三坊十五坪	六条一丁目 826-1	豊徳工業(株)	分譲住宅新築	宅地	H21.7.21	GL-0.4m まで掘削、盛土内
78	H21.3042	右京二条四坊五・六坪	菅原町 370 番地 伏見小学校地内	奈良市消防長	消防防火設備	学校地	H21.7.21 H21.7.28	GL-2.0m まで掘削、-1.7m 付近で地山確認
79	H21.3104	元興寺旧境内、奈良町遺跡	東寺林町 2 番	個人	共同住宅新築	宅地	H21.7.22	GL-0.6m まで掘削、-0.5m 下で地山確認
80	H21.3041	古市城跡	古市町 268 番地	奈良市長	消防防火設備	学校地	H21.7.22 H21.7.29 H21.7.30	GL-1.5m まで掘削、盛土内 GL-2.2 ~ 2.3m まで掘削、盛土内 GL-3.0m まで掘削、地山確認
81	H21.3039	元興寺旧境内(重点地区)	餅飯殿町 9 ~ 今御門町 25	大阪ガス(株)	ガス管敷設・入替	道路	H21.7.23	GL-0.8m まで掘削、地山確認
82	H21.3137	右京五条三坊十坪	平松二丁目 281 番 86	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.23	GL-0.3m まで掘削、地山確認
83	H20.3290	右京六条一坊十一坪・六条条間路	柏木町 385 番先	関西電力(株)	電気工事	道路	H21.7.24	GL-2.6m まで掘削、-1.5m 下で地山確認
84	H21.3109	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目 989 番他	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.24	GL-0.3m まで掘削、盛土内
85	H21.3184	右京一条北辺三坊六坪	西大寺北町一丁目 378-5	㈱吉川商事	分譲住宅新築	宅地	H21.7.27	GL-0.4m まで掘削、盛土内、一部地山確認
86	H20.3242	左京二条七坊七坪、奈良町遺跡	西笹鉾町 43-1 他	天理教梅谷大教会	教会新築	宅地	H21.7.27	GL-0.1 ~ 0.4m まで掘削、盛土内
87	H21.3106	左京四条四坊一坪	三条添川町 71 番 21	個人	個人住宅新築	宅地	H21.7.28	GL-0.55m まで掘削、盛土内
88	H21.3147	西大寺旧境内	西大寺新田町 564 番・565 番 1	㈱フォレストホーム	駐車場造成	荒蕪地	H21.7.29	GL-1.3m まで掘削、地山確認
89	H21.3167	西大寺旧境内	西大寺竜王町一丁目 2-11 ~ 1 丁目 2-7	大阪ガス(株)	ガス管敷設	道路	H21.7.30	GL-0.1 ~ 0.4m まで掘削、盛土内
90	H21.3129	右京三条三坊十三坪	宝来二丁目 822-4 他	個人	個人住宅新築	宅地	H21.8.3	GL-0.3m まで掘削、盛土内
91	H21.3197	右京一条北辺三坊六坪・一条北大路	西大寺北町一丁目 378-6 (G 号地)	㈱吉川商事	分譲住宅新築	宅地	H21.8.3	GL-0.4m まで掘削、耕作土内
92	H21.3195	右京一条北辺三坊六坪・一条北大路	西大寺北町一丁目 378-7 (L 号地)	㈱吉川商事	分譲住宅新築	宅地	H21.8.3	GL-0.4m まで掘削、耕作土内
93	H21.3196	右京一条北辺三坊六坪・一条北大路	西大寺北町一丁目 378-8 (K 号地)	㈱吉川商事	分譲住宅新築	宅地	H21.8.3	GL-0.4m まで掘削、耕作土内
94	H21.3158	左京四条五坊十五坪、奈良町遺跡	三条町 569 番	積和不動産関西(株)	共同住宅新築	駐車場	H21.8.4	GL-0.6m まで掘削、黒褐色土内
95	H21.3020	右京四条二坊六坪	尼辻南町の一部他	個人	共同住宅新築	宅地	H21.8.5	GL-0.6m まで掘削、褐灰色土内、土器の破片確認
96	H21.3180	右京北辺三坊二坪	西大寺新町一丁目 175 番 4	個人	個人住宅新築	宅地	H21.8.6	GL-0.5m まで掘削、床土内
97	H21.3138	右京四条四坊四坪	平松三丁目 213 番 1	個人	共同住宅新築	駐車場	H21.8.12	GL-0.3m まで掘削、耕作土内

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
98	H21.3182	右京一条四坊・一条南大路	西大寺芝町二丁目2031-4・6	オーエスハウジング(株)	分譲住宅新築	宅地	H21.8.18	GL-0.1～0.2mまで掘削、盛土内
99	H21.3047	左京四条五坊十四坪	杉ヶ町53-3	(株)住	分譲住宅新築	宅地	H21.8.19	GL-0.5mまで掘削、盛土内
100	H21.3173	右京三条四坊五坪	宝来三丁目746-5、746-6	個人	個人住宅新築	宅地	H21.8.21	GL-0.2mまで掘削、盛土内
101	H21.3179	左京五条六坊十二坪(佐伯院跡推定地)	南京終町59番2	個人	個人住宅新築	宅地	H21.8.21	GL-0.25mまで掘削、盛土内
102	H21.3130	西大寺旧境内・一条条間路	西大寺国見町一丁目1	大阪ガス(株)	ガス管敷設	道路	H21.8.21	GL-0.8～1.3mまで掘削、盛土内
103	H21.3204	西大寺旧境内	西大寺竜王町一丁目1544-3、1533-1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.8.25	GL-0.1～0.2mまで掘削、盛土内
104	H21.3151	左京二条六坊十三坪、奈良町遺跡	坊屋敷町5-2、6-3	個人	個人住宅新築	宅地	H21.8.25	GL-0.4mまで掘削、黒色土内
105	H21.3152	古市遺跡	古市町1508番17、1521番11	個人	個人住宅新築	宅地	H21.8.25	GL-0.35mまで掘削、地山確認
106	H21.3206	左京五条六坊一坪	大森町4-1	個人	賃貸住宅新築	宅地	H21.8.27	GL-0.35mまで掘削、盛土内
107	H21.3108	左京三条大路(東一坊)	三条大路二丁目地内	関西電力(株)	電気管路修繕工事	道路	H21.9.1	GL-1.8mまで掘削、-1.4m下で地山確認
108	H21.3141	朱雀大路(四条)	四条大路三丁目959-1	大洋実業(株)	店舗新築	宅地	H21.9.2	GL-1.0mまで掘削、旧耕土内
109	H21.3214	奈良町遺跡	中辻町32-9、32-13	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.3	GL-0.5mまで掘削、盛土内
110	H21.3168	左京四条二坊十二坪	四条大路一丁目1000番12	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.3	GL-0.45～0.9mまで掘削、盛土内
111	H21.3161	右京六条四坊十一坪	六条二丁目1131番5	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.3	GL-0.65mまで掘削、地山確認
112	H21.3141	左京五条三坊一坪	四条大路南439-13	オーエスハウジング(株)	分譲住宅新築	宅地	H21.9.3	GL-0.2mまで掘削、盛土内
113	H21.3187	左京五条六坊三坪	西木辻町105	大阪ガス(株)	ガス管敷設	道路	H21.9.4	GL-0.6mまで掘削、盛土内
114	H21.3218	左京二条五坊北郊	法蓮町717番7	ミサワホーム近畿(株)	分譲住宅新築	宅地	H21.9.4	GL-0.2mまで掘削、盛土内
115	H21.3054	奈良町遺跡	高畑町1270番1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.7	GL-0.2mまで掘削、地山確認
116	H21.3186	右京一条二坊十四坪	西大寺栄町2339-3他	奈良市長	公衆トイレ建設	宅地	H21.9.8	GL-1.4mまで掘削、耕作土内
117	H21.3202	右京六条四坊十三坪	六条西四丁目1492番93	(株)アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H21.9.8	GL-0.2mまで掘削、地山確認
118	H21.3142	右京一条二坊三坪	二条町二丁目59番6	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.9	GL-0.5mまで掘削、盛土内
119	H21.3169	左京四条二坊十二坪	四条大路一丁目1000番14	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.11	GL-0.4mまで掘削、盛土内
120	H21.3215	右京六条一坊六坪・西一坊坊間東小路	西ノ京町24番12	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.11	GL-0.2mまで掘削、盛土内
121	H21.3241	左京六条四坊十六坪	大安寺五丁目975番3	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.14	GL-1.3mまで掘削、-0.7m下で地山確認
122	H21.3148	元興寺旧境内・奈良町遺跡	今御門町地内 勝南院町地内	奈良市水道事業管理者	水道工事	道路	H21.9.14 H21.12.2	GL-1.1mまで掘削、既設埋設管の堀形内 GL-1.2mまで掘削、黒灰色土内
123	H21.3145	左京二条七坊十六坪・東七坊坊間東小路、奈良町遺跡	東笹鉾町29-1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.14	GL-0.8mまで掘削、暗灰色粘質土内
124	H21.3192	左京六条一坊七坪・東一坊坊間路	柏木町493-1～157-1	大阪ガス(株)	ガス管敷設	道路	H21.9.18	GL-0.7mまで掘削、盛土内
125	H21.3242	西大寺旧境内	西大寺南町2438-1他	奈良交通(株)	駐輪場新築	宅地	H21.9.18	GL-1.7mまで掘削、地山確認、遺構面あり
126	H21.3084	左京六条二坊三坪	八条五丁目417番1の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.24	GL-0.2mまで掘削、盛土内
127	H21.3083	左京六条二坊三坪	八条五丁目417番2の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H21.9.24	GL-0.2mまで掘削、盛土内
128	H21.3240	右京七条三坊七坪	七条一丁目426-6他	(株)福岡屋住宅流通	分譲住宅新築	宅地	H21.9.24	GL-0.1mまで掘削、盛土内
129	H21.3226	左京二条七坊北郊・一条南大路	西包永町14番1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.25	GL-0.2mまで掘削、表土層内出土遺物あり
130	H21.3255	左京五条六坊三坪	西木辻町105-18	個人	個人住宅新築	宅地	H21.9.25	工事先行、土層確認できず
131	H21.3244	南紀寺遺跡	南紀寺町二丁目334-5	一建設(株)	個人住宅新築	宅地	H21.9.28	GL-0.1mまで掘削、盛土内
132	H21.3247	南紀寺遺跡	南紀寺町二丁目334-9	一建設(株)	個人住宅新築	宅地	H21.9.28	GL-0.15mまで掘削、盛土内
133	H21.3248	南紀寺遺跡	南紀寺町二丁目334-10	一建設(株)	個人住宅新築	宅地	H21.9.28	GL-0.2mまで掘削、盛土内
134	H21.3249	右京六条四坊十一坪	六条二丁目1131番4	個人	個人住宅新築	宅地	H21.10.1	GL-0.1mまで掘削、盛土内
135	H21.3262	遺物散布地(奈良県遺跡地図)5A-41	秋篠町1667-5	オーエッチ工業株	分譲住宅新築	宅地	H21.10.2	GL-0.2mまで掘削、盛土内
136	H21.3266	左京五条三坊八坪	恋の窪一丁目607-9	OSハウジング(株)	分譲住宅新築	宅地	H21.10.5	GL-0.4mまで掘削、盛土内
137	H21.3203	左京二条六坊北郊	法蓮町1268番3	(株)サンリツホーム	個人住宅新築	宅地	H21.10.5	GL-0.2mまで掘削、盛土内
138	H21.3047	左京四条五坊十四坪	杉ヶ町53-3	(株)住	分譲住宅新築	宅地	H21.10.5	GL-0.4mまで掘削、盛土内
139	H21.3222	西大寺旧境内	国見町一丁目224番地1の一部他	奈良交通(株)	駐輪場建設	駐輪場	H21.10.7	GL-1.0～1.2mまで掘削、明青灰色粘土、耕作土内
140	H21.3126	正暦寺旧境内	菩提山町77番	(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ	携帯電話無線基地局建設	宅地	H21.10.15	GL-1.9mまで掘削、1.6m下で地山確認、14.15世紀頃の備前焼大甕の破片を数点確認

平成21年度実施 工事立会一覧

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
141	H21.3252	右京七条三坊六坪・西三坊坊間東小路	七条一丁目 383 番 5、6	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	H21.10.15	GL-0.05m まで掘削、地山確認、出土遺物あり
142	H21.3188	左京二条五坊北郊	法蓮町 736-1 ~ 737-1	大坂ガス(株)	ガス管敷設	道路	H21.10.15	GL-0.7m まで掘削、地山確認
143	H21.3216	右京五条四坊六坪	平松四丁目 395 番 12	個人	個人住宅新築	宅地	H21.10.19	GL-0.25m まで掘削、盛土内
144	H21.3258	左京三条五坊十二坪・奈良町遺跡	油阪地方町 6-7	個人	店舗付個人住宅新築	宅地	H21.10.20	GL-0.3m まで掘削、盛土内
145	H21.3295	左京五条六坊三坪	西木辻町 105-23	個人	個人住宅新築	宅地	H21.10.23	GL-0.35m まで掘削、盛土内
146	H21.3296	左京四条五坊十三坪	杉ヶ町 10-9	オーエッチ工業(株)	分譲住宅新築	宅地	H21.10.26	GL-0.2m まで掘削、盛土内
147	H21.3298	左京九条二坊十五坪	西九条町二丁目 11 番 3	個人	共同住宅新築	宅地	H21.10.27	GL-1.3m まで掘削、褐色土内
148	H21.3281	西大寺旧境内	西大寺新田町 535-2	個人	個人住宅新築	宅地	H21.10.27	GL-0.5m まで掘削、茶褐色土内
149	H21.3222	西大寺旧境内	西大寺国見町 224 番地 1 の一部他	奈良交通(株)	駐輪場	駐輪場	H21.10.29	GL-0.6 ~ 1.0m まで掘削、地山・遺構面および遺物確認
150	H21.3312	左京五条六坊三坪	西木辻町 105 番 20	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.2	GL-1.1m まで掘削、0.6m 下で地山確認
151	H21.3201	左京五条二坊八坪	大安寺町 565-19、-13	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.5	GL-1.3m まで掘削、1.2m 下で地山確認
152	H21.3251	矢田原遺跡	矢田原町 812、813、824	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.6	GL-0.37m まで掘削、地山確認
153	H21.3299	右京四条二坊九坪	尼辻中町 184-1 他	個人	共同住宅新築	駐車場	H21.11.9	GL-0.2 ~ 0.3m まで掘削、盛土内
154	H21.3159	右京五条三坊一坪	五条一丁目 481 番 94	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.11	GL-0.1m まで掘削、盛土内
155	H21.3277	奈良町遺跡	肘塚町 382-2 ~ 168-8	大阪ガス(株)	ガス管敷設	道路	H21.11.12 H21.11.13	GL-0.8m まで掘削、盛土内 GL-0.9m まで掘削、盛土内
156	H21.3259	右京二条二坊一坪	二条町三丁目 90 番 89	(株)コナ・ジャパン	宅地造成	宅地	H21.11.12 H21.11.13	GL-1.6m まで掘削、耕作土内
157	H21.3327	左京九条一坊十三坪	西九条町四丁目 3 番地の 1	近畿セキスイハイム工業(株)	住宅用展示場	宅地	H21.11.16	GL-0.3m まで掘削、盛土内
159	H21.3286	右京七条三坊・西二坊大路	六条一丁目 452-5	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.16	GL-0.1m まで掘削、盛土内
160	H21.3290	右京五条二坊十一坪	五条町 358-1	個人	倉庫新築	宅地	H21.11.16	GL-0.1m まで掘削、盛土内
161	H21.3301	西大寺旧境内	西大寺新田町 2545 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.17	GL-0.82m まで掘削、耕作土内
162	H21.3230	四条大路・西三坊大路	平松一丁目地内	奈良市長	道路工事	道路	H21.11.18	GL-1.6m まで掘削、0.5m 下で地山確認
163	H21.3239	左京五条七坊六坪	井上町 14-2、17-3	個人	地区集会書新築	宅地	H21.11.18	GL-0.3m まで掘削、黒褐色土内
164	H21.3303	右京北辺四坊四坪	西大寺宝ヶ丘 723-6	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.20	GL-0.2m まで掘削、地山確認
165	H21.3284	右京一条北辺三坊六坪	西大寺北町一丁目 378 番 11	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.24	GL-0.3m まで掘削、耕作土内
166	H21.3328	遺物散布地(奈良県遺跡地図) 5A-41	秋篠町 1667-2	オーエッチ工業(株)	分譲住宅新築	宅地	H21.11.25	GL-0.3m まで掘削、盛土内
167	H21.3292	右京七条四坊十六坪	六条三丁目 11-14	(株)連合設計社	個人住宅新築	宅地	H21.11.27	GL-0.5m まで掘削、地山確認
168	H21.3334	右京六条三坊十五坪	六条一丁目 826-6	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.27 H21.12.2	GL-0.6m まで掘削、地山確認 GL-0.3m まで掘削、地山確認
169	H21.3200	須恵器窯跡(奈良県遺跡地図 4B-6)	三松ヶ丘 500-115	個人	個人住宅新築	宅地	H21.11.30	GL-0.3m まで掘削、盛土内
170	H21.3261	菅原寺旧境内	菅原町地内(菅原町 507-1)	奈良市長	河川工事	河川	H21.11.30	GL-0.5m まで掘削、褐色土内
171	H21.3324	左京四条五坊六坪	三条本町 1010	(株)ベルコ	集会所(営業所)新築	宅地	H21.11.30	GL-3.2m まで掘削、地山確認
172	H21.3275	右京六条四坊二坪	六条二丁目 451-1 他	個人	青空駐車場造成	荒蕪地	H21.12.2	GL-0.85m まで掘削、地山確認
173	H21.3323	西大寺旧境内	西大寺新田町 535 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H21.12.7	GL-0.8m まで掘削、地山、柱穴 1 基礎確認
174	H21.3181	左京三条六坊・三条大路	橋本町 15	大阪ガス(株)	ガス管敷設	道路	H21.12.9	GL-1.5m まで掘削、盛土内
175	H21.3304	左京五条七坊六坪	井上町 5-12、5-13	個人	個人住宅新築	宅地	H21.12.9	GL-0.2m まで掘削、盛土内
176	H21.3321	左京五条七坊六坪	井上町 3-7	個人	個人住宅新築	宅地	H21.12.9	GL-0.4m まで掘削、盛土内
177	H21.3380	右京八条四坊十六坪	七条西町一丁目 609 番 62	個人	個人住宅新築	宅地	H21.12.11	GL-0.3m まで掘削、盛土内
178	H21.3250	左京四条四坊一坪	三条添川町 3-15 ~ 2-31	大阪ガス(株)	ガス管敷設	道路	H21.12.14	GL-0.65m まで掘削、地山確認
179	H21.3283	左京三条六坊五坪	上三条町 23-4	奈良市長	看板設置	宅地	H21.12.14	GL-0.85m まで掘削、褐色土内
180	H21.3352	左京二条六坊二条大路、奈良町遺跡	坊屋敷町 37-7	個人	個人住宅新築	宅地	H21.12.17	GL-0.4m まで掘削、盛土内
181	H21.3347	左京五条二坊六坪	四条大路南町 385 番 34	個人	個人住宅新築	宅地	H21.12.17	GL-0.3 ~ 0.4m まで掘削、盛土内
182	H21.3395	左京三条四坊一坪・東二坊大路	芝辻町二丁目 9-2	(株)吉井新聞舗	店舗新築	宅地	H21.12.17	GL-0.2m まで掘削、盛土内
183	H21.3245	南紀寺遺跡	南紀寺町二丁目 334-6	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	H21.12.22	GL-0.3m まで掘削、盛土内
184	H21.3348	左京二条五坊北郊	法蓮町 752 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H21.12.22	掘削なし
185	H21.3391	遺物散布地(奈良県遺跡地図 5A-41)	秋篠町 1667-6	オーエッチ工業(株)	分譲住宅新築	宅地	H21.12.22	GL-0.3m まで掘削、盛土内

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
186	H21.3382	右京四条一坊二坪・ 四条条間北小路	四条大路四丁目 81-3	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	H21.12.24	GL-0.3m まで掘削、盛土内
187	H21.3383							
188	H21.3271	左京二条五坊・二条 条間路	法蓮町 256-1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.12.24	GL-0.4m まで掘削、灰色粘質土 内
189	H21.3400	左京五条二坊十六坪	四条大路南町 439-8	オーエスハウジング(株)	分譲住宅新築	宅地	H21.12.28	GL-0.2m まで掘削、盛土内
190	H21.3361	左京四条四坊二坪	三条添川町 219 番 4 他	個人	個人住宅新築	宅地	H22.1.5	GL-0.06m まで掘削、褐色土内
191	H21.3346	左京六条一坊七坪・ 東一坊坊間路	柏木町 157-12	個人	個人住宅新築	宅地	H22.1.5	工事先行 掘削、 耕作土内
192	H21.3341	左京三条五坊四坪	大宮町一丁目 58-3 の一部 他	(株)ノーザンリバー	店舗増築	宅地	H22.1.6	GL-0.95m まで掘削、地山確認
193	H21.3260	松林苑 (重点地区松 林苑)	歌姫町地内 (歌姫 町 1482 付近)	奈良市長	河川工事	山林	H22.1.7	GL-2.9m まで掘削、地山確認
194	H21.3368	左京九条四坊十六坪	東九条町 242-1	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	H22.1.12	GL-0.1 ~ 0.3m まで掘削、盛土 内
195	H21.3309	右京四条一坊九坪	四条大路四丁目 29 番 4 他	個人	個人住宅新築	宅地	H22.1.12	GL-0.4m まで掘削、盛土内
196	H21.3393	右京六条四坊二坪・ 西三坊大路	六条一丁目 931 番 3 他	個人	共同住宅新築	宅地	H22.1.15	GL-0.3m まで掘削、地山確認
197	H21.3374	左京五条六坊六坪・ 佐伯院跡	西木辻町 202 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H22.1.15	GL-0.1 ~ 0.3m まで掘削、黒褐 色土内
198	H21.3414	左京五条三坊八坪	恋の窪一丁目 607-6	オーエスハウジング(株)	分譲住宅新築	宅地	H22.1.18	GL-0.2 ~ 0.4m まで掘削、盛土 内
199	H21.3422	右京七条三坊十四坪	七条町二丁目 670	大阪ガス(株)	ガス管敷設	道路	H22.1.18	GL-0.7m まで掘削、盛土内
200	H21.3227	元興寺旧境内、奈良 町遺跡	芝新屋町 12-2	奈良市教育委員会	説明碑設置	寺院	H22.1.19	GL-0.2m まで掘削、茶褐色土内
201	H21.3335	右京二条三坊九・十 坪・二条条間北路	近鉄西大寺南地区 20 街区 5-1 画地 及び 6 画地の各一 部	個人	個人住宅新築	宅地	H22.1.20	GL-0.3m まで掘削、盛土内
202	H21.3413	左京三条三坊・三条 大路	大宮町四丁目地内	奈良市長	下水道工事	道路	H22.1.22	GL-1.2m まで掘削、既設の水道 管掘形内
203	H21.3306	左京八条四坊十一・ 十二坪	東九条 686 番・ 688 番の各一部	個人	賃貸・共同住宅 新築	宅地	H22.1.22	GL-0.3m まで掘削、盛土内
204	H21.3406	奈良町遺跡	紀寺町 885 番 12	個人	個人住宅新築	宅地	H22.1.26	GL-0.3m まで掘削、盛土内
205	H21.3359	左京六条二坊十坪	大安寺西二丁目 281	奈良市教育委員会	プレハブ倉庫新 築	宅地	H22.1.29	GL-0.5m まで掘削、盛土内
206	H21.3401	左京五条三坊十六坪	恋の窪一丁目 630 番 55	個人	個人住宅新築	宅地	H22.2.1	GL-0.3m まで掘削、盛土内
207	H21.3436	左京六条四坊十三坪	六条二丁目 1474-1 他	個人	個人住宅新築	宅地	H22.2.2	GL-0.4m まで掘削、盛土内
208	H21.3444	左京五条六坊一坪、 奈良町遺跡	大森町 1 番 11	個人	個人住宅新築	宅地	H22.2.2	GL-0.5m まで掘削、盛土内
209	H21.3407	右京二条二坊一坪	二条町三丁目 90 番 98	(株)日本中央住販	分譲住宅新築	宅地	H22.2.8	GL-0.1m まで掘削、盛土内
210	H21.3410	左京二条五坊六坪	法蓮町 62-10	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H22.2.9	GL-0.3m まで掘削、盛土内
211	H21.3408	阿弥陀山寺遺跡	敷島町一丁目 531 番 26	個人	個人住宅新築	宅地	H22.2.9	GL-0.4 ~ 1.2m まで掘削、地山 確認
212	H21.3438	広大寺池遺跡	今市町 地内	奈良市長	河川工事	河川	H22.2.10	GL-2.0m まで掘削、盛土内
213	H21.3421	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目 989-7	個人	個人住宅新築	宅地	H22.2.12	GL-0.3m まで掘削、盛土内
214	H21.3420	左京八条四坊十坪	東九条 669 他	個人	賃貸住宅新築	青空駐車 場	H22.2.12	GL-0.25m まで掘削、旧耕作土内
215	H21.3412	左京三条五坊六坪	大宮町一丁目 31 番 1	奈良市長	ポンプ格納庫新 築	宅地	H22.2.12	GL-0.9m まで掘削、河川堆積層 内
216	H21.3291	左京五条七坊十六坪、 奈良町遺跡	福知院町 20 番 1	個人	物置新築	宅地	H22.2.15	GL-0.3m まで掘削、盛土内
217	H21.3371	右京一条二坊・西二 坊大路	西大寺本町	奈良市長	下水道工事	道路	H22.2.17 H22.2.22	GL-1.4m まで掘削、1.3m 下で地 山確認 発進縦抗、GL-1.0m で地山確認
218	H21.3355	右京三条三坊十五坪	菅原町 508 他	喜光寺	土塀建設	寺院	H22.2.19 H22.2.23 H22.2.24 H22.3.1 H22.3.2	GL-0.7 ~ 0.9m まで掘削、地山 確認 GL-0.6m まで掘削、一部で地山 確認 西面 GL-0.3m まで掘削、水田床 土内南面 GL-0.6m まで掘削、地 山確認 GL-0.4m まで掘削、地山確認 GL-0.5m まで掘削、地山上面確認、 柱穴・土坑・溝を検出 軒平瓦 1 点・平瓦片を確認
219	H21.3435	左京二条六坊五坪、 奈良町遺跡	北内町 82 番 3 の一 部	個人	個人住宅新築	宅地	H22.2.22	GL-0.3m まで掘削、地山確認
220	H21.3191	左京三条五坊七坪・ 三条条間路	大宮町五丁目 1-3 ~ 二丁目 8-18	大阪ガス(株)	ガス管敷設・撤 去	道路	H22.2.22	GL-1.1m まで掘削、盛土内
221	H21.3381	左京三条四坊八坪	芝辻町二丁目 223 番 4	個人	個人住宅新築	駐車場	H22.2.22	GL-0.9m まで掘削、茶褐色土内
222	H21.3424	右京七条一坊十五・ 十六坪	西ノ京町 132 他	医療法人 康仁会	青空駐車場設置	水田	H22.2.23	GL-0.2m まで掘削、床土上面

平成21年度実施 工事立会一覧、踏査一覧

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
223	H21.3470	左京三条一坊一坪 (重点地区平城京跡周辺)	二条大路南三丁目 地内	奈良市長	公園造成	公園	H22.2.25	GL-0.4m まで掘削、盛土内
224	H21.3476	右京二条二坊一坪	二条町三丁目 90-95	(株)日本中央住販	分譲住宅新築	宅地	H22.2.26	GL-0.3m まで掘削、盛土内
225	H21.3458	右京四条一坊十四坪	四条大路五丁目 99-1 の一部、99-2	個人	賃貸住宅新築	宅地	H22.3.1	GL-0.3m まで掘削、盛土内
226	H21.3472	紀寺跡、奈良町遺跡	紀寺町 916 番	個人	個人住宅新築	宅地	H22.3.1 H22.3.3	GL-0.25m まで掘削、盛土内
227	H21.3488	奈良町遺跡	高畑町 1203-3、 1203-5	個人	個人住宅新築	宅地	H22.3.2	GL-0.5 ~ 1.0m まで掘削、地山確認
228	H21.3360	和田カナドオリ遺跡	和田町地内	奈良市長	道路改良工事	道路	H22.3.3	GL-0.55m まで掘削、地山確認
229	H21.3464	左京九条一坊十六坪	西九条三丁目 11-13	大阪ガス(株)	ガス管敷設	道路	H22.3.5	GL-1.0m まで掘削、地山確認
230	H21.3467	左京五条三坊一坪	四条大路南町 439-8	オーエスハウジング(株)	分譲住宅新築	宅地	H22.3.11	GL-0.4m まで掘削、盛土内
231	H21.3366	奈良町遺跡	高畑町 644-17	個人	個人住宅新築	宅地	H22.3.15	GL-0.5m まで掘削、盛土内
232	H21.3310	左京三条六坊八坪 奈良町遺跡	内侍原町 40	個人	個人住宅新築	宅地	H22.3.17	GL-0.55m まで掘削、遺物包含層内
233	H21.3316	左京六条一坊八・九坪・東一坊坊間路	柏木町 155-3 ~ 497-1	大阪ガス(株)	ガス管敷設	道路	H22.3.18	GL-0.6m まで掘削、盛土内
234	H21.3439	奈良町遺跡	北京終町 57-25	個人	個人住宅新築	宅地	H22.3.19	GL-0.3m まで掘削、盛土内
235	H21.3525	右京一条二坊十四坪・ 一条条間路	西大寺栄町 2321-1	(有)中畑ビル	事務所新築	宅地	H22.3.19	GL-1.0m まで掘削、地山確認、奈良時代の遺構面あり
236	H21.3398	右京六条四坊三・四坪	六条二丁目 885-1	(有)京西ハッピーサービス	老人デイサービスセンター新築	水田	H22.3.23	GL-0.6m まで掘削、旧河川の堆積層内
237	H21.3495	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目 984-1 の一部	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H22.3.24	GL-0.1m まで掘削、盛土内
238	H21.3496	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目 992、984-1 の各一部	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H22.3.24	GL-0.1m まで掘削、盛土内
239	H21.3497	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目 984-1 の一部	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H22.3.24	GL-0.1m まで掘削、盛土内
240	H21.3498	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目 992 の一部	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H22.3.24	GL-0.1m まで掘削、盛土内
241	H21.3500	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目 998-1 の一部	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H22.3.24	GL-0.1m まで掘削、盛土内
242	H21.3501	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目 998-1、992 の各一部	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H22.3.24	GL-0.1m まで掘削、盛土内
243	H21.3502	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目 998-1 の一部	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H22.3.24	GL-0.1m まで掘削、盛土内
244	H21.3503	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目 998-1 の一部	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H22.3.24	GL-0.1m まで掘削、盛土内
245	H21.3491	西隆寺跡	西大寺本町 196 番 1 の一部	旭化成ホームズ(株)	分譲住宅新築	宅地	H22.3.29	GL-0.2m まで掘削、盛土内
246	H21.3430	法華寺旧境内	法華寺町 無番地 内	奈良市長	サインボード設置	道路	H22.3.31	GL-0.6m まで掘削、盛土内
247	H21.3454	左京二条六坊北郊	法蓮町 957 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H22.3.31	GL-0.25m まで掘削、盛土内

(2) 平成 21 年度文化財保護法第 125 条の 1 の現状変更許可申請に伴う工事立会

番号	申請受理番号	遺跡	申請地	申請者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
1	H19.1099	史跡大安寺旧境内	東九条 1303 番地	個人	擁壁設置	農業用倉庫敷地	H21.4.16	GL-0.3m まで掘削、盛土内
2	H21.1073	史跡大安寺旧境内	大安寺一丁目 1287-1	個人	土蔵の除去及び 仮設フェンスの 設置	宅地	H21.11.20	掘削なし
3	H21.1056	史跡元興寺塔跡	芝新屋町 元興寺 境内	奈良市教育委員会	説明碑設置	元興寺境内	H22.1.19	GL-0.15m まで掘削、盛土内
4	H20.1134	史跡平城京朱雀大路	二条大路南三丁目	平城遷都 1300 年記念 事業協会	史跡上にある築 山除去及び車止 めの除去	史跡	H22.2.2	現地表上の盛土の除去のみ
5	H21.1055	史跡元興寺小塔院跡	西新屋町 45 番	宗教法人 小塔院	説明版設置	宅地	H22.3.1	GL-0.4m まで掘削、表土層内、 信楽系の土瓶蓋 1 点・江戸時代以 降の瓦 1 点を確認

16. 平成 21 年度実施 踏査一覧

No.	踏査地	事業者	事業内容	事業面積	届出受理番号	踏査期日	踏査所見
1	奈良阪町 2781 他	奈良市長	鴻池運動公園整備事業	24,000㎡	H19.4005	11/25	遺構及び遺物の散布は認められな かった。

第 2 章 自然科学分析報告

自然科学分析

奈良市教育委員会では、発掘調査の成果をより総合性の高い確実なものとするために、遺跡や遺物の肉眼観察では把握できない事象について、自然科学分析を活用している。

これまでに行ってきた主な自然科学分析は、下記の通りである。

- 1 環境の指標性が高く、生活資源となっている植物を主とした生物遺体の同定
- 2 年代の手がかりとなる遺物が含まれない地層や遺構の年代を比定するために行う、試料の含有放射線量から年代値を求める年代測定（例：放射性炭素年代測定、TL年代測定）や、年代の指標性が高い広域火山灰（例：AT火山灰、AH火山灰）の同定
- 3 遺物に付着したり土壌に含まれたりする有機物や化学物質、あるいは土器の胎土や地質に含まれる鉱物の成分を同定する理化学分析（例：蛍光X線分析）

平成21年度は、下記の自然科学分析を実施した。

- ① 平城京第622次調査 奈良時代の道路側溝SD 2005a・bおよび宅地内の溝SD 102・104・114b・119・148bの埋土の花粉分析
奈良時代の道路側溝SD 2005内および築地SA 220上の杭列SX 810～815の杭材の樹種同定
奈良時代の土器埋納遺構SX 803の土器内部から出土した金属製薄板の蛍光X線分析
- ② 平城京第623次調査 縄文時代後期以前の流路と弥生時代後期の溝から採取した木材の樹種同定および放射性炭素年代測定（AMS）
弥生時代後期の溝の埋土と奈良時代の井戸および溝の埋土の花粉分析
- ③ 西大寺旧境内第25次調査 奈良時代の溝埋土の花粉・珪藻分析、種実・樹種同定

本書には①と、前年度までの調査で実施したが未報告であった下記の自然科学分析の成果とをあわせて報告する。なお、②は次年度の年報にて、また③は次年度刊行予定の別報告書にて、それぞれ報告する予定である。

- ④ 平城京第459-2次調査 奈良時代の道路側溝SD 101内の杭列SX 801の杭材の樹種同定
（平成13年度実施分）
- ⑤ 平城京第608次調査 奈良時代の道路側溝SD 2005b・cおよび宅地内の溝SD 121の埋土の花粉分析
（平成20年度実施分） 奈良時代の道路側溝SD 2005b・2006の埋土の珪藻分析
奈良時代の道路側溝SD 2005b内の杭列SX 822の杭材の樹種同定

④は五条条間北小路北側溝（本書の報告ではSD 2005）の西延長分の成果であり、⑤は今回報告する調査地の成果である。

（安井宣也）

1. 平城京第 459-2 次調査における樹種同定

1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材で特徴ある組織をもつ。そのため、解剖学的に概ね属レベルの同定が可能となる。木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく、堆積環境によっては現地性の森林植生の推定が可能になる。考古学では木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

2 試料

試料は、五条条間北小路北側溝 S D 101 (本書報告部分では S D 2005 として報告) の北岸に沿って打ち込まれた護岸杭列 S X 801 から採取した木材 12 点である。

3 方法

カミソリを用いて、試料の新鮮な基本的三断面(木材の横断面、放射断面、接線断面)を作製し、生物顕微鏡によって 60 ~ 600 倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4 結果

結果を表に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

モミ属 *Abie* マツ科 図 2-1・2 (No. 15・35)

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかで、傷害樹脂道が存在する。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で 1 分野に 1 ~ 4 個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅう状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に 5 種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの 4 種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ 45m、径 1.5m に達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

ツガ *Tsuga sieboldii* Carr. マツ科 図 2-3 (No. 7)

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞及び放射仮道管から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型でややヒノキ型の傾向を示し、1 分野に 2 ~ 4 個存在する。放射仮道管が存在し、その壁には小型の有縁壁孔が存在する。わずかではあるが、樹脂細胞が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、ツガに同定される。ツガは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ 20 ~ 25m、径 50 ~ 80cm である。材は耐朽、保存性中庸で、建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。

5 所見

同定の結果、五条条間北小路北側溝 S D 101 の北岸の護岸杭列 S X 801 から採取した木材はモミ属 10、ツガ 2 であった。モミ属およびツガは温帯に普通に分布する針葉樹である。これらの樹種が杭として選択的に用いられていたと考えられる。(株式会社 古環境研究所)

参考文献

佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞。木材の構造, 文永堂出版, p.20-48.

佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞。木材の構造, 文永堂出版, p.49-100.

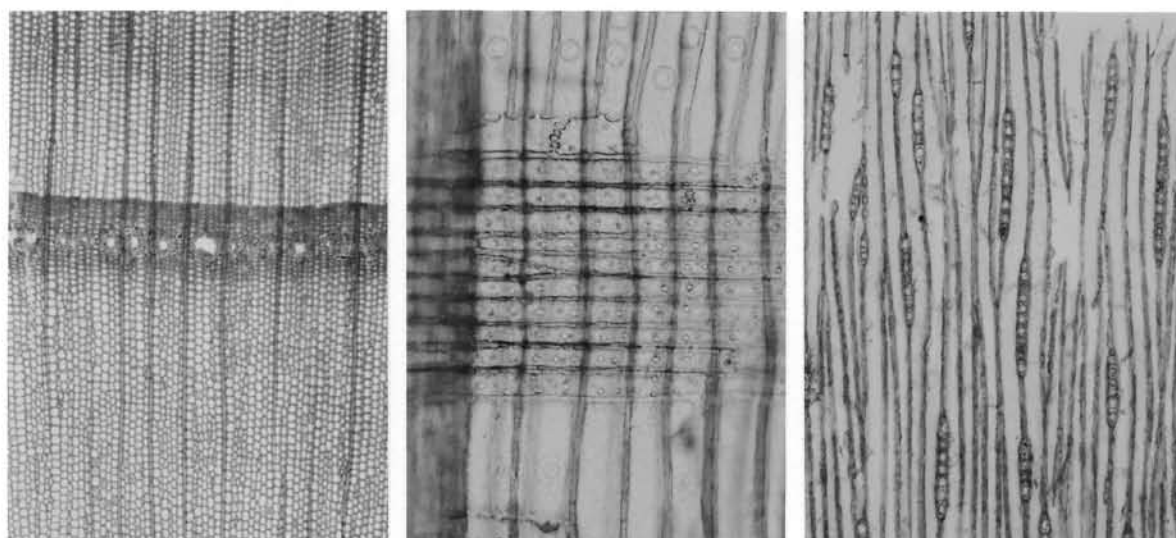
島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, 296p.

表 1 護岸杭列 S X 801 採取木材の樹種同定結果

試料	結果 (和名/学名)	
No.7	ツガ	<i>Tsuga sieboldii</i> Carr.
No.12	モミ属	<i>Abies</i>
No.15	モミ属	<i>Abies</i>
No.31	ツガ	<i>Tsuga sieboldii</i> Carr.
No.35	モミ属	<i>Abies</i>
No.38	モミ属	<i>Abies</i>
No.45	モミ属	<i>Abies</i>
No.74	モミ属	<i>Abies</i>
No.86	モミ属	<i>Abies</i>
No.93	モミ属	<i>Abies</i>
No.102	モミ属	<i>Abies</i>
No.113	モミ属	<i>Abies</i>



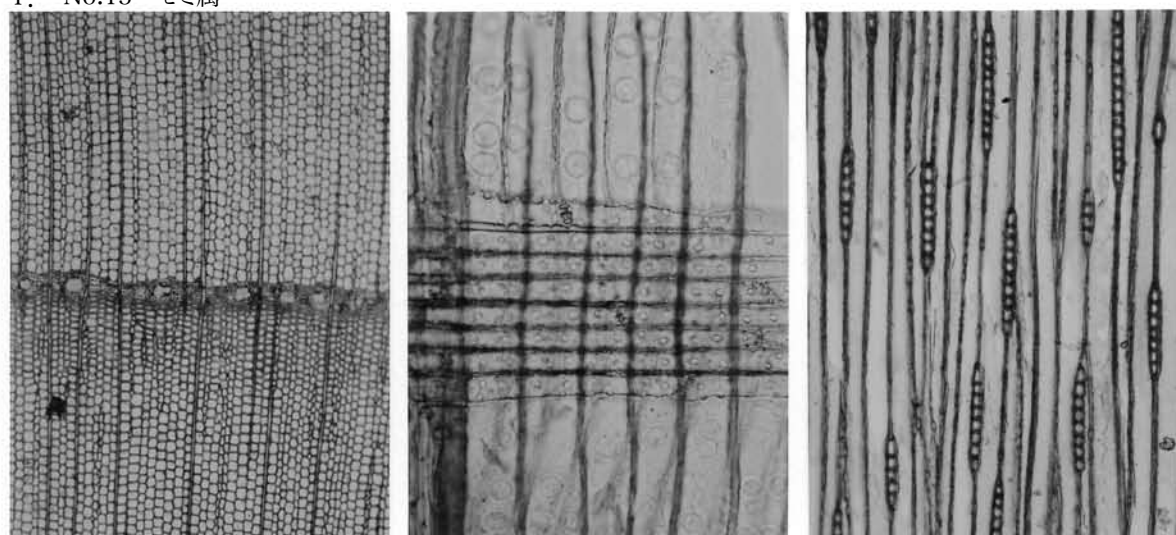
図 1 護岸杭列 S X 801 (南西から)



横断面 ————— : 0.5mm
1. No.15 モミ属

放射断面 ————— : 0.1mm

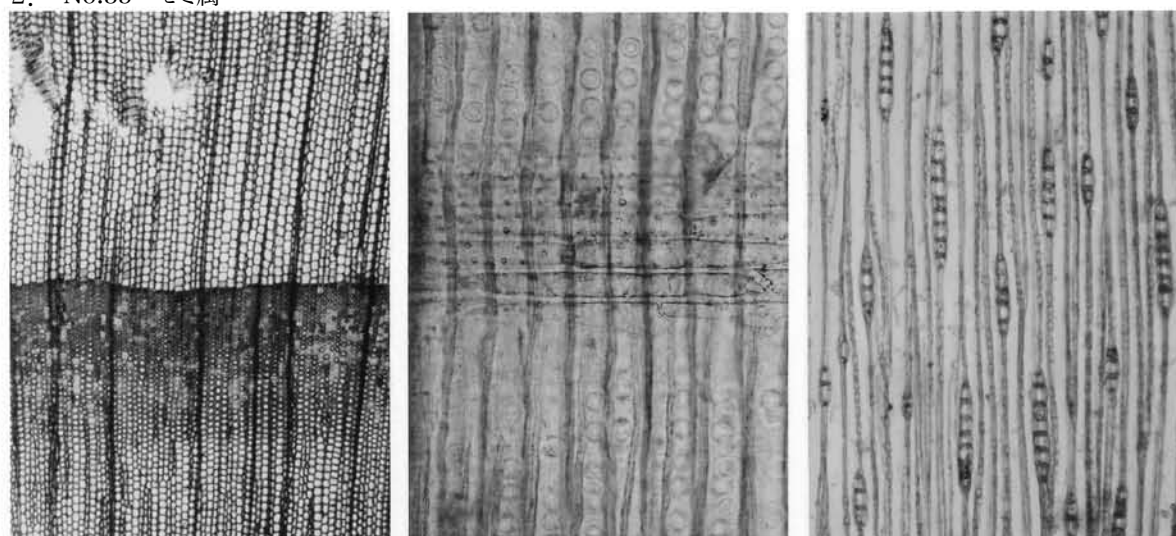
接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.5mm
2. No.35 モミ属

放射断面 ————— : 0.1mm

接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.5mm
3. No.7 ツガ

放射断面 ————— : 0.1mm

接線断面 ————— : 0.2mm

図2 護岸杭列S X 801 採取木材の断面写真

2. 平城京第 608 次調査における自然科学分析

I 花粉分析

1 はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2 試料

分析試料は、A発掘区の奈良時代の溝S D 121（平成20年度年報を参照）より採取された試料A（暗茶褐色砂質土）、試料B（暗茶褐色砂質土）の2点、F発掘区の奈良時代の五条条間北小路北側溝S D 2005より採取されたc-第1層（試料3（灰色砂））からb-第5層（試料8（灰色粗砂））の6点、奈良時代の五条条間北小路南側溝S D 2006より採取された試料10（灰色砂質土）から試料12（淡灰褐色粘土）の3点の計11点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1 cm³を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 6) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や

類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

4 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉23、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉23、シダ植物孢子2形態の計52である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図1、図2に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真（図3）に示した。また、寄生虫卵についても同定した結果、3分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、モクセイ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ニワトコ属-ガマズミ属

〔草本花粉〕

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ササゲ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属、ベニバナ

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

〔寄生虫卵〕

回虫卵、鞭虫卵、異形吸虫類卵？

(2) 花粉群集の特徴

1) A発掘区 溝S D 121（試料A・B）

いずれの試料も花粉密度が低く、ほとんど検出されない。

2) F発掘区 五条条間北小路北側溝S D 2005 b-第5層～c-第1層（試料8～試料3）・図1

下位より花粉構成と花粉組成変化の特徴を記載する。

表1 平城京第608次調査 花粉分析結果

分類群	学名	和名	A発掘区		F発掘区									
			SD121		SD2005c	SD2005b					SD2006			
			A	B	第1層	第1層	第2層	第3層	第4層	第5層	10	11	12	
<hr/>														
Arboreal pollen		樹木花粉												
<i>Podocarpus</i>		マキ属										1	1	
<i>Abies</i>		モミ属			1	7	7	1				1	7	1
<i>Tsuga</i>		ツガ属			1	4	7	2				4	5	4
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属複雑管束亜属		1	4	12	17	14				1	21	16
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	2	1	13	34	23	7	3			5	26	24
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ	1		2	1	1							
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科												
<i>Juglans</i>		クルミ属			1	7	14	3				1	17	18
<i>Alnus</i>		ハンノキ属		1					1			1	1	1
<i>Betula</i>		カバノキ属			2			1	1			1	1	1
<i>Corylus</i>		ハシバミ属										2		2
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ			1			1	1	1			1	3
<i>Castanea crenata</i>		クリ							1				1	1
<i>Castanopsis</i>		シイ属	1		3	3	2	4	1				12	20
<i>Fagus</i>		ブナ属				3	1						1	2
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	2		8	6	9	7				4	29	13
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	2		4	15	15	13				6	14	19
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ				1							2	2
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ						2					1	1
<i>Acer</i>		カエデ属			1									
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ							1			1		
<i>Vitis</i>		ブドウ属			47								1	24
Oleaceae		モクセイ科												
<hr/>														
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉												
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科												
<i>Rosaceae</i>		バラ科												
<i>Leguminosae</i>		マメ科												
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニワトコ属-ガマズミ属												
Nonarboreal pollen		草本花粉												
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属											2	
Gramineae		イネ科	8	1	24	149	145	42	6			67	227	149
<i>Oryza type</i>		イネ属型			2	1	2	7					3	9
Cyperaceae		カヤツリグサ科		1	2	39	33	5				4	37	22
<i>Anellema keisak</i>		イボクサ				1	1							
<i>Monochoria</i>		ミズアオイ属				2	1							
<i>Polygonum</i>		タデ属				2			1					1
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節				2	5						2	
<i>Rumex</i>		ギシギシ属				2								
<i>Fagopyrum</i>		ソバ属				1	1						1	2
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科			2	46	42	8				2	4	6
Caryophyllaceae		ナデシコ科				6	3						1	1
<i>Ranunculus</i>		キンボウゲ属				2								
Cruciferae		アブラナ科	1		1	8	3	2					4	2
<i>Vigna</i>		ササゲ属					1							
Hydrocotyloideae		チドメグサ亜科	2	1	2	24	3	3	1			1	7	5
Apiioideae		セリ亜科			1	8	2					1	11	7
<i>Plantago</i>		オオバコ属	1			5	2	1						
<i>Actinostemma lobatum</i>		ゴキツル				4								3
Lactuicoideae		タンポポ亜科				9	4	2				1	7	
Asteroideae		キク亜科	2		2	8	4					1	4	2
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	5	3	13	57	38	12				17	36	25
<i>Carthamus tinctorius</i>		ベニバナ						1						
Fern spore		シダ植物胞子												
Monolate type spore		単条溝胞子	13	2	6	4	7	1	1			9	7	8
Trilate type spore		三條溝胞子	1	1	1	3	6	1				2	13	4
Arboreal pollen		樹木花粉	8	3	88	93	101	55	5	0		27	141	152
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	1	0	1	4	2	6	0	0		1	6	8
Nonarboreal pollen		草本花粉	19	6	49	376	291	83	7	0		94	346	234
Total pollen		花粉総数	28	9	138	473	394	144	12	0		122	493	394
Pollen frequencies of 1cm ³		試料 1cm ³ 中の花粉密度												
			1.7	6.0	6.7	6.4	3.8	5.3	7.8	0.0		7.9	4.2	2.9
			× 10 ²	× 10	× 10 ²	× 10 ³	× 10 ³	× 10 ²	× 10			× 10 ²	× 10 ³	× 10 ³
Unknown pollen		未同定花粉	0	1	9	14	7	4	1	0		9	14	9
Fern spore		シダ植物胞子	14	3	7	7	13	2	1	0		11	20	12
Helminth eggs		寄生虫卵												
<i>Ascaris(lumbricoides)</i>		回虫卵				3	1	1						
<i>Trichuris(trichiura)</i>		鞭虫卵				1	1	1						
<i>Metagonimus-Heterophyes</i> ?		異形吸虫類卵?				1								
Total		計												
			0	0	0	5	2	2	0	0		0	0	0
Helminth eggs frequencies of 1cm ³		試料 1cm ³ 中の寄生虫卵密度	0.0	0.0	0.0	3.5	1.4	0.7	0.0	0.0		0.0	0.0	0.0
						× 10	× 10	× 10						
Charcoal fragments		微細炭化物												
			(+)	(+)		(+)	(+)			(+)	(+)	(+)	(+)	(+)

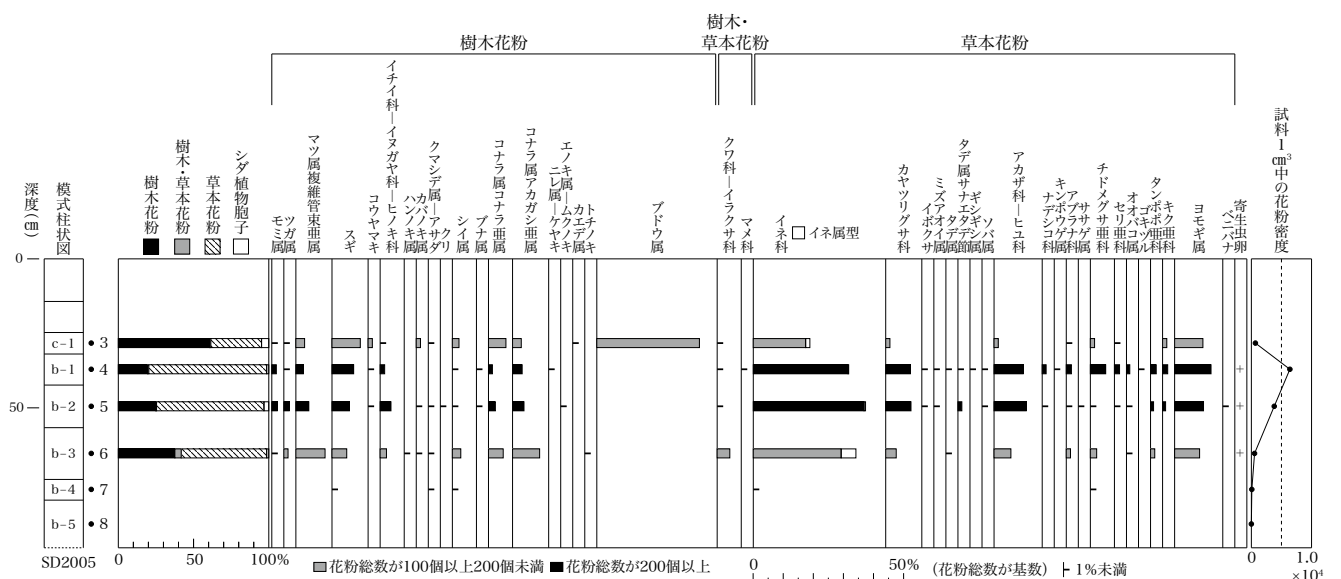


図1 平城京第 608 次調査 F 発掘区 S D 2005b・c の花粉ダイアグラム

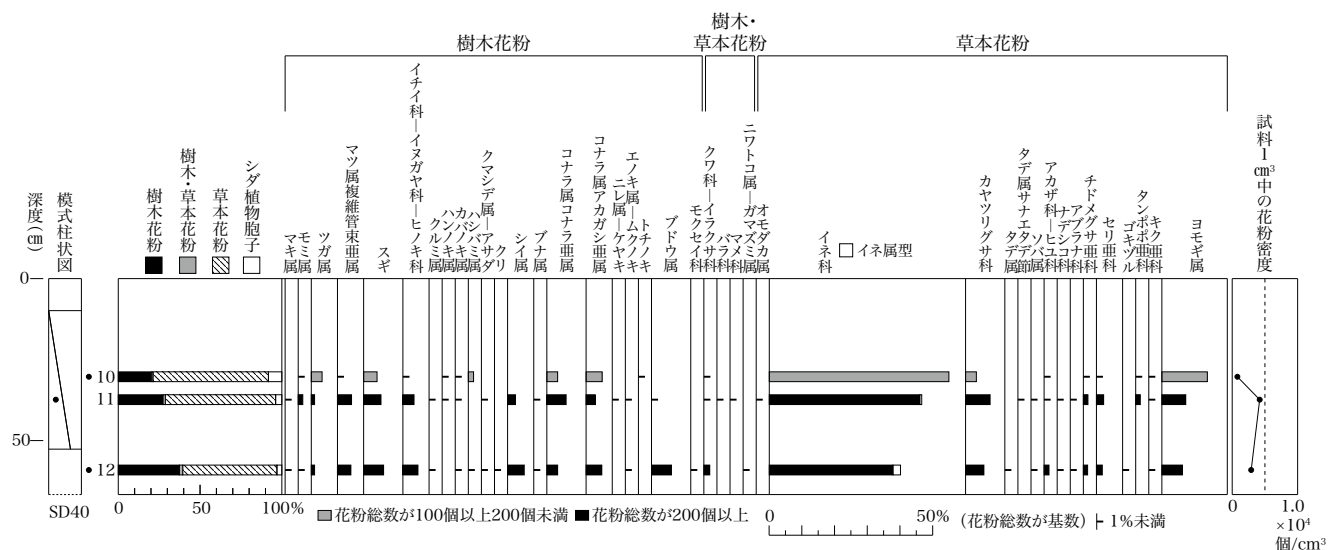


図2 平城京第 608 次調査 F 発掘区 S D 2006 の花粉ダイアグラム

- b-第5層、b-第4層 (試料8、試料7)
花粉密度が極めて低く、ほとんど検出されない。
- b-第3層 (試料6)
樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、約 55% を占める。草本花粉ではイネ科 (イネ属型を含む) を主に、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、カヤツリグサ科などが出現する。樹木花粉ではマツ属複雑管束亜属、コナラ属アカガシ亜属、スギ、コナラ属コナラ亜属などが出現する。回虫卵、鞭虫卵がわずかに検出された。
- b-第2層、b-第1層 (試料5、試料4)
いずれの試料も類似した出現傾向を示し、草本花粉が約 70%以上を占める。草本花粉ではイネ科が優勢し、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属などが伴われる。b-第2層 (試料5) でベニバナ、ササゲ属、

- 両試料からソバ属がわずかに出現する。樹木花粉ではスギ、マツ属複雑管束亜属、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などが出現する。b-第2層 (試料5) では回虫卵、鞭虫卵が、b-第1層 (試料4) では回虫卵、鞭虫卵、異形吸虫類卵? (小蓋が欠落し断定できないため) がわずかに検出された。
 - c-第1層 (試料3)
樹木花粉が約 60%を占め、花粉密度は低くなる。ブドウ属が高率に出現し、スギ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複雑管束亜属などが低率に出現する。草本花粉ではイネ科 (イネ属型を含む)、ヨモギ属などが出現する。
- 3) F 発掘区 五条条間北小路南側溝 S D 2006 (試料

12 から試料 10)・図 2

下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

・試料 12

草本花粉の占める割合が高く、約 55%を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が多く出現し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、ソバ属などが出現する。樹木花粉ではスギ、ブドウ属、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属などが低率に出現する。

・試料 11

草本花粉の占める割合が高くなる。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが増加し、ソバ属がわずかに認められた。樹木花粉ではブドウ属、シイ属が減少する。

・試料 10

花粉密度が低くなり、草本花粉の占める割合がさらに高くなる。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が増加する。樹木花粉ではツガ属、コナラ属アカガシ亜属がやや増加する。

5 考察

1) A発掘区 溝SD 121

いずれの試料も花粉密度が低く、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積時間が速かったことなどが考えられる。したがって、溝SD 121は常時滞水する溝ではなかったとみなされる。

2) F発掘区 五条条間北小路北側溝SD 2005b・c

下位より、b-第5層・第4層は、花粉密度が極めて低く、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積時間が速かったことなどが考えられる。

b-第3層の時期は、イネ科、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、カヤツリグサ科などが生育していた。いずれも人里植物および畑作雑草であり、周囲にやや乾燥した環境が分布していたと推定される。なお、イネ属型が検出されることから、周辺に水田の分布も推定される。近隣には、マツ属複維管束亜属、スギなどの針葉樹と、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属などの広葉樹が分布し、地域的な森林要素であったと考えられる。寄生虫卵がわずかに検出された。生活汚染程度であることから、堆積地に近接して生活域が分布していたと推定される。

b-第2層、b-第1層の時期は、人里植物ないし畑作雑草であるアカザ科-ヒユ科、ヨモギ属などの草本が

生育していた。水生植物であるイネ科、カヤツリグサ科が増加し、少ないながらイネ属型が水田雑草のミズアオイ属などと共に出現することから、周辺地域で水田が拡大したと考えられる。ソバ属、ササゲ属、ベニバナの有用植物が検出された。寄生虫卵も出現することから、居住域からの汚染が示唆される。

c-第1層（試料3）の時期は、地域的な森林および周辺の環境は下部と大差がない。高率に出現するブドウ属は、現地生が高いと考えられ、ブドウ、エビヅル、ヤマブドウ、サンカクヅルなどが生育していた。溝廃絶時の周辺の様相を示していると思われる。

3) F発掘区 五条条間北小路南側溝SD 2006

下位より、試料12の時期はイネ科が極めて多く、ヨモギ属、カヤツリグサ科が生育し、ブドウ属も現地生が高いことから周辺に生育していたと思われる。イネ科が極めて多く、集落域などの人為地の環境が示唆される。また、イネ属型やソバ属などの有用植物も検出された。近隣には、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、マツ属複維管束亜属などの針葉樹と、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属などの広葉樹が分布し、地域的な森林要素であったと考えられる。

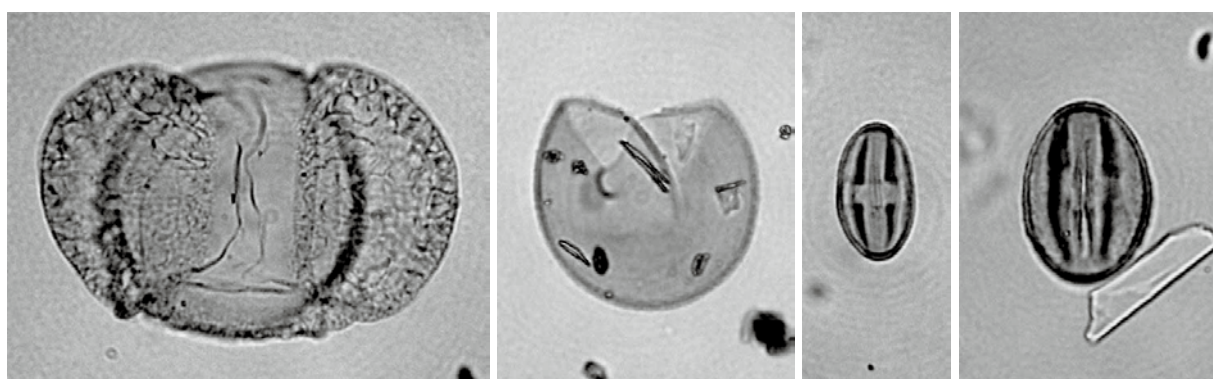
試料11の時期は、現地生が高いと考えられたブドウ属が減少し、試料10の時期では、花粉密度が低くなり、イネ科、ヨモギ属が増加することからやや乾燥化したと考えられる。

6 まとめ

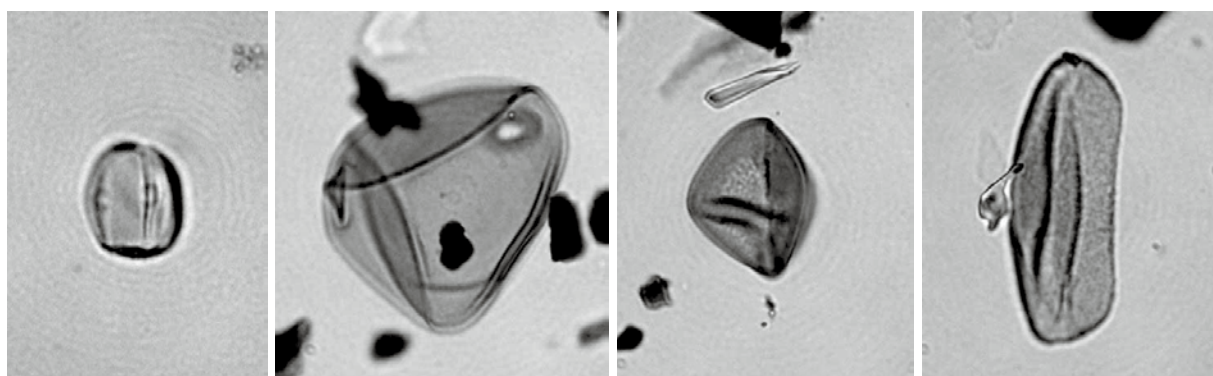
A発掘区の奈良時代の溝SD 121、F発掘区の奈良時代の五条条間北小路北側溝SD 2005b・c、F発掘区の奈良時代の五条条間北小路南側溝SD 2006の花粉分析の結果、いずれもイネ科を主にヨモギ属またはカヤツリグサ科やアカザ科-ヒユ科が生育し、やや乾燥した集落域や畑地の人為環境が示唆された。有用植物としてイネ属型、ソバ属、ササゲ属が検出された。

参考文献

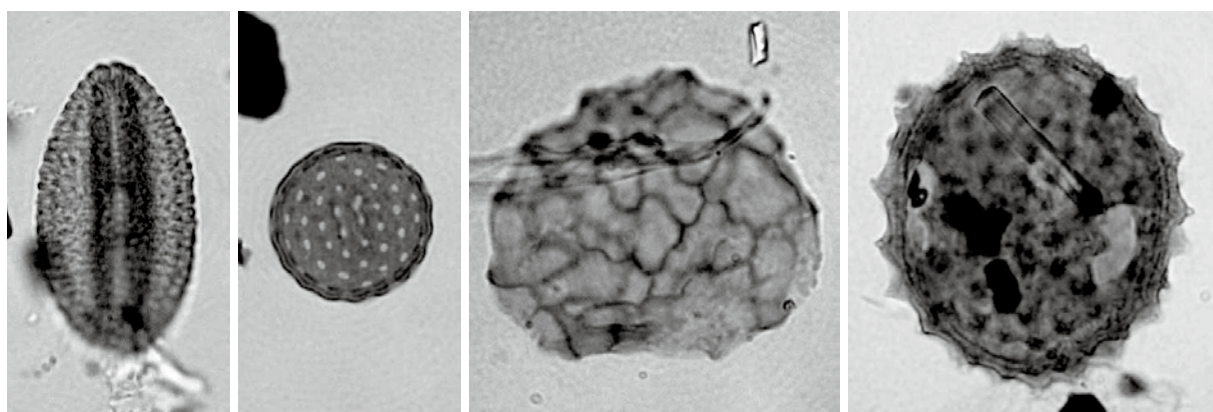
- 金原正明 (1993) 「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本 第10巻古代資料研究の方法』角川書店, p.248-262.
- 島倉巳三郎 (1973) 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集, 60p.
- 中村純 (1967) 『花粉分析』古今書院, p.82-110.
- 中村純 (1974) 「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として」『第四紀研究』13, p.187-193.
- 中村純 (1977) 「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号, p.21-30.
- 中村純 (1980) 「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集, 91p.



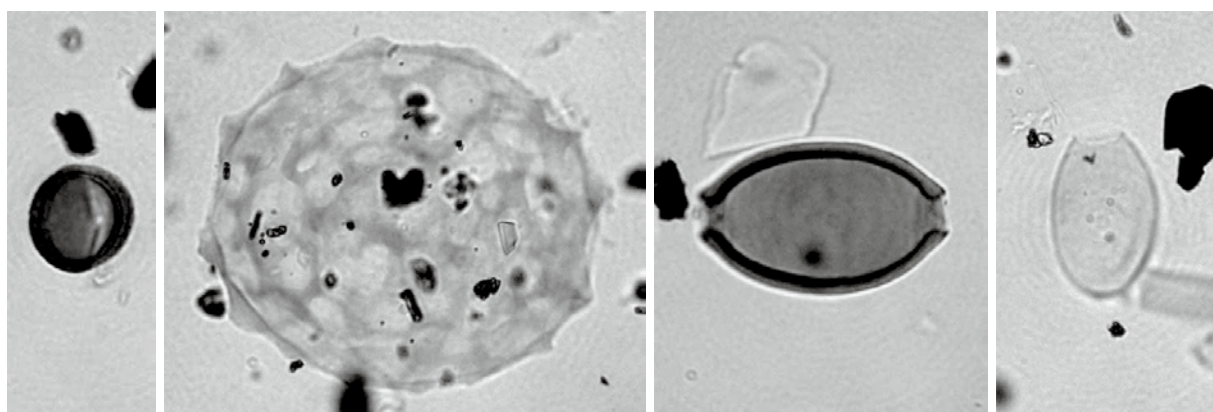
1 マツ属複維管束胚属 2 スギ 3 シイ属 4 コナラ属アカガシ胚属



5 ブドウ属 6 イネ属型 7 カヤツリグサ科 8 ミズアオイ属



9 ソバ属 10 アカザ科-ヒユ科 11 ササゲ属 12 ベニバナ



13 ヨモギ属 14 回虫卵 15 鞭虫卵 16 異形吸虫類卵

— 10 μ m

図3 平城京第608次調査 花粉・寄生虫卵顕微鏡写真

II 珪藻分析

1 はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

2 試料

分析試料は、F発掘区で検出した奈良時代の五条条間北小路北側溝 S D 2005b の第4層から採取された試料7（暗灰色粘質土）、奈良時代の五条条間北小路南側溝 S D 2006 から採取された試料12（淡灰褐色粘土）の2点である。

3 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から 1 cm³ を採量
- 2) 10% 過酸化水素水を加え、加温反応させながら 1 晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（5～6回）
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラートを作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 600～1500 倍で行った。計数は珪藻被殻が 200 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査をした。

4 結果

(1) 分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）9 分類群である。表 1 に分析結果を示す。また、出現した主要な分類群について顕微鏡写真を示した。以下に表記した分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

Amphora copulata, *Amphora montana*, *Cymbella naviculiformis*, *Cymbella tumida*, *Eunotia minor*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula clementioides*, *Navicula cuspidata*, *Rhopalodia gibberula*

(2) 珪藻群集の特徴

- 1) F 発掘区 五条条間北小路北側溝 S D 2005 b - 第4層（試料7）

表 2 平城京第 608 次調査 珪藻分析結果

分類群	F 発掘区	
	SD2005b 第4層 (7)	SD2006 12
貧塩性種 (淡水生種)		
<i>Amphora copulata</i>		1
<i>Amphora montana</i>	2	
<i>Cymbella naviculiformis</i>	2	
<i>Cymbella tumida</i>	1	
<i>Eunotia minor</i>	1	
<i>Hantzschia amphioxys</i>		1
<i>Navicula clementioides</i>	1	
<i>Navicula cuspidata</i>		1
<i>Rhopalodia gibberula</i>		1
合計	7	4
未同定	0	0
破片	4	16
試料 1 cm ³ 中の殻数密度	2.4 × 10 ³	1.2 × 10 ³
完形殻保存率 (%)	-	-

珪藻密度が極めて低く、陸生珪藻の *Amphora montana*、流水不定性種で沼沢湿地付着生環境指標種群の *Cymbella naviculiformis*、好止水性種の *Cymbellatumida*、好止水性種で沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor*、流水不定性種の *Navicula clementioides* がわずかに出現する。

- 2) F 発掘区 五条条間北小路南側溝 S D 2006（試料12）

珪藻密度が極めて低く、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、流水不定性種の *Amphora copulata*、*Navicula cuspidata*、*Rhopalodia gibberula* がわずかに出現する。

5 考察

- 1) F 発掘区 五条条間北小路北側溝 S D 2005 b - 第4層（試料7）

珪藻密度が極めて低く、陸生珪藻、好止水性種、流水不定性種がわずかに出現する。珪藻の生育しにくい乾燥した環境が示唆され、溝は珪藻の繁殖できない短期間、雨水等が流れる溝であったと推定される。

- 2) F 発掘区 五条条間北小路南側溝 S D 2006（試料12）

珪藻密度が極めて低く、陸生珪藻、流水不定性種がわずかに出現するのみで、珪藻の生育しにくい乾燥した環境が示唆され、溝は珪藻の繁殖できない短期間、雨水等が流れる溝であったと推定される。

参考文献

- Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, p. 131-506.
- Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch. Center.
- Krammer, H., Lange-Bertalot (1986-1991) Cillariophyceae. 1-4.

Asai,K.&Watanabe,T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10,p.35-47.

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42,p.73-88.

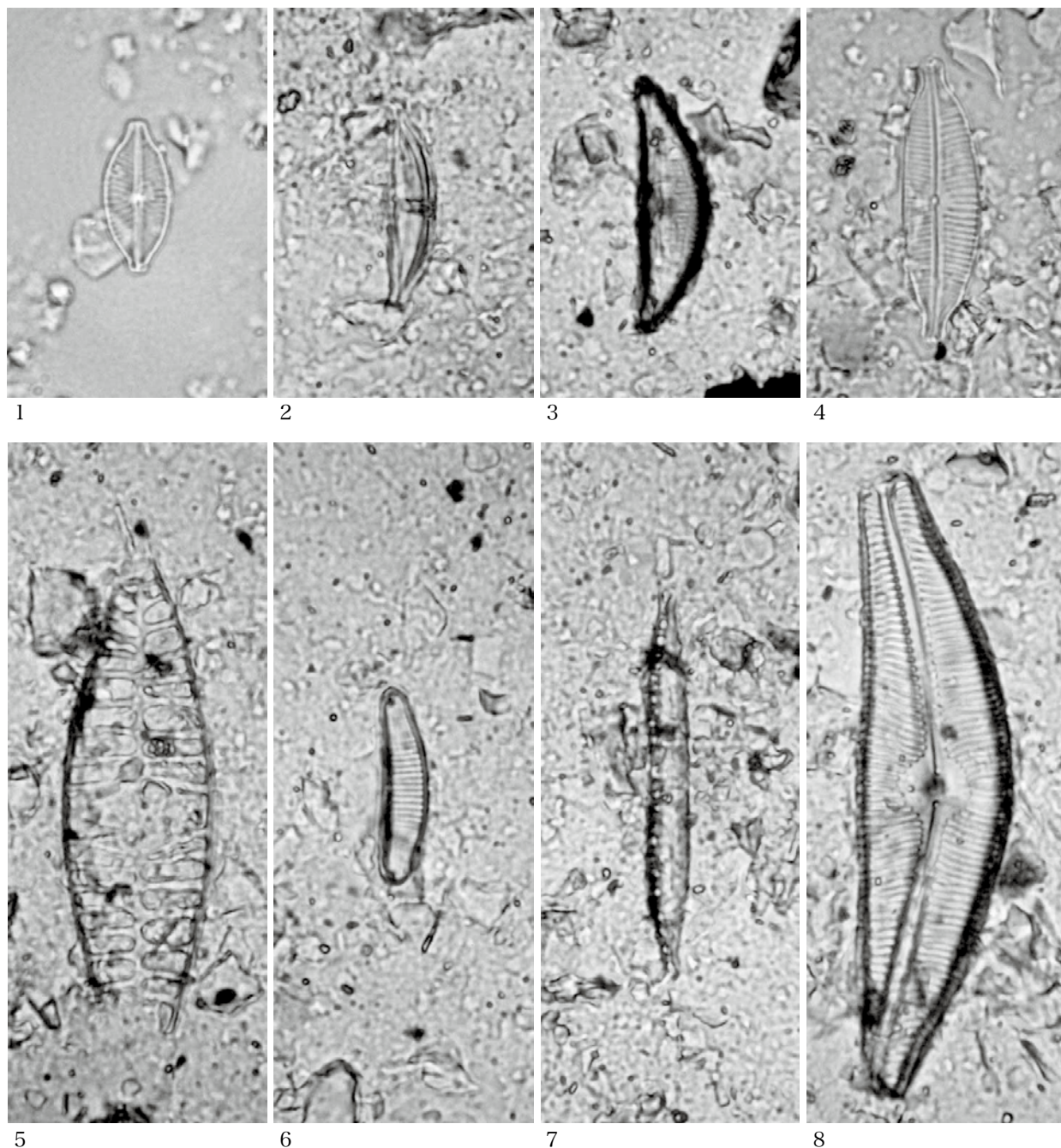
伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環

境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p.23-45.

小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29-44.

小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27,p.1-20.

渡辺仁治 (2005) 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数 DAIPo, pH 耐性能. 内田老鶴圃, pp.666.



1. *Navicula clementioides* 2. *Amphora montana* 3. *Amphora copulata* 4. *Cymbella naviculiformis*
5. *Navicula cuspidata* 6. *Eunotia minor* 7. *Hantzschia amphioxys* 8. *Cymbella tumida*

図4 平城京第608次調査 珪藻顕微鏡写真

IV 樹種同定

1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的隣隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2 試料

試料は、F 発掘区で検出した奈良時代の五条条間北小路北側溝 S D 2005b 内の護岸の杭列 SX822 の杭材 8 点〈木杭 2・3・5～10〉である。

3 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柎目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって 40～1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4 結果

主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

モミ属 *Abies* マツ科 図 5-1（木杭 6）

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で 1 分野に 1～4 個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりモミ属に同定される。モミ属は日本に 5 種が自生し、そのうちウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの 4 種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ 45 m、径 1.5 m に達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。〈木杭 2・5～8〉

ツガ属 *Tsuga* マツ科 図 5-2（木杭 3）

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞及び放射仮道管から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型でややヒノキ型の傾向を示し、1 分野に 2～4 個存在する。放射仮道管が存在し、その壁には小型の有縁壁孔が存在する。わずかではあるが、樹脂細胞が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりツガ属に同定される。ツガには、ツガ、

コメツガがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ 20～25 m、径 50～80cm である。材は耐朽性、保存性はともに中庸で、建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。〈木杭 3〉

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 図 5-3（木杭 9）

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で 1 分野に 2 個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15 細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ 40 m、径 1.5 m に達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱であり、耐朽性、耐湿性はともに高い。良材であり、建築など広く用いられる。〈木杭 9・10〉

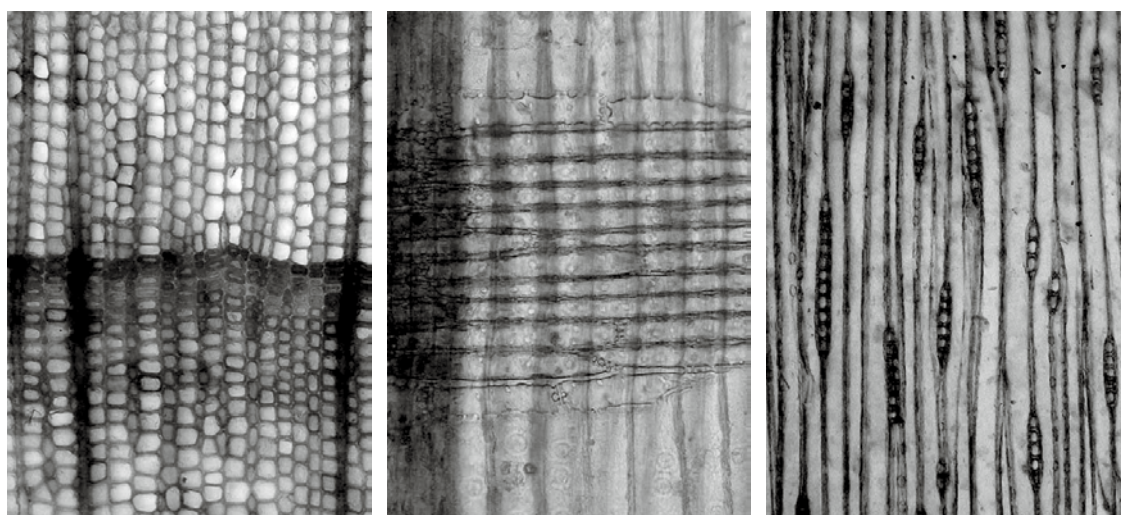
5 所見

同定の結果、F 発掘区で検出した奈良時代の五条条間北小路北側溝 S D 2005b 内の護岸の杭列 SX822 の杭材は、モミ属 5 点、ツガ属 1 点、ヒノキ 2 点であった。モミ属は温帯性のモミと考えられ、木材は耐久性、保存性は低いが、軽軟なことから加工が容易な木材である。ツガ属の木材は重厚で耐朽性、保存性は中庸で、切削、加工はあまり容易でない。ヒノキの木材は木理通直で大きな材が取れる良材であり、とくに保存性が高い。モミ、ツガ属、ヒノキは温帯に広く分布する針葉樹であり、モミは谷間や緩傾斜地の適潤な深層の肥沃地を好み、ツガ属はやや痩せた尾根上等に生育する。ヒノキはやや傾斜のある適潤地を好み、急傾斜地、尾根筋、岩盤上にも生育する。近畿では山地部に照葉樹に混じり生育する。以上のことから、護岸の杭列 S X 822 の杭材は当時遺跡周辺に生育していたか、近隣地域からの流通の範囲でもたらず事の出来る木材であったといえる。

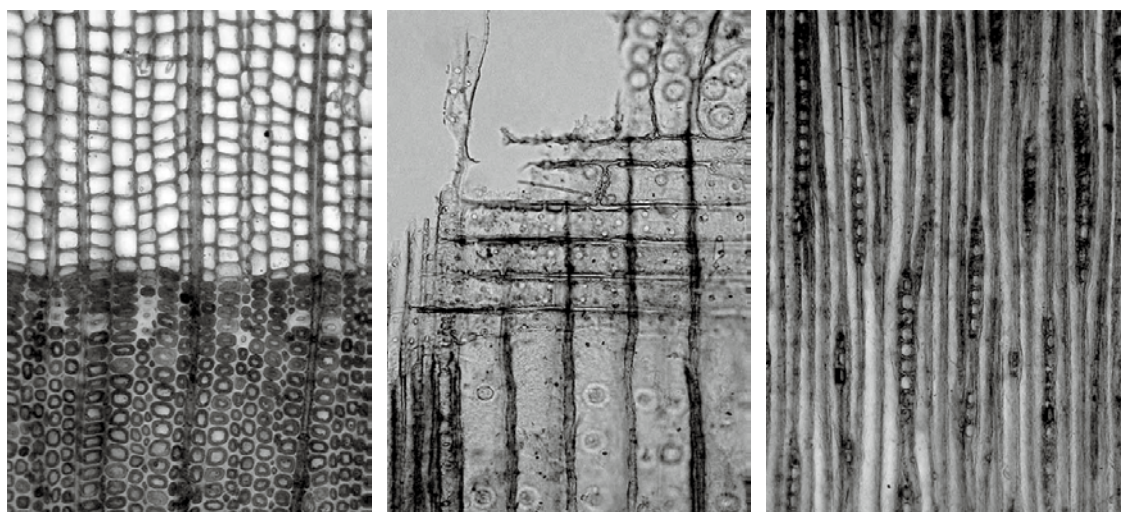
（株式会社 古環境研究所）

参考文献

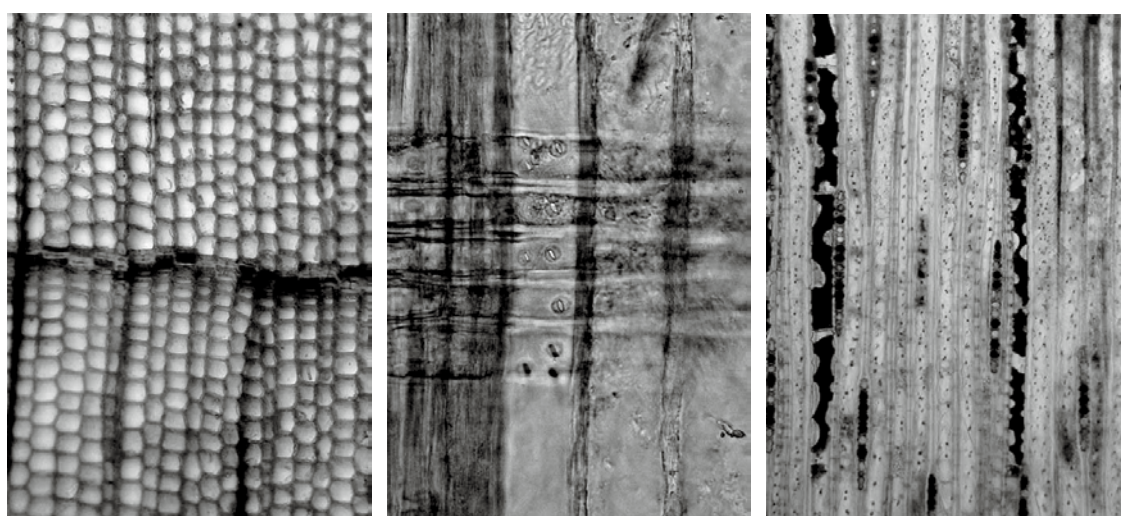
- 佐伯浩・原田浩（1985）「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版，p.20-48.
- 佐伯浩・原田浩（1985）「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版，p.49-, 100.
- 島地謙・伊東隆夫（1988）『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣，p.296
- 山田昌久（1993）「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究』特別第 1 号，植生史研究会，p.242



横断面 ————— : 0.2mm 放射断面 ————— : 0.1mm 接線断面 ————— : 0.2mm
1. 木杭6 モミ属



横断面 ————— : 0.2mm 放射断面 ————— : 0.1mm 接線断面 ————— : 0.2mm
2. 木杭3 ツガ属



横断面 ————— : 0.2mm 放射断面 ————— : 0.05mm 接線断面 ————— : 0.2mm
3. 木杭9 ヒノキ

図5 平城京第608次調査 木材の断面写真

3. 平城京第 622 次調査における自然科学分析

I 花粉分析

1 はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2 試料

分析試料は、左京五条四坊九坪東辺の雨落溝 S D 106 より採取された No. 3、及び南辺の雨落溝 S D 114b より採取された No. 5、同十坪北辺の雨落溝 S D 119 より採取された No. 8、同十五坪西辺の雨落溝 S D 104 より採取された No. 10、同十六坪南辺の雨落溝 S D 148b より採取された No. 13、五条条間北小路北側溝 S D 2005b より採取された No. 16・18、同 a より採取された No. 14 の計 8 点（いずれも奈良時代の埋土）である。

3 方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から 1 cm³ を採量
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加え 15 分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理

を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

4 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 26、樹木花粉と草本花粉を含むもの 5、草本花粉 25、シダ植物胞子 2 形態の計 58 である。これらの学名と和名および粒数を表 1 に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図 2 に示す。なお、200 個未満であっても 100 個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真（図 1）に示した。また、寄生虫卵についても同定した結果、3 分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、モチノキ属、トチノキ、ブドウ属、ミズキ属、ツツジ科、カキ属、モクセイ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ゴマノハグサ科、ニワトコ属-ガマズミ属

〔草本花粉〕

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、ネギ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、キカシグサ属、アカバナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属、ベニバナ

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

回虫卵、鞭虫卵、マンソン裂頭条虫卵

(2) 花粉群集の特徴

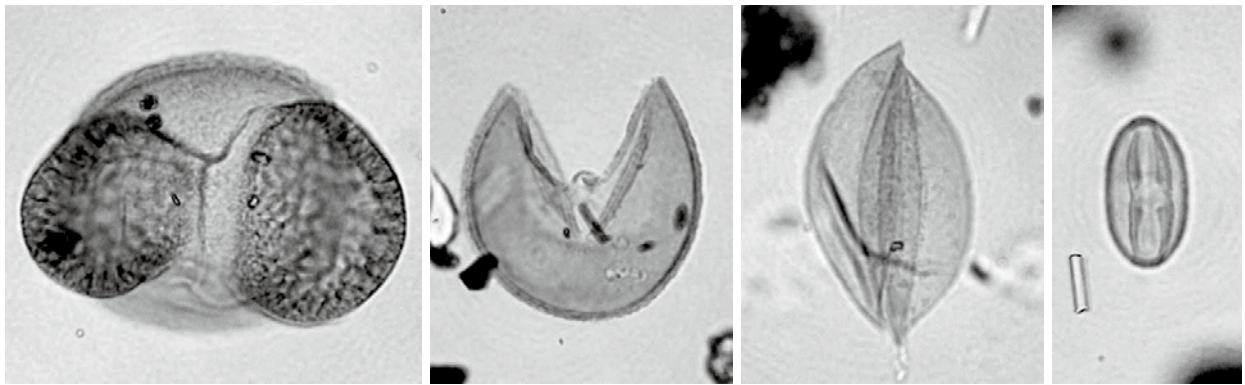
1) 九坪東辺の雨落溝 S D 106（試料 No. 3）

花粉密度は低く、樹木花粉と草本花粉の占める割合はほぼ同じである。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属を主に、シイ属、スギ、マツ属複維管束亜属などが出現する。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、ミズ

表1 平城京第622次調査 花粉分析結果

分類群	学名	和名	九坪	九坪	十坪	十五坪	十六坪	五条条間北小路北側溝		
			SD106 No.3	SD114b No.5	SD119 No.8	SD102 No.10	SD148b No.13	SD2005 (b)No.16	(b)No.18	(a)No.14
Arboreal pollen		樹木花粉								
	<i>Podocarpus</i>	マキ属				1				
	<i>Abies</i>	モミ属	2		2	1	6	3	3	4
	<i>Tsuga</i>	ツガ属	1		1	5	5	1	4	3
	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	5		1	62	9	14	24	8
	<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	11	1	4	36	25	26	34	38
	<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ						1	2	1
	Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	4		2	26	11	7	12	11
	<i>Salix</i>	ヤナギ属				2				
	<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1					1		1
	<i>Betula</i>	カバノキ属	1				2		3	2
	<i>Corylus</i>	ハシバミ属				2				2
	<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ				3	3	1	2	3
	<i>Castanea crenata</i>	クリ	1		2	1		2	1	
	<i>Castanopsis</i>	シイ属	12	3	2	20	11	13	7	5
	<i>Fagus</i>	ブナ属				3				2
	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	28	4	9	28	45	23	27	41
	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	26	6	8	34	19	27	19	19
	<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	1	1		2	1	1	4	1
	<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ					1	1		
	<i>Ilex</i>	モチノキ属	1							1
	<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ	1			1				
	<i>Vitis</i>	ブドウ属						2		
	<i>Cornus</i>	ミズキ属				1				
	Ericaceae	ツツジ科								1
	<i>Diospyros</i>	カキ属								1
	Oleaceae	モクセイ科								1
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉								
	Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	3				3	1	2	5
	Rosaceae	バラ科				1	1	3		
	Leguminosae	マメ科				2	1		1	
	Scrophulariaceae	ゴマノハグサ科						1		
	<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属				1				
Nonarboreal pollen		草本花粉								
	<i>Sagittaria</i>	オモダカ属				2	1	3		
	Gramineae	イネ科	40 *	8	35	198	147	160	141	142 *
	<i>Oryza type</i>	イネ属型	1			6	1	6		4
	Cyperaceae	カヤツリグサ科	9			24	14	16	14	30
	<i>Aneilema keisak</i>	イボクサ			1	4		1		1
	<i>Monochoria</i>	ミスアオイ属	1						5	
	<i>Allium</i>	ネギ属							1	
	<i>Polygonum</i>	タデ属							2	1
	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節			2		1		3	
	<i>Rumex</i>	ギンギシ属					2		1	
	<i>Fagopyrum</i>	ソバ属				2				
	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1		4	6	23	6	42	6
	Caryophyllaceae	ナデシコ科			1	1	1	2	1	2
	<i>Ranunculus</i>	キンボウゲ属							1	
	Cruciferae	アブラナ科	1		2	3	6	7	4	1
	<i>Rotala</i>	キカシグサ属				6	1			
	Onagraceae	アカバナ科	1							
	Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	1	1	3	16	8	4	10	5
	Apioidae	セリ亜科	2			7	1	2	2	7
	<i>Plantago</i>	オオバコ属						2	1	7
	<i>Actinostemma lobatum</i>	ゴキヅル				1	1			
	Lactuoidae	タンポポ亜科				1		1		
	Asteroidae	キク亜科			2	3	3	4	3	3
	<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	14	3	33	32	25	17	39	31
	<i>Carthamus tinctorius</i>	ベニバナ								1
Fern spore		シダ植物孢子								
	Monolate type spore	単条溝孢子	4	2		2	4	3	3	9
	Trilate type spore	三条溝孢子	1		1	3	4	1	2	4
Arboreal pollen		樹木花粉	95	15	31	228	138	123	145	142
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	3	0	0	4	5	5	3	5
Nonarboreal pollen		草本花粉	71	12	83	312	237	230	277	240
Total pollen		花粉総数	169	27	114	544	380	358	425	387
Pollen frequencies of 1cm ³		試料 1cm ³ 中の花粉密度	1.1 × 10 ³	1.7 × 10 ²	7.4 × 10 ²	2.7 × 10 ⁴	3.4 × 10 ³	3.4 × 10 ³	1.1 × 10 ⁴	3.1 × 10 ³
Unknown pollen		未同定花粉	10	2	10	11	13	10	7	7
Fern spore		シダ植物孢子	5	2	1	5	8	4	5	13
Helminth eggs		寄生虫卵								
	<i>Ascaris(lumbricoides)</i>	回虫卵								10
	<i>Trichuris(trichiura)</i>	鞭虫卵								8
	<i>Diphyllobothrium mansonii</i>	マンソン裂頭条虫卵								1
Total		計	0	0	0	0	0	0	19	0
Helminth eggs frequencies of 1cm ³		試料 1cm ³ 中の寄生虫卵密度	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5 × 10 ²	0.0
Digestion rimeins		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments		微細炭化物	(+)		(+)	(+)	(+)		(+)	(+)

*:集塊

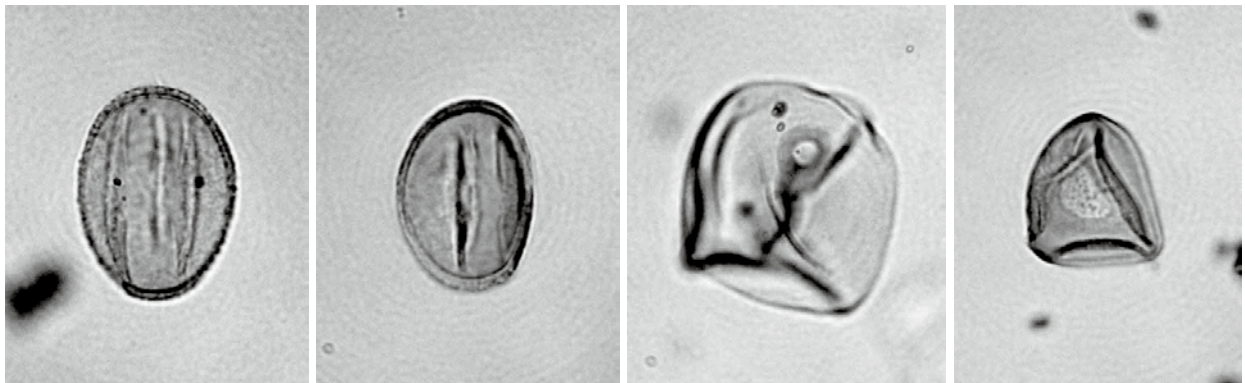


1 マツ属複維管束型属

2 スギ

3 イチイ科-イヌガヤ科
-ヒノキ科

4 シイ属

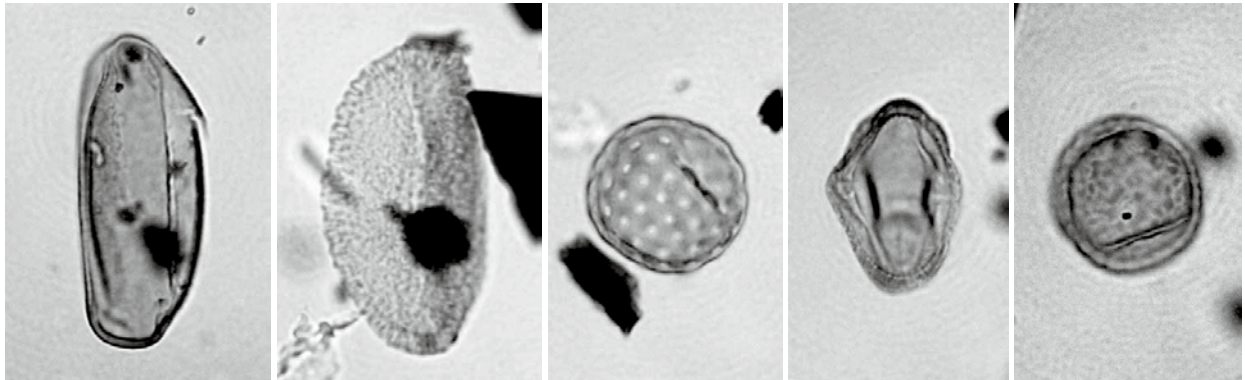


5 コナラ属コナラ型属

6 コナラ属アカガシ型属

7 イネ科

8 カヤツリグサ科



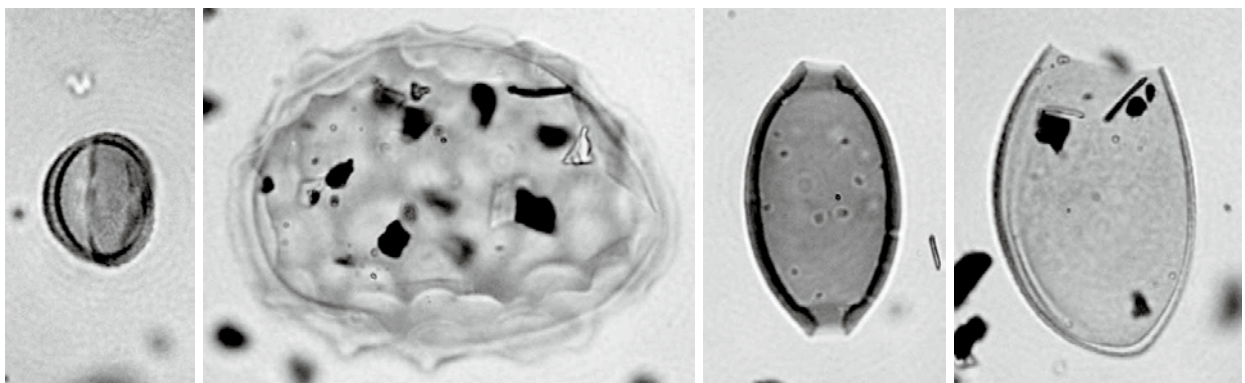
9 ミズアオイ属

10 ソバ属

11 アカザ科-ヒユ科

12 チドメグサ科

13 オオバコ属



14 ヨモギ属

15 回虫卵

16 鞭虫卵

17 マンソン裂頭条虫卵

— 10 μ m

図1 平城京第622次調査 花粉・寄生虫顕微鏡写真

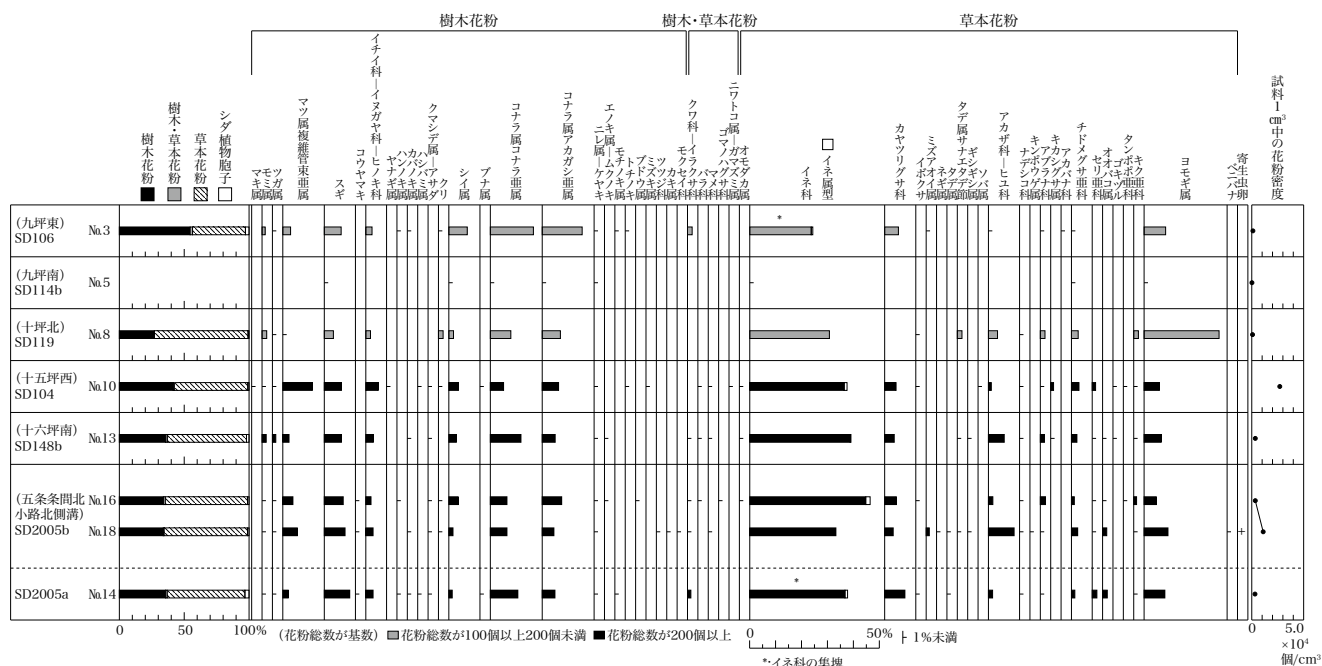


図2 平城京第 622 次調査 花粉ダイアグラム

アオイ属などが出現する。

2) 九坪南辺の雨落溝 S D 114b (試料No.5)

花粉密度が極めて低く、樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、シイ属、ニレ属-ケヤキ、スギ、草本花粉のイネ科、ヨモギ属、チドメグサ亜科がわずかに出現する。

3) 十坪北辺の雨落溝 S D 119 (試料No.8)

花粉密度は低い。草本花粉が約 70% を占める。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が優占し、アカザ科-ヒユ科、チドメグサ亜科などが低率に出現する。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、スギなどが出現する。

4) 十五坪西辺の雨落溝 S D 104 (試料No. 10)

草本花粉の占める割合が高く、約 55% を占める。草本花粉ではイネ科 (イネ属型を含む) が高率に出現し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、チドメグサ亜科が伴われ、オモダカ属、ソバ属などが出現する。樹木花粉ではマツ属複雑管束亜属、スギ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、シイ属などが出現する。

5) 十六坪南辺の雨落溝 S D 148b (試料No. 13)

草本花粉の占める割合が高く、約 60% を占める。草本花粉ではイネ科を主に、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、カヤツリグサ科などが低率に出現する。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、スギ、コナラ属アカガシ亜属などが出現する。

6) 五条条間路北小路北側溝 S D 2005b (試料No. 16、No. 18)、S D 2005a (試料No. 14)

S D 2005b の No. 16 と No. 18 では花粉構成と花粉組成ともに類似する。草本花粉の占める割合が高く、約 65% を占める。草本花粉ではイネ科が高率に出現し、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、カヤツリグサ科などが伴われる。樹木花粉ではスギ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複雑管束亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などが出現する。S D 2005b 北側溝 No. 18 では、樹木花粉のツツジ科、カキ属、モクセイ科、草本花粉ではイネ属型、オモダカ属、ミズアオイ属、ベニバナがわずかに出現し、回虫卵、鞭虫卵、マンソン裂頭条虫卵があわせて 1 cm³ 中約 150 個検出される。

S D 2005a の No. 14 では草本花粉の占める割合が高く、約 60% を占める。草本花粉ではイネ科 (イネ属型を含む) が優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが出現する。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、スギ、コナラ属アカガシ亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、マツ属複雑管束亜属などが出現する。

5 花粉分析から推定される植生と環境

それぞれの地点において花粉群集の特徴から植生の復元を行う。

1) 九坪東辺の雨落溝 S D 106 (試料No.3)

花粉密度が低く、乾燥あるいは乾湿を繰り返す環境が推定される。溝は通常は乾燥しており、雨水が流れるときのみ水が流れていたと推定される。周辺にはコナラ属

コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイ属を主に、ニヨウマツ類（マツ属複雑管束亜属）やスギの樹木とイネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などの草本が分布していた。

2) 九坪南辺の雨落溝 S D 114b (試料No.5)

花粉密度が極めて低く、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥か乾湿を繰り返す堆積環境が推定され、溝は常時は乾燥し雨水が流れる溝であったと推定される。

3) 十坪北辺の雨落溝 S D 119 (試料No.8)

花粉密度が低く、比較的乾燥した環境を好むヨモギ属とイネ科が多くアカザ科-ヒユ科、チドメグサ亜科なども生育し、周辺は乾燥した環境であった。周辺にはコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などの広葉樹が生育しスギも分布していたと考えられる。

4) 十五坪西辺の雨落溝 S D 102 (試料No.10)

イネ科にはイネ属型が伴われ、水田雑草のオモダカ属も出現する。また、栽培植物のソバ属が検出されることなどから、周辺に水田やソバの畑が分布していたと考えられる。溝の周囲にはイネ科を主としてヨモギ属、カヤツリグサ科、チドメグサ亜科などの草本が繁茂していたとみなされる。近隣の森林はマツ属複雑管束亜属の割合が高く、二次林化が行われている。他の地点とは様相が異なる。

5) 十六坪南辺の雨落溝 S D 148b (試料No.13)

周辺にはイネ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などの草本が生育し、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの広葉樹とスギ、マツ属複雑管束亜属、モミ属、ツガ属などの針葉樹が分布していた。

6) 五条条間北小路北側溝 S D 2005b (試料No.16、No.18)、S D 2005a (試料No.14)

S D 2005b のNo.16、No.18 の森林植生は、マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などの針葉樹とコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの広葉樹で構成される。S D 2005a のNo.14 ではマツ属複雑管束亜属が少ない。ともに堆積地周辺には水田の分布が示唆され、水田や溝周囲にイネ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などの草本が生育していたと見なされる。

S D 2005b のNo.18 では寄生虫卵が 1 cm^3 中約 150 個検出され、糞便の堆積ではないが生活汚染を受ける溝であったと考えられる。わずかに出現するベニバナは、植栽ではなく薬用に起因する可能性が示唆される。また S D 2005b のNo.18 の時期には樹木花粉のツツジ科、

カキ属、モクセイ科が出現しており、これらの樹木が植栽されていた可能性が考えられる。

6 まとめ

左京五条四坊九坪の東辺の雨落溝 S D 106 (試料No.3) と南辺の雨落溝 S D 114b (試料No.5)、同十坪北辺の雨落溝 S D 119 (試料No.8) は、いれも花粉密度が低く、花粉の分解が行われるような常時は乾燥した溝であったと考えられた。同十六坪南辺の雨落溝 S D 148b (試料No.13)、五条条間北小路北側溝 S D 2005a (試料No.14) では、イネ科を主に、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などの草本と、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの広葉樹とスギの針葉樹が分布していた。同十五坪西辺の雨落溝 S D 102 (試料No.10) と五条条間北小路北側溝 S D 2005b (試料No.16・No.18) は、マツ属複雑管束亜属の割合が高く、二次林化が行われており、他の地点より時期が下ると考えられた。また、試料No.18 では寄生虫卵がやや多く、生活汚染を受ける溝であったと考えられ、周囲にツツジ科、カキ属、モクセイ科が植栽されていたと考えられた。

参考文献

- 金原正明 (1993) 「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本 第10巻古代資料研究の方法』角川書店, p.248-262.
島倉巳三郎 (1973) 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館 館収蔵目録』第5集, 60p.
中村純 (1967) 『花粉分析』古今書院, p.82-102.
中村純 (1974) 「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として」『第四紀研究』13, p.187-193.
中村純 (1977) 「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号, p.21-30.
中村純 (1980) 「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集, 91p.

II 樹種同定

1 はじめに

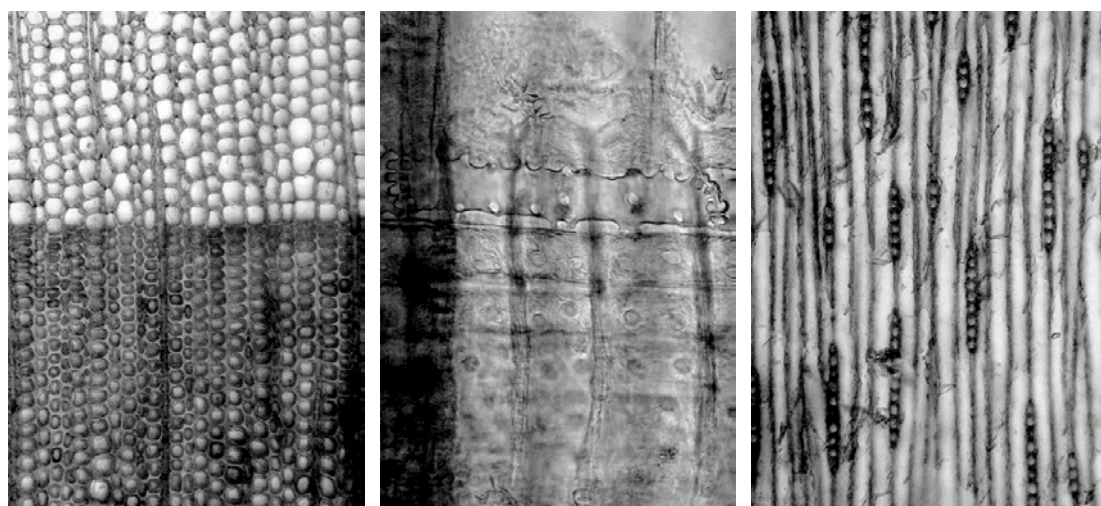
木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2 試料

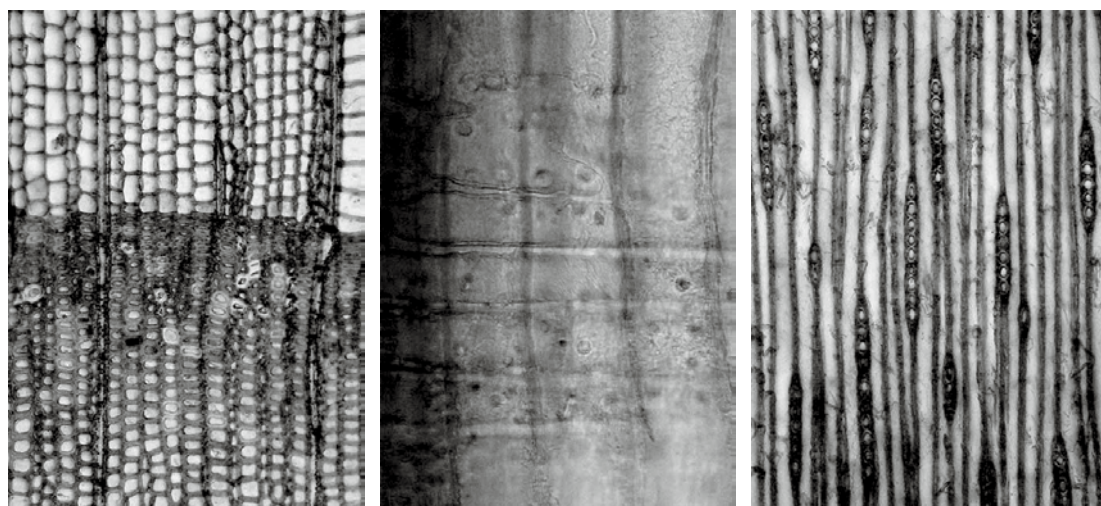
試料は、五条条間北小路北側溝 S D 2005 内の杭列 S X 811 ~ 813・815・東四坊坊間東小路西側溝 S D 1011 内の杭列 S X 810 および九坪西辺を画する築地 S A 220 上の杭列 S X 814 の各遺構から出土した杭材 29 点である。

3 方法

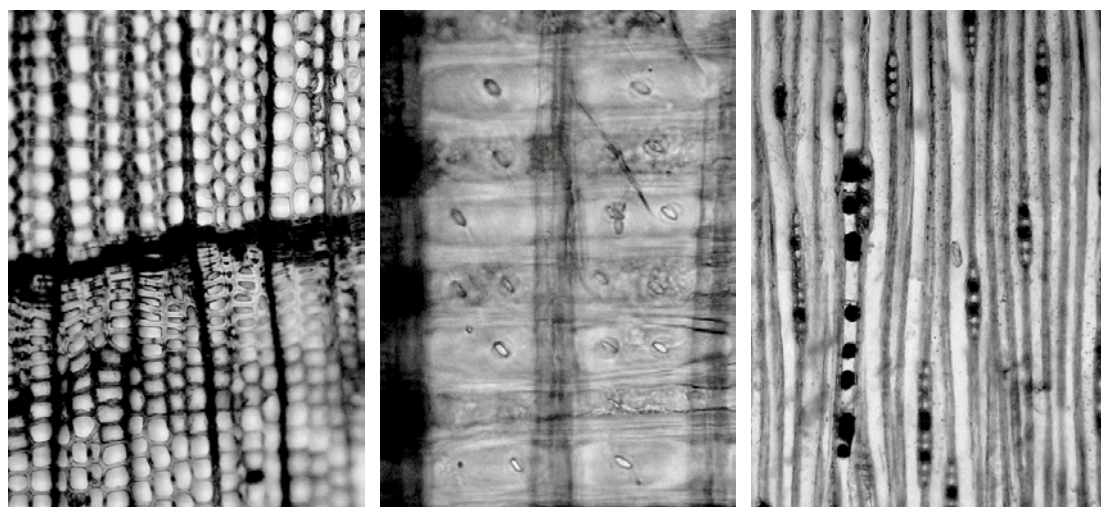
カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、



横断面 ————— : 0.2mm 放射断面 ————— : 0.05mm 接線断面 ————— : 0.2mm
1. No.7 モミ属

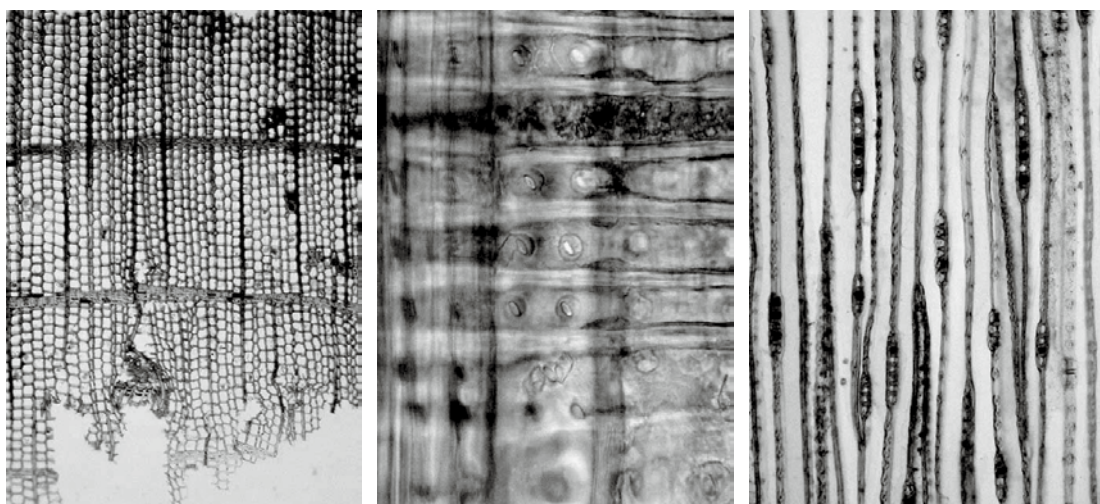


横断面 ————— : 0.2mm 放射断面 ————— : 0.05mm 接線断面 ————— : 0.2mm
2. No.9 ツガ属

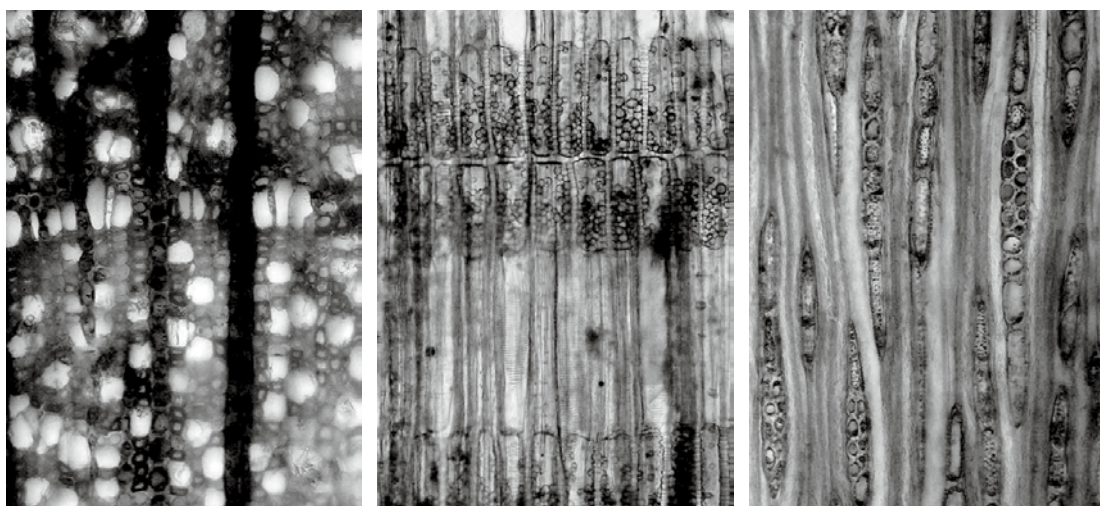


横断面 ————— : 0.2mm 放射断面 ————— : 0.02mm 接線断面 ————— : 0.2mm
3. No.2 ヒノキ

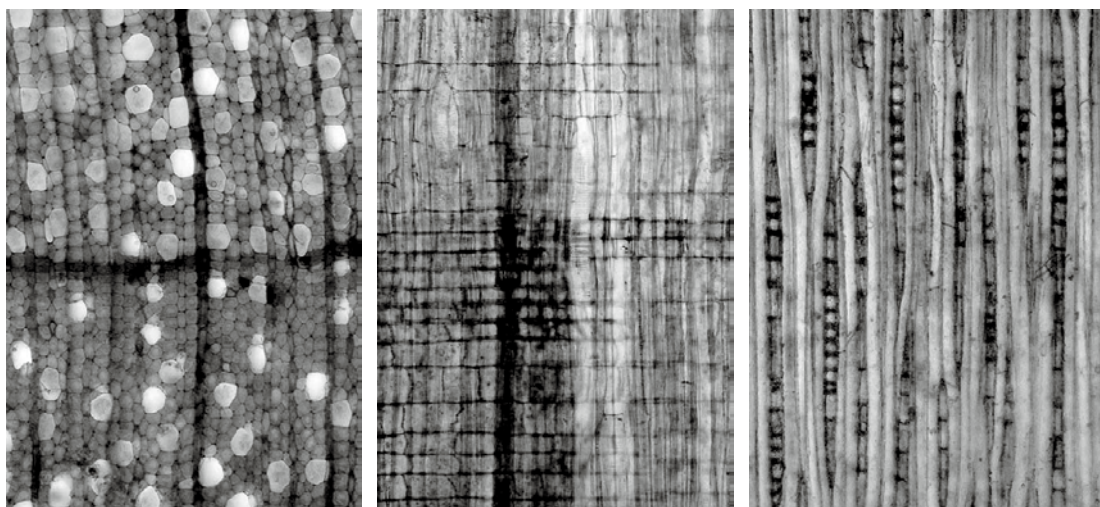
図3 平城京第622次調査 木材の断面写真①



横断面 ————— : 0.5mm 放射断面 ————— : 0.02mm 接線断面 ————— : 0.2mm
4. No.23 ヒノキ



横断面 ————— : 0.2mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.2mm
5. No.14 シキミ



横断面 ————— : 0.2mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.2mm
6. No.16 サカキ

図4 平城京第622次調査 木材の断面写真②

表2 平城京第622次調査 樹種同定結果

No	調査回数・発掘区	試料名称	遺跡	遺構種別・番号	時代	採取部位	結果(学名/和名)	
1	H J 622 B発掘区	SX813 木杭No.1	平城京跡 (五条条間北小路)	SX813 (SD2005内の杭列)		木杭	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	
2		SX813 木杭No.2					<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	
3		SX813 木杭No.3					<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	
4		SX813 木杭No.4					<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	
5		SX813 木杭No.5					<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	
6		SX813 木杭No.6					<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	
7		SX812 木杭No.1					SX812 (SD2005内の杭列)	<i>Abies</i> モミ属
8		SX812 木杭No.2						<i>Abies</i> モミ属
9		SX812 木杭No.3						<i>Tsuga</i> ツガ属
10		SX812 木杭No.4						<i>Abies</i> モミ属
11	H J 622 D発掘区	SX810 木杭No.1	平城京跡 (東四坊坊間東小路)	SX810 (SD1011内の杭列)	奈良	木杭	<i>Abies</i> モミ属	
12		SX810 木杭No.2					<i>Abies</i> モミ属	
13		SX815 木杭No.1	平城京跡 (五条条間北小路)	SX815 (SD2005内の杭列)			<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	
14		SX815 木杭No.5					<i>Illicium religiosum</i> Sieb. et Zucc. シキミ	
15		SX815 木杭No.6					<i>Abies</i> モミ属	
16		SX815 木杭No.7					<i>Cleyera japonica</i> Thunb. サカキ	
17		SX815 木杭No.9					<i>Illicium religiosum</i> Sieb. et Zucc. シキミ	
18		SX814 木杭No.2	平城京跡 (左京五条四条九坪)	SX814 (九坪東面築地 SA220上の杭列)			<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	
19		SX814 木杭No.5					<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	
20		SX811 木杭No.1					平城京跡 (五条条間北小路)	SX811 (SD2005内の杭列)
21	SX811 木杭No.2	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ						
22	SX811 木杭No.3	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ						
23	SX811 木杭No.4	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ						
24	SX811 木杭No.5	<i>Abies</i> モミ属						
25	SX811 木杭No.6	<i>Abies</i> モミ属						
26	SX811 木杭No.7	<i>Abies</i> モミ属						
27	SX817 付近木杭No.1	SX817 付近 (SD2005内の杭列)	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ					
28	SX817 付近木杭No.2		<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ					
29	SX817 付近木杭No.3		<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ					

放射断面(柾目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40~1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4 結果

表2に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図3・4に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

モミ属 *Abies* マツ科 図3-1 (No.7)

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面:早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面:放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1~4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面:放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりモミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、そのうちウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

ツガ属 *Tsuga* マツ科 図3-2 (No.9)

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞及び放射仮道管から構成される針葉樹材である。

横断面:早材から晩材への移行は急である。

放射断面:放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型でややヒノキ型の傾向を示し、1分野に2~4個存在する。放射

仮道管が存在し、その壁には小型の有縁壁孔が存在する。わずかではあるが、樹脂細胞が存在する。

接線断面:放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりツガ属に同定される。ツガ属には、ツガ、コメツガがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ20~25m、径50~80cmである。材は耐朽性、保存性ともに中庸で、建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

図3-3 (No.2)・図4-4 (No.23)

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面:早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面:放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面:放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱であり、耐朽性、耐湿性ともに高い。良材であり、建築など広く用いられる。

シキミ *Illicium religiosum* Sieb. et Zucc. モクレン科

図4-5 (No.14)

横断面:小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布

する散孔材である。早材部の年輪界付近に於いて、道管が少し並ぶ傾向を示す。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く50を超える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～2細胞幅で、単列部が太い。

以上の形質よりシキミに同定される。シキミは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、高さ10 m、径30 cmに達する。材は、強さ中庸で、旋作、器具、薪などに用いられる。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科

図4-6 (No.16)

横断面：小型の道管が、単独ないし2個複合して密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く40を超える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8～10 m、径20～30 cmである。材は強靱、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

5 所見

同定の結果、五条条間北小路北側溝内の杭列S X 811～813、815等、東四坊坊間東小路西側溝S D 1011内の杭列S X 810、九坪東辺を画する築地S A 220上の杭列S X 814で出土した木材は、ヒノキ15点、モミ属10点、シキミ2点、ツガ属1点、サカキ1点であった。ヒノキ、モミ属、ツガ属は温帯に広く分布する針葉樹で、いずれも常緑高木である。周辺地域には植生の主要素としては分布しないため、流通による可能性がある。シキミ、サカキは照葉樹林の要素で周辺の山野に普通に分布していたと考えられる。

参考文献

- 佐伯浩・原田浩(1985)「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版、p.20-48。
佐伯浩・原田浩(1985)「広葉樹材の細胞」『木材の構造』、文永堂出版、p.49-100。
島地謙・伊東隆夫(1988)『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣、p.296
山田昌久(1993)「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究』特別第1号、植生史研究会、p.242

Ⅲ. 金属製薄板の蛍光X線分析

1. はじめに

物質にX線を照射すると、その物質を構成している元

素に固有のエネルギー(蛍光X線)が放出され、この蛍光X線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。

2 試料

分析試料は、土器埋納遺構SX803の土器内部から出土した大きさ約1～2 cmの金属製薄板2点(試料1、試料2)である。

3 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析装置(堀場製作所製分析顕微鏡, XGT-5000Type II)を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法(FP法)による定量分析を行った。測定条件は、測定時間3000秒、ビーム径100 μm、電圧50kV、試料室内真空である。

4 分析結果

図5に各元素の定量分析結果(wt%)およびX線スペクトル図を示す。

5 考察

金属製薄板2点について蛍光X線分析を行った。その結果、両試料とも銀(Ag)の明瞭なピークが認められ、銅(Cu)の小さなピークも認められた。銀(Ag)の含量は、試料1では98.6%、試料2では99.2%といずれも高い値である。したがって、これらの金属製薄板の主成分は銀であり、銅(Cu)もわずかに含まれていると考えられる。

6 まとめ

土器埋納遺構S X 803で出土した金属製薄板2点について、蛍光X線分析により材質を調査した結果、両者とも銀製品であることが確認された。

(株式会社 古環境研究所)

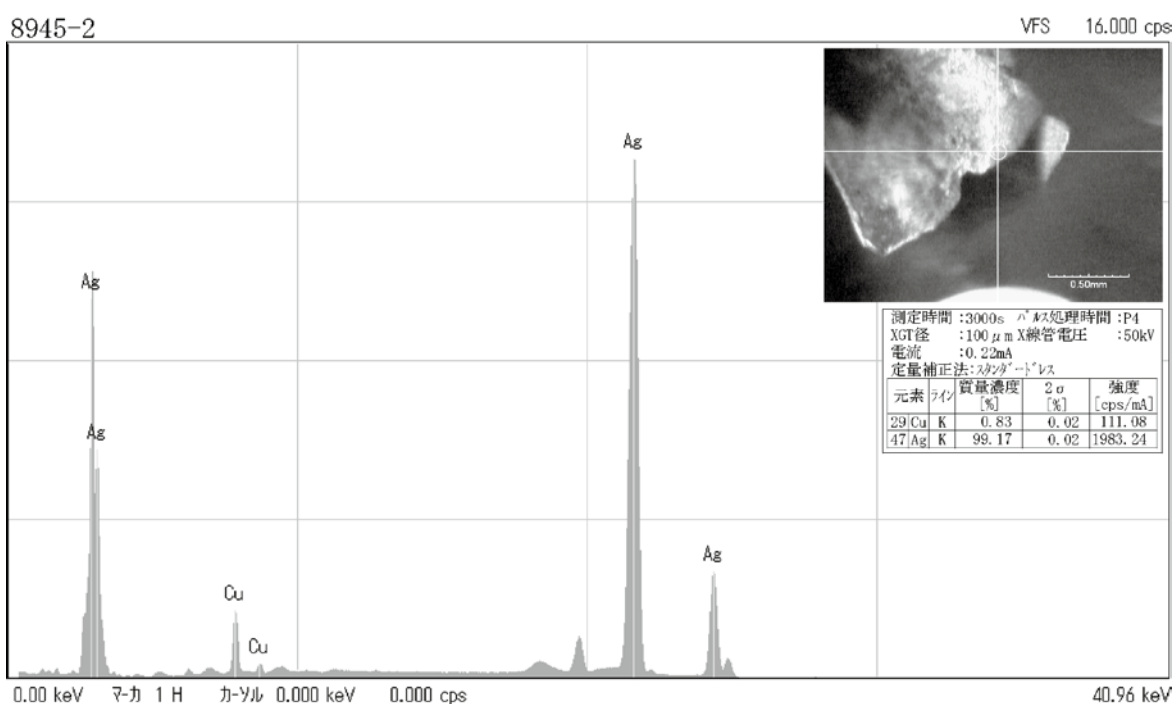
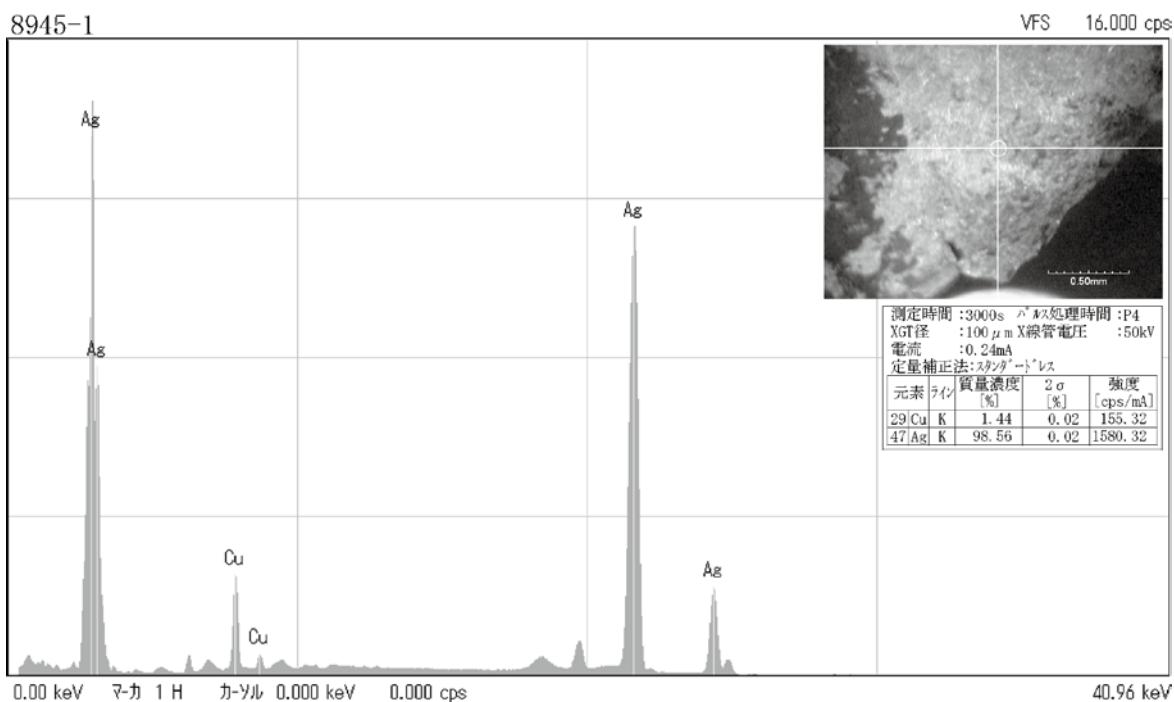


図5 平城京第622次調査 蛍光X線分析結果

第3章 平成21年度 保存活用事業報告

平成 21 (2009) 年度埋蔵文化財保存活用事業報告

1. 展示

A 常設展示

対象：一般

会期：平成 21 年 4 月 1 日 (水) ～ 10 月 23 日 (金)
(140 日間)

場所：埋蔵文化財調査センター展示室

趣旨：奈良市の歴史を埋蔵文化財の展示を通じて知ってもらう。

内容：旧石器時代～江戸時代の各時代の埋蔵文化財を遺跡ごとに展示。

観覧者数：1473 名

B 平城遷都 1300 年祭記念 第 27 回秋季特別展 「出土品に見る奈良のやきものと暮らし」の開催

対象：一般

会期：平成 21 年 11 月 2 日 (月) ～ 12 月 25 日 (金)
(42 日間)

場所：埋蔵文化財調査センター展示室・ロビー

趣旨：発掘調査で出土した土器・陶磁器類を時代を超えて、国産品から海外のものまでを展示、焼き物を通して奈良の人々の暮らしを紹介。

観覧者数：659 名

その他：・案内を「しみんだより」11月号・奈良市役所のホームページに掲載。

- ・宣伝用のポスター・チラシの作成・配布。
- ・展示解説用パンフレットの作成。
- ・事前に報道機関に資料を配布。
- ・埋蔵文化財講演会を実施。

平成 21 年 11 月 21 日 (土) 13:00 ～ 16:30
参加者 32 名

会場：埋蔵文化財調査センター講座室
土橋理子「海のシルクロードを来た陶磁器
-奈良・平安時代-」

中島和彦「奈良でつくられた土器のはなし」

C 発掘調査速報展示 (2 回) の開催

対象：一般

趣旨：発掘調査などの最新の成果を夏と春の 2 回に分けて、展示・紹介する。

①夏季速報展示

会期：前期 平成 21 年 7 月 6 日 (月) ～ 7 月 31 日 (金)
後期 平成 21 年 8 月 10 日 (月) ～ 8 月 31 日 (月)
(合計 35 日間)

場所：前期 埋蔵文化財調査センター展示室前ロビー
後期 市役所ロビー

内容：帯解黄金塚古墳の調査成果と「磚積式石室」について出土遺物や写真パネルで紹介。また、西大寺旧境内出土のイスラム陶器・木簡も併せて展示。

観覧者数：848 名 (前期 589 名 後期 259 名)

その他：・案内を「しみんだより」7月号・奈良市役所のホームページに掲載。

- ・宣伝用ポスター・チラシの作成・配布。
- ・展示リーフレットの作成。
- ・事前に報道機関に資料を配布。

②春季速報展示

会期：平成 22 年 3 月 1 日 (月) ～ 3 月 31 日 (水)
(23 日間)

内容：市指定文化財 弥勒寺蔵 三角縁吾作銘二神二獣鏡と、併せて文化財に指定された鏡の伝来を記した文書を初公開した。

観覧者数：357 名

その他：・案内を「しみんだより」3月号・奈良市役所のホームページに掲載。

- ・宣伝用ポスター・チラシの作成・配布。
- ・展示リーフレットの作成。
- ・事前に報道機関に資料を配布。

D 年間観覧者数 2,922 名(249 日間)。累計 18,569 名。
月平均 243 名。内訳は表 1 のとおり。

表 1

月別	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
	49	207	313	589	103	145	71	329	402	194	163	357

地域別	奈良市内	奈良県内	近畿圏内	近畿圏外	男女別	男	女
	133	66	56	18		1998	924

年齢別	～9 歳	10～19 歳	20～29 歳	30～39 歳	40～49 歳	50～59 歳	60～69 歳	70 歳～	学生
	12	20	32	30	26	40	86	56	19

2. 施設見学の受け入れ

埋蔵文化財調査センター施設見学

(1)

対象：大安寺西小学校6年生 120名

期日：平成21年5月8日(金)

(2)

対象：(財)奈良市生涯学習財団三笠公民館主催講座
受講者 30名

期日：平成21年5月29日(金)

(3)

対象：立命館宇治中学高等学校社会科教員研修会
11名

期日：平成21年7月22日(水)

(4)

対象：大安寺西小学校3年生 7名

期日：平成21年10月16日(金)

(5)

対象：富雄歴史教室 20名

期日：平成21年3月8日(月)



展示室を見学する小学生

3. 講演会・教室の開催

A 「埋蔵文化財調査報告会」の開催

対象：一般

期日：平成22年3月20日(土)

内容：平成21年度に埋蔵文化財調査センターが行った主な発掘調査の報告と、春季速報展示に関連して、三角縁神獸鏡についての報告を行った。

- ・久保邦江「西大寺旧境内の調査」
- ・鐘方正樹「弥勒寺蔵 三角縁吾作銘二神二獸鏡について」

会場：埋蔵文化財調査センター講座室

趣旨：平成21年度に実施した調査や、展示品の調査

成果について、職員が図や写真などを使用して報告する。

参加者数：47名

その他：・募集案内を「しみんだより」2月号・奈良市役所のホームページ、春季速報展のポスター・チラシに掲載。

・事前に報道機関に資料を配布。



埋蔵文化財調査報告会

B 「夏休み親子考古学体験」の開催

対象：小学4年生以上の児童とその保護者

期日：平成21年8月14日(金)

内容：クイズに答えながら埋蔵文化財調査センターの展示室を見学後、瓦の拓本を体験する。

会場：埋蔵文化財調査センター展示室・講座室

趣旨：展示室を見学することで、奈良の歴史を知ってもらい、本物の遺物に触れることで、考古学に親しんでもらう。

参加者数：22名

その他：募集案内を「しみんだより」8月号・奈良市役所のホームページに掲載。



夏休み親子考古学体験

4. 市民考古サポーター養成講座

A Stage 1 受講生の募集

対象：一般

期日：平成 21 年 7 月 8 日（水）～平成 22 年 3 月 3 日（水）

毎月 1～2 回、全 13 回（表 2）

内容：埋蔵文化財調査センターが行う発掘調査、出土遺物の整理、展示会などの活動支援ボランティアの養成講座。職員が講師をつとめる講座・実習のプログラムにより、将来の活動に必要な基本的知識・技術を身につける。

募集人員：25 名

その他：・案内を「しみんだより」6 月号と奈良市役所のホームページに掲載。

・募集用のチラシを作成・配布。

表 2

	日時	講座名
第 1 回	7 月 8 日	開講式・オリエンテーション 考古学とは何か
第 2 回	7 月 22 日	石器のはなし・縄文人の暮らし
第 3 回	8 月 12 日	弥生の社会・古墳のはなし
第 4 回	9 月 2 日	佐紀古墳群を訪ねる（実習）
第 5 回	9 月 9 日	奈良の都平城京
第 6 回	10 月 14 日	奈良時代の土器・古代の瓦
第 7 回	10 月 21 日	平城宮跡をみる（実習）
第 8 回	11 月 11 日	発掘作業の流れ
第 9 回	12 月 2 日	発掘現場をみる（実習）
第 10 回	12 月 9 日	舞台裏をみる（出土品整理作業）
第 11 回	1 月 13 日	拓本のとり方（実習）
第 12 回	2 月 10 日	奈良町と中近世の土器・陶磁
第 13 回	3 月 3 日	土器類の分類整理（実習） 閉講式

B Stage 2 の活動

講座終了後、希望者を「市民考古サポーター」として登録し、奈良市の埋蔵文化財保護を支援していただくとともに、楽しみながら学ぶ場を提供する。

対象：平成 20 年度の受講修了者 25 名

登録人員：18 名

活動開始：平成 23 年 5 月～

活動内容：土器洗浄などの遺物整理、展示作業の補助、講座の準備、受付、体験学習の補助や施設見学のご案内、発掘現場作業補助などに参画。

月平均活動延べ人数：63 名



市民考古サポーター養成講座 Stage 1



市民考古サポーター養成講座 Stage 2

5. 体験学習・実習の受け入れ

A 博物館実習

対象：追手門学院大学学生 1名

期日：平成21年10月26日（月）～30日（金）の
5日間

内容：第27回秋季特別展の展示設営

B 市立高校体験学習

(1)

対象：一条高校人文科学科1年生 40名

期日：平成21年9月29日（火）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：出土遺物の整理実習（洗浄・注記・拓本）

(2)

対象：一条高校人文科学科2年生 40名

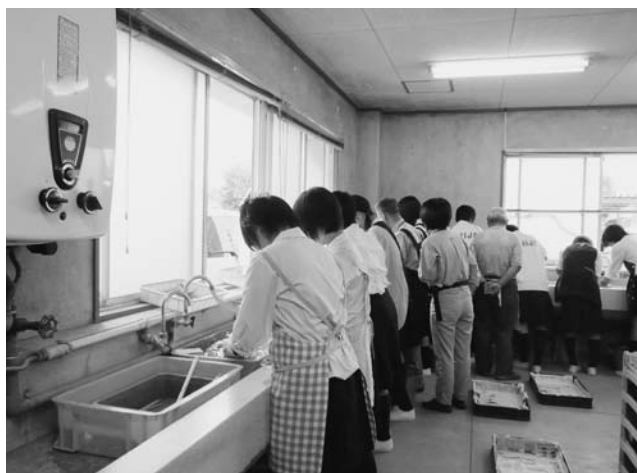
期日：平成21年8月20日（木）～26日（水）

場所：平城京跡発掘調査現場（奈良市大森町）

内容：発掘調査の体験実習



博物館実習



高校体験学習・出土遺物の整理



高校体験学習・発掘現場実習

C スーパーサイエンスハイスクール事業現地研修

対象：奈良県立奈良高校 地学部 3名

期日：平成21年7月23日（木）

場所：平城京跡発掘調査現場（奈良市大森町）

内容：「珪藻と古環境」の現地研修

D 中学校職場体験学習

(1)

対象：伏見中学校2年生 男子3名

期日：平成21年7月28日（火）～30日（木）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記

(2)

対象：田原中学校 男子1名・女子2名

期日：平成21年10月7日（水）～9日（金）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記・ポスター発送準備

(3)

対象：三笠中学校 男子1名・女子1名

期日：平成21年11月18日（水）～19日（木）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄

(4)

対象：京西中学校 男子1名

期日：平成22年1月19日（火）～20日（水）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記

(5)

対象：平城西中学校 男子3名

期日：平成22年2月2日（火）～4日（木）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記



中学校職場体験学習

6. 文化財学習用キット（ドキ土器キット）の貸出

対象：奈良市内の小中学校など

趣旨：市内の発掘調査で出土した石器・土器・瓦などの実物資料を教員用の解説書を付けて小中学校などへ貸し出し、社会科学習、郷土を知る学習の補助教材として利用してもらう。また、埋蔵文化財調査センターを見学する小中学生・自主活動グループに「触れることのできる文化財」として使用した。

資料の内容

- ①縄文土器と弥生土器
- ②縄文時代の石鏃と弥生時代の石鏃・石包丁
- ③古墳時代の埴輪と須恵器
- ④-1 土器 A
- ④-2 土器 B 奈良時代の土器
- ⑤奈良時代の瓦 軒丸瓦・軒平瓦
- ⑥奈良時代の硯と墨書土器・和同開珎

(1)

場所：佐保小学校

期日：平成 21 年 4 月 9 日（木）～ 16 日（木）

資料：①・②・③

(2)

場所：奈良育英小学校

期日：平成 21 年 4 月 16 日（木）～ 22 日（水）

資料：①

(3)

場所：佐保小学校

期日：平成 21 年 5 月 7 日（木）～ 14 日（木）

資料：④-1・④-2・⑥

(4)

場所：奈良育英小学校

期日：平成 21 年 5 月 28 日（木）～ 6 月 4 日（木）

資料：④-1・④-2

(5)

場所：(財)奈良市生涯学習財団 平城東公民館

期日：平成 21 年 9 月 4 日（金）～ 14 日（月）

資料：⑤

(6)

場所：神功小学校

期日：平成 21 年 10 月 20 日（火）～ 27 日（火）

資料：④-1・④-2・⑤・⑥



ドキ土器キットで学習する小学生

7. 職員の講師など派遣

A 一条高校人文科学科「総合文化研究」授業

期日：①平成 21 年 7 月 9 日（木）

②平成 21 年 9 月 15 日（火）

場所：一条高校（奈良市法華寺町）

派遣人数：①②各 1 名

内容：①発掘調査について ②考古学概論

B 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館主催「土曜講座」

期日：平成 21 年 9 月 5 日（土）

場所：奈良県立橿原考古学研究所 講堂

派遣人数：1 名

内容：平城京左京五条四坊九・十坪の調査について

C 平成 21 年度奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会「発掘調査報告会」

期日：平成 22 年 3 月 6 日（土）

場所：河合町中央公民館 視聴覚室

派遣人数：2 名

内容：帯解黄金塚古墳第 2 次調査・西大寺旧境内第 25 次調査

8. 埋蔵文化財調査センター保管遺物・写真などの貸出ほか

埋蔵文化財調査センターで保存・管理している遺物・写真などの貸出・提供・掲載許可を行った。また、学術研究に関わって、資料の閲覧を受け入れた。

A 遺物などの貸出 20件 (表3の通り)

B 写真などの貸出・提供・掲載許可 20件 (表4の通り)

C 学術研究に関わる資料閲覧 12件 (表5の通り)

表3

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
1	東京国立博物館	平成館考古展示室に常設展示	H 21.4.1 ~ H 22.3.31	平城京跡出土木簡(模造品)10点(礫進上木簡1点、月借錢進上木簡1点、豹皮分銭付札1点、渋皮御田侍奴画指木簡1点、北宮封緘木簡1点、衛府進塩付札1点、禄布付札1点、槐花進上木簡1点、造酒司符1点、瓦進上木簡1点)、分銅(模造品)1点(平城京跡第167次調査出土)
2	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所	「河南省鞏義黃治唐三彩窯の簡報 付論. 大安寺出土陶枕の再検討」に参考資料として使用	H 21.5.11 ~ H 21.5.22	唐三彩輪花杯1点(平城京跡第93次調査出土)、陶枕4点(平城京跡第293次調査出土1点、大安寺旧境内第68・73・92次調査出土各1点)、杯2点(平城京跡第127次調査出土)、唐白釉円面獸脚硯1点(平城京跡第130次調査出土)
3	群馬県立歴史博物館	第86回企画展「国宝 武人ハニワ、群馬へ帰る！」に展示	H 21.6.15 ~ H 21.9.11	家形埴輪1点(杉山古墳出土)
4	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	速報展「大和を掘る27 - 2008年度発掘調査速報展」に展示	H 21.7.1 ~ H 21.9.25	奈良三彩火舎1点、須恵器1点、宝珠硯2点(平城京跡第579・608-A次調査出土)、奈良三彩火舎1点、須恵器1点、土師器6点、炭片4点(平城京跡第608-D次調査出土)、須恵器1点、土師器8点(平城京跡第608-E次調査出土)、播磨産軒丸瓦1点(平城京跡第608-F次調査出土)、播磨産軒平瓦1点、平瓦2点、鬘斗瓦2点(平城京跡第459-2次調査出土)、埋納遺構出土状況写真パネル3点
5	鳥根県立古代出雲歴史博物館	平成21年度特別展「どすこい! - 出雲と相撲 -」に展示	H 21.7.6 ~ H 21.10.2	墨書土器2点(「相撲所」「左相撲」)(平城京跡第28次調査出土)
6	春日大社	夏季特別公開「春日大社の考古学展」に展示	H 21.7.22 ~ H 21.9.25	土師器9点(平城京跡第559次調査出土)、土師器10点(元興寺旧境内第62次調査出土)
7	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	奈良県立橿原考古学研究所平城遷都1300年祭記念第2回ミニ展示「井戸と暮らし」に展示	H 21.8.25 ~ H 21.9.30	木製釣瓶1点、釣瓶釣り金具一括、碁石7点(平城京跡第1次調査出土)、瓢箪の柄杓1点(平城京跡第257-1次調査出土)、瓦製井筒1点(平城京跡第327-1次調査出土)
8	鳥根県立古代出雲歴史博物館	平成21年度企画展「出雲国誕生と奈良の都」に展示	H 21.9.30 ~ H 21.12.22	角柱2点(西隆寺跡第8次調査出土)
9	大阪府立近つ飛鳥博物館	平成21年度秋季特別展に展示	H 21.9.30 ~ H 21.12.16	土師器5点、石釧1点、車輪石1点、管玉3点、滑石製小玉2点、ガラス玉2点、碧玉原石2点(平城京跡第257-3次調査出土)
10	木簡学会	木簡学会第31回研究会集会以展示	H 21.12.4 ~ H 21.12.7	木簡8点(「神護景雲二年」1点、「参議従三位石上朝臣」1点、「東海道 東巽道」1点、「太政官謹奏」1点、「三綱務所」1点、「雇車貳両」1点、「金堂所 嶋院」1点、「大徳一心念」1点)(西大寺旧境内第25次調査出土)
11	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	平城遷都1300年記念特別陳列「平城京発掘」に展示	H 21.12.18 ~ H 22.3.31	三彩施釉瓦10点(平城京跡第28・73次調査出土)、木簡1点(平城京跡第73次調査出土)、陶硯7点、軒丸瓦1点、軒平瓦1点(平城京跡第1次調査出土)、軒丸瓦1点、軒平瓦1点、丸瓦5点(平城京跡第291次調査出土)、埋納遺構出土状況写真パネル3点
12	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所飛鳥資料館	飛鳥資料館研究図録第12冊に掲載	H 22.1.5 ~ H 22.1.25	素紋鏡9点(平城京跡第157・207・273-1・283-2・284・292-1・314・363・364-7次調査出土)、小型海獸葡萄鏡3点(平城京跡第208・273-2・314次調査出土)、花鳥紋背円鏡1点(平城京跡第258次調査出土)、唐花六花鏡1点(平城京跡第266次調査出土)、唐草双鳥紋六棱鏡1点(平城京跡第531次調査出土)

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
13	大阪府立近つ飛鳥博物館	平成 21 年度冬季特別展「ふたつの飛鳥の終末期古墳－河内飛鳥と大和飛鳥－」に展示	H 22.1.7 ～ H 22.3.14	須恵器 2 点、土師器 1 点、榛原石(磚) 1 点(黄金塚古墳第 2 次調査出土)、黄金塚古墳第 2 次調査 墳丘全景など写真パネル 4 点
14	日進市教育委員会	企画展「につしんの窯跡～飛鳥・奈良・平安時代の猿投窯」に展示	H 22.2.1 ～ H 22.6.8	土師器 7 点(平城京跡第 1・276-2・310-1・327-3・347-2 次、東市跡第 6 次調査出土)、須恵器 15 点(平城京跡第 133・180・257-2・276・283・327-3・557 次、西大寺旧境内第 14 次、大安寺旧境内第 53・58、東大寺旧境内第 11 次調査出土)、銭貨 2 点(和同開珎)(東市跡第 4 次調査出土)
15	奈良県立図書情報館	図書展示「平城京の世界」に展示	H 22.3.9 ～ H 22.4.30	円面硯 1 点(平城京跡第 196-2 次調査出土)、墨書土器「東院」1 点(平城京跡第 284 次調査出土)、銭貨 6 点(和同開珎 2 点、神功開寶 2 点、萬年通寶 2 点 東市跡第 4 次調査出土)、筆と墨のレプリカ各 1 点、木簡赤外線写真パネル 1 点
16	奈良県立橿原考古学研究所付属博物館	平城遷都 1300 年記念春季特別展「大唐皇帝陵展」に展示	H 22.3.25 ～ H 22.7.20	唐三彩輪花杯 1 点(平城京跡第 93 次調査出土)、陶枕 4 点(平城京跡第 293 次調査出土 1 点、大安寺旧境内第 68・73・92 次調査出土各 1 点)、杯 2 点(平城京跡第 127 次調査出土)、三足炉 1 点(平城京跡第 578 次調査出土)、唐白釉円面獣脚硯 1 点(平城京跡第 130 次調査出土)、奈良三彩 42 点(平城京跡第 1・14・56・91・134・171・180・307・310-3・327-3・347-2・351-2・479・557・608-A・622 次、大安寺旧境内第 28・30・43・53・72・92 次、西大寺旧境内第 3 次、東市跡第 4・19・26 次、試掘 88-6 調査出土)、白磁碗 1 点(大安寺旧境内第 60 次調査出土)、三彩垂木先瓦 6 点(大安寺旧境内第 78 次調査出土)、三彩施釉瓦 10 点(平城京跡第 28・73 次調査出土)、イスラム陶器 33 点、墨書土器「皇甫東朝」1 点(西大寺旧境内第 25 次調査出土)、胡人面付硯脚(平城京跡第 506-1 次調査出土)

奈良市管内

17	なら奈良館	常設展示	H 21.4.1 ～ H 22.3.31	土師器 9 点(平城京跡第 52・314 次、東市跡第 4・6 次調査出土)、須恵器 14 点(平城京跡第 52・157 次、東市跡第 4 次調査出土)、木製品 2 点(平城京跡第 174 次調査出土曲物 1 点、第 257-3 次調査出土へら 1 点)、パネル 1 点(貴族の食卓風景)
18	奈良市水道局	常設展示	H 21.4.1 ～ H 22.3.31	軒丸瓦 2 点、軒平瓦 1 点(平城京跡第 28 次調査出土)
19	辰市人権文化センター	常設展示	H 21.4.1 ～ H 22.3.31	埴 1 点(平城京跡第 14 次調査出土)
20	富雄公民館	常設展示	H 21.4.1 ～ H 22.3.31	弥生土器 2 点(杏遺跡出土)、古墳時代の須恵器 2 点、土師器 2 点(杏遺跡、平城京跡第 162 次調査出土)、奈良時代の土師器 1 点、須恵器 5 点(平城京跡第 52・92・133・157・222 次調査出土)、墨レプリカ 1 点、鎌倉時代の土師器 1 点、瓦器 1 点(奈良町遺跡、菅原東遺跡出土)、室町時代の土師器(奈良町遺跡、元興寺旧境内第 4・13 次調査出土)、江戸時代の土師器・陶磁器(奈良町遺跡、元興寺旧境内第 15 次、菅原東遺跡出土)、パネル 12 点

表 4

	申請日	申請機関	目的	内容	その他
1	H21.5.15	鳥根県立古代出雲歴史博物館	平成 21 年度企画展「出雲国誕生と奈良の都」の展示図録などに掲載	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 16 年度口絵 7 掲載 西隆寺跡第 8 次調査角柱写真 1 点	貸出・掲載許可
2	H21.6.11	東京法令出版株式会社	中学歴史資料集「グラフィックワイド歴史」に掲載	平城京跡第 167 次調査出土 銅製分銅(壺形) 写真 1 点	掲載許可
3	H21.8.6	奈良県立橿原考古学研究所付属博物館	奈良県立橿原考古学研究所平城遷都 1300 年祭記念第 2 回ミニ展示「井戸と暮らし」の展示図録に掲載	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 7 年度図版 3 掲載 平城京跡第 310-1 次調査井戸 S E 510 1 点、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 10 年度 82 頁掲載 平城京跡第 422 次調査①井戸 S E 02 1 点 ②井戸 S E 02 断割 1 点	貸出・掲載許可

	申請日	申請機関	目的	内容	その他
4	H21.8.8	大阪府立近つ飛鳥博物館	平成 21 年度秋季特別展の図録などに掲載	埋蔵文化財調査センター常設展示図録『出土品が語る奈良の歴史』掲載 菅原東遺跡①濠の検出状況 1 点 ②土師器・須恵器集合写真 1 点 ③ガラス小玉など集合写真 1 点	貸出・掲載許可
5	H21.8.26	学校教育課	奈良市教育委員会ホームページに掲載	西大寺旧境内出土第 25 次調査出土 イスラム陶器写真 1 点	貸出・掲載許可
6	H21.8.27	株式会社 東京堂出版	「不思議探検 暮らしの中の左右学」に掲載	平城京跡第 28 次調査出土「左相撲」墨書土器写真 1 点	貸出・掲載許可
7	H21.9.4	株式会社 日本アートセンター	「週刊 古社名刹巡拝の旅 33 号 南都の遺風」に掲載	奈良市ホームページ掲載 佐紀古墳群（西群）航空写真 1 点	貸出・掲載許可
8	H21.9.7	小学館	総合女性月刊誌「和楽」に掲載	平成 20 年度秋季特別展パンフレット『寧楽地寶』掲載 奈良三彩集合写真 1 点	貸出・掲載許可
9	H21.9.24	株式会社 郷土出版	「戦国日本」に掲載	『多聞廃城跡 発掘調査概要報告』図版 1 掲載 多聞廃城跡（多聞山）全景写真 1 点	貸出・掲載許可
10	H21.9.25	日外アソシエーツ株式会社	「考古博物館事典」に掲載	埋蔵文化財調査センターパンフレット掲載 埋蔵文化財調査センター全景写真 1 点	貸出・掲載許可
11	H21.10.22	大阪府立近つ飛鳥博物館	平成 21 年度冬季特別展「ふたつの飛鳥の終末期古墳－河内飛鳥と大和飛鳥－」の図録などに掲載	黄金塚古墳第 2 次調査 ①墳丘全景 1 点 ②A 発掘区の石敷きと外堤 1 点 ③B 発掘区の石敷き 1 点 ④C 発掘区の石敷きと土器出土状況 1 点	貸出・掲載許可
12	H21.11.20	第一法規株式会社	「月刊文化財 平城京特集 平城京の寺院」に掲載	『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成 17 年度 巻首図版 1 掲載 大安寺旧境内第 110 次調査 西塔地区基壇全景航空写真 1 点	貸出・掲載許可
13	H21.12.4	実業印刷株式会社	奈良県教育委員会委託事業 小学 5・6 年生向け社会科副読本「ガイドブック 奈良の遺跡案内」に掲載	宮跡庭園復元建物写真 1 点、宮跡庭園復元建物とモデル写真 1 点、埋蔵文化財調査センター展示室内観写真 1 点	貸出・掲載許可
14	H21.12.11	奈良県土木部 河川課	遊歩道整備における案内サインに掲載	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 5 年度 図版 49 掲載 平城京跡第 284 次調査 東堀河 1 点、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 6 年度 図版 64 掲載 平城京跡第 314 次調査 東堀河 1 点	貸出・掲載許可
15	H21.12.16	奈良県立橿原考古学研究所 附属博物館	平城遷都 1300 年記念特別陳列「平城京発掘」の図録に掲載	①平城京跡第 378-2 次調査 無文銀銭②平城京跡第 266 次調査 唐花六花鏡③平城京跡第 207・208・273-2・292・314 次調査 小型海獣葡萄鏡・素紋鏡集合④平城京跡第 28・73 次調査 三彩施釉瓦⑤平城京跡第 28・73 次調査「相撲所」墨書土器⑥平城京跡第 28 次調査「淡路国」「遠江国」付札木簡⑦平城京跡第 180 次調査 甲斐型杯⑧平城京跡第 431-1 次調査「美濃国」刻印土器 以上、平成 20 年度秋季特別展パンフレット『寧楽地寶』掲載⑨平城京跡第 405 次調査 神功開寶鑄造関連遺物⑩平城京跡第 167 次調査 銅製分銅（壺形）⑪平城京跡第 102 次調査 銅製分銅（笠型）⑫平城京跡第 459-2・608-F 次調査 播磨産軒丸・軒平瓦⑬『平城京左京二条二坊十二坪発掘調査概要』表紙掲載 平城京跡第 73-1 次調査 平城京左京二条二坊十二坪遺跡全景⑭『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和 54 年度巻首図版掲載 平城京左京五条二坊十四坪遺跡全景⑮～⑰平城京跡第 608-A・D・E 調査埋納遺構出土土器集合写真	貸出・掲載許可
16	H22.1.13	日進市教育委員会	企画展「にしんの窯跡～飛鳥・奈良・平安時代の猿投窯」のパンフレットなどに掲載	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成元年度巻首図版 3 掲載 平城京跡第 182 次調査 S X 16 出土須恵器写真 1 点、同概要報告書図版 18 掲載 平城京跡第 182 次調査土器埋納遺構 S X 16 写真 1 点、奈良市内航空写真 1 点	貸出・掲載許可
17	H22.1.22	奈良県立橿原考古学研究所 附属博物館	平成 22 年度橿原考古学研究所附属博物館年間パンフレットに掲載	平成 20 年度秋季特別展パンフレット『寧楽地寶』掲載 大安寺西塔風鐸写真 1 点	貸出・掲載許可

	申請日	申請機関	目的	内容	その他
18	H22.2.8	宮内庁書陵部	黄金塚古墳陵墓参考地の地形図を作成するため	黄金塚古墳周辺測量データ	貸出・使用許可
19	H22.2.24	奈良県立橿原考古学研究所	「考古資料における三次元デジタルアーカイブの活用と展開」研究成果報告書に掲載	①弥勒寺蔵 三角縁吾作銘二神二獣鏡②平城京跡第 531 次調査出土唐草双鳥紋六棱鏡③平城京跡第 273-2 次調査出土小型海獣葡萄鏡④平城京跡第 208 次調査出土小型海獣葡萄鏡⑤平城京跡第 314 次調査出土小型海獣葡萄鏡⑥平城京跡第 266 次調査出土唐花六花鏡⑦平城京跡第 258 次調査出土花鳥紋背円鏡 以上 7 点三次元 C G 画像データ	掲載許可
20	H22.2.19	奈良県立図書情報館	図書展示「平城京の世界」に写真パネルを展示	西大寺旧境内第 25 次調査風景写真 5 点	貸出・使用許可

表 5

	閲覧日	申請者	目的	閲覧資料名
1	H21.6.15	元興寺文化財研究所職員	個人研究	元興寺旧境内第 3・19・21・26・42・43・45・47 次調査出土土器
2	H21.9.15	京都大学大学院学生	個人研究	宮山 4 号墳、ベンショ塚古墳、水間遺跡第 6 次調査出土玉類、菅原東遺跡出土緑色凝灰岩未成品
3	H21.9.18	国学院大学聴講生	個人研究	平城京跡第 228・269 次、大安寺旧境内第 29 次、古市城跡、東市跡 31 次調査出土土器
4	H21.9.30	奈良県立橿原考古学研究所職員	個人研究	南紀寺遺跡第 3 次、平城京跡第 437 次調査出土土器
5	H21.11.12	奈良大学学生	個人研究	平城京跡第 276 次調査出土井戸枳材
6	H21.11.18	大谷大学教授	個人研究	平城京跡第 28・73 次調査出土「相撲」関連墨書土器
7	H21.12.14	日進市教育委員会職員	特別展資料調査	平城京内出土の尾張産須恵器、平城京出土の土師器・須恵器食器類
8	H21.12.15	山本考古学研究所所長、元興寺文化財研究所職員	個人研究	西大寺旧境内第 25 次調査出土イスラム陶器
9	H22.2.19	徳島県埋蔵文化財センター職員	個人研究	平城京跡第 228・269 次、元興寺旧境内第 4・31・38 次、東大寺旧境内第 3 次調査出土土器
10	H22.3.4	島根県教育庁文化財課古代文化センター職員	特別展資料調査	平城京跡第 257-3 次調査出土土器
11	H22.3.8	奈良県立橿原考古学研究所職員	個人研究	平城京跡第 28・89・257・327-1・349・378-7・427・437・486・491・497・520・538 次、東市跡第 4 次調査出土石製腰帯具
12	H22.3.9	岡山市立オリエント美術館職員	特別展資料調査	西大寺旧境内第 25 次調査出土イスラム陶器

(池田富貴子)

第4章 紀 要

平城京の陶硯

三好美穂

I はじめに

陶硯は、都城遺跡をはじめ官衙跡、寺院跡など全国の古代遺跡から多くの出土例が報告されており、これらの出土例からも窺えるように、国家制度の充実および地方においては体制の波及を示す一面をもつ考古資料である。その中でも、全国の約2割を占めている平城宮・京の出土陶硯は、種類も多様で、都という条件を反映して共伴遺物に恵まれ、時期が特定できる例も多い点で注目されている。

平城京跡の陶硯研究については、奈良文化財研究所(以下、奈文研と記す)によって『平城京出土陶硯集成I—平城宮跡—』、『平城京出土陶硯集成II—平城京・寺院—』が刊行され、総数1072点(平城宮533点、平城京539点)の陶硯が集成された¹⁾。この集成では、宮域跡での調査資料は網羅されてはいるものの、平城京域からのものは奈文研調査に限定されている。奈良市教育委員会が実施した平城京域内での発掘調査では、2008年度までに陶硯383点(以下、奈良市資料と記す)が出土しているが、これらの集成は未刊行であり、早急に公表する必要がある。奈文研と奈良市資料を合わせれば、平城京跡出土陶硯のほぼ全体像の把握が可能となり、他地域の出土資料との比較検討等の研究に寄与できるものと考えられる。本稿では、奈良市資料を網羅することから始め、主体を占める円面硯を中心に形態分類および製作技法を検討しながら概要を記す。そして、奈文研資料と併せて平城京における出土傾向等の予察を述べ、今後の基礎研究につなげる事を目的とした。

II 平城京跡出土陶硯の概要

対象資料

ここで取り扱う資料は、奈良市教育委員会が1979年度から2008年度までに実施した平城京跡の調査で出土した陶硯382点で、時期的には8世紀代の資料が大半を占めるが、9世紀前半代のものも含めた。

一覧表の作成について

調査単位ごとに、陶硯の種類、型式、製作技法、法量、形態的な特徴に主眼をおいて観察したデータを表内に盛り込んだ。また、坪ごとに検索できるよう右京、左京、東市跡、寺院にわけて作表した。陶硯の名称と部位²⁾および型式名称については、基本的に『平城京出土陶硯集成I—平城宮跡—』(以下、『集成I』と記す)に準拠

した。ただ、分類上必要なものについては、新たに型式分類名称を付した。これについては、後述する型式分類においてその都度明記することとする。以下、陶硯の種類とその製作技法を中心に述べる。

(1) 陶硯の種類

奈良市資料の陶硯の種類には、円面硯、円形硯、宝珠硯、形象硯、風字硯、特殊硯の他に転用硯がある。転用硯は、須恵器杯・皿・蓋・甕体部片・壺底部片を利用して硯としたもので、猿面硯もこれに含まれる。



杯蓋硯(須恵器杯蓋の転用)

硯の中では転用硯が一番多く、定形硯と同じように研究対象とするべきではあるが稿を改めることとする。ただし、須恵器甕胴部等の破片を二次的に加工して作られた「猿面硯」については一覧表に組み入れた。以下、硯の種類ごとに述べる。

1) 円面硯

脚部の形態の違いによって、圈足円面硯、蹄脚円面硯、獸脚円面硯、無脚円面硯に分けられている。

i. 圈足円面硯 平面円形の硯面と周囲にめぐる海部、円筒形状の脚部からなる硯である。種類別では出土量が最も多く、奈良市資料は261点ある。硯面の形状から『集成I』では以下の3つに分類している。(図2)

【硯面の分類】

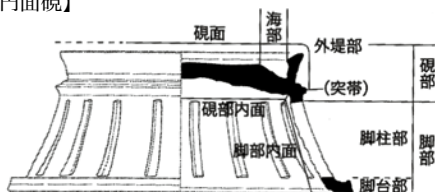
- a: 硯面が明確な段をもって隆起するもの。
- b: 硯面が弧を描いて隆起するもの。
- c: 硯面が水平なもの。

261点のうち、硯面が残る資料168点を分類すると、aが124点、bが19点、cが15点、不明が10点であった。『集成I』では、上記の硯面分類の他に、それぞれのタイプの中での細分と特徴が説明されている³⁾が、a~cのタイプの中には、タイプを越えて、共通する分類基準を設定できると判断できる。そのため、『集成I』で説明された細分と特徴とは別に、硯部の外堤部と脚台に焦点をあて以下のように分類を新たに試みた。

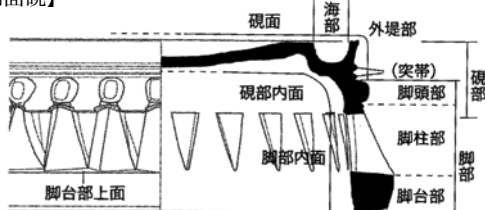
【硯部の分類】 外堤部と突帯の形状から3つに分類した。

- A: 外堤部は脚柱部のほぼ延長線につくられ、外堤は直立もしくは外方に開いて立ちあがる。突帯は脚柱部より外側に付される。
- B: 外堤部と突帯が脚柱部より外側につくられる。

【圈足円面硯】



【蹄脚円面硯】



【円形硯】



【風字硯】

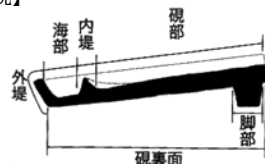


図1 各部の名称 (『平城京出土陶硯集成I—平城宮跡—』による)

C：外堤部はA同様に脚柱部の延長線につくられるが、突帯が一体化したような形につくられる。

【脚台部の分類】脚台部の形状から6つに分類した。

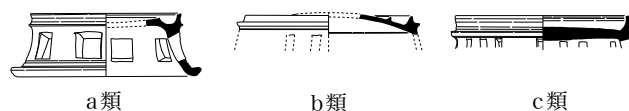
- 1：脚台は脚柱下端からL字状に屈曲し、端部が上方に突出したもの。
- 2：脚台は脚柱下端からL字状に屈曲し、脚台端部が下方に突出したもの。
- 3：脚台は脚柱下端からL字状に屈曲し、脚台端部が上・下に突出したもの。
- 4：脚台は脚柱下端からL字状に屈曲し、脚台端部は突出せず脚台端部は丸もしくは方形におさめる。
- 5：脚台は脚柱下端から真下にのび、脚台端部は突出せず、方形状に作り平坦な接地面をもつもの。
- 6：脚台は蹄脚円面硯にみられるような厚みのある方形を呈するもの。

以上の形態的特徴を表す分類記号を組み合わせ、出土資料ごとに明示することにより、多量にある圈足円面硯の主流の型を把握することを目的とした。表記方法は、例えば硯面はa、外堤部から突帯はA、脚台は1に分類できる個体ならば、a-A1と表示する。

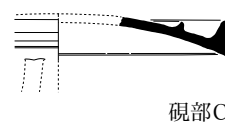
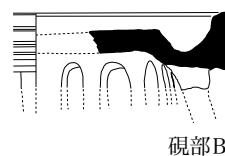
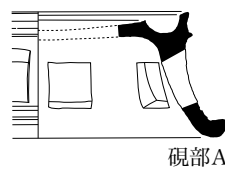
【分類結果】圈足円面硯261点のうち、硯部から脚部まで残存する資料は15点ある。大半が硯面はa、硯部はAに分類できるが、脚台の形状は多様である。

- a-A1：1点、a-A2：1点、a-A3：2点、
a-A4：1点、a-A5：6点、a-A6：1点

【硯面の分類】



【硯部の分類】



【脚部の分類】

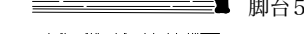
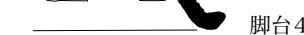
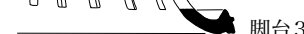
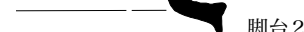
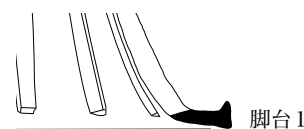


図2 圈足円面硯の分類

b-A2：1点、b-A5：2点

硯部だけが残存する資料は153点で、このうち型式が分かるものが138点ある。

a-A：94点、a-B：15点、a-C：1点
b-A：15点、b-C：1点、c-A：12点

脚台部だけが残存する資料は64点で、その型式は次のとおりである。

1：10点、2：19点、3：11点、
4：5点、5：13点、6：5点

以上、硯部・硯面の分類では、a-Aに分類できるものが圧倒的に多く、圈足円面硯の主体を占める型であることが理解できる。また、硯面が弧を描いて隆起するbには、硯部分類のBがなく、硯面が水平なcは、Aタイプだけに限られ、B・Cがない。量的な違いはあるがタイプに多様性がみられることから、同時に型式差も多いことを示す結果といえよう。次に主体を占めるタイプのものについて、法量や調整、焼成方法についてみる。

a-Aタイプは、外堤部径が最小7.9cmから最大29.4cmまでのものがあるが、9.0cm台～19.0cm台のものが多く、特に13.0cm台と16.0～17.0cm台に集中する傾向がみられる。調整は、硯部は基本的にロクロナデであるが、脚部上端から硯部内面にかけてヘラケズリのような痕跡が見られる個体がある。ゆるやかな曲面になるようにコテ状の工具を使って成形したと考えられる。焼成方法は、窯内では正位置に据えて焼いたもの(正置焼成)

が58点、逆さに向けて焼いたもの（倒置焼成）は74点、自然釉を確認できないものが42点ある。

a - Bタイプは、外底部径が不明なものが多いが、16.0cm台のものだけがみられる。調整は、基本的にa - Aタイプと同じである。焼成方法は、正置焼成が7点、倒置焼成が4点、不明3点である。

b - Aタイプは、外提部径9.5cm～18.0cmまでのものがあるが、量的には10cm前後と15cm前後のものが多い。脚部に刻線文や綾杉文を施しているものが5点（072・078・160・162・358）、硯面内面に重ね焼きの痕跡が残るもの1点（129）を確認した。正置焼成が7点、倒置焼成は5点ある。

c - Aタイプは、外底部径9.4～23.0cmまでのもので、10.0～14.0cmの小型のものが多い。12点のうち6点は硯面に突帯状の低い内堤が巡っており、このタイプの特徴かもしれない。198の脚台内面に須恵器杯あるいは皿の口縁部とみられる破片が溶着している。正置焼成が4点、倒置焼成は8点ある。

このように圈足円面硯の外提部の大きさには、小型のものから大型のものまでであることがわかったが、a - Aタイプのものより、b - Aタイプやc - Aタイプの大きさが若干小型化を示すような傾向がみられる。タイプと法量の差異が時期差を示しているのかもしれない。

脚台部の分類については、脚台1～6タイプのものでそれぞれあり、量的には均衡するような結果であるが、脚台2と5がやや多く、蹄脚円面硯のように厚みのある四角形状を呈する脚台6は、他のものと比べ少ない。大きくみると、圈足円面硯の脚台部がL字状に屈曲するのが主流で、その中でさらに1～4タイプに分かれると理解した方がよさそうである。また、脚台部の形態は、大半が須恵器甕の口縁部形態と類似しており、陶硯の生産地を考える際の手がかりになると考える。脚台5に分類した資料088・107は、和泉陶邑窯産須恵器甕の口縁部形態と類似することから、陶邑産の製品である可能性も指摘できよう。

これまでみてきたように、圈足円面硯の形態は多様性に富んでいるが、外堤や突帯端部の形状によってさらに細分できる可能性がある。外堤部の端部を観察すると、丸くおさめるもの（134）と三角形のもの（107）、方形状のものに大きく分けられ、方形状にはさらに内傾するもの（366）と外傾するもの（027）、窪みをもつ平坦面のもの（348）などがある。（図3）また、外堤部の下に圈線や突帯がめぐるもの、波状文を施すものなど様々である。脚台についても圈線や突帯がめぐるものが



図3 外堤端部の細分



資料 198



資料 129



資料 358



資料 162

存在しており、型式分類が難しい状況ではあるが、これら細部の違いは、時期、生産地、工房や工人の差などを反映している可能性が考えられるため、今回提示した分類を基軸にしてさらに観察を深めていきたい。

ii. 蹄脚円面硯 平面円形の硯面に海部がめぐる硯部と獣脚様の脚柱と脚台からなる硯である。平城京では圈脚円面硯に次いで多く、奈良市資料は59点ある。製作技法の違いから蹄脚円面硯Aと蹄脚円面硯Bに分類される。

蹄脚円面硯A 硯部と脚台部は別々に作り、型作りした獣脚様の脚柱部で結合したもので、脚台・脚柱の形状から①薄板・三角形、②薄板・砲弾形③肉厚・細棒に細分されている。

蹄脚円面硯B 硯部と脚台部を一連で成形したのち、側面に型作りした脚頭・脚柱飾りを貼りつけ、下底部の台を補充し、脚柱飾りの間を削り取って透孔とするもので、脚台、脚柱、硯面の形状により①～⑤に細分されている⁴⁾。蹄脚円面硯Aの製作技法上の簡略形で後出するものと考えられている。

蹄脚円面硯Aに分類できるものは24点あり、蹄脚円面硯Bは35点ある。出土資料の大半が破片で、全体を復原できるものは一個体（272）しかないため、『集成I』で示された上記の分類定義だけでは資料を細分することができない状況である。

そこで、残存する資料をもとに観察をおこなった結果、蹄脚円面硯においても製作技法の違いはあるが、共通する分類基準を設定できると判断した。外堤部を欠く硯部片と脚部片が多いため、対象資料に則した分類を試みた。

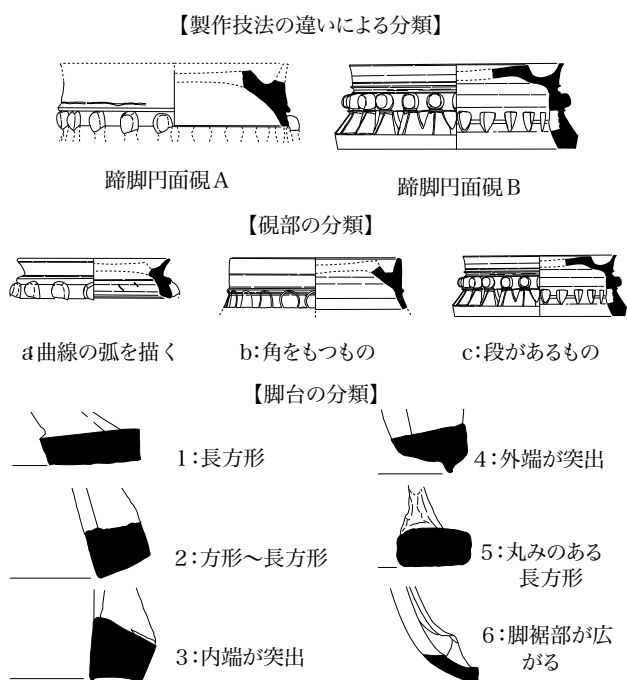


図4 蹄脚円面硯の分類

【硯部の分類】

- a : 硯部内面が曲線状の弧を描くもの。
 b : 硯部内面が角をもつもの。
 c : 硯部内面に段をもつもの。

【脚台部の分類】

- 1 : 断面形は長方形、高さが低く底部は平坦なもの。
 2 : 断面形は方形～長方形、底部は平坦なもの。
 3 : 断面形は方形～長方形、底部の内端が突出する。
 4 : 断面形は方形～長方形、底部の外端が突出する。
 5 : 断面形は丸みをもつ長方形、底部は平坦なもの。
 6 : 圈足円面硯の脚裾部にみる脚台で端部は四角形、先端は下方へ突出するものとししないものがある。

この分類により、圈足円面硯と同じ要領で蹄脚円面硯A - a 1等と記すこととし、出土一覧表を作成した。資料によっては部位を欠くものがあるが、判断できる範囲で記載した。

【分類結果】

(蹄脚円面硯A)

硯部が残存する資料は14点ある。

a : 13点、b : 0点、c : 1点

脚台が残存する資料は6点ある。

1 : 2点、2 : 2点、3 : 0点、

4 : 0点、5 : 2点、6 : 0点

蹄脚円面硯Aの硯部内面は、064・171・186など硯部内面がアーチ状の弧を描く硯部aタイプが最も多い。おそらくコテ状の工具を使用して硯部内面を丁寧に成形

したものとする。126のように内面に段がつく硯部cタイプの個体は1点ある。

脚台の資料が少ないが、脚台5に分類した076・285の脚柱は、『集成I』で示された細棒状を呈している。蹄脚円面硯Aは、自然釉が確認できたものは全て倒置焼成とみられるが、外面に自然釉がかかるものが数点ある。正置焼成の可能性もあるので、今後の観察にも注意が必要である。外堤部径が16.6～22.0cm、脚台径は24.2～33.0cmの中～大型品が多い。

(蹄脚円面硯B)

硯部から脚柱部までが残存する資料は1点(272)のみで、蹄脚円面硯B - a 2に分類できる。

硯部が残存するものは13点ある。

a : 4点、b : 3点、c : 4点、不明 : 2点

脚台が残存するものは21点ある。

1 : 1点、2 : 8点、3 : 8点、

4 : 2点、5 : 0点、6 : 2点

様々な型式に属するものがあり、蹄脚円面硯Aではみられない019・273などの脚台6が存在する。

大きさは、外堤部径19.8～29.0cm、脚台径15.8～32.0cmのものがある。平城宮においては、脚台径が18.4cmの中型品が最小であるが、奈良市資料では15.8cmが最小である。

蹄脚円面硯Bは、この分類結果が示すように、型式差が多くみられ、生産工房あるいは工人が多彩であることが推測できる。さらに、今回示した分類の中にも、まだ別々の型式的特徴として括れる要素も内包している。製作技術上の系譜を知るための重要な手掛かりになると考えるが、この問題については、奈良市資料だけで分析するには限界があるので、平城宮等の出土陶硯をも含め検討し、改めて提示したい。

iii. 獸脚円面硯 硯部に3個以上の獸脚を付し、脚部下端を脚台で繋がらないものである。1点確認した。139は残存する脚部の位置から3ヵ所に獸脚が付くとみられる。硯裏面はロクロケズリで調整され、裏面から外堤にかけては自然釉が厚くかかる。硯面一面に墨が付着する。獸脚円面硯は、8世紀初めには生産されなくなると言われているが、本資料は、右京三条三坊一坪の調査⁵⁾で検出した井戸SE 14の抜取穴から8世紀末頃の土器と共伴して出土したものである。

iv. 無脚円面硯 脚柱部がないもので2点(120・237)ある。いずれも硯面に突帯状の内堤がめぐるタイプで、外堤部から硯裏面にかけて自然釉がかかる。237は硯部裏面も硯として使用しており、器表面は滑らかで墨

痕が付着している。裏面には重ね焼きの痕跡もみられる。

2) 円形硯

硯部は平面円形、海部が片方に偏るか区別されないもので、5点(122・217・232・322・338)確認した。232は獣脚が、338には面取りされた高い脚が付く。5点とも硯裏面に自然釉がかかる。

3) 宝珠硯

外形を2個以上偶数の円弧と1個の尖形とで宝珠形に造形し、裏面に2脚もしくは4脚付すもので、3点(275・293・379)確認した。293の外形は、宝珠硯の定義と若干異なり、1個の円弧と1個の尖形で宝珠形を作っている。硯面には突帯状の内堤を眉形に付け、硯面と海部を分ける。裏面には面取りされた低い脚が3個付くと考える。

宝珠硯は型作りと考えられており、硯面に範傷があり同範と認定されるものが平城宮内裏北外郭地区と東院西辺地区から出土している⁶⁾。

4) 形象硯

楕円形の硯部に海部と硯面部を設け、鳥・亀・羊などの頭頸部・胸部・尾部を立体的に造形するもので、16点

ある。硯部には堤によって海部を作るが、海部は硯面に比べ丁寧な仕上げの調整を加えていないものが多い。040は鳥形硯で、硯面から硯尻が残っている。平城宮内裏東方官衙・造酒司地区南辺で出土した鳥形硯⁷⁾と形態がよく似ている。024は竹管によって羽毛が表現されている。

5) 風字硯

硯尻側に2脚をつけて少し高くし、硯面を硯頭側に傾斜させるもので、15点ある。このうちには黒色土器B類の風字硯(163)1点を含む。いずれも硯裏面に自然釉が厚くかかるものが多く調整が見えにくい。硯面・硯裏面ともにナデおよびヘラケズリ痕跡が残る。中にはハケメ痕跡が残るものがある。376は、眉毛状を呈する突帯で海部と硯面とを分けている。012は硯部と硯裏面に重焼きの痕跡がある。

6) 特殊硯

上述してきた種類に属さない形の硯をまとめた。多角硯(115)は平面12角形に面取りされ、平坦な硯面と高い角高台がめぐる⁸⁾。硯面中央部がわずかに窪む。高台外面には丁寧なヘラミガキが施されている。水滴付きの硯(207)は、外堤の内側に水滴が付された硯で、形象硯もしくは宝珠硯になる可能性がある。水滴になると考えられる部位は、「凸」形状を呈しており上部を欠く。その下端に径0.4～0.5cmの小穴が穿たれ硯面に水が流れる仕組みになっている。硯裏面には自然釉が厚くかかる。

7) 猿面硯

須恵器壺もしくは甕の体部片を打ち欠き、猿の顔面のような楕円形状に加工したもので、2点(155・356)ある。いずれも硯面・硯裏面は丁寧に磨かれ、手触りが滑らかであるが、硯面にはわずかにロクロ目が残る。

以上、奈良市資料のうち量的にも多く残存状態の良い圈足円面硯および蹄脚円面硯を中心に形態的特徴を把握するために形態分類を試み、その概要を述べた。次に、器表面に残された調整痕跡や自然釉がかかる状態などから、圈足円面硯・蹄脚円面硯の製作技法についてふれておく。

(2) 製作技法

1) 圈足円面硯製作工程

圈足円面硯は、須恵器の基本的な製作技法と共通しており、一般的な須恵器杯・皿などに比べて器表面にヘラミガキを施すなど丁寧に仕上げたものが多い。器表面の調整痕跡から以下の製作過程を復原した。

①天地を逆方向にして、丸みをおびた平底の鉢状になるよう粘土紐を巻き上げる。②内・外面をロクロナデまたはロクロケズリで調整したのち、脚台部を作る。硯部



円形硯

資料 355



資料 286



宝珠硯

資料 208



資料 293



形象硯

資料 024



風字硯

資料 062



特殊硯

資料 207



猿面硯

資料 155

内面から脚柱部内面にかけてアーチ状を呈しているものが多いが、おそらく端部に丸みをもったコテ状の工具を使っていると考え。③器体を正位置に据えなおし、外堤・突帯になる部分に粘土紐を貼りつけ形を整えて、①段階の丸みをおびた底部外面に海部と硯面を作る。海部は、ロクロナデにより窪みを作り出しているものとコテ状の工具で作らだしているものがある。硯面は、ロクロケズリのちミガキを加えて仕上げているものが大半である。外堤部よりも硯面が高いものは、硯面に粘土を足して重上げしているようである。外堤や突帯の貼付は、接合痕跡が分からないように、ヘラ先などの工具で丁寧に脇を調整している個体がほとんどである。④最後に、ヘラ状工具を使って脚柱部の透孔を穿ち、圏線や線刻などで文様を描く。

圏足円面硯は、硯の大きさにかかわらずほとんど同じ工程で製作されているものと考え。また、コテ状の工具の使用やヘラミガキの多用、突帯の貼り付け後にひと手間かけるなど非常に丁寧に作られている個体が多いことも判明した。

例外的な資料として、圏足円面硯をみようみまねで製作したと考えられるもの(005)が出土している。調整痕跡も雑な印象があり、興味深い資料である。

2) 蹄脚円面硯の製作技法

蹄脚円面硯脚は、製作技法の違いにより、①硯部と脚台部は別々に作る蹄脚円面硯Aと②硯部と脚台部を一連で成形する蹄脚円面硯脚Bに分類されており、両者にみられる脚柱部の飾りは、脚頭・脚節・獣脚様の三角飾りを一連で型作りされたものを貼り付けていると考えられている。蹄脚円面硯AとBの成形技法については、指摘されるとおり硯部と脚台は別作りされるものと、一連で作られたものがあることが分かる。しかし、脚柱部の飾りが「型づくり」という点に関しては疑問が残るため、以下で若干の私見を記す。

「型づくり」の根拠としては、①脚頭・脚節に木目痕が残る。②脚頭剥離面・脚柱内面の縦方向ヘラケズリ痕跡は脚柱部の型作り成形時の痕跡であると述べられている。これに対して筆者は違う見方をしており、これらの痕跡は「型づくり」によるものではなく、板を利用して形を整えている可能性はあるものの、基本的に手づくねによる一連の作業中の痕跡と考える。資料観察からは、形を揃えた脚頭と三角形の脚柱を別々に作ったものを接合したのち、脚節を貼り付けたと判断され、脚頭・脚節に残る木目痕とされているものは、脚節の粘土紐を貼り付けた際に、接合部分の脇をヘラ状の工具または布や草



頭部の脇に残るナデの痕跡



貼り付けによる脚節部



コテ状工具の痕跡



手づくね成形による脚頭部

の端を使って押さえた時に生じたナデ痕跡であると考えられる。蹄脚円面硯脚Aの脚柱部は、同一個体内では形のばらつきが少ない精巧な製品が多いが、別個体と比べると様々な形を呈しており、「型」が存在するのであれば同範製品が存在することになるが、現在のところはそのような資料はみつかっていない。仮に板目痕跡が残っている資料があれば、それは板を利用して形を整えた際の痕跡と見た方が妥当であると考えられる。脚節部の下にはナデ調整痕跡が残る資料(080・082)もある。また、脚柱部の獣脚様の三角飾りにはヘラケズリ痕跡を残すものが大半を占めていることから、「型」を使用していない根拠としてあげることができる。

3) 蹄脚円面硯Aの製作工程

器面に残された痕跡や調整から復原してみる。

①硯部・脚柱部・脚台をそれぞれ作る。②脚台に脚柱部を貼り付ける。③硯部を天地逆に向けて置く。④硯部下端と脚頭部の接合する部分にヘラで線を描き貼る位置に記す。⑤脚柱～脚台部を天地逆にむけて、明示した線を参考にして、硯部下端に脚頭部を貼り付ける。⑥最後に脚頭部と硯部下端がしっかり接合するように、脚頭部の脇をヘラなどの工具でナデつける。⑦天地逆にして焼成する。

④の工程は出土資料の157、⑥は031・119・126から復原した。④の工程は必ずおこなっているとは限らず、蹄脚円面硯Aの外堤部の下方にある突帯の下に脚頭部を貼り付けている個体が多いことから、突帯を貼り付けの基準としていたのかもしれない。186の硯部下端には、脚頭部を貼り直した痕跡がみられる。蹄脚円面硯は大型のものが多く、接合面の狭い硯部と脚柱～脚台部の接合はかなり難しい作業であったことが想定できる。

4) 蹄脚円面硯Bの製作過程

蹄脚円面硯Bの製作技法は、圈足円面硯の製作過程と①②までは同じである。③器体を正位置に直し、幅の広い脚台部をつくる。④外堤・突帯になる部分に粘土紐を貼りつけ形を整える。底部・海部の作り方は圈足円面硯と同じである。⑤側面に脚頭と三角飾りを貼った後に脚節の細い粘土を貼付け、飾りをつくる。脚台に乗せた三角は、脚台に粘土を足して三角を埋め込んだ資料もある。⑥脚柱飾りの間をヘラ状の工具で切り取り透孔とする。蹄脚円面硯Bの製作技法は、注意深い作業が必要な工程を残すが、蹄脚円面硯Aに比して製作過程全体としては簡略化したものであるといえよう。このような製作技術の改良は、量産面や未経験の工人への波及においては大きな一助となったであろう。

III 陶硯の出土分布状況

奈良市資料383点と『集成I・II』で報告された平城宮・京跡および寺院跡の資料を合わせると1,455点⁹⁾となり、これらの出土地点を視覚的に捉えるために図5に示し、平城京の条坊ごとに出土点数を表2～4¹⁰⁾にまとめた。

(1) 平城京右京での傾向

三条大路付近から以北は、右京二条三坊から右京三条三坊にかけての地域に集中しており、その他は平城宮や朱雀大路に近いところに分布している。四条大路以南では、右京八条一坊に集中しており、その他は薬師寺旧境内近辺、右京五条四坊、右京六条一坊、右京七条一坊・二坊、右京八条二坊に疎らに分布している。これらの疎密傾向は、遺跡の性格を反映していることもあれば、地域における発掘調査の面積の多少により左右されている場合も考えられる。特に右京二条三坊から三条三坊にかけては、近鉄西大寺駅周辺土地区画整理事業地に伴い広範囲に奈良市が発掘調査を実施している場所であり、右京八条一坊については、大和郡山市の焼却場建設に伴う大規模な発掘調査が実施されたところである。

そこで、出土点数が多かった右京二条三坊の各坪の調査面積を例にとって出土率を調べてみた。表1は、各坪で実施した調査の総面積と出土量を出し、1,000㎡あたり何点出土しているのかを算出したものである。出土率が一高いのは、右京二条三坊六坪・十二坪・十五坪で1,000㎡あたり4.0点台で、低いのは七坪の0.7点であった。坪内での発掘区の位置による違いも考慮する必要があるが、坪によって差異が認められる。右京八条一坊十三・十四坪では、十三坪が調査面積3,115㎡で23点出土、十四坪は4,300㎡で16点で、出土率は、十三坪が7.4点、十四坪は3.7点となる。出土率としては、右京二条三坊六坪¹²⁾と右京八条一坊十三坪¹¹⁾では、宮に近い二条三坊六坪より宮から離れた八条一坊十三坪の方が出土量が高い。右京八条一坊十三坪では、工房関係の遺物が大量に出土しており、官営工房の可能性が指摘されている所である。右京二条三坊六坪・十二坪・十五坪の出土率が高い理由は明らかではないが、六坪からは施釉瓦、佐波理箸、帯金具、滑石製環状鈕付蓋など出土遺物の内容が特異な状況であることと関係がある

表1 陶硯の出土率

条坊	調査面積	出土点数	出土率
R.2-3-2	7,450	20	2.7
R.2-3-3	10,540	15	1.4
R.2-3-4	12,050	9	0.7
R.2-3-6	6,985	28	4.0
R.2-3-7	13,192	9	0.7
R.2-3-9	2,150	2	0.9
R.2-3-10	3,030	3	1.0
R.2-3-11	9,728	21	2.2
R.2-3-12	1,390	6	4.3
R.2-3-15	1,000	4	4.0
R.8-1-13	3,115	23	7.4
R.8-1-14	4,300	16	3.7

のかもしれない。しかし、両坊をもって右京全域の出土傾向として一般化することは注意が必要である。

(2) 平城京左京での傾向

左京では、平城宮に近い二条大路界限に分布が集中しており、量的にもまとまって出土する坪が多い。特に、長屋王邸宅跡とされる左京三条二坊一・二・七・八坪¹³⁾からの出土量は平城京内においても特異であり、出土率は次のとおりである。

一坪：発掘面積 7,000㎡、15 点、出土率 2.1 点

二坪：発掘面積 4,400㎡、7 点、出土率 1.6 点

七坪：発掘面積 15,000㎡、68 点、出土率 4.5 点

八坪：発掘面積 3,300㎡、34 点、出土率 10.3 点

長屋王邸宅内の家政機関の存在が推定されている七・八坪に集中していることがわかる。

さらに一条大路付近、四条から五条の東四坊大路付近、五条一坊の地域などにも分布が集中している。五条大路以北と東四坊大路以西といった範囲では出土量の多少はあるにせよ、どの坊からも陶硯が出土している。一方、

東四坊大路から以東（外京域）になると分布・出土量ともに希薄である。この周辺一帯には、中世～近世の都市遺跡が広がっているため、奈良時代の遺構が壊され出土遺物が少ない所が多い。

五条大路以南では、左京七条一坊のように集中するところもあるが、全体的には右京と同じような疎らな分布傾向を示している。

(3) 東市跡推定地での傾向

平城京東市跡は、左京八条三坊五・六・十一・十二坪の4坪分にあたりと推定されている。十一・十二坪には東堀河が南北に流れており、橋脚も検出されている。これまでの調査で陶硯は10点確認されており、いずれも圈足円面硯である。現在までの発掘面積と出土点数は、六坪は8,128㎡で3点、十一坪は2,332㎡で5点、十二坪が563㎡で2点である。出土率は、順に0.4点、2.1点、3.5点となる。東市跡推定地内は、東堀河以外の地点では陶硯に限らず出土遺物量が全体的に希薄傾向を示すが、外堤部径が27.5cmの大型の圈足円面硯（a-Aタイプ）

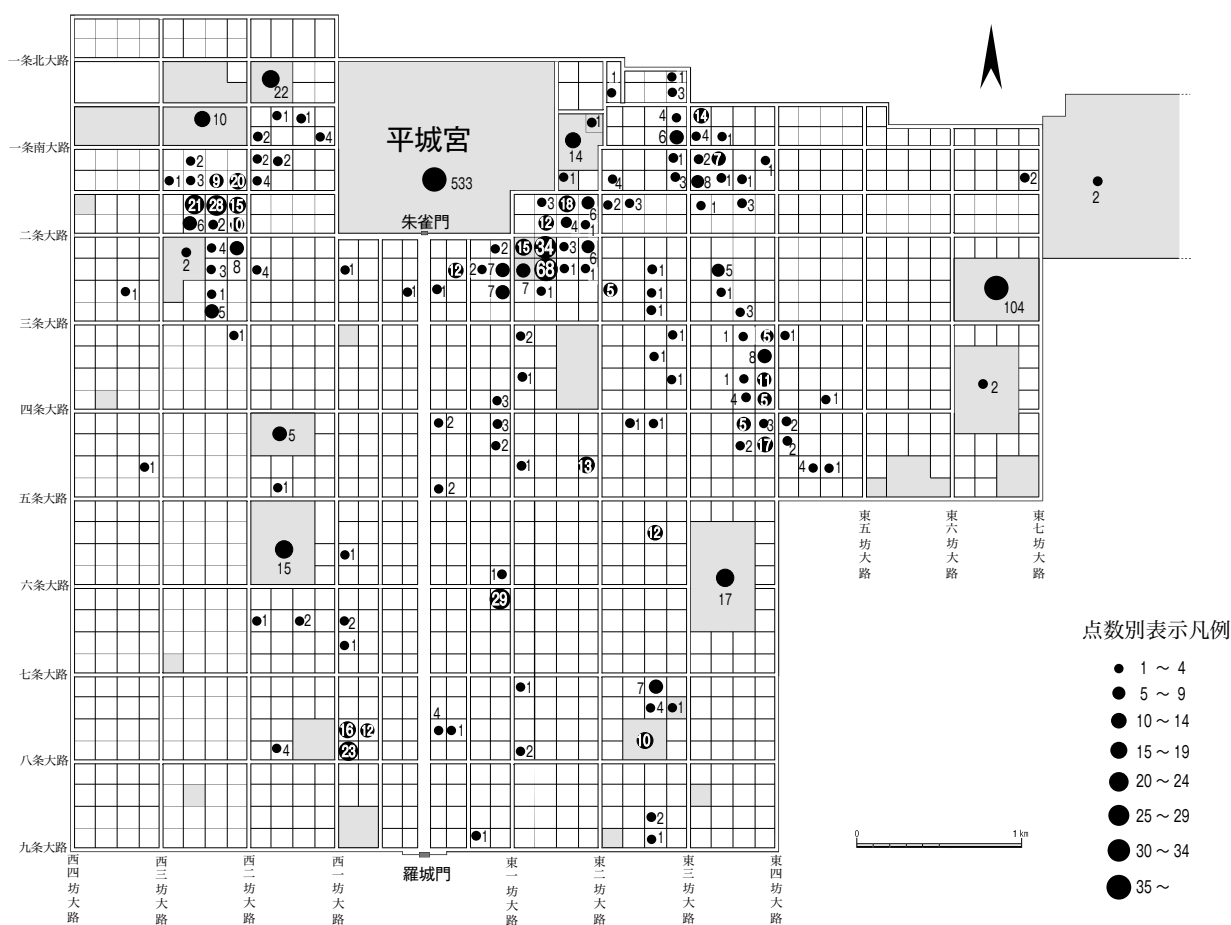


図5 平城京出土陶硯の分布状況

が八条三坊六坪から出土しており、東市内の遺構の性格を考える際の手掛かりになるであろう。

右京・左京の出土傾向は、これまでに工房関連遺跡や宮外官衙または家政機関としての性格をもつ遺跡が多い傾向にあることが指摘されているが、これ追認し得る結果であった。しかし、遺跡の立地条件の違いなどもあり、出土率だけで判断することは危険である。研究の進んでいない転用硯の問題も存在し、定形硯と転用硯の差異や検出遺構や他の遺物の検討を進めていく中で、ひとつの要因としてみておきたい。

(4) 寺院での傾向

奈良市資料の寺院出土陶硯は、量的には少なく、史跡大安寺旧境内が13点、元興寺旧境内が1点、菅原寺境内が2点、西大寺旧境内が8点、西隆寺跡が4点、奈文研資料を合わせても197点と少ない。寺院内では、主要伽藍よりも実務的な空間に出土が偏るとの見解が『集成I・II』で示されている。奈良市資料においても、大安寺旧境内では主要伽藍からの出土はなく、小子房や僧房周辺、境内地に残された杉山古墳の周濠埋土から出土した資料に限られる。寺院という性格上、硯の使用頻度が一般宅地よりも多く、相当量の筆記道具類が必要であったことは想像できる。興味深い事例として、興福寺一乗院の発掘調査では、1つの土坑から98点もの陶硯が出土しており注目される。このような出土状況は、平城宮においてもみられず、寺院遺跡の特徴であるともいえよう。ただ、大安寺旧境内に残された杉山古墳の周濠からは多数の転用硯が出土しており¹⁴⁾、現在遺物調査中の西大寺第25次調査¹⁵⁾で出土した硯の主体を占めるのも転用硯である。転用硯と定形硯の使い分けも今後の硯の研究において重要な視点になると思われる。

IV 圈足円面硯と蹄脚円面硯

今後の資料増加によって認識の補正は必要であるが、宮および寺院を含めた平城京跡では、圈足円面硯と蹄脚円面硯を合わせた円面硯が陶硯の約9割を占めており、それぞれの出土状況を示したものが図7である。

円面硯のうち、大きさが中・小型のものに中心のある圈足円面硯が多い点は、調査地の違いを越えて共通する

表2 出土地別による陶硯の内訳

出土場所	圈足円面硯	蹄脚円面硯	その他の陶硯		計
左京・右京	448 (62.7)	134 (18.7)	133 (18.6)		715
東市跡	10 (100)	0	0	0	10
寺院跡	142 (72.1)	7 (3.6)	48 (24.3)		197
平城宮	278 (52.2)	193 (36.2)	62 (11.6)		533
合計	878 (60.3)	334 (30.0)	243 (16.7)		1455

() 内数字：%

表3 出土陶硯の内訳 (右京・左京1)

条-坊-坪	圈足	蹄脚	円面	円形	宝珠	形象	風字	黒風	特殊	猿面	不明	計
R1-2-4	1	2							(1)			4
R1-2-6	(1)											1
R1-2-11	1											1
R1-2-13	2											2
R2-2-9	2											2
R2-2-15	3	1					1					5
R2-2-16	1	(1)										2
R2-3-2	13	4				1	2					20
R2-3-3	9	2		2		2						15
R2-3-4	8					1						9
R2-3-5	1					1						2
R2-3-6	19	8					1					28
R2-3-7	7	1				1						9
R2-3-9	1	1										2
R2-3-10	1	2										3
R2-3-11	11	5	1	1			2		1			21
R2-3-11・15		(1)										1
R2-3-12	3	2	(1)	1								7
R2-3-15	4											4
R3-1-3	(1)											1
R3-1-15	(1)											1
R3-2-15	4											4
R3-3-1	6	1	1									8
R3-3-5	(4)		(1)									5
R3-3-6	1											1
R3-3-7	3											3
R3-3-8	3	1										4
R3-4-6	1											1
R3-5-13							1					1
R4-3-1	(1)											1
R5-2-12								(1)				1
R5-4-3	(1)											1
R6-1-14			(1)									1
R7-1-14	1											1
R7-1-15		1								1		2
R7-2-7	(1)						(1)					2
R7-2-15	(1)											1
R8-1-11	(4)	(6)	(2)									12
R8-1-13	(13)	(5)	(2)		(1)	(2)						23
R8-1-14	(10)	(5)		(1)								16
R8-2-12	(1)	(3)										4
北辺-1-2	(1)	(1)										2
北辺-2-2	(2)											2
北辺-4-3	(1)											1
平城宮北方	(1)						(1)					2
右京合計	150	53	9	5	1	8	9	1	2	1	0	239

条-坊-坪	圈足	蹄脚	円面	円形	宝珠	形象	風字	黒風	特殊	猿面	不明	計
L1-3-2	(1)											1
L1-3-5		1		1								2
L1-3-13	5							1				6
L1-3-14	3 (1)											4
L1-3-15	(2)					(1)						3
L1-3-16	(1)											1
L1-4-3	(6)	(1)					(4)	(3)				14
L1-4-4	(2)						(2)					4
L1-4-5	1											1
L2-2-5	(9)	(2)	(1)									12
L2-2-6	(2)			(1)								3
L2-2-10				(1)								1
L2-2-11	(14)	(1)				(3)						18
L2-2-12	3	1										4
L2-2-13	(1)											1
L2-2-14	(3)			(2)			(1)					6
L2-3-2	4											4
L2-3-3	(2)											2
L2-3-6	(1)		(2)									3
L2-4-1	1	1										2
L2-4-2	6	1				1						8
L2-4-3		1										1
L2-4-7	7	1										8
L2-4-10	1											1
L2-4-11	3											3
L2-4-16	1											1
L-2-5北郊	1											1
L2-7-15	2											2
L3-1-3	1											1
L3-1-7	(9)	(2)					(1)					12
L3-1-10		(2)										2
L3-1-14	(2)	(3)	(1)				(1)					7
L3-1-15	(6)	(1)										7
L3-1-16	(2)											2
L3-2-1	(9)	(6)	(2)									17

() 内数字：奈文研資料

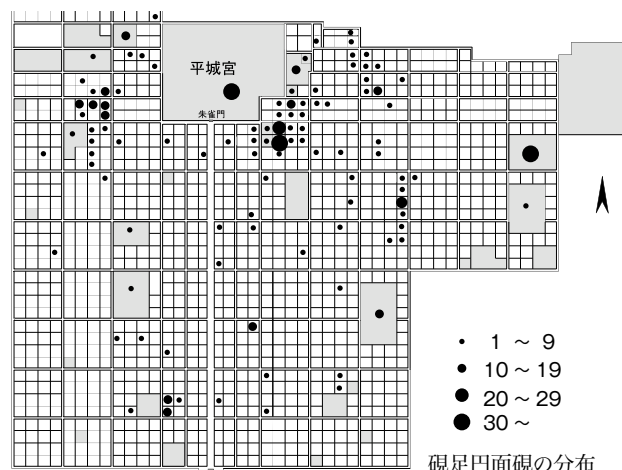
表4 出土陶硯の内訳(左京2・東市・寺院・平城宮)

条-坊-坪	圈足	蹄脚	円面	円形	宝珠	形象	風字	黒風	特殊	猿面	不明	計
L3-2-2	(2)	(5)					(1)					8
L3-2-6	(1)											1
L3-2-7	(34)	(21)	(3)	(3)		(1)	(3)		(3)			68
L3-2-8	(20)	(5)	(1)	(4)	(1)				(1)	(2)		34
L3-2-9	1	1					1					3
L3-2-10	(1)	(1)										2
L3-2-15	(1)											1
L3-2-16	4				1				1			6
L3-3-3	4											4
L3-3-6				1								1
L3-3-10	1											1
L3-3-11	1											1
L3-3-12	1											1
L3-4-6	1											1
L3-4-7	(3)	(1)		(1)								5
L3-4-12	1	1		1								3
L3-4-13	1				1							2
L4-1-13	1											1
L4-2-1	(2)											2
L4-2-3		1										1
L4-3-10		1										1
L4-3-14	1											1
L4-3-16	1											1
L4-4-9						(1)						1
L4-4-11				1								1
L4-4-12	3											3
L4-4-13	4		1				1					6
L4-4-14	11											11
L4-4-15	7	1										8
L4-4-16	5											5
L4-5-1	1											1
L4-5-12						1						1
L5-1-1	2											2
L5-1-4	(1)	(1)										2
L5-1-15		1				1						2
L5-1-16	1	2										3
L5-2-3					1							1
L5-2-14	6	2		2	2	2	1					13
L5-3-8	1											1
L5-3-9	1											1
L5-4-9	2		1		1				1			5
L5-4-10	2											2
L5-4-15	8	6		1		2						17
L5-4-16	3											3
L5-5-6			1									1
L5-5-1	2											2
L5-5-2	2											2
L5-5-7		1										1
L5-5-11							1					1
L6-1-13	1											1
L6-3-10	8	1				1						10
L7-1-16	(16)	(3)	(2)	(5)	(1)	(1)			(1)			29
L8-1-3	(3)	(1)										4
L8-1-6						(1)						1
L8-2-1	1											1
L8-2-4	1			1								2
L8-3-9	(6)					(1)						7
L8-3-9・16	(1)											1
L8-3-10	(3)			(1)								4
L8-3-15						(1)						1
L9-1-12	1											1
L9-3-11	1					1						2
L9-3-12		1										1
左京合計	298	81	16	26	6	19	17	4	7	2	0	476
東市跡推定地	10											10

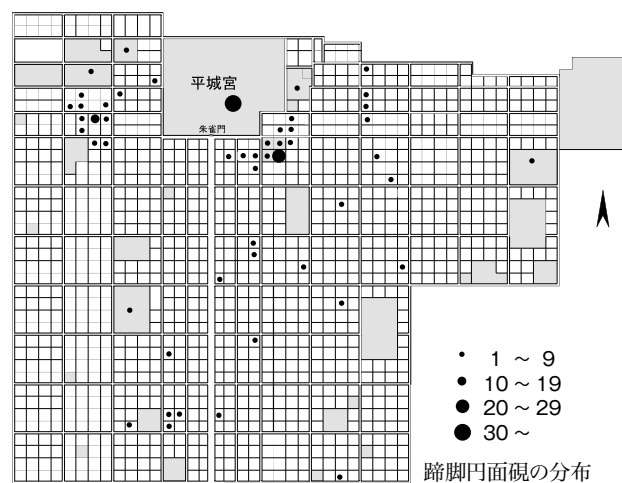
遺跡名	圈足	蹄脚	円面	円形	宝珠	形象	風字	黒風	特殊	猿面	不明	計
大安寺	8 (2)		1	(2)	1	1	2					17
法華寺	(11)	(2)					(1)					14
阿彌陀浄土院	(3)											3
元興寺	(1)									1		2
海竜王寺	(1)											1
興福寺	(77)	(2)	(13)	(1)	(4)	(4)	(2)		(1)			104
西大寺	5 (2)	1		1			1					10
西隆寺	3(15)	1	1 (1)			1						22
東大寺									(2)			2
唐招提寺	(4)								(1)			5
薬師寺	(8)	(1)			(2)	(1)	(3)					15
菅原寺	2											2
寺院計	142	7	16	4	7	7	9	2	2	1	0	197

平城宮跡	(278)	(193)	(11)	(16)	(3)	(11)	(9)	(8)	(4)			533
------	-------	-------	------	------	-----	------	-----	-----	-----	--	--	-----

() 内数字：奈文研資料



硯足円面硯の分布



蹄脚円面硯の分布

図6 平城京内における円面硯の分布

が、その出土比率には差異が見られる。だが外堤部径が20cmを越す大型の圈足円面硯は、三条大路以北の平城宮周辺に多いことも指摘できる。

平城宮では大型品を主体とする蹄脚円面硯が数多く出土している点は、これまでに指摘されているところで、平城宮が日本律令国家の政庁であるという遺跡の特殊性を顕著に示している。

平城京内では、長屋王邸とされる左京三条二坊七坪から21点の蹄脚円面硯が出土している。蹄脚円面硯の出土率は45.6%で平城宮を上回っており、出土率の高さは長屋王邸宅という特殊性を反映したものとみられる。

蹄脚円面硯は、社会的地位や身分を象徴する頂点に位置する最高級の硯であったことはほぼ間違いないと考えられる。

V まとめ

本稿では、平城京跡から出土する陶製の硯を考古資料として集成し、概要を説明してきた。石製品にも視点を向けて調査したが、石製硯は奈良時代のものでは正倉院に伝わる青斑石硯¹⁶⁾がみられるだけで、平城宮・京に

においては出土例を確認することができなかった。このことから硯は、平城京跡では陶硯が100%近い状況で主体を成すものであったと理解してよいであろう。

平城京跡出土陶硯(定形硯)は、調査地の違いを越えて、円面硯が9割近く占め、宝珠硯など他の形の硯は少数に止まり、円面硯のなかでも中小型の大きさの圈足円面硯と大型の蹄脚円面硯の2種の陶硯が中心であったことが明らかになった。このことは、古代律令国家が、都城の役所で使用する中心的な硯として、唐代に盛行した「丸い硯」を選択した結果であり、円面硯が律令体制を象徴するものであったことを示すものであろう。

圈足円面硯は、宮・京を通じて常に多数を占めるが、平城宮においては、平城京よりも蹄脚円面硯の出土割合が高く、長屋王邸など高級貴族の邸宅も宮に順じる状況を呈している。蹄脚円面硯は、高い品質の硯として製作され、陶硯の中の頂点に位置するものであったといえる。

宝珠硯や形象硯、風字硯、特殊硯といった少数の硯の位置づけが問題ではあるが、平城京内で多量に出土する須恵器杯・蓋などの転用硯は、律令国家を支えた文書行政の普及を直接的に示す考古資料であると思われる。

平城京跡出土陶硯の生産地については、量的に陶邑窯の製品が中心を占めると思われるが、猿投窯産の製品も確実に一定量あり、その他の生産地を想定せざる得ない資料も存在する。製作技法の研究は、生産地の特定、流通については硯の地方への波及などを知るためには欠かせないものであり、今回の分類視点をもとに今後も継続的に陶硯研究を進めていきたい。

本稿をまとめるにあたり、神野 恵・木村理恵(奈良文化財研究所)、宮原晋一(奈良県立橿原考古学研究所)、小森俊寛・大洞真白・備前知世(八幡市教育委員会)、井戸竜太(助枚方市文化財研究調査会)の各氏、奈良市埋蔵文化財調査センター所長をはじめとする職員諸氏の御教示・御協力を得たことに深く感謝申し上げます。

- 1) 奈良文化財研究所『平城京出土陶硯集成Ⅰ－平城宮跡－』2006 奈良文化財研究所史料第77冊、奈良文化財研究所『平城京出土陶硯集成Ⅱ－平城京・寺院－』2007 奈良文化財研究所史料第80冊
- 2) 円面硯の硯面にめぐる突帯については、煩雑さを避けるために内堤の用語を用いた。
- 3) a～cの分類は、奈良文化財研究所によって示されたもので、3つの分類の中にはそれぞれ特徴をもつものがあるとされているが、本稿では使用しなかった。
- 4) 蹄脚円面硯についても奈良文化財研究所が提示したものである。本稿では、蹄脚円面硯の特徴を簡略して記したが、本来の定義内容は奈良文化財研究所『平城京出土陶硯集成Ⅰ－平城宮跡－』2006 奈良文化財研究所史料第77冊に収録されている。
- 5) 「平城京右京三条三坊一坪の調査 第169・173・182・184次

- 調査』『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成元年度 奈良市教育委員会 1990
- 6) このことについては、『平城京陶硯集成Ⅰ』p 29 資料番号21とp 33 資料番号66の資料が同範であると報告されている。硯面には木目痕(範傷)が残ることから同範と認定されているが、奈良市資料の宝珠硯はいずれも破片であるため、型作りの痕跡はみいだせなかった。
- 7) 奈良文化財研究所『平城京出土陶硯集成Ⅰ－平城宮跡－』2006 奈良文化財研究所史料第77冊 p 73- 資料番号469、PL22-469、Ph59-469
- 8) 平城宮東方官衙地区からも12角形に復元される無高台の多角硯が出土している。陶邑産の製品である可能性が考えられている。
- 9) 1,455点は奈良市および奈文研が実施した発掘調査で出土したものを合計した点数である。奈良県立橿原考古学研究所、大和郡山市教育委員会、元興寺文化財研究所や大学による発掘調査の出土資料は含まないが、平城京出土陶硯資料の大半を占める奈良市資料と奈文研資料によってほぼ平城京の出土傾向を窺うことができるものと考えられる。
- 10) 表4・5は、奈良市資料と奈文研資料をまとめて提示したものである。表内表示は、p 131を参照して頂きたい。
- 11) 奈良国立文化財研究所『右京八条二坊十三・十四坪の調査』奈良国立文化財研究所学報第46冊 1989年 発掘区が十三坪と十四坪にまたがっているため、坪境小路路面中軸線から南を十三坪に、北を十四坪として、掲載報告書から発掘面積を計測した。
- 12) 右京二条三坊六坪の調査掲載文献は以下のとおりである。『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成6年度 奈良市教育委員会 1995、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成7年度 奈良市教育委員会 1996、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成12年度 奈良市教育委員会 2002
- 13) 奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995 発掘面積は、脚柱8)と同じ方法で計測した。
- 14) 三好美穂、池田裕英、細川富貴子「第四章 出土土器 第3節 土器」『史跡大安寺旧境内Ⅰ』奈良市教育委員会 1997
- 15) 西大寺旧境内の第25次調査は、平成21年度に実施された発掘調査であり、現在遺物調査中である。
- 16) 本資料は、正倉院事務所『正倉院宝物 中倉』朝日新聞社 1988を参考にした。

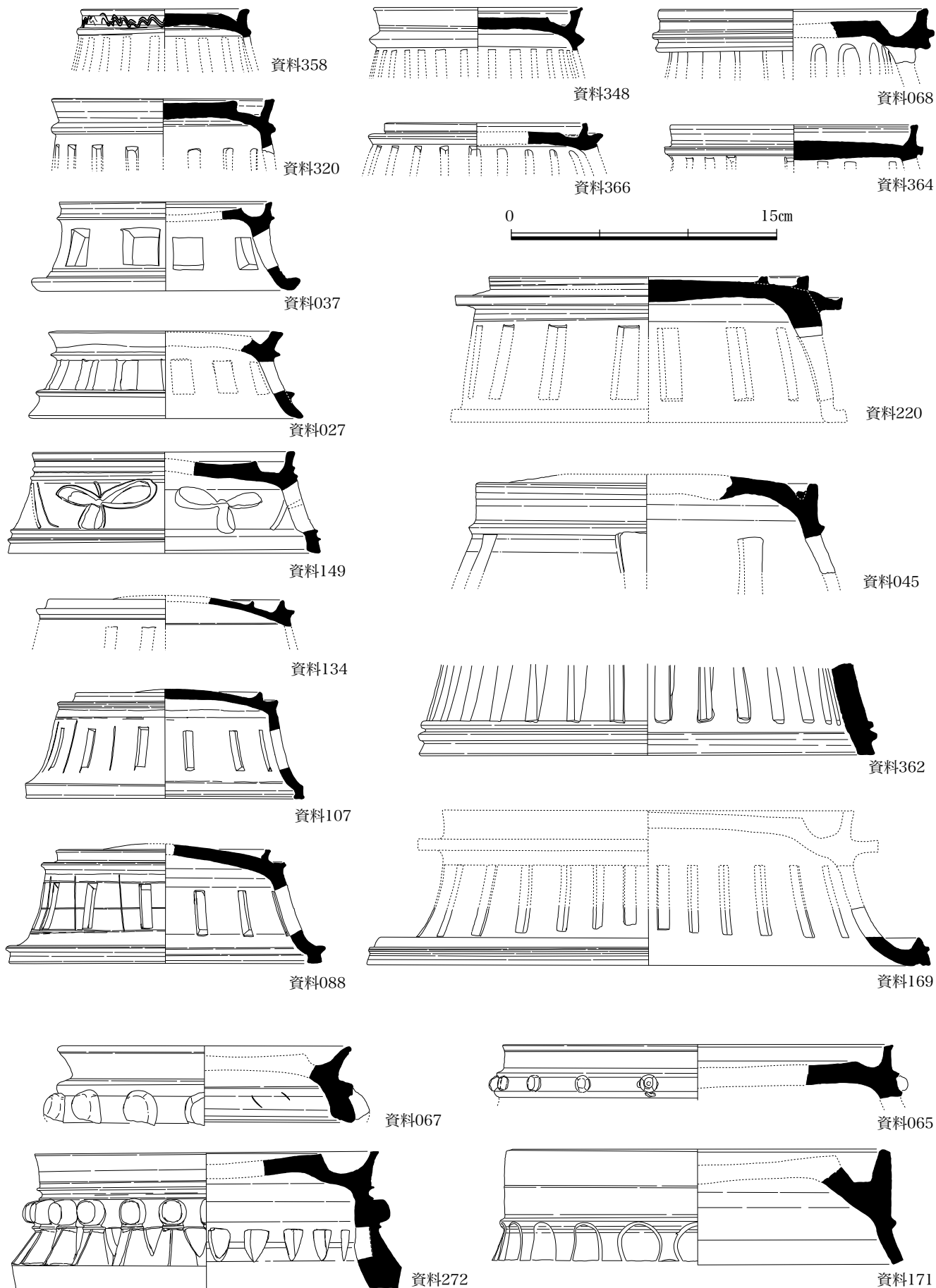


図7 平城京跡出土陶硯1 (1/3)

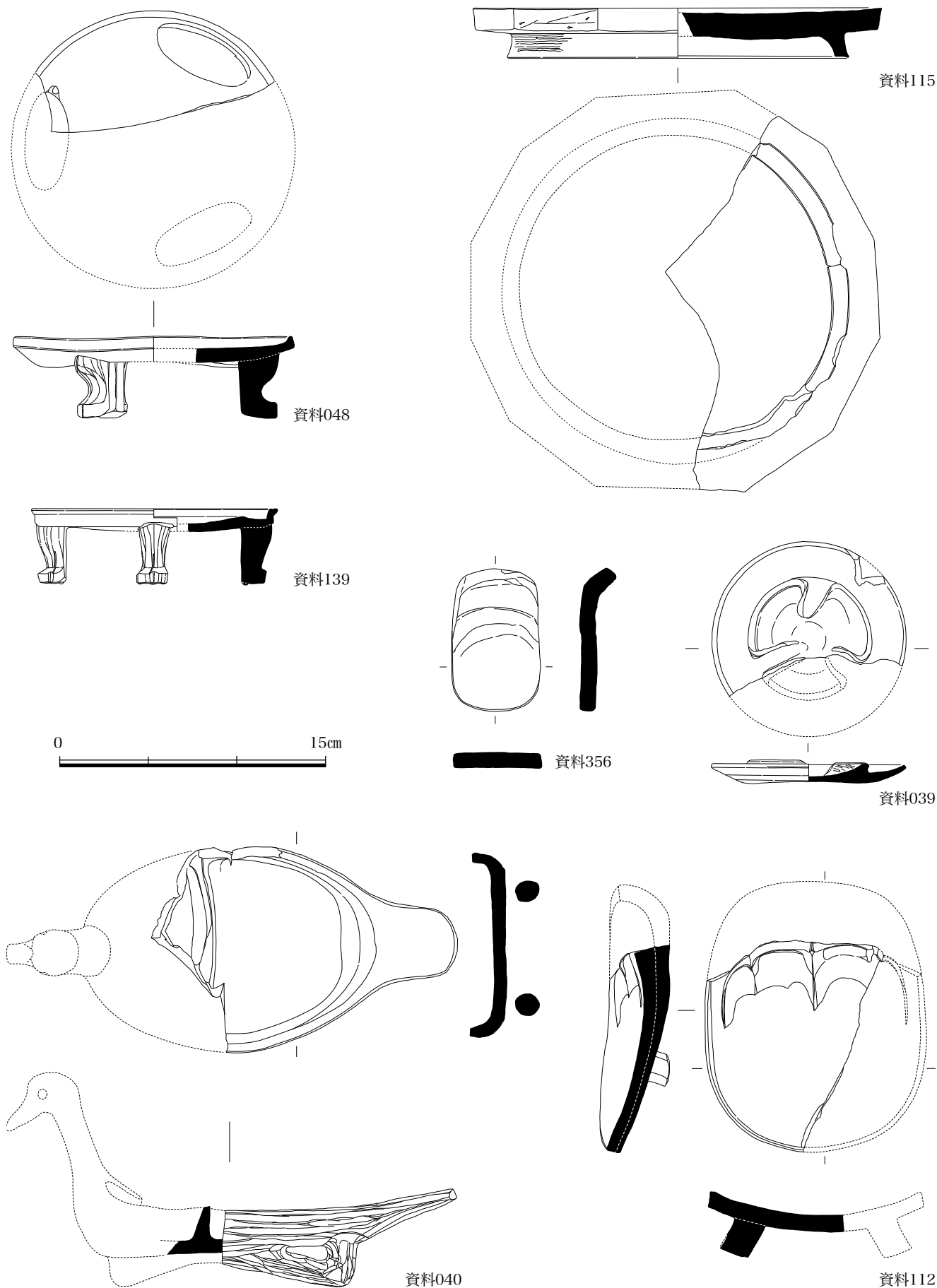


図8 平城京跡出土陶硯 2 (1/3)

【圈足円面硯】



様々な大きさの圈足円面硯



資料 149



資料 107



資料 220



資料 088

【蹄脚円面硯】



資料 272



資料 157



資料 126



資料 284



資料 033



資料 177



資料 273

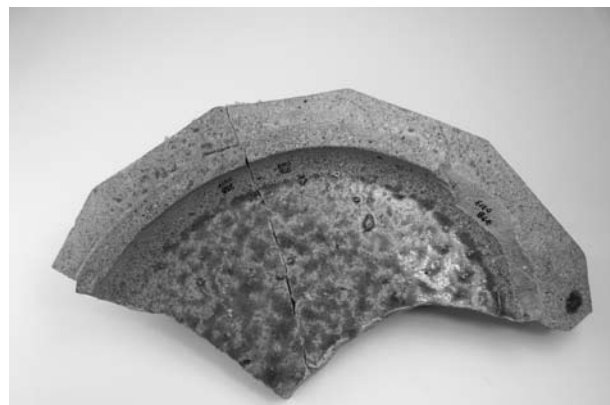


資料 137

【その他の硯 - 1】



資料 039



資料 115



資料 293



資料 139



資料 208



資料 062 (裏面)



資料 048



資料 306

【その他の硯 - 2】



資料311



資料318



資料024



資料024 (鳥胸部外面)



資料040



資料040 (裏面)



資料005



資料005 (裏面)

平城京跡出土陶硯一覽

1. 本表は、奈良市教育委員会が昭和54年度から平成20年度までに、平城京跡内において実施した発掘調査で出土した陶硯の概要をまとめたものである。本書に収録した陶硯は、奈良市埋蔵文化財調査センターで整理を行い、収蔵・保管している。
2. 一覽表の配列は、平城京条坊復原に基づき、右京、左京、東市跡推定地、寺院旧境内地順に配列した。
3. 資料番号は、一個体ごとに番号を付した。接合するものや同一個体と考えられる破片も明記した。
4. 調査次数は、奈良市教育委員会が実施した発掘調査に付与された番号である。
5. 遺跡名の表示要領は次のとおりである。HJ=平城京、L=右京、R=左京、TI=東市跡推定地、GG=元興寺旧境内、SD=西大寺旧境内、KK=菅原寺旧境内、DA=大安寺旧境内、SR=西隆寺旧境内
条、坊、坪は算用数字と、(ピリオド)を用いて表示した。例) 右京一条二坊四坪=R.1.2.4
6. 出土遺構名および遺構時期は各掲載概要報告書に準拠した。時期は、世紀=C、前半=前、中頃=中、後半=後、末頃=末、時期不明=—(ハイフン)で表した。
7. 硯の種類は、次のように略記した。圈足円面硯=圈足、蹄脚円面硯=蹄脚、円面硯=円面、円形硯=円形、宝珠硯=宝珠、形象硯=形象、風字硯=風字、黒色土器B類の風字硯=黒風、特殊硯=特殊、猿面硯=猿面
8. 硯型式は、基本的に奈良文化財研究所『平城京出土陶硯Ⅰ』に準拠しているが、圈足円面硯と蹄脚円面硯は筆者による分類も明示した。
9. 硯の残存状態は、硯部が残存するもの=○、残存しないもの=×とし、脚部は残存する部位を明記し、残存しないものは×を付した。
10. 法量は、可能な限り計測をしたが、小破片で計測できないものは—(ハイフン)を付した。
11. 備考には、自然釉の降下や形態的特徴および調整等を記した。

資料 No	破片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備考
								硯部	脚部		
001		HJ207	R.1.2.4	柱穴	—	圈足	5	×	脚柱～脚台	脚台 30.0	自然釉不明。胎土には白色微石粒を多く含む。
002		HJ207	R.1.2.4	SD 03	8C前～中	蹄脚	B-2	×	脚柱～脚台	—	正置焼成。脚柱内面はロクロナデ調整。
003		HJ207	R.1.2.4	包含層	—	蹄脚	B-4	×	脚柱～脚台	脚台 26.5	正置焼成。
004	3	HJ348	R.1.2.11	素掘溝・包含層	—	圈足	a-A	○	脚柱	外堤 20.0 硯面 15.0	3片接合。正置焼成カ。外堤部端面は内傾する。硯部内面はコテで成形した後、ロクロナデ調整。
005		HJ578	R.1.2.13	SE 501	8C後	圈足	—	○	×	外堤 11.3 硯面 6.8	ナデによって硯面周縁に窪みをつくり海部とする。硯部裏面は指オサエによる凹凸が著しい。外面はケズリ調整。圈足円面硯に分類したが、形態は他の資料と著しく異なる。
006		HJ578	R.1.2.13	SK 601	11C末～12C初	圈足	5	×	脚柱～脚台	—	脚柱下部には2条の突帯がつく。脚台は四角形状。
007		HJ534	R.2.2.9	SD 02	8C	圈足	a-A	○	×	外堤 25.2	正置焼成。硯面の厚さが0.6cmと薄い。
008	2	HJ503	R.2.2.9	包含層	—	圈足	2	×	脚柱～脚台	脚台 15.5	2片接合。正置焼成。透孔数8(復原)。脚柱外面の透孔の間には、縦方向の刻線が1条ある。脚台は屈曲するタイプ。
009		HJ460	R.2.2.15	SD 109	12C前	圈足	aカ	○	—	—	自然釉不明。
010		HJ460	R.2.2.15	SE 503 裏込	8C後～末	圈足	5	×	脚柱～脚台	脚台 29.8	正置焼成。脚台上半に2条の突帯が廻る。脚柱部の透かし孔は細長い楕円形状を呈する。
011		HJ460	R.2.2.15	SE 503 新	8C後～末	圈足	—	×	脚柱のみ	—	正置焼成カ。

資料 No	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								硯部	脚部		
012		HJ460	R.2.2.15	S E 503 新	8 C 後～末	風字		○	—	—	倒置焼成。硯面・硯裏面に重焼き痕跡が残る。内外面ともケズリ調整。研尻近くに脚部痕跡あり。
013		HJ460	R.2.2.15	S D 15 下層	8 C	蹄脚	B - 2	×	脚柱～脚台	—	正置焼成。細い粘土紐を貼り付け脚節とする。
014		HJ504	R.2.2.16	廃棄土坑	12 C 中	圈足	a - A	○	脚柱	外堤 17.0	倒置焼成。透孔は指ナゲで面取りする。
015		HJ283	R.2.3.2	S D 101	8 C～9 C	風字		○	○	—	倒置焼成。眉形状の突帯で内堤を作る。裏面は自然釉が厚くかかり、調整不明。硯尻側に9角に面取りした脚部が付く。
016		HJ283	R.2.3.2	SD103	8 C～9 C	圈足	b - A	○	—	突帯 15.0 硯面 9.6	倒置焼成。硯部内面のロクロ目が顕著である。硯面に低い突帯状の内堤がめぐるタイプ。
017		HJ283	R.2.3.2	SD103	8 C～9 C	圈足	—	×	脚柱のみ	—	倒置焼成。
018		HJ283	R.2.3.2	SD103	8 C～9 C	圈足	b カ - A	○	脚柱	—	自然釉不明。資料 016 と形態が似る。
019		HJ283	R.2.3.2	S E 511	9 C 前	蹄脚	B - 6	×	脚柱～脚台	脚台 21.5	正置焼成。脚節は貼付けと考える。外面には暗オリーブ色(7.5Y4/3)の自然釉が厚くかかる。
020		HJ283	R.2.3.2	S K 514	9 C 前	圈足	a - A カ	○	—	硯面 12.5	自然釉不明。硯部内面に成形時の接合痕残る。胎土に黒色粒子が多く含まれている。
021		HJ283	R.2.3.2	包含層	—	圈足	a - A	○	—	外堤 13.4	自然釉不明。硯面裏の中央に朱もしくはベンガラが付着。
022		HJ283	R.2.3.2	包含層	—	圈足	a - A	○	脚柱	外堤 13.4 突帯 14.1 硯面 10.3	自然釉不明。透孔が貫通していない箇所がある。硯面に低い突帯状の内堤がめぐるタイプ。
023		HJ283	R.2.3.2	包含層	—	圈足	a - A	○	—	硯面 13.0	倒置焼成カ。硯部裏面に粘土紐接合痕が残る。
024		HJ283	R.2.3.2	S E 508	8 C 末	形象		○	○	残存長 11.2 残存幅 6.7	正置焼成。頭部を欠く。全面丁寧なミガキを施す。鳥体部にあたる外堤部外面に竹管文で羽毛を表す。硯裏面には鳥の脚を付す。
025		HJ327-1	R.2.3.2	S B 231・232	8 C	圈足	a - A	○	脚柱	硯面 17.5	正置焼成。外堤の下に細い2段の突帯が付く。硯部内面は段がつくタイプ。
026		HJ327-1	R.2.3.2	包含層	—	圈足	a - A	○	脚柱	—	自然釉不明。外堤部の下に細い突帯が付く。硯部内面に段がつく。資料 023 と形態が似る。
027		HJ327-1	R.2.3.2	包含層	—	圈足	a - A 5	○	脚柱	外堤 13.2 脚台 5.5 器高 4.9	倒置焼成。外堤部下の突帯は、細く尖った三角形を呈する。
028		HJ327-1	R.2.3.2	包含層	—	圈足	6	×	脚柱～脚台	—	正置焼成。脚台に圈線が2条めぐる。
029		HJ327-1	R.2.3.2	包含層	—	蹄脚	A - a	○	×	外堤 17.9	倒置焼成。硯部裏面にはタタキ目が残る。
030		HJ351-2	R.2.3.2	包含層	—	風字		○	脚部	幅 14.0	倒置焼成。硯部裏面はへら削りした後、ナゲ調整。
031	3	HJ431-2	R.2.3.2	S B 322・土坑 ・包含層	8 C	蹄脚	A - a	○	脚頭	突帯 22.0	3片同一個体と考える。自然釉不明。硯部に脚頭部の脇を押さえて接合する。硯部内面はコテ状の工具で成形。
032	2	HJ431-2	R.2.3.2	S B 336	8 C	圈足	5	×	脚柱～脚台	脚台 19.8	2片同一個体と考える。倒置焼成。脚台端部は丸みをおびた三角形を呈する。
033	3	HJ431-2	R.2.3.2	素掘溝	8 C	蹄脚	A	×	脚柱～脚台	脚台 30.5	2片接合。1片同一個体と考える。自然釉不明。脚柱と脚台の接合痕跡が明瞭。

資料 No.	破 片 数	調査回数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								硯部	脚部		
034	3	HJ431-2	R.2.3.2	小穴	8 C	圈足	a - A	○	脚柱～脚台	外堤 8.3 突帯 8.8 硯面 5.3	3片接合。倒置焼成。外堤部外面に波状文がある。外堤端部および突帯端部は丸くおさめる。
035		HJ273-2	R.2.3.3	S E 506	8 C 中	圈足	a - A	○	脚柱	外堤 16.0	自然釉不明。硯面中央部が窪むタイプ。外堤部下の突帯下面に工具のアタリが残る。
036	2	HJ310-1	R.2.3.3	包含層	—	蹄脚	B - 3	×	脚柱～脚台	—	2片同一個体と考える。正置焼成。脚台の接合痕明瞭。
037	7	HJ310-1	R.2.3.3	S A 306・ 包含層	8 C 前	圈足	a - A 4	○	○	外堤 12.0 脚台 15.2 硯面 8.4 器高 5.0	5片接合。2片同一個体。倒置焼成。脚部の器厚が0.7～1.2cmと厚いのに対して硯面が0.5cmと薄い。
038	2	HJ310-1	R.2.3.3	S D 109・ 包含層	8 C	形象		○	脚部	—	2片同一個体と考える。正置焼成。外堤および硯部外面に波状の線刻あり。
039	2	HJ310-1	R.2.3.3	包含層	—	円形		○	無脚	外堤 10.9 器高 1.3	2片接合。自然釉みあらず。全形は皿形を呈しており、硯面には銀杏形の内堤部が3ヵ所に付く。内外面とも丁寧な磨きを施す。
040	2	HJ310-1 ・ 293	R.2.3.3、 R.2.3.4	素掘溝・包含層	—	形象		○	脚部	残存長 17.2 幅 11.8 残存高 5.5	2片接合。正置焼成。鳥形硯。硯裏面にはハケメ痕跡が残る。平城宮内裏東方官衙・造酒司地区から出土した鳥形硯に似る。
041		HJ310-1	R.2.3.3	包含層	—	圈足	a - A	○	×	外堤 13.0	正置焼成。硯部内面はコテ状の工具で調整。
042		HJ310-1	R.2.3.3	包含層	—	圈足	a - A	○	脚柱	外堤 10.6 硯面 6.6	倒置焼成。外堤部はやや内湾しながら立ち上がる。端部は内傾する。外堤部下の突帯は、細く尖った三角形を呈する。
043		HJ431-3	R.2.3.3	S E 524 掘形	8 C	圈足	a - A	○	脚柱	外堤 17.0	正置焼成。
044		HJ431-3	R.2.3.3	S E 529 掘形	8 C 後	圈足	—	×	脚柱のみ	—	正置焼成。内外面の手触りが滑らかである。
045		HJ431-3	R.2.3.3	S E 529 枠内	9 C 前	圈足	a - A	○	脚柱	外堤 19.7	正置焼成。海部に重ね焼き痕跡あり。外堤端部は外傾する。
046		HJ431-3	R.2.3.3	S E 530 枠内	8 C 末	圈足	不明	○	—	—	倒置焼成。
047		HJ431-3	R.2.3.3	S E 530 枠内	8 C 末	蹄脚	A - a カ	○	—	—	自然釉不明。脚部がかなり開くタイプになると考える。
048		HJ431-3	R.2.3.3	小穴	8 C	円形		○	○	硯部 15.5	倒置焼成。楕円形状の海部が2つ以上ある。獣脚。
049		HJ431-3	R.2.3.3	包含層	—	圈足	a - A	○	—	外堤 20.5 突帯 21.9 硯面 16.0	倒置焼成。脚部を欠いたのち、割れ口を研磨して硯部のみを再利用したと考える。
050		HJ273-1	R.2.3.4	S B 230	8 C 末	圈足	—	×	脚柱のみ	—	正置焼成。
051		HJ293	R.2.3.4	包含層	—	圈足	a - A	○	—	外堤 28.0	倒置焼成。外堤部は三角形で、硯部裏面に段が付く。
052		HJ293	R.2.3.4	土坑	—	圈足カ	不明	○	—	硯面 15.6	倒置焼成。
053		HJ293	R.2.3.4	S B 278	8 C	圈足	a - B	○	—	硯面 12.5	自然釉不明。硯部裏面にカキ目のような痕跡が残る。コテによるものか。外堤部と脚部が大きく外へ張り出すタイプ。
054		HJ293	R.2.3.4	S B 270	8 C	圈足	4	×	脚柱～脚台	脚台 24.6	倒置焼成。透孔の裏面から角を面取りする。
055	2	HJ293	R.2.3.4	素掘溝・包含層	—	形象		○	—	—	2片同一個体と考える。倒置焼成。細い突帯状の内堤で海部と硯面を分ける。硯裏面ヘラケズリ。

資料 No.	破 片 数	調査 次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								硯部	脚部		
056	7	HJ293	R.2.3.4	包含層	—	圈足	1	×	脚柱～脚台	脚台 29.8	7片同一個体と考える。倒置焼成。脚柱の上部外面に円形貼文が付く。貼文は手づくね。脚部外面はロクロナデで調整。
057	3	HJ378-2	R.2.3.4	S D 106	8 C	圈足	a - A	○	脚柱	外堤 21.6 硯面 16.8	3片接合。倒置焼成。外堤部下の突帯～脚柱にかけて円形貼文あり。
058		HJ378-2	R.2.3.4	包含層	—	圈足	a - B	○	×	—	正置焼成。硯面中央部が皿状に窪む。裏面は不定方向ナデ。
059		HJ495-2	R.2.3.5	S D 104	8 C～9 C初	圈足	a - A	○	脚柱	外堤 19.2	倒置焼成。外堤部の下に脚頭状の円形貼文が付く。硯面中央が窪むタイプ。硯部内面は、アーチ状の弧を描く。
060		HJ495-2	R.2.3.5	包含層	—	形象		○	×	—	正置焼成。外堤部外面～裏面は丁寧な磨きを施す。
061		HJ286-2	R.2.3.6	S D 110	8 C	圈足	4	×	脚台	—	正置焼成。
062	2	HJ286-2	R.2.3.6	土坑	8 C	風字		○	脚部		2片接合。倒置焼成。硯尻裏面に角高台が2脚つく。硯裏面に線刻あり。
063	3	HJ286-2	R.2.3.6	柱穴	8 C	圈足	b - A	○	脚柱部	外堤 14.3	3片接合。正置焼成。硯面と海部の区別はあるが、硯面の高さが低い。硯面にわずかにヘラケズリ痕跡残る。
064		HJ286-2	R.2.3.6	包含層	—	蹄脚	A - a	○	脚頭		外面に自然釉かかる。硯部裏面はコテ状工具で成形。
065		HJ310-2	R.2.3.6	S D 110	8 C	蹄脚	B - a	○	—	外堤 22.0 硯面 17.8	倒置焼成。脚頭部は直径 0.9cmと小さい。その下に細い脚節を付す。
066		HJ310-2	R.2.3.6	S B 273	8 C	圈足	aカ b - A	○	脚柱部	外堤 10.8	倒置焼成。外堤の下に突帯が2条めぐる。
067		HJ310-2	R.2.3.6	小穴	—	蹄脚	A - a	○	脚頭部	外堤 16.6 突帯 16.7	外面に自然釉かかる。硯部内面にコテ状工具のアタリがみられる。
068		HJ310-3	R.2.3.6	S K 603	8 C	圈足	a - B	○	脚柱部	外堤 16.0 硯面 11.6	正置焼成。外堤部下に細い圈線が一条、その下に突帯が2条めぐる。
069		HJ310-3	R.2.3.6	S E 524	8 C	圈足	aカ c - A	○	×	外堤 17.8	倒置焼成。
070		HJ310-3	R.2.3.6	落ち込み	8 C	圈足	a - A 5	○	脚柱～脚台	外堤 18.0 脚台 22.4 器高 5.7	倒置焼成。脚台上半に三角形の突帯が1条めぐる。
071		HJ326-2	R.2.3.6	素掘溝	—	圈足	6	×	脚柱～脚台	脚台 21.0	正置焼成。
072		HJ326-2	R.2.3.6	包含層	—	圈足	3	×	脚柱～脚台	脚台 26.9	正置焼成カ。脚部が大きく開くタイプ。
073		HJ326-2	R.2.3.6	包含層	—	圈足	a - A	○	×	外堤 20.0	正置焼成カ。緻密な胎土。外堤は細長い四角形状を呈する。硯部裏面に段がつくタイプ。
074		HJ443-4	R.2.3.6	S D 101	8 C～9 C初	圈足	—	×	脚柱のみ	—	脚柱外面はロクロケズリ調整。
075		HJ443-4	R.2.3.6	小穴	8 C	圈足	—	×	脚柱のみ	—	脚柱外面はロクロケズリ調整。
076	3	HJ443-5	R.2.3.6	S K 609・ 包含層	8 C	蹄脚	A - 5	×	脚台	脚台 32.2	2片接合、1片同一個体と考える。自然釉不明。脚柱は丸棒状になると考える。
077		HJ443-5	R.2.3.6	S D 101	8 C	圈足	—	×	脚柱のみ	—	自然釉不明。
078		HJ443-5	R.2.3.6	小穴	—	圈足	bカ - A	○	×	突帯 13.0 硯面 9.5	倒置焼成。外堤部下に線刻による模様がある。
079		HJ443-5	R.2.3.6	包含層	—	蹄脚	B - c	○	脚頭～脚柱	—	自然釉不明。硯部内面に段がつくタイプ。

資料 No.	破 片 数	調査回数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								硯部	脚部		
080		HJ443-5	R.2.3.6	包含層	—	蹄脚	Aカ	×	脚柱のみ	—	自然釉不明。貼り付けた脚節の下にナデ痕跡がみえる。
081	4	HJ443-6	R.2.3.6	S B 370・ S K 610・ 整地層・包含層	8 C～9 C初	圈足	a - A 5	○	脚柱～脚台	外堤 19.0 突帯 20.5 外堤 22.0	4片同一個体と考える。倒置焼成。外堤部上半に三角形の突帯が1条めぐり。HJ310-3次資料No.064と形態が似る。
082		HJ443-6	R.2.3.6	素掘溝	—	蹄脚	A	×	脚頭～脚柱	—	自然釉不明。脚頭部の形態が細長い。脚節は粘土貼付により成形されている。脚頭～脚柱は一体で手づくね。
083		HJ292-1	R.2.3.6	S F 0611 直上	8 C～9 C初	圈足	b - A	○	脚柱	外堤 14.5	自然釉不明。脚柱に縦方向と斜方向の線刻あり。
084		HJ292-1	R.2.3.6	S F 0611 直上	8 C～9 C初	蹄脚	B - 3	×	脚柱～脚台	外堤 28.5	正置焼成。脚台の接合痕がわかる事例。
085		HJ292-1	R.2.3.6	S D 104	8 C～9 C初	圈足	5	×	脚柱～脚台	脚台 15.8	正置焼成カ。楕円形状の透孔あり。脚台に1条の突帯めぐり。
086		HJ292-1	R.2.3.6	包含層	—	圈足	aカ b - A	○	脚柱	外堤 24.0	自然釉不明。外堤端部は外傾する。
087		HJ292-1	R.2.3.6	包含層	—	圈足	a - A	○	—	外堤 9.2	自然釉不明。小型。硯部内面ロクロナデ。
088	8	HJ327-5	R.2.3.6	S D 104・ 素掘溝	8 C	圈足	b - A 5	○	脚柱～脚台	外堤 10.5 突帯 12.4 脚台 15.7 器高 6.2	8点接合。正置焼成。外堤は脚部よりやや内側につく。硯部内面～脚部内外面はロクロナデ調整。
089		HJ364	R.2.3.7	S D 104	8 C～9 C	圈足	4	×	脚柱～脚台	脚台 15.3	正置焼成。
090		HJ364	R.2.3.7	S D 104	8 C～9 C	圈足	a - A	○	脚柱	外堤 14.5	自然釉不明。硯部内面はロクロケズリ調整。
091		HJ364	R.2.3.7	S D 104	8 C～9 C	形象		○	×	—	正置焼成。硯面および外堤部外面は丁寧に磨かれている。一部にハケメ痕跡残る。海部は成形時の指オサエの痕が残る。
092		HJ364	R.2.3.7	素掘溝	—	圈足	—	×	脚柱のみ	—	倒置焼成。外面に線刻による文様が施される。
093		HJ378-4	R.2.3.7	S X 02	8 C	圈足	a - A	○	×	—	正置焼成。
094	2	HJ378-4	R.2.3.7	S D 104・ 自然河川	8 C～9 C・ 13 C～15 C	圈足	a - B	○	×	突帯 24.0 硯面 18.0	2片同一と考える。正置焼成。外堤部下に細い2条の突帯、硯面には低くて細い内堤部がめぐり。石のような質感。
095		HJ378-4	R.2.3.7	S D 104	8 C～9 C	圈足	6	×	脚柱～脚台	—	正置焼成。脚台内面はロクロケズリ、脚部内面はロクロナデ。脚台外面に圈線が1条めぐり。
096		HJ378-4	R.2.3.7	S D 104	8 C～9 C	圈足	aカ c - Aカ	○	×	—	自然釉不明。硯部内面はロクロナデ。
097		HJ378-4	R.2.3.7	S D 104	8 C～9 C	蹄脚	B - 3	×	脚柱～脚台	—	正置焼成。胎土に黒色粒子が含まれ、ケズリにより引っ張られて線状になっている。
098		HJ327-2	R.2.3.9	包含層	—	圈足	aカ - A 5	○	脚柱～脚台	外堤 14.0 突帯 13.7 脚台 16.7	自然釉不明。外堤下に突帯が2条めぐり、突帯間に円形貼文が付く。長脚。
099		HJ327-2	R.2.3.9	—	—	蹄脚	B - A	○	×	—	自然釉不明。海部底は平坦面を成す。
100		HJ317	R.2.3.10	S D 102	8 C前～12 C	蹄脚	A - a	○	脚頭部	—	倒置焼成。胎土粗い。
101	2	HJ317	R.2.3.10	S D 102	8 C前～12 C	蹄脚	B - 3	×	脚柱～脚台	脚台 30.2	2片接合。正置焼成。脚柱部三角形飾り外面のケズリが粗く、ケズリ残しあり。脚柱部と脚台の接合痕跡明瞭。

資料 No.	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								硯部	脚部		
102	3	HJ327-3	R.2.3.10	包含層	—	圈足	a - A 1	○	脚柱～脚台	外堤 9.8 突帯 10.1 硯面 5.5 脚台 12.4 器高 5.2	3片接合。倒置焼成。脚柱部に5個の透孔あり。硯面はロクロケズリ、硯部内面はコテ状工具で成形。工具のアタリが残る。小型硯。
103		HJ327-5	R.2.3.11	S D 103	8 C～9 C初	蹄脚	B - 3	×	脚台～脚柱	—	正置焼成。
104		HJ327-5	R.2.3.11	素掘溝	—	蹄脚	A - a	○	脚頭部	—	倒置焼成。脚頭部を貼り直した痕跡あり。
105		HJ327-5	R.2.3.11	S E 508	9 C中	圈足	2	×	脚柱～脚台	脚台 16.3	正置焼成。
106		HJ327-5	R.2.3.11	包含層	—	蹄脚	B - a	○	×	外堤 29.0	自然釉不明。硯部内面コテ状工具で成形。
107		HJ327-5	R.2.3.11	包含層	—		b - A 5	○	脚柱～脚台	外堤 12.0 突帯 13.7 脚台 18.0 器高 6.7	正置焼成。全体の形状が資料 088 に似る。硯部内面～脚部内外面はロクロナデ調整。脚台上半に突帯が1条めぐる。
108		HJ292-1	R.2.3.11	包含層	—	圈足	2	×	脚柱～脚台	脚台 17.8	正置焼成。
109		HJ292-1	R.2.3.11	S D 103	8 C～9 C初	圈足	a - A	○	脚柱	外堤 13.8	正置焼成。脚部外面に縦方向の刻線が1条ある。
110		HJ292-1	R.2.3.11	S D 103	8 C～9 C初	圈足	2	×	脚柱～脚台	脚台 21.0	倒置焼成。
111	2	HJ292-1	R.2.3.11	土坑・包含層	8 C	圈足	a - A	○	—	外堤 15.2	2片同一個体と考える。正置焼成。硯面に小さい突帯が2条めぐる。
112		HJ327-5	R.2.3.11	S D 103	8 C～9 C初	風字カ		○	○	—	正置焼成。内堤は花卉を表現している。鐏状の稜線で花卉の輪郭を表現している。花卉は貼り付け。脚部は7角形に面取りする。
113		HJ378	R.2.3.11	S D 102	8 C	圈足	5	×	脚柱～脚台	脚台 12.8	自然釉不明。脚柱部に縦方向の線刻を施す。透孔の有無不明。
114	2	HJ378	R.2.3.11	S D 102	8 C	圈足	c - A	○	×	外堤 21.1	2片接合。正置焼成。正置焼成。硯面には低い突帯状の内堤がめぐる。硯部裏面はコテ状の工具で成形したのちナデか。
115	2	HJ378	R.2.3.11	S D 102・ S X 804	8 C・中世	特殊		○		短径 22.8 長径 23.6 器高 2.8	多角硯。2片接合。倒置焼成。硯部と海部の区別がなく、ほぼ水平である。12角形になると考える。
116		HJ378	R.2.3.11	S X 804	中世	圈足	a - A	○	×	外堤 7.9	倒置焼成。小型硯。
117		HJ378	R.2.3.11	包含層	—	圈足	bカ - A	○	×	外堤 10.0 突帯 10.7	倒置焼成。外堤部端面は内傾。外堤部下の突帯は低い。
118	2	HJ378	R.2.3.11	包含層	—	圈足	aカ - A	○		外堤 13.4	2片同一個体と考える。倒置焼成。硯面に低い内堤がめぐるタイプ。
119		HJ378	R.2.3.11	包含層	—	蹄脚	A - a	○	×	外堤 22.0 硯面 17.2	倒置焼成。脚頭部は残存しないが、接合時に脚頭部側面に沿って施したナデ痕跡が残る。
120		HJ443-1	R.2.3.11	S D 104	8 C	円面		○	無脚	外堤 13.7	倒置焼成。硯面に細長い三角形の内堤がめぐる。
121		HJ443-1	R.2.3.11	素掘溝	—	蹄脚	A - a	○	脚頭部	—	倒置焼成。焼成がやや軟質。
122		HJ443-1	R.2.3.11	S X 804	8 C	円形		○	—	外堤 15.4 突帯 18.3	倒置焼成。海部が片側による。
123		HJ443-1	R.2.3.11	包含層	—	風字		○	×	—	自然釉不明。硯部内面にハケメ痕跡あり。

資料 No.	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								硯部	脚部		
124		HJ494-1	R.2.3.12	土坑	8 C	蹄脚	A - a	○	×	—	倒置焼成。脚頭部は欠損しているが、脚頭周囲の脇を押さえて貼り付けた痕跡が残る。
125	3	HJ494-1	R.2.3.12	土坑	8 C	圈足	3	×	脚柱～脚台	脚台 23.8	2片接合。1片は同一個体と考える。倒置焼成。器壁の厚みが一定である。
126	2	HJ480	R.2.3.12	S B 210	8 C後	蹄脚	A - c	○	×	外堤 20.8	2片接合。倒置焼成。脚頭部は残存しないが、貼付時に脚頭部の周囲を工具でナデ付けた痕跡が残る。
127	2	HJ480-1	R.2.3.12	S K 602	8 C後	圈足	2	×	脚柱～脚台	脚台 15.0	2片同一個体と考える。正置焼成。脚台端部は三角形を呈する。
128		HJ494-3	R.2.3.12	包含層	—	円形カ		○	脚柱	—	自然釉不明。脚部が長く、外面には縦方向の線刻がある。
129	2	HJ494-3	R.2.3.12	S X 803	9 C前	圈足	b - A	○	脚柱	外堤 11.3 突帯 12.5	2片接合。正置焼成。硯部内面は不定方向のナデ、重ね焼き痕跡が残る。
130		HJ200	R.3.2.15	落ち込み	8 C	圈足	a - A	○	脚柱	外堤 28.4	正置焼成。
131		HJ229	R.3.2.15	包含層		圈足	a - B	○	—	外堤 16.0 突帯 16.8	倒置焼成。硯部内面はコテ状工具で成形。
132		HJ443-7	R.3.2.15	S D 150	8 C	圈足	5	×	脚台	脚台 25.0	正置焼成。脚台端部は屈曲せず、細長い長方形におさめる。
133		HJ443-7	R.3.2.15	包含層	—	圈足	aカ - A	○	×	突帯 26.8	倒置焼成。海部はコテ状工具による成形か。
134		HJ169	R.3.3.1	包含層	—	圈足	b - C	○	×	外堤 13.3 突帯 14.5 硯面 10.0	自然釉不明。硯面に小さい内堤が付くタイプ。
135		HJ169	R.3.3.1	包含層	—	圈足	1	×	○	脚台 15.8	倒置焼成。
136		HJ169	R.3.3.1	包含層	—	圈足	c - A	○	×	外堤 10.0 突帯 11.4	倒置焼成。硯面はロクロケズリ。
137		HJ169	R.3.3.1	包含層	—	蹄脚	B - cカ	○	脚柱	—	正置焼成。細い粘土紐を貼り付け脚節とする。
138		HJ173	R.3.3.1	S E 16	8 C	圈足	2	×	脚柱～脚台	脚台 10.5	倒置焼成。
139		HJ173	R.3.3.1	S E 14	8 C末	円面		○	○	外堤 13.6	倒置焼成。獣脚がつく。硯裏面はロクロケズリ。硯部一面に墨が付着。
140		HJ173	R.3.3.1	包含層	—	圈足	2	×	脚柱～脚台	外堤 15.8	倒置焼成。
141		HJ184	R.3.3.1	土坑	8 C	圈足	a - A	○	脚柱	外堤 10.8	自然釉不明。
142		HJ184	R.3.3.1	素掘溝	—	圈足	c - A 2	○	脚柱～脚台	外堤 13.5	自然釉不明。脚柱部に花卉状の透孔がみられる。
143		HJ257-4	R.3.3.6	素掘溝	—	圈足	aカ - A	○	—	外堤 12.8	倒置焼成。
144		HJ257-2	R.3.3.7	素掘溝	—	圈足	5	×	脚柱～脚台	—	正置焼成。脚台外面に3条の圈線がめぐる。
145		HJ257-2	R.3.3.7	包含層	—	圈足	6	×	脚柱～脚台	脚台 20.4	自然釉不明。脚柱部に縦方向の刻線が2条ある。
146		HJ257-2	R.3.3.7	包含層	—	圈足	aカ - A 6	○	脚柱～脚台	突帯 16.5 脚台 18.6	倒置焼成。脚部の透孔は楕円形状を呈す。
147		HJ196-2	R.3.3.8	S D 102	8 C	蹄脚	B - 3	×	脚柱～脚台	脚台 31.5	自然釉不明。脚台内面に半円形状の抉りが入る。
148	2	HJ196-2	R.3.3.8	包含層	—	圈足	—	×	脚柱のみ	—	2片同一個体と考える。自然釉不明。

資料 No	破 片 数	調査 次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								硯部	脚部		
149		HJ196-2	R.3.3.8	包含層	—	圈足	a - A 5	○	○	外堤 14.8 脚台 17.6 硯面 10.2	倒置焼成。外堤部の下と脚台上半に細い突帯がそれぞれ2条めぐり、脚柱部に花卉状の透孔を穿孔する。脚柱部外面には、穿孔した花卉状透孔の外周を線刻で縁取る。
150		HJ257	R.3.3.8	S D 208	14 C ~ 15 C	圈足	b - A	○	×	—	倒置焼成。
151		HJ222	R.3.4.6	包含層	—	圈足	a - A	○	—	外堤 14.0	倒置焼成カ。突帯下面に切り欠きが見られる。
152		HJ287	R.3.5.13	整地土	12 C	風字		○	脚部	幅 9.7	自然釉不明。研頭部を欠くが、研尻～硯中央にかけては同じ幅である。硯裏面に格子目状のタタキ痕跡が残る。硯面にはいたるところに指ナデがみられる。研尻付近に角高台が一对付く。
153		HJ491	R.7.1.14	S E 07	12 C 中	圈足	3	×	脚柱～脚台	脚台 10.2	正置焼成。透かし孔の幅が0.3mmと狭い。小型硯。
154	3	HJ349	R.7.1.15	S X 10・11	8 C 後～15 C 後	蹄脚	B - a	○	脚柱～脚台	—	3片同一個体と考える。倒置焼成。焼成はやや軟質。
155		HJ349	R.7.1.15	S X 11	15 C 後	猿面		○	—	—	須恵器鉢を打ち欠き、周縁を磨いて硯に転用している。
156		HJ520	L.1.3.5	南北溝	8 C	円形		○	無脚	—	倒置焼成。硯面に突帯状の内堤がめぐり、硯裏面ロクロケズリ。
157	14	HJ520	L.1.3.5	土坑・包含層	8 C	蹄脚	A - 1	×	脚頭～脚台	—	6片接合。8片同一個体と考える。倒置焼成。脚台は薄型の長方形で、ロクロケズリ調整。脚柱飾りは均整がとれており、形の差異が少ない。三角形の飾りの角は丸みをもつ。
158		HJ019	L.1.3.13	素掘溝	—	圈足	—	○	脚柱	—	正置焼成。脚部の透孔間に縦方向の刻線が2条ある。
159		HJ019	L.1.3.13	素掘溝	—	圈足	b カ - A	○	×	外堤 10.0	正置焼成。外堤部は内湾気味に立ち上がる。
160		HJ019	L.1.3.13	素掘溝	—	圈足	b - A	○	脚柱	外堤 15.4 突帯 18.3	倒置焼成。脚部外面に縦方向の線刻と綾杉文を施す。
161		HJ019	L.1.3.13	包含層	—	圈足	a - A	○	×	外堤 14.0	自然釉不明。脚部に縦方向の線刻あり。硯面に突帯状の内堤がめぐり、タイプ。硯部内面はロクロナデおよび不定方向ナデ。
162		HJ019	L.1.3.13	素掘溝	—	圈足	b - A 2	○	脚柱～脚台	外堤 15.0 脚台 21.0	倒置焼成。透孔の間の脚柱外面に線刻模様あり。外堤部下の突帯は長く、端部は丸くおさめる。
163		HJ440	L.1.3.13	S E 01	8 C	黒風		○	×	—	硯頭部は隅丸方形を呈する。内外面のミガキ密。
164		HJ003	L.1.3.14	S K 01	8 C	圈足	4	×	脚柱～脚台	—	自然釉不明。透孔の角を内面から面取りする。
165	2	HJ003	L.1.3.14	包含層	—	圈足	a カ - A 2	○	脚柱～脚台	外堤 18.0 突帯 19.0 脚台 19.8	2片接合。正置焼成カ。四角形状の外堤部と丸く細長い突帯がつく。硯部内面は不定方向のナデ。
166	2	HJ440	L.1.3.14	S E 01 枠内	8 C	圈足	a - A 3	○	脚柱～脚台	外堤 16.6 突帯 17.0 硯面 10.0	2片同一個体と考える。自然釉不明。硯部内面は不定方向のナデ調整。
167		HJ307	L.1.4.5	S D 02	8 C ~ 9 C 中	圈足	2	×	脚柱～脚台	脚台 14.1	正置焼成。自然釉が厚く調整不詳。
168		HJ028	L.2.2.12	包含層	—	圈足	c - A カ	○	脚柱～脚台	—	倒置焼成。硯面に低い内堤がめぐり、
169		HJ073	L.2.2.12	包含層	—	圈足	c - A	○	×	突帯 19.5	倒置焼成カ。外堤は「く」の字状に屈曲しながら立ち上がる。硯面に低い内堤がめぐり、
170	3	HJ073	L.2.2.12	包含層	—	圈足	3	×	脚柱～脚台	—	3片接合。倒置焼成。内外面ロクロナデ調整。

資料 No.	破 片 数	調査 次数	遺跡 名	出土 遺構	遺構 時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								硯部	脚部		
171		HJ073	L.2.2.12	包含層	—	蹄脚	A - a	○	脚頭部	外堤 25.3 突帯 25.8	倒置焼成。硯部内面はコテ状工具で成形。
172		HJ431-1	L.2.3.2	S E 562 掘形	8 C 末	圈足	—	×	脚柱のみ	—	自然釉不明。内外面ロクロナデ調整。
173		HJ431-1	L.2.3.2	S E 562 枠内	8 C 末～9 C 初	圈足	—	×	脚柱のみ	—	自然釉不明。脚柱部の透孔間に横方向に3条の圈線をめぐらせたのち、縦方向に刻線を2条施す。
174		HJ431-1	L.2.3.2	小穴	—	圈足	a - A	○	脚柱	外堤 17.0	正置焼成。硯部内面はコテ状の工具で調整。
175		HJ431-1	L.2.3.2	包含層	—	圈足	a - A	○	×	外堤 8.6	自然釉不明。小型硯。硯部内面コテ状の工具で成形。外堤端部はやや内傾する。突帯は三角形状を呈す。
176	4	HJ447	L.2.4.1	包含層	—	圈足	1	×	脚柱～脚台	脚台 15.8	4片同一個体と考える。正置焼成。脚台端部は垂直にたちあがり、丸くおさまられている。脚柱が長くなるタイプ。
177	2	HJ447	L.2.4.1	包含層	—	蹄脚	B - 2	×	脚柱～脚台	脚台 15.8	2片接合。正置焼成。脚台上面に脚柱が剥離した痕跡残る。小型の蹄脚円面硯。
178		HJ157	L.2.4.2	素掘溝	—	蹄脚	B - 2	×	脚柱～脚台	脚台 23.8	正置焼成。脚節が2重にある。貼付。
179		HJ157	L.2.4.2	柱穴	8 C	圈足	a - B	○	脚部	外堤 14.2	倒置焼成。脚部に十字形の透孔あり。
180		HJ157	L.2.4.2	包含層	—	形象		○	×	幅 12.0	正置焼成。外堤部外面にミガキを施す。硯尻は欠損。
181		HJ157	L.2.4.2	包含層	—	圈足	a カ - A	○	脚柱～脚台	外堤 25.2	正置焼成。外堤部の下に突帯が2条めぐる。
182		HJ157	L.2.4.2	包含層	—	圈足	c - A	○	脚柱～脚台	外堤 20.0	倒置焼成。
183		HJ157	L.2.4.2	包含層	—	圈足	a - A	○	×	突帯 13.5	倒置焼成。
184		HJ157	L.2.4.2	包含層	—	圈足	a - A	○	×	外堤 9.2	正置焼成。硯面は使用された痕跡みられず。
185	2	HJ157	L.2.4.2	包含層	—	圈足	a - A	○	脚柱～脚台	外堤 12.5	2片接合。自然釉不明。硯部内面はロクロナデおよび不定方向のナデで調整。
186		HJ260	L.2.4.3	包含層	—	蹄脚	A - a	○	脚頭部	突帯 21.1	倒置焼成。脚頭部を貼り直した痕跡残る。
187	2	HJ172	L.2.4.7	包含層	—	圈足	a - A	○	脚柱		2片接合。倒置焼成。硯部内面はコテ状工具で成形。
188		HJ174	L.2.4.7	S D 01	8 C	圈足	a - A	○	脚柱		倒置焼成。脚部外面の透孔間に縦方向の線刻を施す。
189		HJ174	L.2.4.7	土坑	8 C	蹄脚	B - 2	×	脚柱～脚台	—	正置焼成。脚台内外面はヘラケズリ。
190	2	HJ174	L.2.4.7	包含層	—	圈足	a - A	○	脚柱～脚台		2片同一個体と考える。正置焼成。外堤部の下には突帯が付かない。硯面には小さい内堤がめぐる。内外面ともにロクロナデ調整。
191		HJ174	L.2.4.7	包含層	—	圈足	a - A	○	×	外堤 12.0	正置焼成。外堤端部は内傾する。
192		HJ174	L.2.4.7	包含層	—	圈足	2	×	○	脚台 16.0	自然釉不明。内外面ロクロナデ調整。
193		HJ174	L.2.4.7	包含層	—	圈足	2	×	○		倒置焼成。内外面ロクロナデ調整。
194		HJ174	L.2.4.7	包含層	—	圈足	c - A	○	×	外堤 12.8	倒置焼成。硯面に低い内堤がめぐる。
195		HJ598	L.2.4.10	包含層	—	圈足	a - A	○	×	外堤 15.5 硯面 10.2	倒置焼成。硯面に低い三角形の内堤部がめぐる。外堤端部はやや内傾する面をもち、突帯断面形は半円形状である。
196		HJ180	L.2.4.11	S E 07 掘形	8 C	圈足	a - B	○	×	—	倒置焼成。
197	2	HJ180	L.2.4.11	包含層	—	圈足	2	×	脚柱～脚台	脚台 19.0	2片同一個体と考える。脚台上半に突帯が1条めぐる。

資料 No	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								硯部	脚部		
198	3	HJ180	L.2.4.11	包含層	—	圈足	cカ-2	○	脚柱～脚台	脚台 19.0	2片接合。1片同一個体と考える。正置焼成。須恵器杯カ皿の高台が脚台に溶着。全体的に器面が荒れており、硯部には気泡が入り膨らみがみられる。
199		HJ267	L.2.4.16	包含層	—	圈足	a-A	○	×	—	自然釉不明。内外面ロクロナデ調整。
200		HJ600	L.2.5.北郊	旧河川	5C後～10C初	圈足	—	×	脚柱のみ	—	正置焼成。脚柱部の透孔は上下2段になる可能性あり。
201		HJ531	L.2.7.15	S X 25	15C後～ 16C前	圈足	—	×	脚柱のみ	—	正置焼成。脚柱外面に綾杉文を線刻する。
202		HJ605	L.2.7.15	土坑	—	圈足	—	×	脚柱のみ	—	自然釉不明。脚柱部透孔間に綾杉文を線刻する。
203	3	HJ312	L.3.1.3	S D 03	8C	圈足	a-A	○	脚柱のみ	硯面 16.9 外堤 22.0 突帯 23.8	3片接合。倒置焼成。
204		HJ002	L.3.2.9	包含層	—	圈足	a-A	○	×	—	倒置焼成。硯面に小さい三角形の内堤がめぐる。
205		HJ002	L.3.2.9	包含層	—	蹄脚	B-1	×	脚台～脚柱	—	正置焼成。脚台の接地面に粘土が剥がれた痕跡が残る。
206		HJ002	L.3.2.9	包含層	—	風字	—	○	脚部	—	正置焼成。6角の脚部が付く。
207		HJ187	L.3.2.16	整地土	8C	特殊	—	○	×	残存高 3.5	正置焼成。硯部に円筒形状の水滴が付き、下方に小穴が穿孔されており、硯面に水が流れる仕組みになっている。
208		HJ187	L.3.2.16	包含層	—	宝珠カ	—	○	×	—	宝珠形になる平坦な硯部に幅0.3cmの溝を掘り巡らし、海部と陸部を分ける。
209		HJ231	L.3.2.16	S D 41	8C	圈足	—	×	脚柱のみ	—	倒置焼成。
210		HJ231	L.3.2.16	包含層	—	圈足	a-A	○	×	外堤 11.5 硯面 7.6	倒置焼成。外堤部の下に突帯が2条めぐる。
211		HJ231	L.3.2.16	包含層	—	圈足	a-A	○	×	外堤 16.7 硯面 12.4	自然釉不明。硯部内面にロクロ目が残る。
212		HJ231	L.3.2.16	包含層	—	圈足	1	×	脚柱～脚台	脚台 24.0	自然釉不明。透孔の裏面を面取りする。
213		HJ247	L.3.3.3	S K 09	8C前	圈足	a-A	○	—	外堤 29.4	自然釉不明。硯部内面はコテ状工具で成形。
214		HJ375	L.3.3.3	包含層	—	圈足	a-A	○	脚柱	—	正置焼成。硯面に凹凸がある。海部の幅が狭くV字状を呈す。硯部裏面は気泡が入り、器面が膨らんでいる。
215		HJ391	L.3.3.3	S D 01	8C	圈足	—	×	脚柱のみ	—	正置焼成カ。脚柱の透孔は上下2段になると考える。
216		HJ391	L.3.3.3	包含層	—	圈足	aカ-A	○	脚柱	—	倒置焼成。脚柱部の透孔は横方向の長方形を呈す。
217		HJ475	L.3.3.6	S D 03	8C	円形	—	○	—	外堤 21.8	倒置焼成。海部の位置不明。
218	2	HJ499	L.3.3.10	東堀河	8～9C	圈足	a-B	○	×	外堤 20.5	2片接合。倒置焼成。外堤部と突帯の形状は四角形状を呈する。
219		HJ191	L.3.3.11	S A 02	8C	圈足	3	×	脚柱～脚台	脚台 16.0	自然釉不明。脚柱部の透孔間に縦方向の刻線が1条ある。
220	3	HJ596	L.3.3.12	S D 01 上層	8C	圈足	—	○	脚柱	外堤 18.0 突帯 20.3	3片接合。釉？硯面に四角形状の内堤が1条めぐる。硯部内面は不定方向のナデ。
221		HJ194	L.3.4.6	S E 24	8C中～後	圈足	4	×	脚柱～脚台	脚台 14.0	正置焼成。内外面ロクロナデ調整。
222		HJ413	L.3.4.12	S X 06	9C～10C末	圈足	a-A	○	脚柱	外堤 13.8	倒置焼成。外堤部の端部は内傾、突帯は丸くおさめる。

資料 No.	破 片 数	調査回数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								硯部	脚部		
223		HJ413	L.3.4.12	包含層	—	円形		○	×	突帯 12.5	正置焼成。硯面には使用痕跡が明瞭に残る。硯部裏面にはロクロ目が残る。
224		HJ461	L.3.4.12	河川 10	—	蹄脚	B - 2	×	脚柱～脚台	脚台 18.8	正置焼成。接合部に亀裂が入る。
225		HJ544	L.3.4.13	攪乱		宝珠		○	×	—	正置焼成。外堤部の小破片。
226	2	HJ544	L.3.4.13	整地層・包含層	8 C	圈足	c カ - A	○	×	外堤 12.0 突帯 13.0	2片接合。自然釉不明。ナデによるわずかなへこみを海部としている。
227		HJ365	L.4.1.13	素掘溝	—	圈足	5 カ	×	脚柱～脚台		自然釉不明。脚部下端に細い突帯が1条めぐる。
228		HJ550	L.4.2.3	河川 03	8 C前～中	蹄脚	B - b	○	×	突帯 25.0 硯面 19.0	正置焼成。内面はコテ状工具で成形。外堤部の下に細い突帯が1条めぐる。
229		HJ314	L.4.3.10	素掘溝	—	蹄脚	B	○	脚頭部	—	自然釉不明。
230	2	HJ301	L.4.3.14	S K 09	8 C	圈足	a - A	○	脚柱	外堤 11.0	2片接合。自然釉不明。硯部内面は不定方向のナデ。脚柱外面に縦方向の刻線がある。
231		HJ442	L.4.3.16	S D 02	8 C～9 C	圈足	l	×	脚柱～脚台	脚台 14.6	正置焼成。脚台はロクロナデ調整。
232		HJ099	L.4.4.11	S D 01	8 C	円形		○	獣脚	外堤 21.7	倒置焼成。獣脚は3カ所に付くと考える。海部は片側に寄る。
233		HJ331	L.4.4.12	S D 02	8 C	圈足	—	○	×	硯面 12.5	正置焼成。硯面の破片。硯面裏面は指オサエの凸凹が残る。
234		HJ335	L.4.4.12	S D 1061	8 C	圈足	c カ	○	×		倒置焼成。硯面に重ね焼きによる変色あり。硯面に低い内堤がめぐる。
235		HJ335	L.4.4.12	包含層		圈足	l	×	脚柱～脚台		倒置焼成。脚柱部下半に圈線が1条めぐる。
236		HJ335	L.4.4.13	S D 03	8 C	圈足	—	×	脚柱のみ	—	倒置焼成。脚柱部に圈線が2条、縦方向の刻線が1条ある。
237	2	HJ208	L.4.4.13	柱穴No.1・ 包含層	8 C	円面		○	無脚		2片接合。正置焼成。硯面には自然釉が厚くかかり、使用痕跡が無い。硯部裏面で墨を磨った痕跡あり。
238		HJ339	L.4.4.13	S D 1062	8 C	風字		○	×	—	硯部裏面に縦方向の板目状の圧痕あり。
239	2	HJ339	L.4.4.13	包含層		圈足	—	×	脚柱のみ	—	2片同一個体と考える。脚柱外面に圈線1条と縦方向の刻線が1条ある。
240		HJ339	L.4.4.13	包含層		圈足	a カ b - A	○	×	外堤 20.0	倒置焼成。外堤部先端に重ね焼きの痕跡残る。
241	3	HJ339	L.4.4.13	包含層		圈足	a カ	○	脚柱		3片接合。倒置焼成。外堤部外面に波状文を施す。
242		HJ164	L.4.4.14	包含層		圈足	a - A	○	脚柱	突帯 13.0	倒置焼成。硯部内面不定方向のナデ調整。
243	3	HJ168	L.4.4.14	土坑	8 C	圈足	a - A 3	○	脚柱～脚台	外堤 17.0 脚台 23.4	3片接合。自然釉不明。焼成はやや軟質。外堤下に突帯が付かないタイプ。脚柱部に線刻による文様あり。
244		HJ168	L.4.4.14	土坑	8 C	圈足	—	×	脚台のみ	脚台 12.0	正置焼成カ。小型硯。
245	2	HJ347-2	L.4.4.14	土坑・包含層	8 C	圈足	a - A	○	脚柱		2片同一個体と考える。正置焼成。硯面の中央部が凹むタイプ。
246		HJ347-2	L.4.4.14	包含層	—	圈足	3	×	脚柱～脚台	脚台 17.5	倒置焼成。脚部の器厚が0.3～0.4mmと薄い。
247	3	HJ347-2	L.4.4.14	包含層	—	圈足	a - B	○	脚柱		3片接合。倒置焼成。外堤部は外反しながら立ち上がる。硯部裏面に指オサエの痕跡あり。
248	2	HJ347-2 ・353-1	L.4.4.14	S E 09・包含層	8 C	圈足	5	×	脚柱～脚台	脚台 20.5	2片同一個体と考える。正置焼成。脚柱下端に突帯が1条めぐる。

資料 No	破 片 数	調査 次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								硯部	脚部		
249	2	HJ353-1	L.4.4.14	S B 01・包含層	8 C	圈足	aカ-A	○	脚柱	外堤 18.8	2片同一個体と考える。正置焼成。外堤端部は内傾する。
250	3	HJ353-1	L.4.4.14	S B 11-8	8 C	圈足	5	×	脚柱～脚台	脚台 20.5	3片接合。正置焼成。脚柱下端に突帯が1条めぐる。
251	2	HJ353-1	L.4.4.14	S X 06・ S E 05	8 C	圈足	a-A	○	脚柱	外堤 15.8	2片同一個体と考える。正置焼成。脚柱外面の透孔間に縦方向の刻線が3条ある。
252		HJ353-1	L.4.4.14	包含層	—	圈足	a-B	○	脚柱	外堤 21.5	資料 251 と同一個体の可能性あり。倒置焼成。
253		HJ318-1	L.4.4.15	包含層	—	圈足	a-Bカ	○	×		正置焼成。硯部内面はロクロナデ調整。
254		HJ325-2	L.4.4.15	素掘溝	—	圈足	2	×	脚柱～脚台	脚台 18.8	正置焼成。脚台端面に圈線が2条めぐる。
255	2	HJ325-2	L.4.4.15	包含層	—	圈足	3	×	脚柱	脚台 23.2	2片接合。倒置焼成。脚柱部突帯を付し、突帯の上下にそれぞれ透孔がある。
256		HJ325-2	L.4.4.15	包含層	—	圈足	a-A	○	脚柱	硯面 18.0	倒置焼成。脚部の透孔は2段になる可能性がある。
257		HJ347-1	L.4.4.15	S D 79	8 C	圈足	a-A	○	脚柱	突帯 17.5	正置焼成。三角形の内堤が廻る。
258		HJ347-1	L.4.4.15	包含層	—	圈足	a-A	○	脚柱	外堤 15.0	倒置焼成。硯面周縁に低い内堤がめぐる。
259		HJ253	L.4.4.15	包含層	—	圈足	a-A	○	脚柱～脚台	器高 5.0	自然釉不明。
260		HJ253-3	L.4.4.15	S D 026	8 C	蹄脚	A-a	○	脚頭部	外堤 18.0	倒置焼成。内外面ロクロナデ調整。
261		HJ199	L.4.4.16	包含層	—	圈足	—	×	脚柱のみ	—	正置焼成。
262		HJ218	L.4.4.16	包含層	—	圈足	a-A	○	×	突帯 18.0	正置焼成。
263		HJ218	L.4.4.16	包含層	—	圈足	3	×	脚柱～脚台	脚台 16.6	正置焼成。内外面ロクロナデ調整。
264		HJ218	L.4.4.16	包含層	—	圈足	a-A	○	脚柱	外堤 12.9	正置焼成。内外面ロクロナデ調整。
265		HJ334	L.4.4.16	S D 101	8 C	圈足	2	×	脚柱～脚台	脚台 21.0	倒置焼成。脚台端部に重ね焼き痕跡残る。
266		HJ186	L.4.5.1	包含層	—	圈足	a-A	○	脚柱	外堤 9.0 硯面 5.8	正置焼成。硯面中央部の器厚が0.5mmと薄い。
267		HJ372	L.4.5.12	河川?	8 C	形象		○	脚部	—	正置焼成。側縁部はケズリ調整。脚部に楕円形の孔が作られている。
268	2	HJ065	L.5.1.1	S D 02	8 C	圈足	a-A 5	○	脚柱～脚台	外堤 17.1 突帯 17.4 脚台 18.8	2片同一個体と考える。脚部外面に縦方向の線刻あり。外堤部の下とく脚部下半に小さい突帯がめぐる。
269	2	HJ065	L.5.1.1	S X 01	8 C	圈足	a-A	○	×	外堤 21.0	2片同一個体と考える。自然釉不明。脚部の透孔は0.7～0.8cm間隔で入る。
270		HJ316	L.5.1.15	S D 02	8 C～10 C末	形象		○	脚部	—	正置焼成。
271		HJ316	L.5.1.15	S D 02	8 C～10 C末	蹄脚	B-4	×	脚柱～脚台		正置焼成。脚柱三角飾り表面にケズリ残しあり。
272	5	HJ338	L.5.1.16	整地土・包含層	8 C	蹄脚	B-a 2	○	○	外堤 19.5	5片同一個体と考える。正置焼成。全体的に白く焼きあがる。
273	4	HJ338-1	L.5.1.16	S X 04・包含層	8 C	蹄脚	B-6	×	脚柱～脚台	脚台 32.0	4片同一個体と考える。正置焼成。脚柱の三角飾りは厚みがなく扁平状の三角形。脚部の様相が他の資料と異なる。
274		HJ338-1	L.5.1.16	包含層	—	圈足	c-A	○	脚柱	外堤 23.0 内堤 16.8	倒置焼成。硯面に低い内堤がめぐる。硯面の器厚が1.5cmある。
275		HJ020	L.5.2.3	包含層	—	宝珠	—	○	×	—	倒置焼成。尖頭部の破片。

資料 No.	破 片 数	調査回数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								硯部	脚部		
276		HJ001	L.5.2.14	斜行大溝	8 C	風字		○	×	—	自然釉不明。硯裏面に脚部を付した痕跡あり。
277		HJ001	L.5.2.14	素掘溝	—	円形	—	○	×		倒置焼成。外堤部端面の角を面取りする。
278		HJ001	L.5.2.14	素掘溝	—	圈足	2	×	○	脚台 20.5	倒置焼成。内外面ロクロナデ調整。
279		HJ001	L.5.2.14	土坑	8 C	圈足	cカ-A	○	○	外堤 14.0	倒置焼成。内外面ロクロナデ調整。
280		HJ001	L.5.2.14	包含層	—	形象		○	脚部	—	自然釉不明。内堤に径0.4cmの貫通孔がある。外堤部外面および硯裏面に線刻で模様を描く。外堤部に脚部を付す。
281		HJ001	L.5.2.14	包含層	—	圈足	a-A	○	×	—	正置焼成。焼成やや軟質。硯部内面はコテ状工具で成形。
282		HJ001	L.5.2.14	包含層	—	圈足	2	×	脚柱～脚台	脚台 18.0	正置焼成。脚部外面下半に圈線が1条めぐる。
283		HJ001	L.5.2.14	包含層	—	圈足	—	×	脚柱	—	自然釉不明。
284	2	HJ001	L.5.2.14	包含層	—	蹄脚	B-b	○	脚頭部	外堤 25.1 硯面 21.5	2片同一個体と考える。倒置焼成。外堤部の下に圈線が2条めぐる。
285	3	HJ001	L.5.2.14	包含層	—	蹄脚	A-5	×	脚台～脚柱	脚台 24.2	3片接合。外面に自然釉かかる。脚柱は、稜が丸みを帯びた三角形形状を呈する。表面はヨコナデ調整。
286		HJ001	L.5.2.14	包含層	—	円形		○	×	外堤 18.2 硯面 13.0	倒置焼成。脚部は獣脚風のもの3本つくと考える
287		HJ001	L.5.2.14	包含層	—	形象		○	×	—	正置焼成。内堤中央部には径0.3cmの貫通孔がある。
288		HJ001	L.5.2.14	包含層	—	圈足	c-A	○	脚台～脚柱	外堤 9.4 脚台 13.4 器高 5.1	倒置焼成。脚柱部には幅約1.0cmの長方形透孔が16個所、縦方向の刻線が1条ある。
289		HJ593	L.5.3.8	包含層	—	圈足	3	×	脚柱～脚台	脚台 22.0	正置焼成。脚台下端にはやや丸みのある四角形状の突帯がつく。
290		HJ217	L.5.3.9	S X 01	8 C	圈足	a-A	○	脚柱	外堤 14.2	正置焼成
291		HJ608	L.5.4.9	包含層	—	圈足	—	×	脚柱のみ	—	内外面ともに自然釉が付着。
292		HJ608	L.5.4.9	包含層	—	圈足	a-A	○	脚柱	外堤 15.0	自然釉不明。内面はコテ状工具で成形カ。
293	2	HJ608・579	L.5.4.9	S X 02・03	8 C	宝珠		○	脚部	—	2片接合。倒置焼成。尖頭は平面三角、硯面は楕円形になる。眉形の突帯を貼り付け海部と硯部を分け内堤とする。
294		HJ459-2	L.5.4.9	S D 01	8 C	円面カ		×	獣脚	残存高 3.3	倒置焼成。
295		HJ459-2	L.5.4.9	S D 01	8 C	特殊		○	×	—	正置焼成。外堤部外面に把手が付く。円形硯カ。
296		HJ459-3	L.5.4.10	S D 02	8 C	圈足	1	×	脚柱～脚台	脚台 16.8	倒置焼成。内外面ロクロナデ調整。
297		HJ579	L.5.4.10	S X 62	8 C	圈足	3	×	脚柱～脚台	—	自然釉不明。脚台上端には丸みのある四角形状の突帯。
298		HJ553	L.5.4.15	S D 85	8 C	圈足	1	×	脚柱～脚台	脚台 15.2	正置焼成。
299	2	HJ553	L.5.4.15	S D 85・包含層	8 C	圈足	a-A	○	×	外堤 13.8	2片同一個体と考える。正置焼成。
300		HJ553-1	L.5.4.15	S D 96	8 C	蹄脚	A-2	×	脚柱～脚台	脚台 30.0	外面に自然釉かかる。脚台部ヘラケズリ調整。
301	2	HJ553-1	L.5.4.15	包含層	—	蹄脚	B-3	×	脚柱～脚台	脚台 30.0	2片同一個体と考える。自然釉不明。脚柱と脚台の接合痕が残る。
302		HJ553-1	L.5.4.15	包含層	—	蹄脚	A-1	×	脚柱～脚台	脚台 33.0	自然釉不明。脚柱部の三角飾り表面はヨコナデ調整。
303		HJ565	L.5.4.15	S K 07	8 C	圈足	aカ-A	○	×	—	正置焼成。硯部内面コテ状工具で成形。

資料 No	破片 数	調査回数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備考
								硯部	脚部		
304		HJ565	L.5.4.15	S X 01	8 C	圈足	a - A	○	×	外堤 13.7	倒置焼成。紐のない須恵器杯蓋と同じ形に作り硯面とした後、粘土紐を巻上げて脚柱部と外堤部を作ったと考えられる珍しい事例である。他の個体には同技法は確認できない。
305	2	HJ565	L.5.4.15	包含層	—	蹄脚	A カ	×	脚柱～脚台		2片同一個体と考える。外面に自然釉かかる。脚柱部の三角飾りは鋭角ではなく丸みをおびる。
306		HJ575	L.5.4.15	S D 42	8 C	形象		○	×	—	自然釉不明。硯裏面は不定方向ヘラケズリ調整、刻線あり。
307		HJ575	L.5.4.15	S X 01	8 C	圈足	—	×	脚柱のみ	—	自然釉不明。
308		HJ575	L.5.4.15	S X 02	8 C	圈足	a - A	○	—	外堤 19.0	正置焼成。海底部は平坦な面を呈す。
309		HJ575	L.5.4.15	S X 23	8 C	円面カ		×	獣脚のみ	残存高 6.8	自然釉不明。脚部裏面に須恵器片カが溶着する。
310		HJ575	L.5.4.15	柱穴 2	8 C	圈足	a - A	○	×	—	正置焼成。
311		HJ575	L.5.4.15	包含層	—	形象		○	脚部	—	正置焼成。外堤部外面に線刻による模様がある。
312		HJ575	L.5.4.15	包含層	—	蹄脚	B - c	○	脚頭	外堤 20.8	正置焼成カ。外堤部下の圈線は作り出しによる。
313	2	HJ581	L.5.4.15	S D 165	8 C	圈足	a - A	○	×	外堤 18.0	2片接合。自然釉不明。外堤はやや内湾しながら立上がる。端部は内傾する。
314	2	HJ581	L.5.4.15	S D 165・ 包含層	8 C	蹄脚	A - 2	×	脚柱～脚台	脚台 32.0	2片同一個体と考える。外面に自然釉かかる。脚柱部の三角飾り表面はヨコナデ調整。
315	2	HJ468-4	L.5.4.16	S D 03	8 C	圈足	b - A	○	×	外堤 15.9 突帯 16.4	2片接合。自然釉不明。硯面と外堤部の接合部が歪む。この状態で使用したらしく、墨が歪んだ内部にまで染み込む。
316		HJ468-4	L.5.4.16	包含層	—	圈足	1	×	脚柱～脚台	脚台 15.4	倒置焼成。脚台外面はロクロナデ調整。
317		HJ468-4	L.5.4.16	包含層	—	圈足	2	×	脚柱～脚台	脚台 19.2	自然釉不明。内外面ロクロナデ調整。
318		HJ506-1	L.5.5.1	S D 40 最下層	8 C	圈足カ		×	○	残存高 5.9	正置焼成。脚柱部に人面を付す。髪の毛と口髭は円形貼文で表現する。鼻梁が高く、異国人を模したものと考える。
319		HJ506-1	L.5.5.1	S D 50	8 C	圈足カ	—	×	脚台	—	自然釉不明。脚台のみの破片。
320	3	HJ552	L.5.5.2	S D 13	8 C	圈足	a - A	○	脚柱	外堤 12.5 突帯 12.6 硯面 8.1	3片接合。倒置焼成。硯面内外面に重ね焼き痕が残る。
321		HJ552	L.5.5.2	S D 96	8 C	圈足	a - A カ	○	脚柱	—	倒置焼成。
322		HJ017	L.5.5.6	包含層	—	円面	—	○	脚部		正置焼成。貼付の角高台がめぐる。
323		HJ009	L.5.5.7	S D 01	8 C	蹄脚	B - b カ	○	×	外堤 21.5	倒置焼成。硯部外面下半に脚頭部の張り付け痕跡が残る。
324		HJ478	L.5.5.11	S X 04	8 C	風字カ		○	脚部	—	倒置焼成。脚部は低い角高台。
325		HJ518	L.6.1.13	包含層	—	圈足	—	×	脚柱のみ	—	自然釉不明。内外面ロクロナデ調整。
326		HJ052	L.6.3.10	東堀河	8 C～9 C	形象		○	×	—	自然釉不明。硯部に磨きあり。海部は粗いナデ調整。
327		HJ052	L.6.3.10	東堀河	8 C～9 C	圈足	a - A	○	×		倒置焼成。外堤部下に細い突帯が1条めぐる。
328		HJ052	L.6.3.10	東堀河	8 C～9 C	圈足	5	×	○	外堤 17.5	正置焼成。脚台部上半に突帯が1条めぐる。
329		HJ052	L.6.3.10	東堀河	8 C～9 C	圈足	—	×	脚柱のみ	—	自然釉不明。
330		HJ052	L.6.3.10	東堀河	8 C～9 C	圈足	a - 2	×	脚柱～脚台	脚台 17.9	倒置焼成。脚柱部に縦方向の刻線が1条ある。

資料 No	破 片 数	調査回数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								硯部	脚部		
331		HJ052	L.6.3.10	東堀河	8 C ~ 9 C	圈足	a - A	○	×		倒置焼成。
332		HJ052	L.6.3.10	東堀河	8 C ~ 9 C	圈足	a - A	○	○	外堤 18.5	倒置焼成。脚部には長方形・円形・楕円形の透孔がある。
333		HJ052	L.6.3.10	東堀河	8 C ~ 9 C	圈足	a - B	○	脚柱		倒置焼成。硯部内面には粘土層が付着。硯面には重焼き痕。
334	3	HJ052	L.6.3.10	東堀河	8 C ~ 9 C	蹄脚	B - 3	×	脚柱~脚台	脚台 18.3	3片接合。正置焼成。脚台上面には指オサエの痕跡が残る。
335		HJ284	L.6.3.10	東堀河	8 C ~ 9 C	圈足	a - B	○	脚柱	外堤 16.8	正置焼成。硯部内面はロクロナデ調整。
336		HJ134	L.8.2.1	S E 01	8 C	圈足	a - A	○	×	外堤 13.4	倒置焼成。硯部内面はロクロ目が明瞭。
337		HJ014	L.8.2.4	S X 02	8 C	圈足	a - A	○	×		正置焼成。内外面ロクロナデ調整。
338		HJ014	L.8.2.4	S E 02・掘形	8 C	円形カ		○	脚部		倒置焼成。7角に面取りした高い脚が付く。
339	2	HJ508	L.9.1.12	包含層	—	圈足	5	×	脚柱~脚台	脚台 16.0	2片同一個体と考える。自然釉不明。脚台上端に突帯が1条めぐる。
340		HJ538	L.9.3.11	S D 20	8 C	形象		○	×	—	正置焼成。海部裏面に脚柱の痕跡あり。外堤部外面に線刻がある。
341		HJ538	L.9.3.11	S D 21	8 C	圈足	—	×	脚柱のみ	—	自然釉不明。脚柱部外面に線刻による模様がある。
342		HJ122	L.9.3.12	S D 01	8 C 後	蹄脚	B - 2	×	脚柱~脚台	脚台 22.1	正置焼成。
343		HJ103	朱雀大路	包含層	—	蹄脚	B	×	脚柱~脚台	—	正置焼成。脚節部貼付け。
344		TI25	東市 L.8.3.6	S D 103	8 C	圈足	1	×	脚柱~脚台	脚台 13.4	倒置焼成。
345		TI25	東市 L.8.3.6	素掘溝	—	圈足	a - C	○	×		正置焼成カ。外堤部の幅が細く、高さも低い。
346		TI25	東市 L.8.3.11	包含層	—	圈足	a - A	○	脚柱	外堤 13.8	正置焼成。硯部内面にロクロ目がみえる。
347		TI25	東市 L.8.3.11	包含層	—	圈足	a - A	○	脚柱	外堤 27.5	倒置焼成。硯部内面はコテ状工具で成形。
348		TI34	東市 L.8.3.11	東堀河	8 C ~ 9 C	圈足	a - A	○	×	外堤 11.8 突帯 12.1	倒置焼成。小型硯。
349		TI26	東市 L.8.3.6	S E 274 抜き取り	8 C	圈足	2	×	脚柱~脚台	脚台 14.4	倒置焼成。内外面ロクロナデ調整。
350		TI31	東市 L.8.3.12	S D 09	8 C	圈足	bカ - A	○	×	外堤 18.0 突帯 19.8	正置焼成。内面はロクロナデ調整。
351		TI31	東市 L.8.3.12	S D 09	8 C	圈足	bカ - A	○	×	—	自然釉不明。硯面の凹凸が著しい。使用痕跡なし。
352		TI04	東市 L.8.3.11	東堀河	8 C ~ 9 C	圈足	a - B	○	×	外堤 16.8	倒置焼成。海部底は平坦面を呈す。内外面ロクロナデ調整。
353		TI06	東市 L.8.3.11	包含層	—	圈足	a - A	○	×	外堤 16.8	正置焼成。硯面裏は平滑である。
354		不詳	—	—	—	蹄脚	B - c	○	脚頭部	突帯 19.8	正置焼成カ。外堤部下に2条の突帯がめぐる。
355		試 95-5	L.2.3.12・13	土坑	8 C	円形		○	無脚	直径 15.8 内堤 10.0	正置焼成。
356		GG56	元興寺旧境内	S K 14	8 C	猿面		○		幅 4.9 長 8.0 高 2.0	須恵器甕を打ち欠き、全体を磨いて硯に転用している。硯面にはわずかにロクロ目残る。
357	3	SD14	西大寺旧境内	S D 03	8 C	蹄脚	B - 2	×	脚柱~脚台	脚台 27.8	3片接合。倒置焼成。脚柱部内面はロクロケズリ調整。
358		SD16-1	西大寺旧境内	S E 501 曲物内	8 C	圈足	b - A	○	×	外堤 9.45	正置焼成。外堤部外面に波状文がある。内面はロクロナデ。
359		SD17	西大寺旧境内	整地層	8 C	圈足	a - A	○	×	—	自然釉不明。外堤部の下に窪みのある幅広い突帯が付く。

資料 No.	破 片 数	調査次数	遺跡名	出土遺構	遺構時期	種類	型式	残存状態		法量 (cm)	備 考
								硯部	脚部		
360		SD19-1	西大寺旧境内	S E 508 裏込	15 C	風字		○	×	—	正置焼成。硯部・硯裏面は不定方向のヘラケズリ調整。
361		SD21	西大寺旧境内	包含層		圈足	a - A	○	×	—	倒置焼成。
362	3	SD23	西大寺旧境内	S A 51	8 C	圈足	6	×	脚柱～脚台	脚台 25.7	2片接合、1片は同一個体と考える。正置焼成。脚台部外面に圈線が2条めぐり。脚柱部外面は縦方向のヘラケズリ。
363		SD24	西大寺旧境内	S D 06	8 C	円形カ		○	脚部	—	正置焼成。低い角高台がめぐり。
364		SD24	西大寺旧境内	S D 06	8 C	圈足	c - A	○	×	外提 14.0	正置焼成。硯部内面はロクロナデ、中央は縦方向のナデ調整。
365		KK2	菅原寺旧境内	S X 01	8 C	圈足	—	×	脚柱のみ	—	自然釉不明。脚柱部外面に線刻により模様を描く。
366		KK4	菅原寺旧境内	包含層	—	圈足	a - A	○	×	外提 15.5	正置焼成。硯部内面は不定方向のナデ調整。
367	2	DA106	大安寺旧境内	S X 06	8 C～9 C前	圈足カ	a カ - A	○	脚柱	—	2片同一個体と考える。自然釉不明。
368		DA28	大安寺旧境内	包含層	—	形象カ		○	×	—	正置焼成。海部裏面に脚部の痕跡が残る。
369		DA28	大安寺旧境内	包含層	—	圈足	a - A	○	脚柱	外提 24.0	自然釉不明。硯面裏は平滑で調整痕跡が不明。
370		DA28	大安寺旧境内	包含層	—	圈足	c - A	○	脚柱	外提 11.0 突帯 12.2	正置焼成。硯面裏に当て具とみられる痕跡あり。
371		DA28	大安寺旧境内	包含層	—	円面		○	無脚	外提 15.0 内提 10.0	倒置焼成。硯面に三角形の内堤をめぐらせる。
372		DA30	大安寺旧境内	包含層	—	圈足	a - B	○	脚柱	外提 16.0 硯面 12.0	正置焼成。脚部～脚裾が大きく広がるタイプ。硯部内面に粘土屑が多く付着。
373		DA72	大安寺旧境内	杉山古墳周濠	8 C～9 C	圈足	a - A	○	脚柱	外提 14.0 突帯 15.0	倒置焼成。外堤部は内湾しながら立ち上がる。端部は内傾する。
374		DA72	大安寺旧境内	包含層	—	圈足	—	×	脚柱	—	自然釉不明。脚柱部外面に線刻による縦横の線がある。
375		DA72	大安寺旧境内	包含層	—	圈足		×	脚柱	—	正置焼成。脚柱部外面はロクロケズリ調整。
376		DA72	大安寺旧境内	包含層	—	風字		○	×	—	正置焼成。硯面に眉毛状の内堤がある。外堤部上端に重焼きの痕跡が残る。
377		DA94	大安寺旧境内	包含層	—	圈足	3	×	脚柱～脚台	脚台 30.0～	倒置焼成。脚部の透孔の周囲を内外面から面取りする。
378		DA94	大安寺旧境内	包含層	—	風字		○	脚部	—	内外面ともに自然釉が付着。調整不明。
379		DA94	大安寺旧境内	包含層	—	宝珠		○	脚部	—	倒置焼成。外堤・内堤ともに輪花状を呈す。
380		SR07	西隆寺旧境内	小穴	8 C	圈足	a - A	○	×	突帯 25.0 硯面 20.0	正置焼成。硯部内面はコテ状工具で成形。
381		SR07	西隆寺旧境内	包含層	—	圈足	b - A	○	×	—	正置焼成。
382		SR08	西隆寺旧境内	包含層	—	円面		○	無脚	直径 22.0	倒置焼成。
383		SR08	西隆寺旧境内	包含層	—	圈足	b カ	○	×	硯面 8.0	自然釉不明。硯部内面は不定方向のナデ調整。

弥勒寺蔵 三角縁吾作銘二神二獣鏡について

鐘方正樹

I. はじめに

奈良市中町の弥勒寺が所蔵する三角縁吾作銘二神二獣鏡（以下、弥勒寺鏡と略称）が、平成21年3月に奈良市指定文化財に登録された。そこで、奈良市教育委員会では弥勒寺鏡に対する関連調査¹を奈良県立橿原考古学研究所・高松市歴史資料館・天理大学附属天理参考館の協力を得て実施し、保存処理²を独立行政法人奈良文化財研究所と協定書を結んで行った。その成果の一部をまとめたのが本稿である。なお、弥勒寺からの寄託を受けて、現在奈良市埋蔵文化財調査センターで弥勒寺鏡を保管している。

II. 弥勒寺鏡の来歴

弥勒寺に残る「弥勒寺古鏡記」には、僧詮海が天保5年（1834）に弥勒寺鏡の銘文を解読しようとしたことが記されている。これによって、すでに江戸時代後期から弥勒寺に三角縁神獣鏡1面が所蔵されていたことがわかる。そして、同じ頃にかかれたとみられる「龍華山古鏡詩并序」の中に、寺地がかつての登美山に属し、その崩れた崖地を掘って鏡を得たのではないかという推測を僧詮海が述べている。この頃には、鏡の出土地の詳細は不明となっていた可能性が高い。

大正3年（1914）11月19日付けで弥勒寺から奈良県へ提出された「寶物及貴重品臺帳」（県立奈良図書館蔵）には、本鏡1面を漢鏡と称して第1号に挙げている。ここでも作者・伝来は不詳となっており、天保5年の「弥勒寺古鏡記」を引いて備考に鏡の概要を記すのみである。

昭和25年（1950）に奈良県の主要古墳を紹介した末永雅雄の『大和の古墳』では、「富雄の丸山」の項に弥勒寺鏡に関する記述がなく、この時点では弥勒寺鏡の存在が研究者にもほとんど知られていなかったと思われる。

弥勒寺鏡の存在が一般的に知られるようになった契機は、富雄町史編纂事業による史料調査によってその重要性が認識され、昭和29年（1954）刊行の『富雄町史』に掲載されたことである。しかしこの時点では、享保・元文年間頃の発掘品で富雄丸山古墳出土品と関係あるものという伝聞が記されているに過ぎず、「弥勒寺古鏡記」などの史料については一切言及されていない。また、昭和36年（1961）の『古墳時代の研究』の中で、小林行雄は伝富雄丸山古墳出土鏡を3面として扱っており、弥勒寺鏡は含めていない。研究資料として積極的に利用さ

れた形跡は未だ認められない。

昭和43年（1968）に刊行された『奈良市史』考古編の中で、弥勒寺鏡の詳細が初めて紹介された。執筆者の末永雅雄は「弥勒寺古鏡記」及び「龍華山古鏡詩并序」の存在を確認し、富雄丸山古墳出土品と聞いていたがその内容から「丸山古墳出土と伝えられて来たことは一応保留しておくことがよい」と述べるにいたっている。しかし、弥勒寺鏡を「伝丸山古墳出土遺物」の中に一括し



図1 弥勒寺と富雄丸山古墳の位置

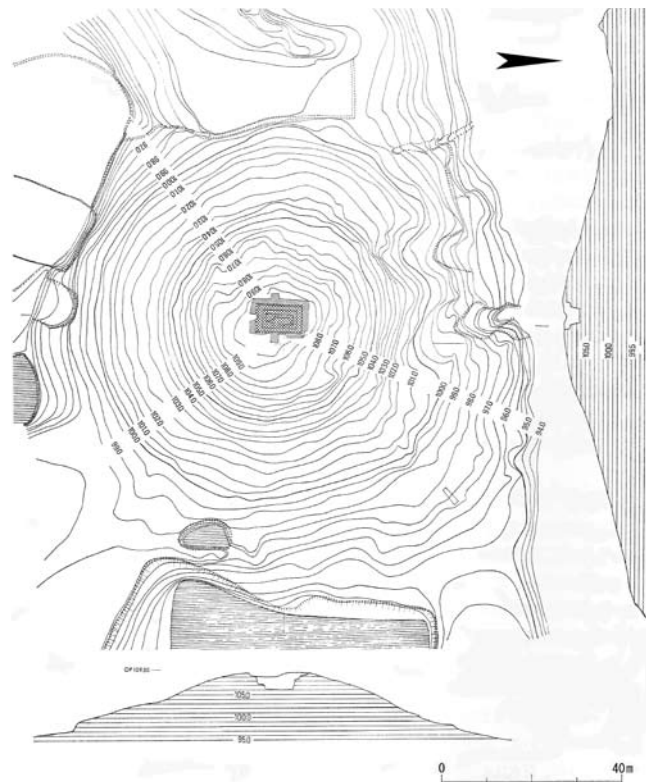


図2 富雄丸山古墳の墳丘（奈良県教育委員会 1973）

て記述するという構成内容が、弥勒寺鏡を富雄丸山古墳出土品と単純に結び付けて扱われる原因の一つとなってしまった。

三角縁神獸鏡の研究が大きく進展しようとする中で、三角縁神獸鏡の集成表を作成する必要性が生じていた。平成元年（1989）、椿井大塚山古墳出土鏡の一般公開に合わせて、京都大学文学部博物館図録『椿井大塚山古墳と三角縁神獸鏡』が刊行され、三角縁神獸鏡目録が作成された。この目録は、三角縁神獸鏡研究の基礎的な準拠資料としてその後広く活用されるようになる。そして目録の中で、弥勒寺鏡出土古墳を富雄丸山1号墳（伝）として掲載したことがその後の取扱いに少なからず影響を与えることとなった。おそらくそれによって、弥勒寺鏡を富雄丸山古墳（伝）と記載する研究者及び研究機関が多くなったとみられる。

以上のように弥勒寺鏡の来歴を整理すると、江戸時代には出土地不詳であったものが戦後になってから伝富雄丸山古墳出土と言いつけられたことがわかる。その理由は不明であるが、明治の盗掘で富雄丸山古墳から多くの副葬品が出土したことの記憶が村人たちの間で交錯したのかも知れない。弥勒寺鏡が富雄丸山古墳出土品であると推測できる根拠は今のところ全くないようである。

Ⅲ. 弥勒寺鏡の特徴

弥勒寺鏡は、いわゆる舶載鏡群に属する。鏡面直径21.7cm・縁の高さ1.0cm・重量940.8gで、銹化によって全体が黒色化しているが、鏡背の文様は比較的鮮明である。鏡面の表面は、銹膨れによって全体的に荒れている。

背面中央に半球形の鈕があり、鈕孔形態は三角縁神獸鏡に特有の長方形である。鈕の外周には、有節重弧文圏座の鈕座がめぐる。内区の文様帯は、鋸歯文を刻み突出する界圏によって、主文帯と銘帯に区分される。主文帯は四個の捩文座乳で等間隔に区切られ、その間に神像二体と獸像二体が鈕を挟んで対向する位置に配置されている。神像の表現は、二体ともに膝がなく、一体は蓮華座のようなものに膝をしずめている。頭に三山冠を被り両肩から翼をのぼすが、その表現もそれぞれ異なる。神像の右側には、旌や幢を写したといわれる傘松形文様（旌飾文）がみられる。

銘帯の文字は欠損のため一部判読できないものの、後述の伝香川県出土同範鏡を参照すれば「吾作明竟莫（甚）大好除去不羊宜古市上有東王父西王母渴飲玉泉飢食棗」となる。

外区は、鋸歯文帯・複波文帯・鋸歯文帯の三文様帯で

構成されており、縁との境に外周突線はみられない。縁は三角形に突出し、銹化が著しい。

Ⅳ. 同範鏡の検討

弥勒寺鏡と同じ文様のいわゆる同範鏡には、伝香川県出土とされる個人蔵鏡1面があり、高松市歴史資料館に現在寄託されている。直径21.6cm、重量938.6gで、銹化によって鏡背全体が黒色化するが、鏡面は比較的遺存状態がよく一部に光沢がある。

鏡背のおよそ2/3の部分に著しい銹化と附着物が認められ、文様の詳細を観察することが難しい状態にある。観察できた範囲では、複数の範キズの位置や形状が合致し、本来の原鏡に由来する文様を両鏡が共有することを確認した。

鈕孔の方向は24度ほど弥勒寺鏡とずれているが、概ね方向は同じである。鈕孔と概ね合致する方向の周縁端部に幅4cmほど削った箇所があり、湯口の位置を示すと推定できる。なお、弥勒寺鏡では銹化のために周縁端部の遺存状況が悪く、湯口の位置を確認できない。

文様の鮮明さについては明らかな差異が認められた。内区文様を構成する突線は、弥勒寺鏡が細く鋭いものに対して、伝香川県鏡は太丸くにおい仕上がりとなっている。伝香川県鏡の有節重弧文圏鈕座をみると、磨り減ったような状態でほとんど文様がみえない。また、銘帯において少なくとも「明～不」までの連続する8文字が太くなってみえる。弥勒寺鏡と比較して、伝香川県鏡の文様は明らかに不鮮明に鑄上がっている。

また、伝香川県鏡にのみ現われている範キズの存在を確認した。有節重弧文圏鈕座から雲気文を貫いて獸像胸部に至る大きな範キズに近接して、有節重弧文圏鈕座を横断するもう一つの範キズが伝香川県鏡にある。この範キズは弥勒寺鏡に認められないので、伝香川県鏡の鑄造が弥勒寺鏡より遅れることを示唆する。

これらの範キズが凸線でなく凹線として現われていることも確認できた。範型のキズはひび割れであり、その空隙に溶湯（高温に溶けた金属）が入り込むから、製品には凸線となって範キズが現われる。しかし、実際のキズは凹凸が逆転してみえる。この違いがどのような理由によって生じたのか理解する上で、鈴木勉の見解が参考となる。それによると、「ひびには新しい真土を筆などで塗り込み補修する。その後十分乾燥してから鑄込みを行うのであるが、鑄込みの瞬間、塗り込まれた真土が僅かに膨張する。膨張した真土は範型の表面に飛び出し、流れ込んだ溶湯はその分だけ凹み、ひびに従って凹線となる」といい、「凹線の存在は、ひびの補修という工程

の存在を証明する」と論じる（鈴木勉 2004）。この見解に従えば、①弥勒寺鏡が一回以上、伝香川県鏡が二回以上の補修を経た范型で铸造されたか、②弥勒寺鏡あるいは共に幾つか铸造された鏡の中の一面を踏み返し製作した范型を使用して伝香川県鏡が铸造されたという想定が成り立つ。①の場合、同范での複数铸造によって范キズが増加するものの、鮮明度の変化は必ずしも铸造順序を示さないという実験結果があり、伝香川県鏡の文様が不鮮明であるのは単純に湯流れの状態に左右されたことになる。②の場合、二次的に製作された范型に乾燥段階で新たなキズが多く生じる可能性が想定されるが、伝香川県鏡に認められた新規のキズは極めて少ない。ただし、伝香川県鏡の文様が不鮮明である点は、踏み返しによる劣化に起因するとも想定できる。資料数が2面と少なく、①・②のどちらとも断定するのは難しいが、①の方が范キズの状況と合致しているように思われる。両鏡ともに范型の補修が認められる点から考えると、煩雑な工程が加わりながら補修の想定が難しい蠟原型による製作ではないだろう。

また、内区で多く見られる凹んだ皺が両鏡の同じ位置に同じ形状で認められた。この皺については、「鑄型の傷とは関わりなく、鑄造の湯回りの状態によってできるもの」と考え、「金属の原鏡を踏返して複数の真土型をつくる同型鏡の技法」の痕跡と想定する見解（岡村秀典 1993）がある。これに従えば、初鑄の鏡を踏み返して2次范を製作し、その范型でつくられた同型鏡が弥

勒寺鏡と伝香川県鏡であるという推測ができる。しかし、両鏡の間に范キズの増加とその補修がみられるので、①の想定に基づいて一つの2次范を幾度か補修して铸造したと考えるのがよさそうである。とすれば、范型は同型鏡の技法で製作されたものの、両鏡については同范関係にあることになる。したがって、水野敏典らが示した三角縁神獸鏡製作モデル（奈良県立橿原考古学研究所 2005）に当てはめれば、蠟原型を使用するモデルC 2 bよりも金属原型を使用するモデルC 2 aでの生産方式が最も理解し易いように思われる（図3）。

V. 天理参考館蔵伝富雄丸山古墳出土鏡との比較検討

弥勒寺鏡が富雄丸山古墳から出土したという伝聞を確認できるのは、戦後に刊行された『富雄町史』が初出である。しかも、富雄丸山古墳出土品は明治12・13年頃を上限として三度に及ぶ盗掘で出土しており、江戸時代から所蔵されてきた弥勒寺鏡とは出土した時期や経緯が明らかに異なる。

石製品が主体の富雄丸山古墳出土品（京都国立博物館蔵）については、箱書に「明治ノ末葉奈良県生駒郡富雄村字大和田丸山古墳出土」と明記され、昭和47年の発掘調査出土品と接合する鋏形石の存在が確認されたことにより、その記載内容の正しさが判明している。一方、天理参考館が所蔵する伝富雄丸山古墳出土鏡には出土地に関する確かな証拠はなく、文字通り「伝」がつくのみである。いずれも守屋孝蔵の旧藏品である点が共通しており、「伝」が付与されたのはそのような理由によるも

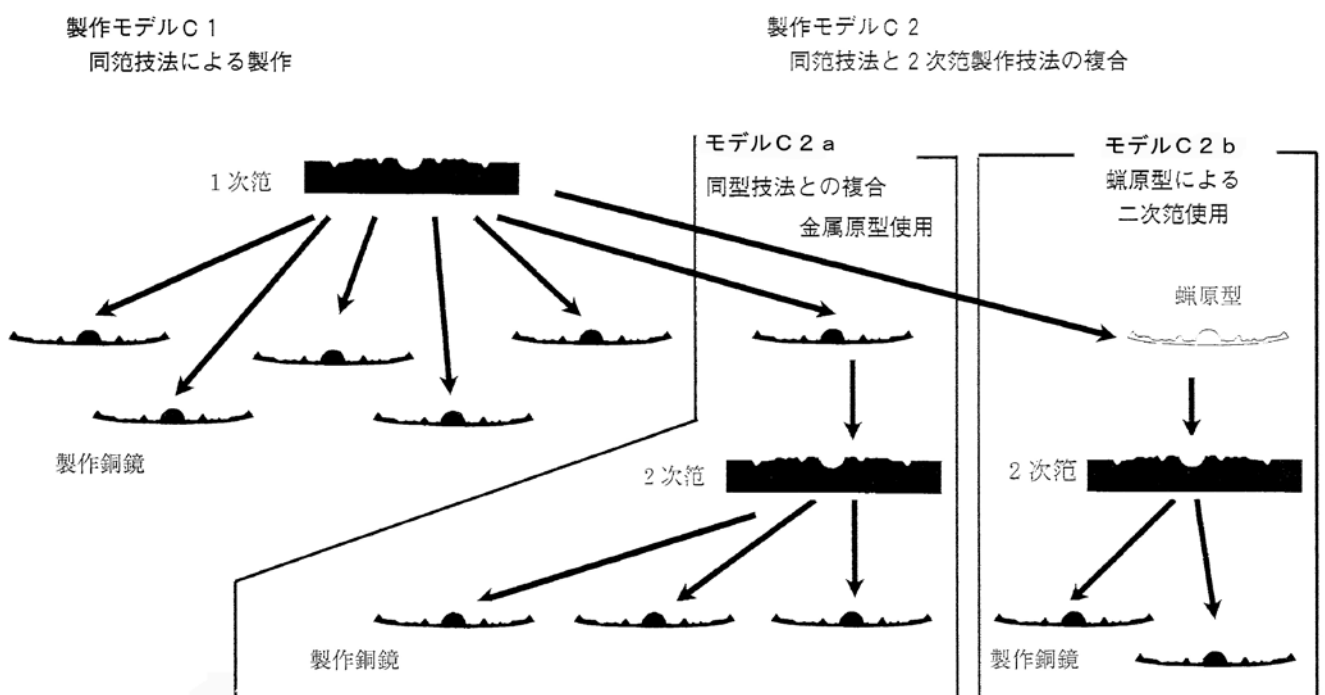


図3 「同范鏡」製作モデル（奈良県立橿原考古学研究所 2005）

のかも知れない。

そこで、天理参考館蔵のもう一つの伝富雄丸山古墳出土鏡と弥勒寺鏡の比較検討を行い、同じ古墳からの出土と伝える鏡に何らかの共通性が認められるか否かについて検討した。

(1) 品目の特徴

天理参考館蔵の伝富雄丸山古墳出土鏡は3面あり、守屋孝蔵から昭和30年6月29日に購入されている。守屋孝蔵は東京の古物商からこれらの鏡を買い受けたらしい。それぞれの鏡の外見的特徴を以下に列記する。

1. 三角縁吾作銘四神四獸鏡〔環状乳式〕(日1220か3) 直径21.5cm・重量1129.8g

鏡面の約半分は別の鏡が重なって副葬された痕跡がある。鏡背は約半分は錆化が認められるものの、他の約半分は錆化せず光沢があり土が附着する。

2. 三角縁画像文帯五神四獸鏡(日1221か2) 直径21.7cm・重量1079.0g

鏡面の一部に錆化と鉄錆の附着があるものの、全体的に光沢が認められる。鏡背は約2/3に錆化があり、約1/3に光沢がある。

3. 三角縁画像文帯盤龍鏡(日1222か1) 直径24.6cm・重量1600.6g

鏡面の約半分は別の鏡が重なって副葬された痕跡がある。鏡背は少し錆化が認められるものの、全体的に光沢がある。

3面の鏡はすべて三角縁神獸鏡で、製作時期に新古関係が想定されている。吾作銘四神四獸鏡が斜縁に近く肉厚で最も古い。天理参考館鏡3面はいずれも1000g以上あるのに対し、弥勒寺鏡は940.8gと軽く厚みも全体的に薄い。神獸表現からみても、天理参考館鏡より弥勒寺鏡の方が新しい型式となろう。

(2) 副葬状態の復元

鏡面に残る痕跡から、3面は重ねられ鏡面を上にして副葬されていた可能性が推定できる。重なるの順序は、画像文帯盤龍鏡(鏡面上向き)の左横に吾作銘四神四獸鏡(鏡面上向き)を半分重ね、さらにその左横に画像文帯五神四獸鏡(鏡面上向き)を半分重ねたと考えられる。一番上の画像文帯五神四獸鏡の鏡面上に残る鉄錆の分布から、その上には鉄器があったと思われる。復元される副葬状態から3面はセットで出土した可能性が高く、そこに弥勒寺鏡が入る余地はないだろう。この点は、天理参考館鏡3面と弥勒寺鏡1面の残存状態の明確な違いからも傍証できる。天理参考館鏡3面はいずれも表面に光沢が残り、遺存状態は良好である。一方、弥勒寺鏡は表面

全体に剥離等の錆化による破損が認められる。

(3) 比較検討による所見

天理参考館蔵の三角縁神獸鏡3面が伝わる通りに富雄丸山古墳出土であるとすれば、残存状態の明確な違いから弥勒寺鏡1面は異なる古墳から出土した蓋然性は高まる。しかし、話はそう単純ではない。天理参考館蔵の良好な遺存具合は、黒塚古墳や椿井大塚山古墳などの堅穴式石槨出土鏡とよく似ていることが注意されるのである。富雄丸山古墳は昭和47年に発掘調査が実施され、埋葬施設は粘土槨1基であることが確認されている(奈良県教育委員会1973)。粘土槨出土鏡は、表面が錆化して光沢を失う例が多い。鏡の状態からみれば、むしろ弥勒寺鏡の方が粘土槨出土品に似ている。

ここで気になることがある。富雄丸山古墳出土品(京都国立博物館蔵)の収納箱には、メスリ山古墳出土と判明した「滑石製椅子形模造品残闕」も一緒に入れてあった。メスリ山古墳の埋葬施設は堅穴式石槨である。伝富雄丸山古墳出土鏡とされた理由が、同じ守屋氏旧蔵の富雄丸山古墳出土品と関連するとすれば、転じてメスリ山古墳出土品との関連性も疑われる。ただし、守屋氏旧蔵の椅子形石製品は関保之助旧蔵品を落札して得たもの(大阪市立大学日本史研究室2008)であり、入手経路が天理参考館鏡と明らかに異なる。

以上の点を勘案すると、今のところ二つの伝富雄丸山古墳出土鏡はどちらも出土古墳不詳と考えておいた方がよいだろう。

VI. おわりに

古鏡に添付されてある「龍華山古鏡詩并序」には、寺地がかつての登美山に属し、その崩れた崖地を掘って鏡を得たのではないかという推測が記されている。江戸時代の「小野氏系図」によると、霊山寺が所在する丘陵周辺を登美山と称したことがわかる。その内容の是非はおくとしても、富雄丸山古墳とは異なる弥勒寺近くの別の古墳から出土した可能性もあり、富雄川流域の古墳時代を考える上で弥勒寺鏡が極めて重要な資料であることは間違いない。

弥勒寺周辺の古墳については、多くの副葬品が出土した直径86mの大形円墳として著名な富雄丸山古墳と詳細不明の茶白山古墳がある他、小規模な後期古墳が幾つか散在する程度である(図1)。富雄地域だけで古墳に埋葬された地域首長の台頭や系列を組み立てるには、古墳や集落などの遺跡数が少ない。ただし、大字中字菅谷から車輪石が出土したと言われており、周辺調査の進展で新知見が得られれば、弥勒寺鏡の評価もさらに高まろう。

また、奈良市内の古墳からかつて出土した鏡などの副葬品は、市外で保管・管理されているものがほとんどであり、市内に残っている古鏡は弥勒寺鏡を含めてわずかである（表1参照）。郷土に残る貴重な資料としての価値も十分に認められる。

なお、古鏡に附された「龍華山古鏡詩并序」および「弥勒寺古鏡記并掖斎所蔵古鏡銘」には、江戸時代後期以前から弥勒寺に古鏡が伝わること、天保年間に常樂寺（大和郡山市稗田町）住職の詮海が狩谷掖斎（江戸の国学者）所蔵鏡の銘文を参考にして弥勒寺鏡の銘文を釈読しようとしたことなどが記されている。古鏡の由来と国学者の交流を伝える古文書としての価値が認められ、古鏡と不可分の資料であるため、併せて奈良市指定文化財に附指定となったことを付記しておく。

弥勒寺鏡の関連調査にあたっては、下記の諸氏からご協力をいただきました。記して深謝いたします。

上原孝夫・奥山誠義・金森大雄・高妻洋成・下垣仁志・田辺征夫・藤原郁代・水野敏典・毛利直子・森下章司・山本英之・脇谷草一郎

[註]

1 関連調査として、弥勒寺鏡の三次元デジタルアーカイブ画像を奈良県立橿原考古学研究所のご協力を得て作成した（画像は水野敏典 2010 に掲載）。また、高松市歴史資料館寄託の同範鏡と天理大学附属天理参考館蔵の伝富雄丸山古墳出土鏡の調査を各機関のご協力を得て実施した。

2 弥勒寺鏡の保存処理は、独立行政法人奈良文化財研究所と共同研究「青銅鏡の劣化と保管環境に関する研究」の協定書を結んで行った。なお、保存処理方法は、以下の通りである。

- ①鏡背面に B 72 を 3%（アセトン・トルエン 1：1 混合液）と BTA 1% 入りを 3 回塗布
- ②鏡面に B 72 を 3%（アセトン・トルエン 1：1 混合液）と BTA 1% 入りを 2 回塗布する。
- ③鏡面・鏡背面の照かりをアセトンで処理

[引用・参考文献]

弥勒寺鏡に関する記述や写真は、下記の図書に掲載がある。

- ・富雄町史編纂委員会編 1954『富雄町史』
 - ・奈良市史編集審議会編 1971『奈良市史』考古編
 - ・京都大学文学部 1989『椿井大塚山古墳と三角縁神獸鏡』
 - ・樋口隆康 2000『三角縁神獸鏡新鑑』
 - ・奈良県立橿原考古学研究所 2002『政権交代—古墳時代前期後半のヤマト—』橿原考古学研究所特別展図録第 58 冊
 - ・車崎正彦編 2004『考古資料大観』第 5 卷（弥生・古墳時代 鏡）
- 同範の伝香川県出土鏡は、下記の図書に写真等の掲載がある。
- ・高松市歴史資料館 1995『鏡の美～讃岐出土・伝来の和鏡を中心として～』第 6 回企画展図録

天理参考館蔵の伝富雄丸山古墳出土鏡については、下記の図書に詳しい。

- ・京都国立博物館 1982『富雄丸山古墳・西宮山古墳出土遺物』
 - ・天理大学附属天理参考館 2006『東西の古墳文化』天理ギャラリー 第 129 回展
- その他
- ・上野勝治 1992「鑄造面からみた三角縁神獸鏡」『古代学研究』128 号
 - ・岡村秀典 1993「福岡県平原遺跡出土鏡の検討」『季刊考古学』第 43 号
 - ・大阪市立大学日本史研究室 2008『メスリ山古墳の研究』
 - ・鈴木勉 2004「三角縁神獸鏡復元研究」『文化財と技術』第 3 号
 - ・奈良県教育委員会 1973『富雄丸山古墳発掘調査報告』
 - ・奈良県立橿原考古学研究所 2005『三次元デジタル・アーカイブを活用した古鏡の総合的研究』
 - ・新納泉 1991「権現山鏡群の型式学位置」『権現山 51 号墳』
 - ・水野敏典 2010『考古資料における三次元デジタルアーカイブの活用と展開』平成 18～21 年度科学研究費補助金基盤研究 (A) 成果報告書

表 1 奈良市内出土鏡所在地一覧（東部山間地域は除く）

出土古墳	出土面数	所在地	備考
弥勒寺蔵鏡	1	弥勒寺(中町)	三角縁 1
円照寺墓山 1 号墳	4	東京国立博物館	三角縁 1 ほか
円照寺裏山古墳	1	円照寺・榎考研	三角縁 1
帯解丸山古墳	1	橿原考古学研究所	方格規矩鏡
古市方形墳	5	東京国立博物館	連弧文鏡ほか
吉備塚古墳	1	橿原考古学研究所	画文帯神獸鏡
鷲塚古墳	1	奈良国立博物館	連弧文鏡
マエ塚古墳	9	橿原考古学研究所	四獸鏡ほか
猫塚古墳	1	所在不明	神獸鏡
衛門戸丸山古墳	15	宮内庁書陵部	連弧文鏡ほか
佐紀陵山古墳(日葉酢媛陵)	3	御陵内へ再埋納	方格規矩鏡ほか
不退寺裏山 2 号墳	1	奈良国立博物館	四獸鏡
添上郡帯解町(山村)古墳出土	2	五島美術館(東京)	画像鏡ほか
添上郡大安寺村古墳出土	1	五島美術館(東京)	獸帯鏡
奈良市平城出土	1	宮内庁書陵部	連弧文鏡
大和あやめ池出土	2	五島美術館(東京)	珠文鏡ほか
西ノ京附近出土	1	内藤虎次郎(所在不明)	前漢鏡
垂仁天皇陵発掘 力	1	新家力三(所在不明)	獸形鏡
南都御陵之所発掘	1	五島美術館(東京)	仿三角縁 1
天保三年(1832)聖武陵付近出土	1	岡山県津山市(斎藤蔵)	四獸鏡
計	53		

表 2 詳細・真偽不明の奈良市内出土鏡（東部山間地域は除く）

出土古墳	出土面数	所在地	備考
伝富雄丸山古墳	3	天理参考館	三角縁 3
法蓮町附近	1	不明	三角縁
法蓮町寺山附近	1	不明	半円方形帯神獸鏡
野神古墳	2	不明	不明
成務天皇陵(平安時代盗掘)	1	不明	不明
計	8		

弥勒寺古鏡記

和州登美庄中村、弥勒寺所藏古鏡、径八寸、重六十二両、其面蝕而無照。於背鑄異人猛獸水波菱尖等。四釘鼻鈕凡如五嶽、周圍有銘凡三十字々画甚奇古、中七八字残缺、不可讀、蓋漢鏡也。其銘曰、

吾作明竟莫大好○○○○真古○○有東王父西王母湯次玉泉汎食棗

鏡無金、飲飢以水、東都掖齋感漢銘鏡三面、其銘字與令大抵相同。

天保五年甲午二月

比丘詮界記

掖齋所藏古鏡銘

○前漢鏡 背二仙人ノ像ヲ鑄ル、銘アリ字数四十三字

吾作明竟甚大好上有東王父西王母仙人王喬赤松子曷次玉泉飢食棗千秋萬歲不老洎由天下由四海兮

鏡二金扁ナク、渴ニ散水ナク、飲シ篇ニシテ流洎ニ作ル

○同 銘字二十七

吾作明竟甚大ユ上有王子喬赤松子天鹿其壽誦天下其萬世無

雙

麒麟篇ナク、龍左文字ナリ

○後漢鏡 銘字三十五

尚方作竟甚奇異倉龍在左白虎在右朱鳥玄武凶名子孫翁々宜父母家中富昌貴且

右釋文掖齋所考

天保二年秋、宗淵僧都訪狩谷氏、親見古鏡、寫其銘字來見

贈畢、賴之得讀弥勒寺鏡銘、實感恩賜之。

天保六年乙未秋

詮界再寫

龍華山古鏡詩并序

寺ヲ弥勒ト号ス。和州添下郡鳥見ノ庄中村ニ在、傳ヘ曰フ、行基菩薩ノ草創ナリト。一古鏡ヲ藏ス。径七寸重サ六十二両、面テ全ク蝕ス、背ニ異人猛獸水波菱尖等ノ状ヲ鑄ル。之ヲ環シテ銘有リ、三十字計リ、篆書極テ古雅ナリ然レモ闕壞多クメ讀ムニ渋ル。中ニ就テ吾作明竟玉泉西王母等ハ分明ニ見ツ可。

或カ云ク漢鏡ナリト、是ナリ乎否ヤ、更ニ後哲ノ鑑定ヲ繕ツ。

竊ニ案スルニ寺地在昔ノ登美山右僕射ノ林山ニ属ス、以ノ故ニ崩崖堀地之際、是等之埋藏物ヲ得ルコト有ル者ナラン。

塵ニ昏ス、古鏡對メ何ヲカ見ル

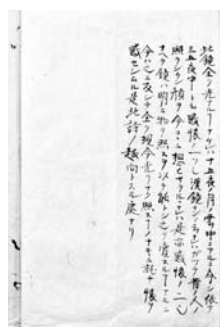
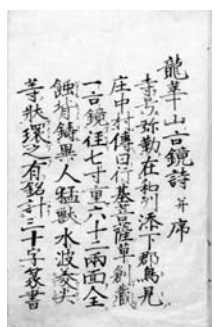
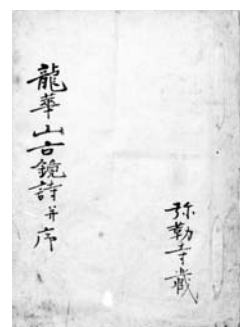
感ヲ發シ情ヲ懷イテ等間ナラヌ

三五夜中、無月ノ色

二千年ノ外ノ古人ノ顔

比丘詮海舛

此鏡全ク光アルコトナケレハ、十五夜ノ月ノ雲中ニアルニ齊シ、依テ三五夜中ト云感懷ノ一ツ也、漢鏡ナント云ナレハ、カツテ昔ノ人ノ照ラシケン顔ヲ今コトニ想ヒヤラル、ナレハ、是亦感懷ノ二也、ナヘテ鏡ハ明ニ物ヲ照スヲ以テ能トシ之ヲ賞スルコトナルニ、今ハ之二反シテ全ク現今光リナク照スコトノナキニ就テ懷ヲ感セシムル、是此詩ノ趣向トスル處ナリ



上：「弥勒寺古鏡記并掖齋所藏古鏡銘」額

下：龍華山古鏡詩并序



(背面)



(鏡面)

伝香川県出土 三角縁吾作銘二神二獸鏡 (個人蔵 高松市歴史資料館寄託資料)



神像の比較 (左; 弥勒寺鏡 右; 伝香川県鏡)



範キズの比較 (上; 弥勒寺鏡 下; 伝香川県鏡)



弥勒寺鏡（左）と伝富雄丸山古墳出土鏡（右）の鏡面比較



弥勒寺鏡（左下）と伝富雄丸山古墳出土鏡の背面比較 [伝富雄丸山古墳出土鏡 天理大学附属天理参考館]



伝富雄丸山古墳出土鏡の副葬状態復元案（背面）



伝富雄丸山古墳出土鏡の副葬状態復元案（鏡面） [伝富雄丸山古墳出土鏡 天理大学附属天理参考館]

印刷・製本の基本仕様

表紙：アートポストカード220kg・マットpp加工

見返し：白色上質紙110kg

巻頭図版：特アート紙135kg

本文：白色マットコート紙90kg

本文フォント：ヒラギノ明朝体

製本：左開き・糸かがり綴じ・平装製本

奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 21 (2009) 年度

I S S N 1 8 8 2 - 9 7 7 5

印刷 平成 24 (2012) 年 3 月 14 日

発行 平成 24 (2012) 年 3 月 27 日

編集 奈良市埋蔵文化財調査センター

630-8135 奈良市大安寺西二丁目 281 番地

TEL 0742-33-1821

FAX 0742-33-1822

URL <http://www.city.nara.lg.jp/>

E-mail maizoubunka@city.nara.lg.jp

発行 奈良市教育委員会

630-8580 奈良市二条大路南一丁目 1-1

TEL 0742-34-1111 (代)

印刷 関西美術印刷株式会社

630-8325 奈良市西木辻町 153-1

TEL 0742-62-3000 (代)

© 2012 by the Nara Municipal Board of Education

Printed in Japan.

No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner.

この冊子は、300部作成し、1部当たりの印刷経費は2,454円です。

**ANNUAL RESEARCH REPORT
of
Archaeology in Nara City Area
2009**

CONTENTS

- I PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL
EXCAVATIONS IN NARA CITY AREA IN 2009.**

- II REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL SCIENCE.**

- III REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENT
FOR ARCHAEOLOGICAL SITES AND MATERIALS
IN 2009.**

- IV BULLETIN OF THE ARCHAEOLOGICAL
RESEARCHCENTER OF NARA CITY.**

**NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION,
2012**

ANNUAL RESEARCH REPORT
of
Archaeology in Nara City Area
2009

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION,2012